

伊礼伊森原遺跡

—嘉手納(7)貯油施設建設工事に伴う文化財発掘調査報告—

1998年3月

北谷町教育委員会



巻首図版（上）石積の検出状況（北側より）
（下）石積の検出状況近景（北西側より）

はじめに

本報告書は、嘉手納基地に所在する「伊礼伊森原遺跡」の緊急発掘調査の成果を記録したものです。

本遺跡は、平成6年度に米軍嘉手納基地内の燃料タンク建設工事に伴って行われた上勢頭古墓群緊急発掘調査の際に行った試掘調査によって発見された遺跡であります。

当地には近世の墓が造られていましたが、発掘調査の結果、谷間の平坦地を階段状に区画するように積まれた土留め状の石積みが6列確認され、12世紀から16世紀頃の農耕の可能性を持つ水田または畑の遺構ではないかと考えられており、このような立地での遺跡はあまり例が無いと聞き及んでおります。

さらに、炉跡状遺構が4基、落とし穴と考えられる土坑が1基確認され、グスク時代における山間部の利用状況が推察されており、遺跡は、米軍燃料貯油タンク施設の建設によって開発されることから、後世に伝えるために検出された遺構を切り取り保存処置を行っております。

埋蔵文化財は、地域の歴史を明らかにし、地域の誇りとなる貴重な財産であり、国民の共有財産であります。

町内では、歴史・文化の解明において沖縄だけにとどまらない新たな発見が続いております。さらに調査研究を行い、貴重な文化遺産を保存し社会に活かしていくことは私達の使命です。

本報告書が、多くの方々に活用され、さらなる文化財保護思想の高揚はもとより、諸開発事業の協議・調整、学術研究の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査及び資料整理、遺構保存にあたりご指導、ご協力をいただいた諸先生方及び関係各位に対し厚くお礼を申し上げます。

平成10年3月

北谷町教育委員会
教育長 當山憲一

例 言

1. 本報告書は平成7・8・9年度事業として「嘉手納基地内(7)貯油施設建設にかかる文化財発掘調査」として那覇防衛施設局と受託契約を行い『伊礼伊森原遺跡』の緊急発掘調査報告書として、その成果をまとめたものである。
2. 今回の発掘調査終了後に平成6年度に行った旧上勢頭上原地区にある亀甲墓の石材保存処置のため解体作業と仮保管を行った。石材は嘉手納基地内上・下勢頭古墓保存地域内に仮保管してある。
3. 本報告書に掲載した地形図は国土地理院の承認を得て、北谷町役場が複製をした25,000分の1の地形図と、5,000分の1の地形図は、沖縄県の承認を得た北谷町役場都市計画課作成、1954年米軍作成4,800分の1の地形図を借用したものである。
4. 本書に記した高度値は、海拔高である。
5. 1号炉跡状遺構、3号炉跡状遺構、落とし穴状遺構の切り取り保存については、奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏のご指導、ご協力を得ました。謝意を表します。
6. プラント・オパール分析は宮崎大学農学部教授 藤原宏志氏、助手 宇田津徹朗氏のご協力を得ました。謝意を表します。
7. 出土した炉跡状遺構について愛媛大学教授 村上恭道氏のご指導をいただいた。謝意を表します
8. 陶磁器の同定は、鎌倉考古学研究所所長 手塚直樹氏のご協力を得ました。謝意を表します。
9. 種子鑑定を北海道女子短期大学助教授 高宮広土氏のご協力を得ました。謝意を表します。
10. 石器の石質同定は北谷高校教頭 大城逸郎氏のご協力を得ました。謝意を表します。
11. 平成8・9年度に、北谷町内伊礼伊森原遺跡水田址の関連調査として水田立地調査を名護市町史編さん室中鉢良護氏のご協力をいただいた。謝意を表します。
12. 付記として宮崎大学農学部教授藤原宏志と名護市町史編さん室中鉢良護氏から玉稿を頂いた。謝意を表します。
13. 調査にあたっては、指導・助言をいただいた。謝意を表します。

沖縄国際大学教授

高 宮 廣 衛

熊本大学名誉教授

白木原 和 美

北谷高校教頭	大 城 逸 郎		
沖縄県立石川少年自然の家所長	知 念 勇		
鹿児島県埋蔵文化センター	長 野 真 一		
笠利町立歴史民俗資料館	中 山 清 美		
沖縄県教育庁文化課	岸 本 義 彦		
糸満市教育委員会文化課	湖 城 清	大 城 一 成	
那覇市教育委員会文化課	金 武 正 紀	島 弘	
	内 間 靖	山 城 直 子	
南風原町教育委員会文化課	上 地 克 也		
浦添市教育委員会文化課	安 里 進	下 地 安 広	
宜野湾市教育委員会文化課	呉 屋 義 勝		
宜野座村立博物館	知 名 定 順		

14. 遺物整理作業及び報告書作成（成果の記録）

本書の執筆は山城がおこない、出土遺物の洗浄、注記、接合、分類集計、実測、製図等、報告書作成に向けての整理は下記のメンバーにより実施した。

赤嶺 健	上間真寿美	豊里 初江	仲村まゆみ	仲村渠安子
花城 可時	前川 恵子	我那覇智美	東門 研治	

15. 発掘調査で得られた資料はすべて、北谷町教育委員会で保管している。

目 次

はじめに

例 言

第 I 章 調査に至る経緯	1
a 調査に至る経緯	1
b 調査体制	4
c 調査の経過	5
第 II 章 遺跡の位置と環境	7
第 III 章 層 序	22
第 IV 章 遺 構	24
第 V 章 遺 物	41
第 VI 章 ま と め	73

付 記

表 目 次

第 1 表 遺物総合出土一覧	41	第11表 本土産磁器観察一覧	53
第 2 表 土器出土一覧	44	第12表 本土産磁器出土一覧	54
第 3 表 土器分類一覧	44	第13表 本土産磁器分類一覧	54
第 4 表 土器出土一覧	45	第14表 沖縄産陶器出土一覧	54
第 5 表 胴部破片分類集計	46	第15表 沖縄産陶器観察一覧	55
第 6 表 土器観察一覧	46	第16表 円盤状製品観察一覧	57
第 7 表 外国産陶磁器出土一覧	47	第17表 陶質土器分類一覧	58
第 8 表 青磁分類一覧	50	第18表 無釉陶器分類一覧	58
第 9 表 白磁・染付・褐釉陶器分類一覧	50	第19表 沖縄産施釉陶器分類一覧	58
第10表 外国産陶磁器観察一覧	51		

挿図目次

第1図	試掘地点位置図	2
第2図	試掘溝柱状図	3
第3図	グリット設定図	6
第4図	北谷町域と伊礼伊森原遺跡位置図	8
第5図	北谷村小字名（現北谷町域）	10
第6図	遺跡の位置と環境	11
第7図	遺跡の地形（1954年米軍作成図）	13
第8図	「ソ・ナ」ライン南側丘陵斜面層序	15
第9図	「ソ」ライン北壁・南壁層序	17
第10図	14～17ライン東壁・西壁層序	19
第11図	試掘溝層序	21
第12図	石積立面図	25
第13図	石積立面図	26
第14図	遺構平面図（セ・ソ-13・14・15）	29
第15図	遺構平面図（セ・ソ-15・16）	31
第16図	遺構平面図（ソ・ナー-16・17）	33
第17図	炉跡状遺構、2号溝状遺構平面図・断面図	35
第18図	土坑・落とし穴平面図・断面図	36
第19図	土器	43
第20図	青磁	48
第21図	白磁・染付・褐釉陶器	49
第22図	本土産磁器	59
第23図	陶質土器・無釉陶器	60
第24図	施釉陶器	61
第25図	施釉陶器	62
第26図	施釉陶器・遊具・鉄製品・金属製品	63
第27図	石器	64
第28図	近代・墓・溝	65
第29図	石積・包含層・畦	67
第30図	石積・包含層	69
第31図	炉跡状遺構・土坑・ピット	71

図版目次

図版 1	79
(上) 遺跡遠景 (北側より)	
(下) 遺跡遠景 (東側より)	
図版 2	80
(上) 遺跡近景 (1994年度)	
(下) 発掘作業風景 (1995年度)	
図版 3	81
(上) セ・ソー14東壁	
(中) セ・ソー15西壁	
(下) セー13東壁	
図版 4	82
(一段左) セー16米軍埋設管溝南壁 (一段右) 2号溝検出状況	
(二段左) 石積1～3検出状況 (二段右) 東D-1号墓前試掘溝 (石積3)	
(三段) 石積2の断面	
図版 5	83
(一段左) 石積4の断面	(一段右) 石積5の断面
(二段左) 石積4 (ソー14北壁)	(二段右) 石積5崩壊部断面
(三段) セー14南壁層序	
図版 6	84
(一段左) 試掘溝No.6検出状況	(一段右) 南側斜面部からの第I層
(二段左) 南側丘陵斜面包含層検出状況	(二段右) 南側丘陵斜面掘り下げ
(三段) 包含層の範囲	
図版 7	85
(一段左) スー16東壁	(一段右) 墓前面の層位
(二段左) スー16西壁	(二段右) ソー14東壁
(三段左) セー14東壁	(三段右) 4・5号溝状遺構
(四段左) セー13東壁	(四段右) ソー13東壁・4号溝部分断面

図版 8	86
(上) 石積 1・2・3 の検出状況	
(下) 石積 4・5・6 の検出状況	
図版 9	87
(一段左) 2号溝状遺構検出状況	(一段右) 2号溝状遺構検出
(二段左) 石積 1～3 と 2号溝状遺構	(二段右) 3号溝状遺構半裁状況
(三段左) 3号溝状遺構	(三段右) 雨天時の谷間 (1994年)
(四段左) II層上面の谷間の検出	(四段右) 4号溝状遺構 (1994年)
図版10	88
(一段左) 石積 3～5 (南側より)	(一段右) 石積 1・2 (東南側より)
(二段左) 集石 2 と 3号炉跡状遺構	(二段右) 石積 4 と 2号炉跡状遺構
(三段) 南側丘陵斜面検出状況、4号土坑 (下位の中央)	
図版11	89
(一段左) 落とし穴状遺構上部断面	(一段右) 落とし穴状遺構断面
(二段左) 遺構内炭の堆積状況	
(三段) 落とし穴状遺構半裁検出状況	
図版12	90
(一段左) 1号土坑の検出状況	(一段右) ナー16丘陵上部検出ピット
(二段左) 2・3号土坑周辺検出状況	(二段右) 2号土坑の検出状況
(三段) 遺跡近景 (南側より)	
図版13	91
(一段左) 1号炉跡状遺構	(一段右) 1号炉跡状遺構断面
(二段左) 3号炉跡状遺構	(二段右) 3号炉跡状遺構断面
(三段左) 2号炉跡状遺構	(三段右) 4号炉跡状遺構
(四段左) 4号炉跡状遺構	

図版14	92
(一段左) 横位把手付土器の出土状況	(一段右) 石積 4 西側出土状況	
(二段左) 土器出土状況	(二段右) 石積 3 下位の土器出土状況	
(三段左) 土器出土状況	(三段右) 青磁皿出土状況	
(四段左) 櫛描文青磁皿出土状況	(四段右) 褐釉陶器出土状況	
図版15	93
炉跡状遺構	(一段左) 2号切り取り範囲	(一段右) 1号切り取り範囲
	(二段左) 2号切り取り作業風景	(二段右) 1号切り取り作業風景
落とし穴状遺構	(三段左) 落とし穴状遺構上部の切り取り	(三段右) 切り取り作業風景
	(四段左) 落とし穴状遺構の切り取り	
図版16	土器	94
図版17	青磁	95
図版18	白磁・染付・褐釉陶器	96
図版19	本土産磁器	97
図版20	陶質土器・無釉陶器	98
図版21	施釉陶器	99
図版22	施釉陶器	100
図版23	施釉陶器	101
図版24	施釉陶器	102
図版25	円盤状製品・鉄鑿・吸口	103
図版26	石器	104

第 I 章 調査に至る経緯

a. 調査に至る経緯

本遺跡は、平成 6 年度に行った上勢頭^{かみしーどう}古墓群発掘調査の際に発見された遺跡である。

平成 3 年 10 月に那覇防衛施設局から嘉手納飛行場提供施設工事として、既存の貯油施設の解体・新設工事の計画に伴う埋蔵文化財の有無についての照会があり、試掘調査によって 10 基の墓が確認され、那覇防衛施設局と協議を行い、記録保存をすることとなった。

平成 6 年度委託事業として平成 6 年 7 月 5 日から 12 月 15 日の期間で発掘調査が行われ、18 世紀ごろから上勢頭に入植した屋取土族層の墓群であることが確認された。

その発掘調査期間中の平成 6 年 10 月 9 日から 11 日の台風 29 号による雨水のため、東 D 地区に鉄砲水が流れ込み、谷間が抉り取られた。その際、すでに確認されていた厚さ約 80cm の腐蝕土層からグスク土器片 2 点が採集された。土器片はほとんどローリングを受けていないことから、近距離からの流入と考えられ、その対応を那覇防衛施設局と協議を行った結果、発掘調査期間中に試掘調査を行ない状況を把握することとなった。

試掘調査は、遺跡の生活跡が考えられる南東側の尾根 7 地点と、谷間 12 地点の合計 19 地点であった。

その結果、遺物包含層は試掘溝 19 地点（第 1 図）の内、谷間東側（No. 8～12 地点）や尾根（No. 13～19）では確認されず、谷間西側の（No. 1～7 地点）で確認され、谷間の中央部から西側にかけて広がっていることが判明した。

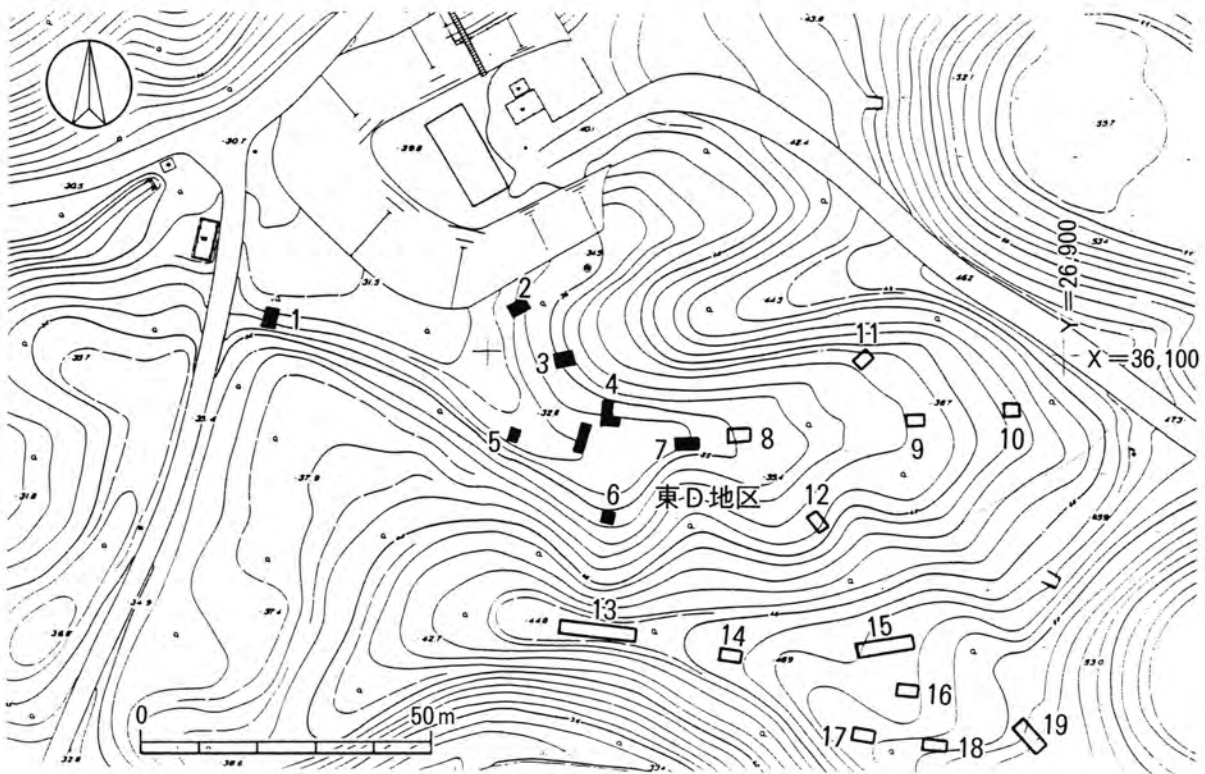
特に、谷間西側の（No. 1～7 地点）の内、丘陵斜面下部の No. 6 試掘地点では、試掘溝の南壁で輪郭部分に焼土がみられ炭が堆積する直径約 80cm の円形の遺構が確認され、西壁には直径約 10cm、深さ約 25cm のピットが 2 本、さらに、土器片が出土することから、No. 6 地点が本遺跡の中心部と考えられた。そこから谷間の西側の下流側に流失し広がりを持つことが推察された。また、包含層は、東 D 地区 1・2 号墓の墓庭入口断面で、墓築上面より下位にあり、墓より古いことが確認され、出土した土器片からグスク時代の遺跡であることが考えられた。

平成 7 年 2 月に那覇防衛施設局へ試掘調査結果の回答を行い、協議調整が行われ次年度、改めて対応することになった。

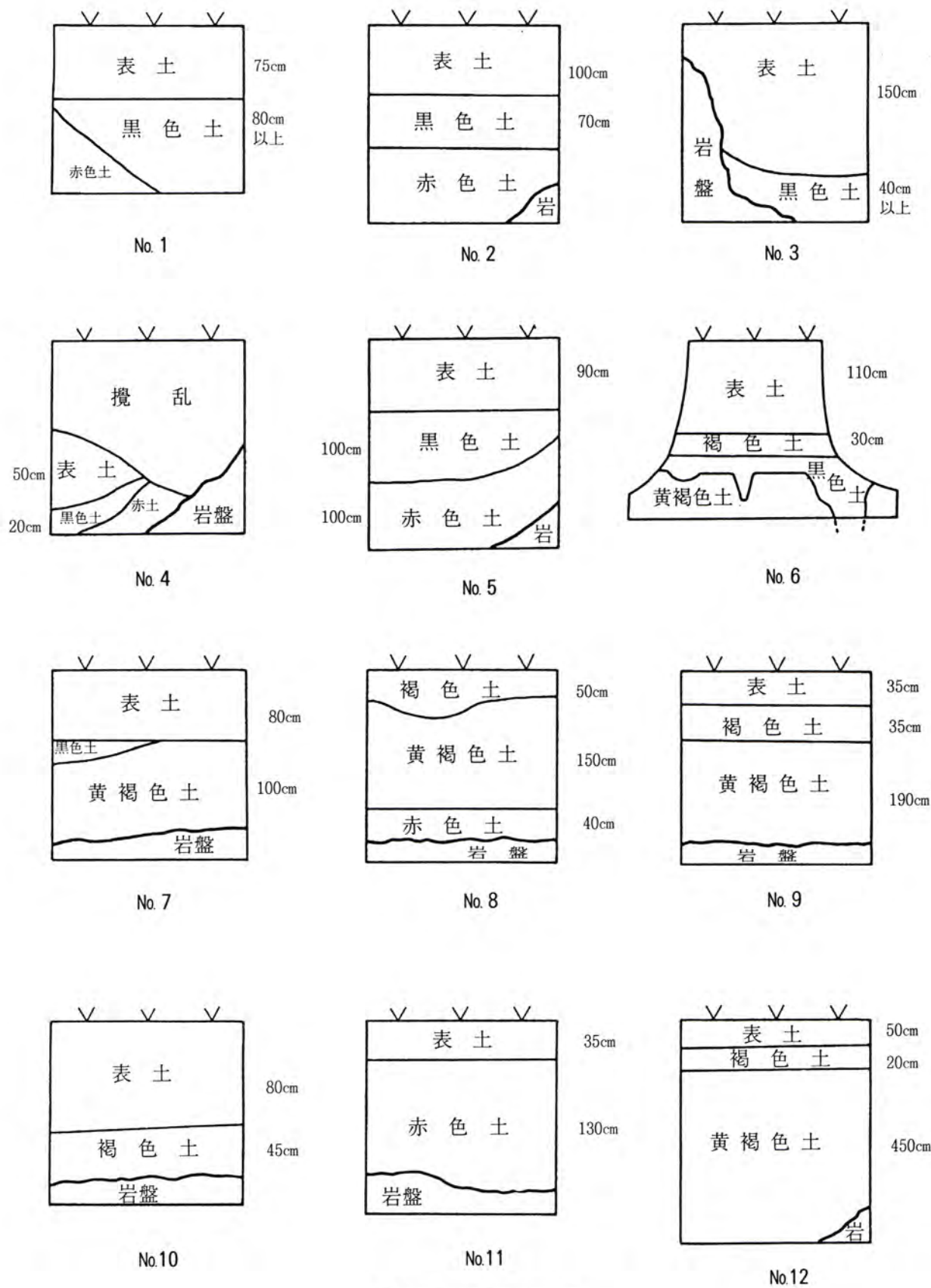
平成 7 年度に那覇防衛施設局と協議調整が行われ、平成 7 年 7 月 5 日から平成 8 年 1 月 13 日まで発掘調査を実施した。調査範囲の 2,100㎡のうち 1,600㎡について調査を

行った。

平成7年10月27・28日にプラント・オパール・のサンプリングを行った。平成8年1月10日から13日の4日間で、遺構3基（炉跡状遺構2基・落とし穴状遺構1基）について切り取り保存措置を行い調査を終了した。その後、前年度に調査を行った北谷町字上勢頭1156・1166番地に位置している亀甲墓を解体し、石材を上・下勢頭古墓群保存地域内に、仮保管を行った。



第1図 試掘地点位置図



第2図 試掘溝柱状図

b. 調査体制

今回の調査体制は発掘調査から資料整理、報告書の刊行まで含めて下記のとおりであった。報告書の刊行は、事業調整の結果、平成9年度に行うこととなった。

調査組織

調査主体	北谷町教育委員会		
調査責任者	教育長	當山 憲一	(平成7～9年度)
	文化課長	松田 盛	(平成7～9年度)
調査総括	文化係長	中村 愿	(平成7～9年度)
調査事務		徳吉 美奈子	(平成7～8年度)
		国仲 美穂	(平成7年度)
		伊敷 美鈴	(平成7～8年度)
		安里 利恵	(平成8年度)
		我那覇 智美	(平成8～9年度)
		徳村 智子	(平成9年度)
		伊禮 一恵	(平成9年度)
調査担当者			
文化財調査嘱託員 (現主事)		山城 安生	(平成7～9年度)
調査補助員			
嘱託職員		比嘉 敦子	
臨時職員		赤嶺 健	
		上間 真寿美	
		豊里 初江	
		仲村 まゆみ	
		仲村渠 安子	
		名幸 さつき	
		花城 可時	
		前川 恵子	

発掘調査作業員

知念 清	普久原 文子	普久原 節子	我如古 清
濱川 久	稲田 セツ子	伊志嶺 朝市	伊志嶺 良子
金城 良夫	郡山 隆彦	宮城 隆明	宮里 盛安
村上 多喜夫	名嘉 實	仲宗根 順次	砂川 栄

渡久地 政 英 渡 口 英 孝 植 田 据 治 上 原 亀 造
上 原 ヨ シ 上 間 常 貞 湧 田 春 子 屋 宜 光 江
棚 原 和 宏

c. 調査の経過

本遺跡の発掘調査は、平成7年度事業として平成7年7月5日から平成8年1月13日の約6ヶ月間で実施した。

調査は、試掘調査の結果、遺構が確認された試掘溝No.6周辺から谷間下流側（西側）に遺物包含層の広がりが確認された地域と谷間上流側（東側）に、調査区設定の測量を行い、バックホーによる伐採作業・表土剥後に人力による発掘作業を行った。

調査区域は、遺跡周辺の丘陵斜面から大量の雨水が流れ込むことから、谷間の上流側に表土剥の掘削土を利用して雨水対策の堤防を設け調査を開始した。

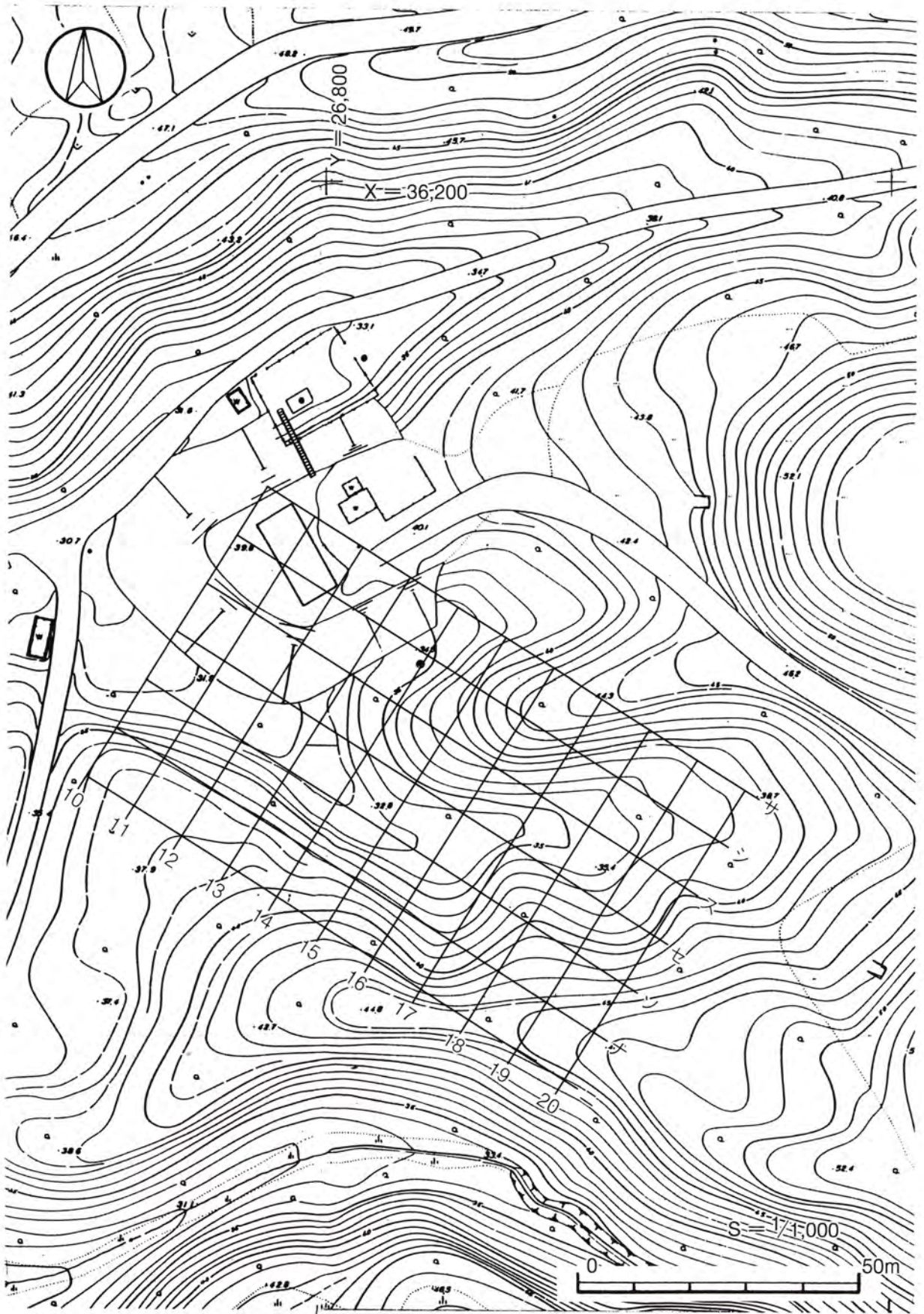
調査区は、谷間の長軸方向のほぼ中心に基準ラインを設定し、前年度に行った古墓調査の際に東D地区3号墓のセンターとした杭を基準に、試掘調査で遺構が検出された西側丘陵斜面部分の中央部に土層観察用の畦を設け、10m×10mのグリットを設定した（第3図）。

調査は、試掘溝No.10のカーボンディテイング分析結果で、 2130 ± 100 B.C. 180のデータが報告されたことから谷間の上流域から行った。その際、遺物包含層と思われた暗褐色土層は、現表土の腐植土で、更にその上位にごく新しい侵蝕土が堆積していることが確認された。米軍埋設施設管跡が交錯しており攪乱の激しい状況であった。

その後、遺跡の広がりが推察された試掘溝No.6地点を中心として、谷間の西側の下流側に広がる地域の発掘に入った。

平成7年10月27・28日にプラント・オパール分析のサンプリングをソー16東壁・東D-1号墓前試掘溝・セー13東壁で行った。

平成8年1月11日から13日に3基の遺構（炉跡状遺構2基、落とし穴状遺構1基）の切り取り保存を行った。落とし穴状遺構は遺構上部の炉跡状部分と本体部分の2つにわけて切り取りを行った。また、それと平行しながら、土層断面を記録して作業を終了した。



第3図 グリット設定図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

北谷町は沖縄本島の中部に位置し、県庁所在地である那覇から北に直線で約16kmの東中国海に面した西海岸側にある。本町の総面積は、東西に4.31km、南北に5.91kmを測り、総面積13.62km²である。北側は嘉手納町、東側は沖縄市、北中城村、南側は宜野湾市と接し、北側には嘉手納基地、西側や南側の沖積平野部にはキャンプ桑江、キャンプ瑞慶覧があり町域の約57%が米軍基地である。

本町は沖縄本島を形成している2つの地質、北部の国頭礫層と南部の島尻層群の境目にあたる。北側は標高約10～20mの微高地が続き、東側は標高約100mの海成段丘の縁にあたり、西側へしだいに低くなっており、海成段丘に囲まれるように沖積平野がひろがる東高西低の地形である。

地勢は、標高20m未満が43.98%、20～39mが26.63%、40～59mが11.53%、60～79mが14.90%、80～99mが4.99%、100～120mが3.96%である。

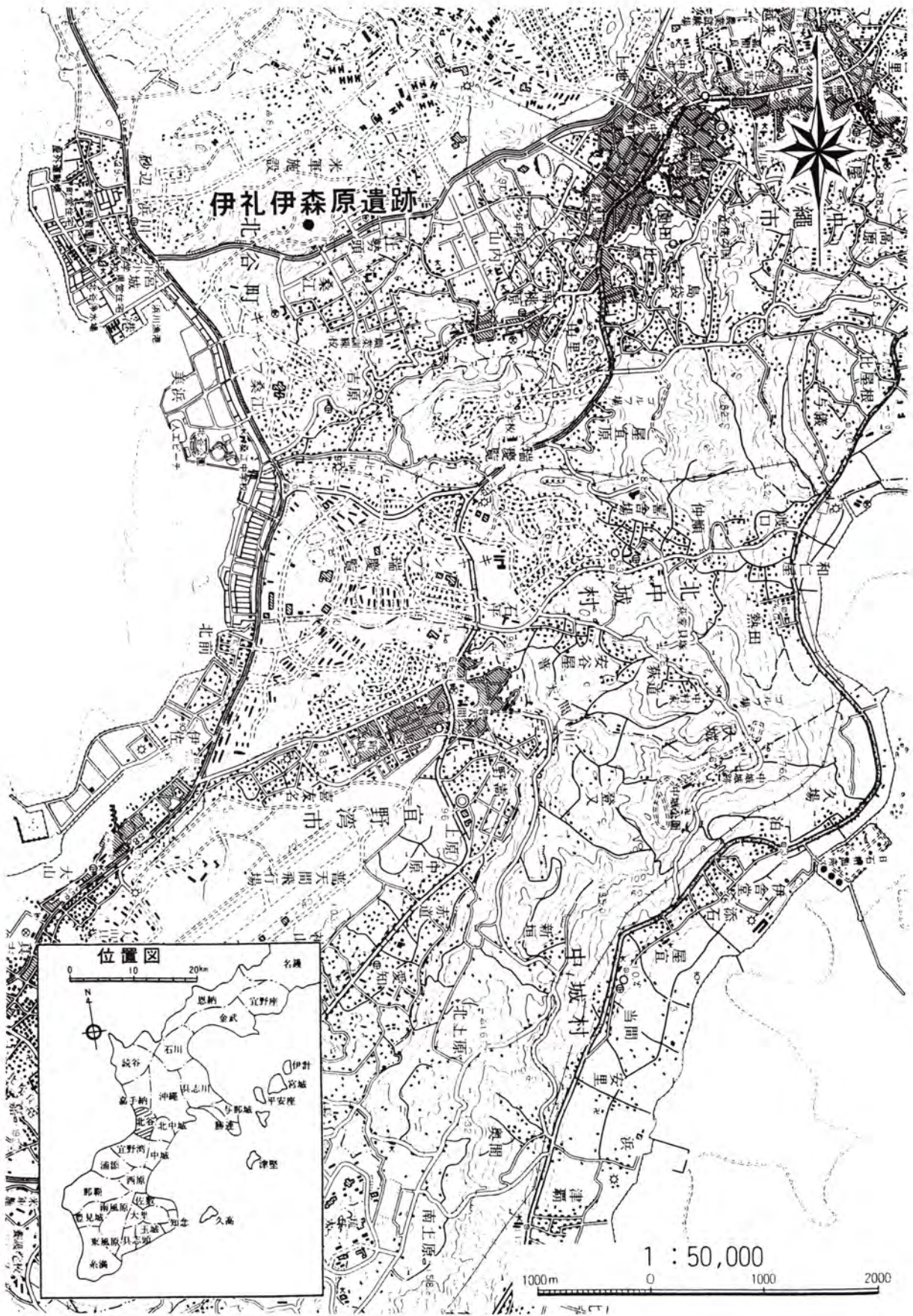
土質は、珊瑚石灰土質、国頭礫層、泥灰岩土層、沖積土層から成り立っている。町域北側の上勢頭・下勢頭は、国頭礫層と隆起石灰岩が露頭し、町域のほぼ中央部にあたる謝苺一帯は国頭礫層、玉上一帯は泥岩土層である。台地部や傾斜面では島尻マーヅが分布し、西海岸の低地部の北谷、北前一帯は海性沖積土層が分布している。石灰岩土質は、侵食によって溶解しやすく陥没ドリーネが発達しており、本遺跡周辺の試掘調査の際にも試掘溝で空洞が見られた。

伊礼伊森原遺跡^{いりいむいばる}は、米軍嘉手納基地となっている町域北側の北谷町字上勢頭伊礼伊森原866番地ほか5筆に所在する。

遺跡一帯は東側の台地部から西側に舌状に伸びる標高約45m前後の尾根が、樹枝状を呈する起伏に富んだ地形を呈しており、遺跡は蛇行しながら下る標高約33mの谷間に形成されている。

現況は、この丘陵地帯に建設された米軍の燃料タンクに囲まれた状態で、戦前、小さな畑を耕していたというが、遺跡内や周辺には燃料タンクから伸びる埋設送油管が縦横に走り、燃料バルブボックスや排水溝が残る。北側にはハウジングエリアがあり大きく地形を変えているが、1954年の米軍地図に本来の地勢を見ることができる（第7図）。

字上勢頭は18世紀ごろから首里から都落ちした士族たちが、主に農業を生業として入植し屋取集落（方言名ヤードゥイ）が形成された地域で、戦前の上勢頭は、まとまった集落が遺跡北西側の盆地状の平地部にあり、本遺跡に近い東側の台地部には耕作地



第4図 北谷町域と伊礼伊森原遺跡位置図

の中に屋敷が散居していたようである。

この丘陵地帯には墓が多く、斜面に露頭する石灰岩には掘込墓（方言でフィンチャーバカ）や亀甲墓（方言でカーミナクーバカ）などがあり、墓群が形成され遺跡周辺にも墓が点在し、調査区内には前年度調査を行った3基（東D-1・2・3号）の掘込墓がある。これらの墓には上勢頭に入植した屋取土族層の墓が見られる。

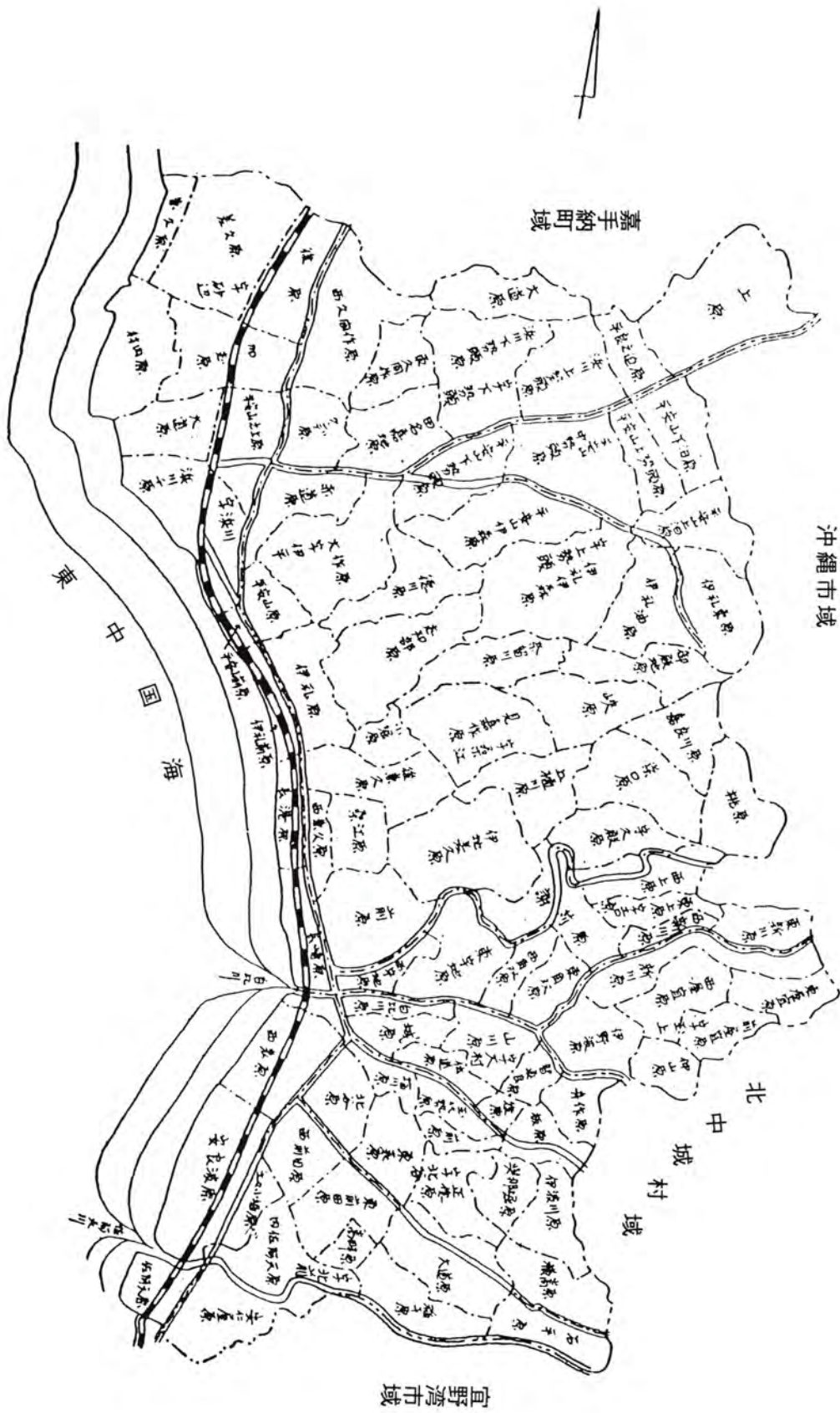
戦前の北谷は山間部まで開拓されており耕地面積では畑が約95%を占め、田圃は5%にも満たないが、県下でも三大美田の一つ「北谷ターブックワー」と称された田圃の多くが沖積低地の北谷にあり、わずかにまとまって玉代勢・伝道・桑江・伊礼・平安山にもある。上勢頭は水源の少ない地域で、雨天時にしか流れない川が多いが、遺跡の約200m西側には、徳川原を通り伊礼（現在はキャンプ桑江内）を抜けて西海岸に注ぐ徳川が流れている。

遺跡一帯は石灰砂岩部層と石英砂岩部層が分布する地域で、方言でフェージャーと呼ばれる生産力が低いとされる土質である。

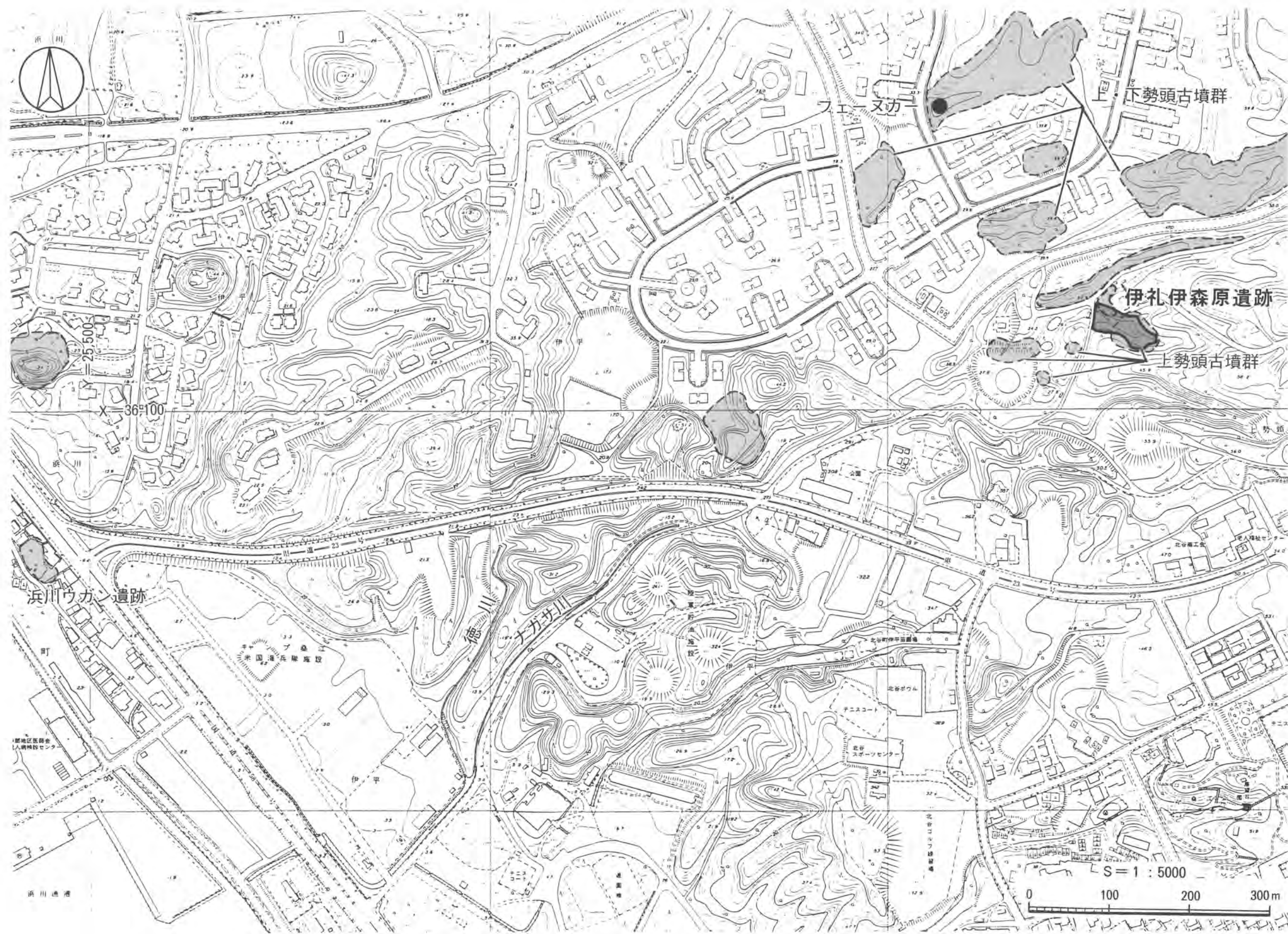
遺跡の立地する谷間は、沖積平野部から山間を抜ける川沿いに内陸部への開発、移動が行われたことが推察される。

参考文献

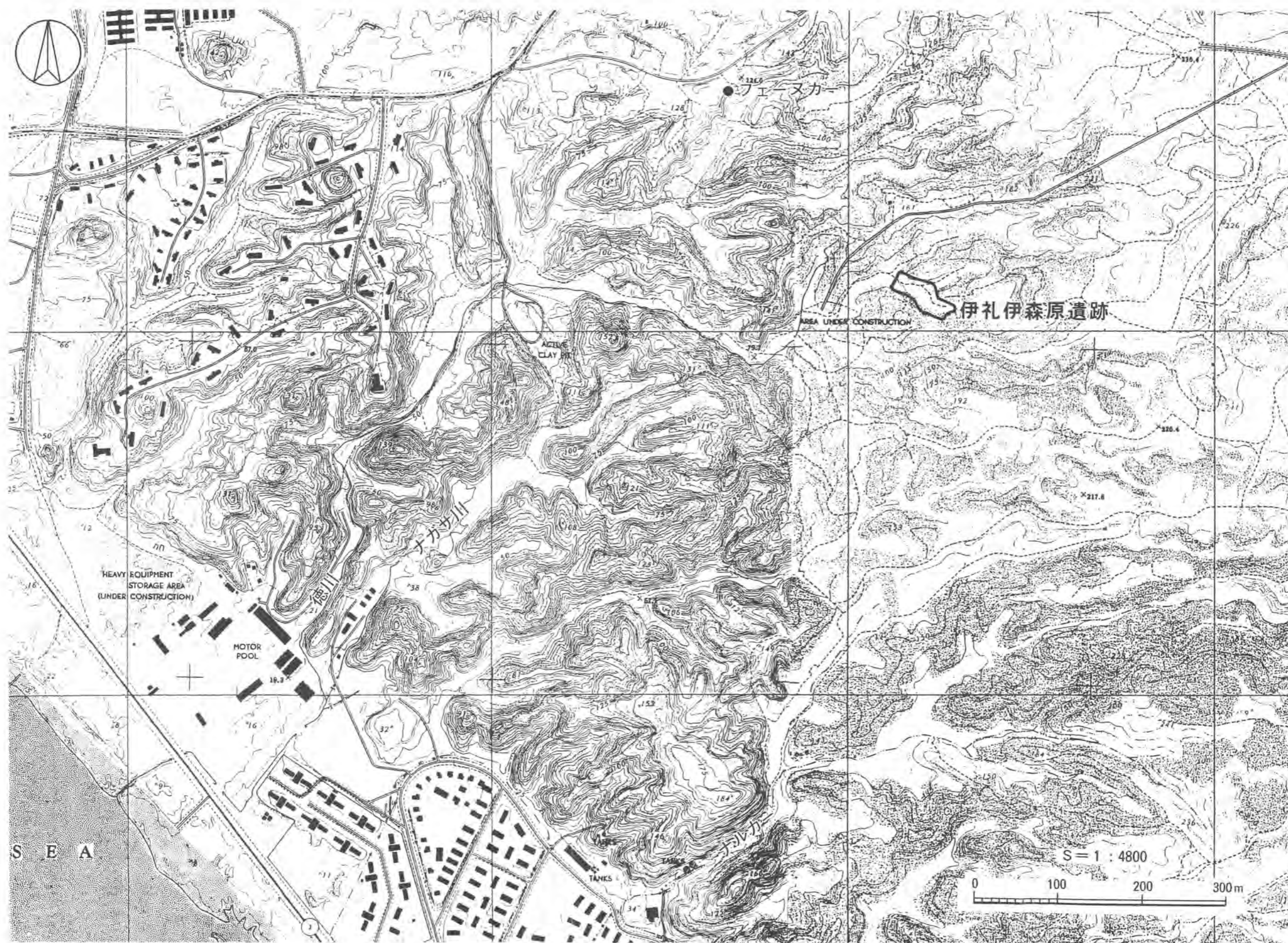
- 『ニライの都市ちやたん』〔1991年度版北谷町勢要覧〕北谷町役場 1991年
- 『北谷村誌』北谷村役所 1961年
- 『北谷町史 第三巻 資料編2 民俗上』北谷町役場 1992年
- 『北谷町史 第三巻 資料編2 民俗下』北谷町役場 1994年
- 『北谷町史 第六巻 資料編5 北谷の戦後』北谷町役場 1988年
- 『北谷町史 別巻 近代統計資料』北谷町 1987年
- 『上勢頭誌 上巻 通史編（I）』上勢頭郷友会 1997年
- 『第11回北谷町統計書 平成6年版』沖縄県中頭郡北谷町 1994年
- 『北谷町の遺跡—詳細分布調査報告書—』沖縄県北谷町教育委員会 1994年



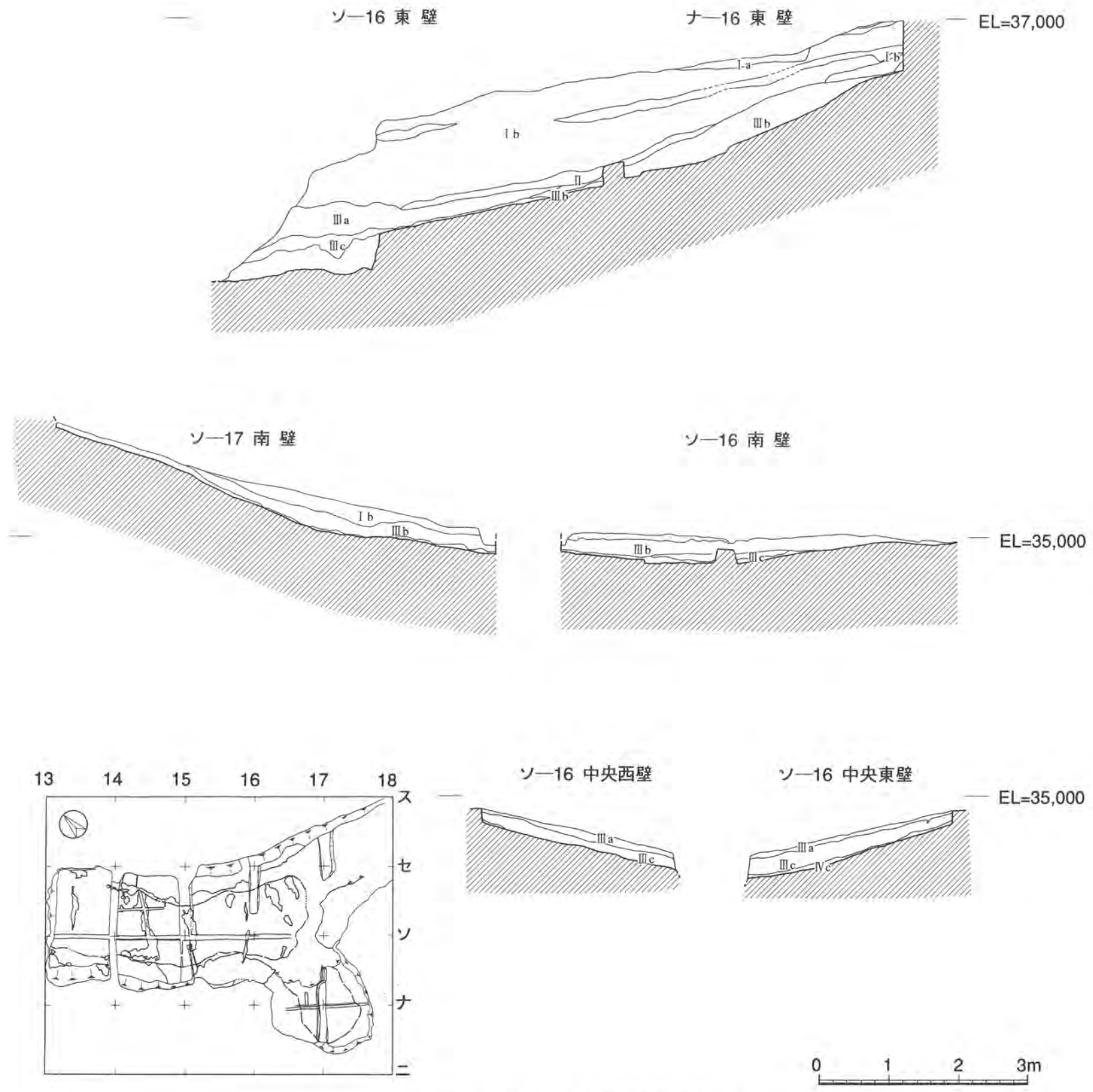
第5図 北谷村小字名（現北谷町域）



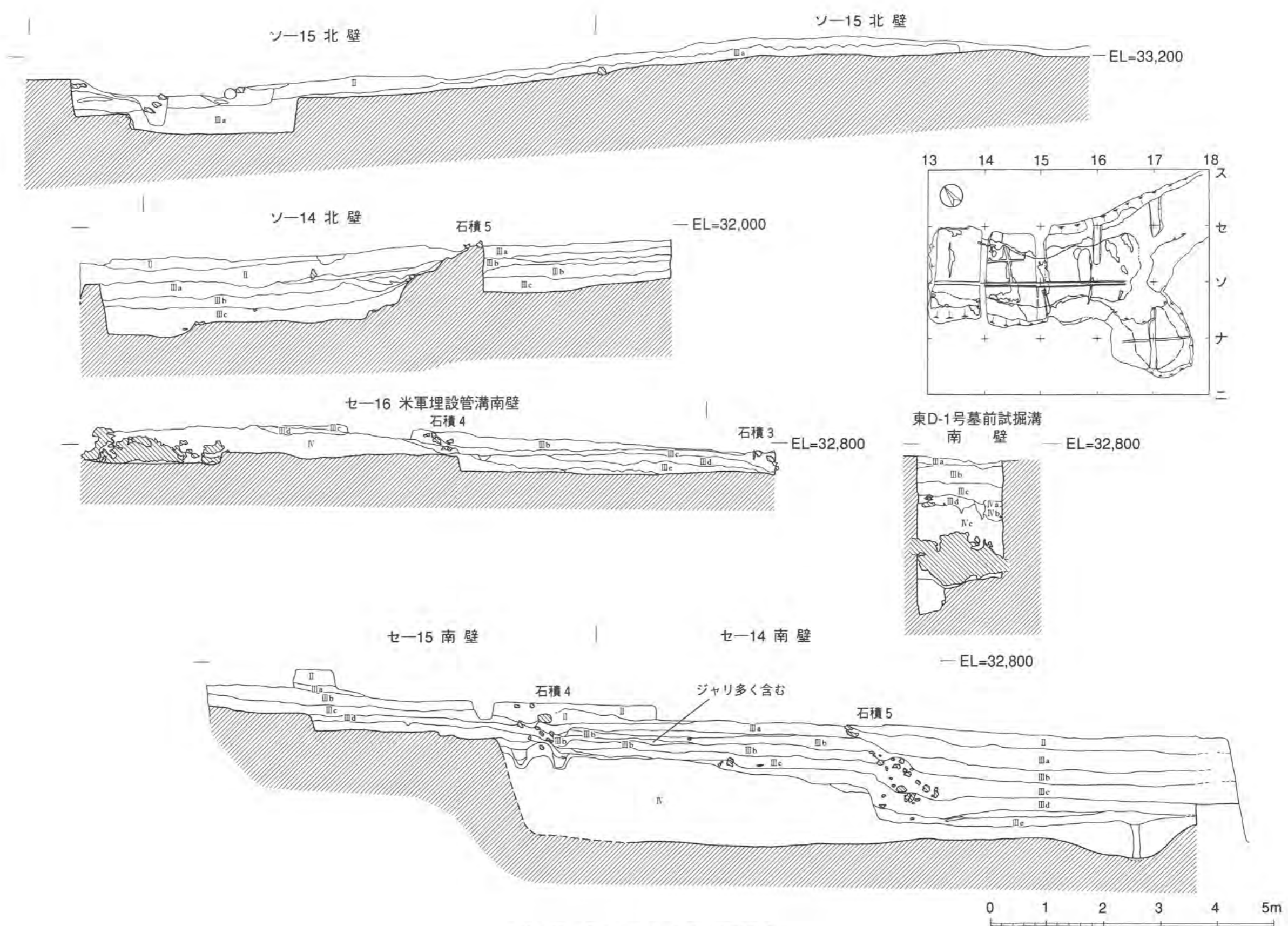
第6図 遺跡の位置と環境



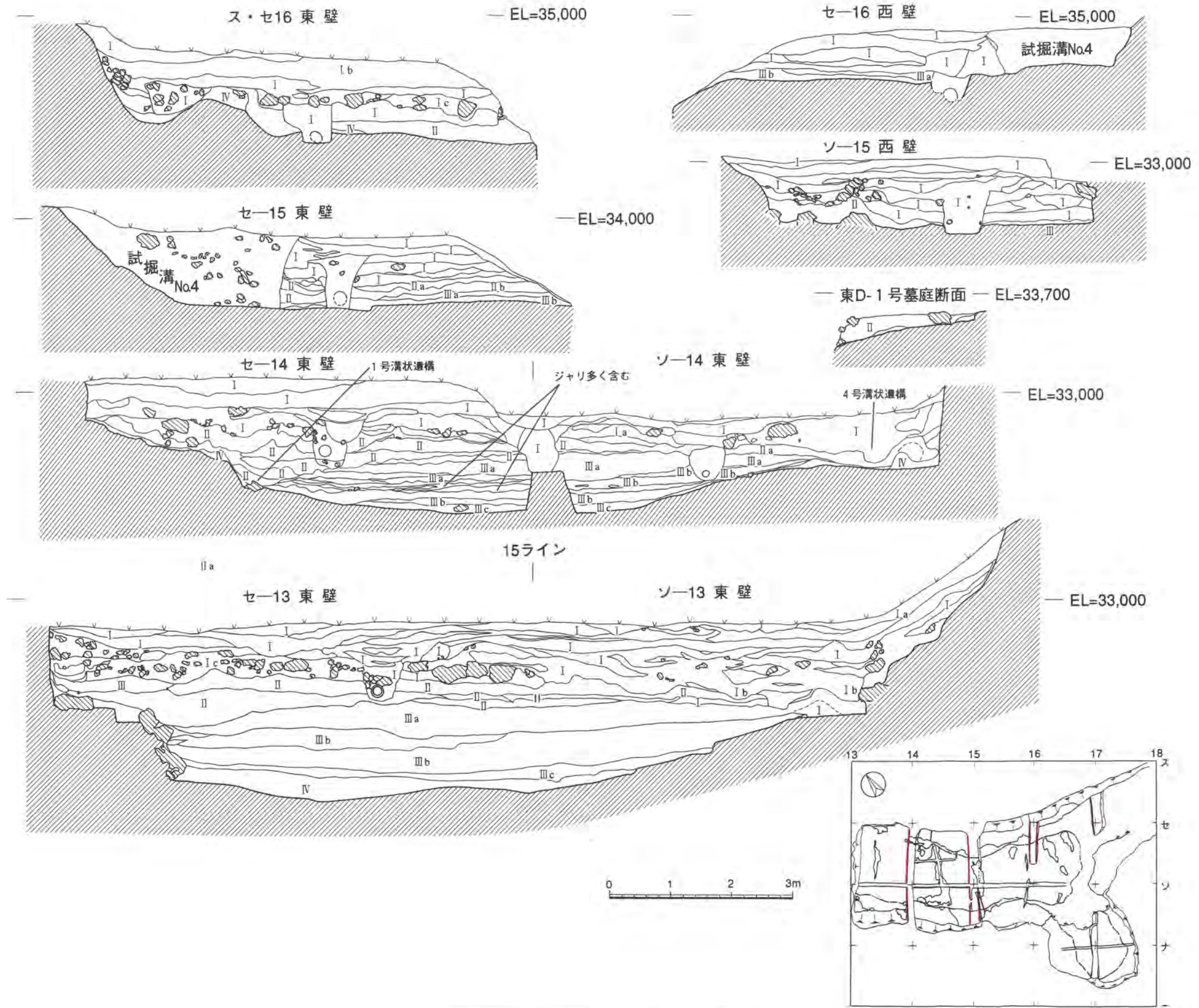
第7図 遺跡の地形 (1954年米軍作成図)



第8図 「ソ・ナ」ライン南側丘陵斜面層序



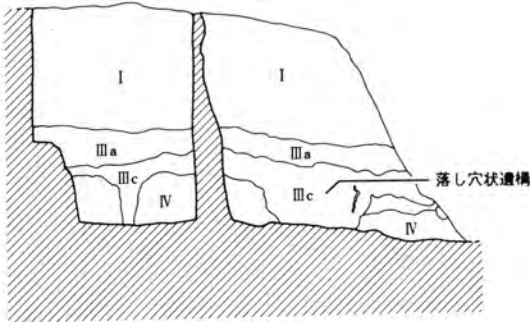
第9図 「ソ」ライン北壁・南壁層序



第10図 14~17ライン東壁・西壁層序

試掘溝No.6の南壁 西壁

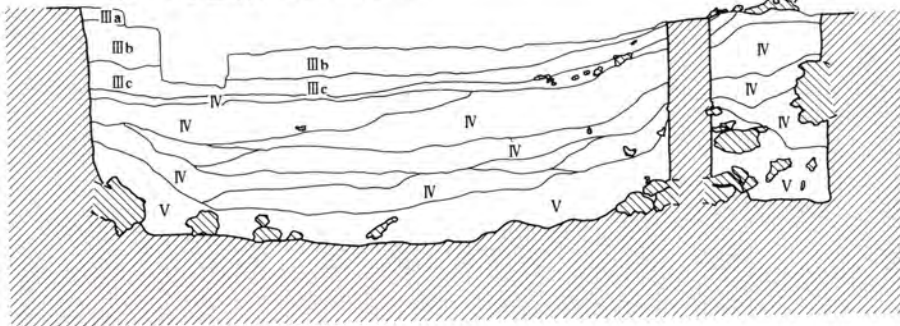
— EL=35,600



東D-1号墓前試掘溝の西壁

北壁 石積3残存部

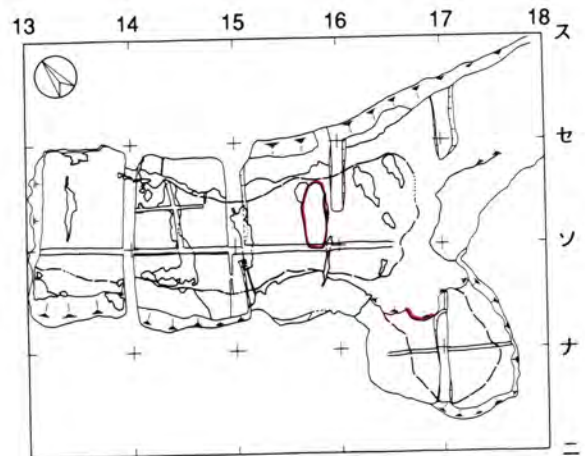
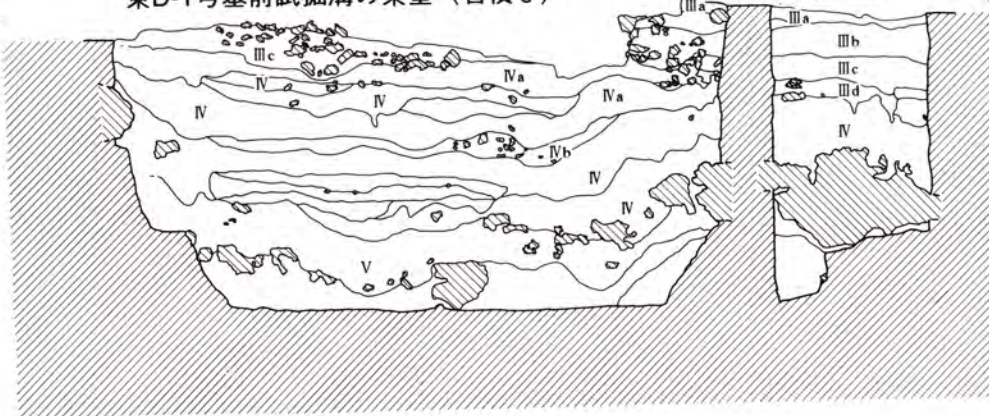
— EL=32,800



東D-1号墓前試掘溝の東壁 (石積3)

南壁

— EL=32,800



第11図 試掘溝層序

第Ⅲ章 層 序

1. 層 序

本遺跡は東から西へ蛇行しながら部分的に大きな高低差をもって下る谷間にあり、遺物包含層は南側丘陵斜面の一部（ソ・ナー16・17グリット）と谷間に堆積し、セー16グリットから下流側に広がる（第14・15・29図）。

谷間の包含層は、石積1・2が検出されたソー16グリット部分で約50cm、蛇行する谷間の頂部にあたる15ライン付近で約80cmである。また、大きな高低差をもつ石積4・5の地点では、前者が約90cm、後者は約1 m 20cmで下流へ延びていく（第9図）。

南側の丘陵斜面では、斜面（ソー16）の下部で検出された落とし穴の付近を中心に、傾斜角度10～25度で摺鉢状に堆積し、層厚は、丘陵斜面下部で厚さ約60cmである（第8図）。

南側丘陵斜面と谷間の境目は、自然の段差があり、包含層が途切れる。しかし、落とし穴状遺構と2号墓の間で僅かな堆積が見られたため、侵食によって途切れたものと考えられる。

層序は基本的には5枚に分けられ、第Ⅲ層がグスク時代の遺物包含層で文化層である。この第Ⅲ層はa・b・c・d・eの5枚に分けられ、さらに、高低差の大きい石列4・5の部分では、Ⅲ層a、bは石英粗粒の堆積や土色などの違いから前者は3枚、後者は5枚に細分される（第8～11図）。

以下、各層について略述する。

第Ⅰ層 表土層で3枚に分けられる。現表土（Ⅰ層a）と戦後の米軍基地接收以後に行われた造成時の赤土や侵食された石灰岩風化土壌の堆積（Ⅰ層b）、造成時に敷かれた石灰岩礫と削平土（Ⅰ層c）である。

基地内施設建設の造成や鉄砲水で侵食された土砂の堆積で、最大で厚さ約1 m 20cmである。造成によると考えられる第Ⅰ層bの堆積がある。

墓に伴うと考えられる幅約40cmの5号溝と戦前行われた畑の脇に造られたものと思われる幅約60cmの4号溝が確認された。ソ・ナー16・17の斜面から谷間の平坦部にかけての堆積は前年度古墓群発掘調査の際に、現表土の上位に流れ込んだ石灰岩風化土が堆積している状況が確認されたが、この土層断面は、実測作業途中で鉄砲水で崩壊した（図版6（一段右））。

第Ⅱ層 近世から近代の暗灰褐色土層で、細かくは5枚に細分され、丘陵斜面では中腹部のみに約10cmの厚さで堆積している。セー16グリットでは約10cmの厚さで、ほぼ水平に堆積しており、セー15グリットから下流側では、1号溝状遺構側に

厚く堆積している。南側丘陵側は、調査中の鉄砲水の流れから見ると侵食されたことが判断できる。谷間の平坦地には、戦前僅かに畑が耕されており、丘陵下には水害を防ぐための溝を施したという。13・14ラインで当時の溝が確認できる。本層下部から沖縄産陶器（壺屋焼破片）が出土する。

第Ⅲ層　グスク土器や青磁や褐釉陶器が出土する遺物包含層である。

第Ⅲ層 a は、厚さ約20～40cmの淡赤褐色土層。移行層で南側丘陵斜面と石列1～4の範囲では約20cmと薄く、谷間の幅がやや狭くなる4号石列（15ライン）付近から下流側に約40cmと厚くなる。

第Ⅲ層 b は、厚さ約40cmの暗茶褐色層で、南側丘陵斜面（ソ・ナー16・17）で、ピット群・土坑、谷間に6列の石積が検出され、グスク土器・青磁・褐釉陶器が出土する。石積5では堰き止められた状況があり、水田などにみられる垂直方向に土中で酸化した根痕が見られる。石積4下流側前面の第Ⅲ層 b には細かいジャリが薄く堆積し下流側に薄くなり、層全体にまばらになる。

第Ⅲ層 c は、厚さ約20cmの暗黒褐色土層。溝状遺構、炉跡状遺構、落とし穴状遺構、土坑、ピットが検出されグスク土器が出土した。石積は、本層から積まれている。

第Ⅲ層 d : 厚さ約20～36cmの淡暗黒褐色土層で、包含層と地山の移行層でやや粒状を呈する。東D-1号墓前試掘溝南壁の最下部で微粒砂岩が検出された。石積5の部分でもっとも厚く炭化木が出土した。

第Ⅲ層 e : 厚さ約30cmの淡黄褐色土層。移行層。やや粘質でより地山に近い。

第Ⅳ層 a : 地山。黄褐色シルト層で石灰岩小礫や石英粒を含む。

第Ⅳ層 b : 黄褐色土層。川底状のジャリ層。

第Ⅳ層 c : 黄褐色粘質シルト層。

第Ⅴ層 : 石灰岩岩盤礫層。

第Ⅳ章 遺 構

本遺跡からは、6列の土留め状石積、4基の炉跡状遺構、溝状遺構6本、落とし穴状遺構1基、土坑4基、ピット群が検出された。

以下、各遺構について述べる。

石 積 (巻首図版(上)(下)・図版8(上)(下)・図版12(三段))

土留め状石積は、東から西へ蛇行しながら下る幅約10mの谷間を横切る状態で、6列検出された。第Ⅲ層cから積まれ第Ⅲ層bを堰き止める状態である。これらは上流側(セ-16)から下流側(セ-13)にNo.1～No.6とした(第12～15図)。

石積1～2の間隔は約2m～2m50cm、面積は約92m²、石積2～3は約4m～5mで面積は約430m²、石積3～4は約7mで面積は267m²、石積4～5は約5mで面積は472m²、石積5～6は約9mで面積は847m²と最も広い。

各石積間の高低差は、石積1と石積2では約24cm、石積2と石積3では約40cm、石積3と石積4では約50cm、石積4と石積5では40cm、石積5と石積6では46cmである。石積1から石積6までは直線距離にして約32m、その高低差は約3mである。その間には、約40cmと約60cmの自然の段差があり、前者は石積4、後者は石積5と同位地にある。高さのある石積4・5や自然の段差は蛇行する谷間の頂部にあたる。

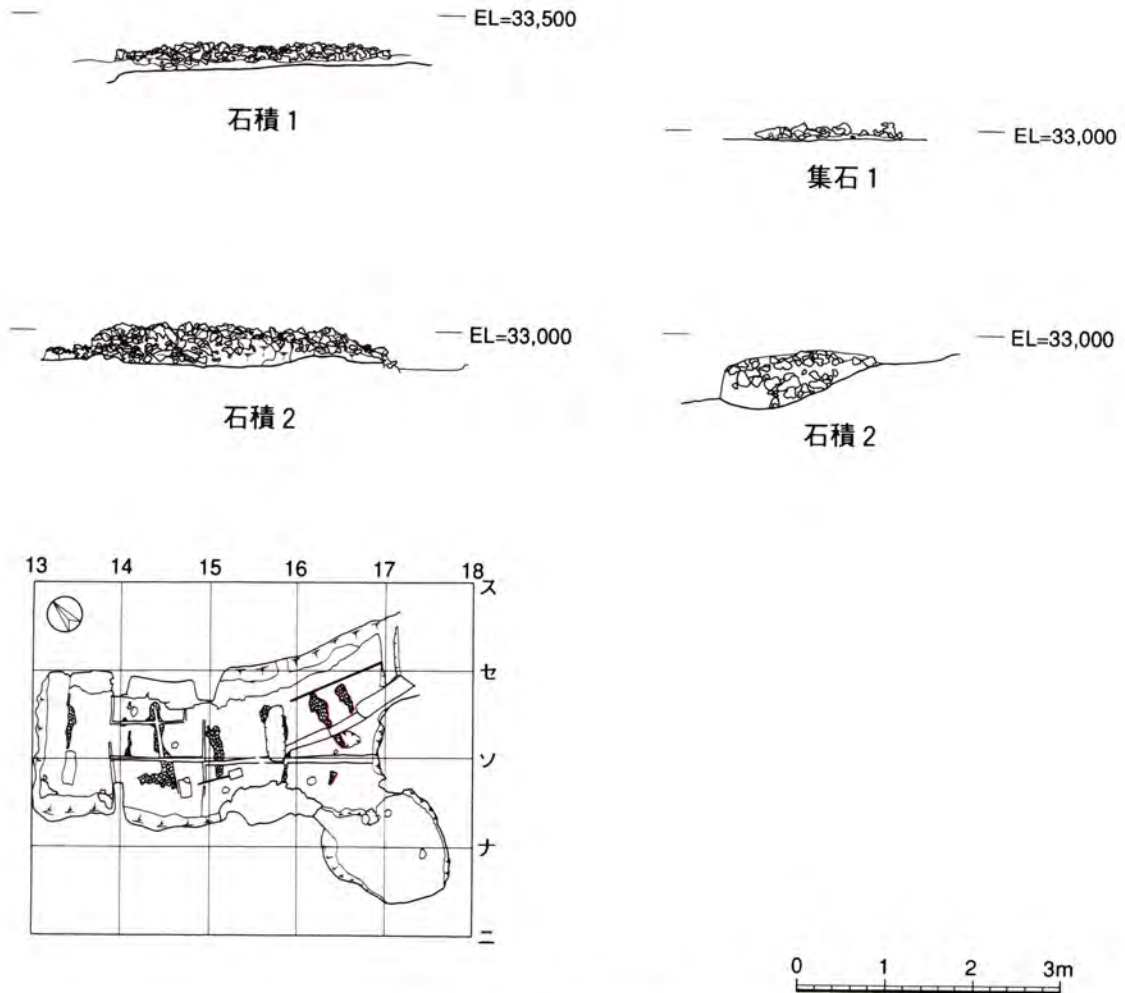
No.1～4までの石積間で石灰岩礫は出土しないが、石積4・5の前面では「ソ」ラインから北側に、石灰岩礫が検出され前者では集積の状態を呈し、後者は顕著であった。土層や遺構の検出状況から崩壊したと考えられる様相を呈していた。また、石積5では積み重ねた状態が見られた。

検出された石積は、10cm前後の小礫から40～50cm大の自然礫で、全体的に見ると約20cm前後のものが多く使われ石積の密度はあまり高くない。

以下、各石積について述べる。

石積1 (第12・15図、図版8(上)・図版9(二段左)・図版10(一段右))

セ-16で検出され、高低差約20cm、長さ約3m、幅約50cm～1mで北側の丘陵よりに広い。使われる石灰岩礫は10cm前後から約30cm大があり、15cm大のものが目立つ。この石積は米軍埋設管溝のため北側部分で途切れた状態である。埋設管溝の南側に石積の残りと思われる僅かな石の広がりが見られるが判然としない。



第12図 石積立面図

石積 2 (第12・15図、図版 8 (上)・図版 9 (二段左)・図版10 (一段右))

セー16で検出され、高低差約50cm、長さ約 8 m、幅約70cm～ 1 m20で北側丘陵よりに広く、15cm大のものが目立つ。

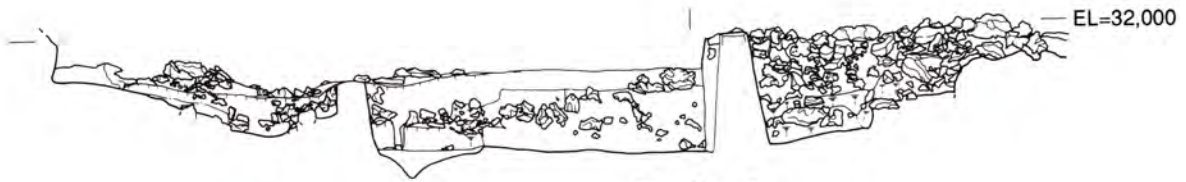
この石積の北側部分の最も幅が広い部分で上流側が半円状に高くなっており、その前面に低く礫が積まれている。やや浅く窪んだ様相である。南側部分には南東から北西方向に下る幅約 2 mの 1号溝状遺構が堰き止められた状態で積まれている。この石積は、地山面まで掘り込まれた米軍の埋設管溝によって寸断された状態である。

石積 3 (第11・15図、図版 8 (上)・図版 4 (二段左))

ソー15の東側と東D-1号墓前試掘溝の東壁と北壁の北側部分に一部残る状態で、試掘トレンチの掘削の際に、第Ⅲ層の遺構レベルから石灰岩礫が多く出土していることから本来は長さ約 9 mの石積が積まれていたことが推察され、試掘溝東壁の残存部には、高低差約40cmの石灰岩礫の集中が見られる。試掘溝の北壁側に残る石積の下位



石積 4



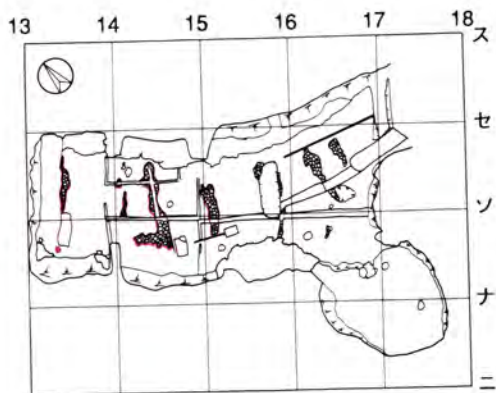
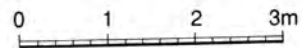
石積 5



石積 5 崩壊礫集中部



石積 6



第13図 石積立面図

から滑石混入土器・横耳（把手）付土器の胴部片が出土した（図版14（二段右））。

石積 4（第13・14図、図版 8（下）・図版 5（一段左））

セ・ソー15で検出され、高低差約80cm、長さ約6 m40cm、北側の丘陵よりにあり幅約1 m55cm、中央部で約1 m、南側丘陵部分は約50cmである。セー15中央部で南東から北西に下る3号溝状遺構を堰き止めた状態で積まれている（図版 9（一段左））。

石積の下流側には南側から北側に細かいジャリの堆積が検出され、2号炉跡状遺構を挟む窪み内で検出された石灰岩礫は、石積下流側に鉄砲水が流れ込んだ際のものと考えられ、石積前面に落ち込む部分の地山面にはシルト質の淡暗褐色土が堆積する窪みが検出された。また、「ソ」ライン畦側の石積除去後の下位には2個のピットが検出された。石積の北側丘陵下には、第Ⅱ層が堆積する1号溝状遺構がある。

石積 5（第13・14図、図版 8（下）・図版 5（一段右）（三段））

セー14で検出され、高低差約1 m20cm、南側の丘陵よりで幅約2 mと規模が大きく両脇にある石灰岩岩盤部分を結んでいる。ソー14側では石の密度が高く35～40cm大の石灰岩礫が目立っている。この石積の中央部から北側部分は、大小さまざまな石灰岩礫が混在し、石英粗粒や石灰岩粗粒などのジャリ状の集中があり、南側斜面に沿って流れ込む鉄砲水によって崩壊したと思われる状態で検出された。この石積崩壊部分の第Ⅲ層bから櫛描文皿（青磁・同安窯）が出土した。この石積は、ソー14北壁の断面で見ると第Ⅲ層aを止めた状態が検出され、第Ⅲ層期に再度、重ね積みが行われた状況が見られる（図版 5の（二段左））。

石積 6（第13・14図、図版 8（下））

セー13で検出され、高低差約60cm、長さ約8 m、中央部で幅約70cmで谷間の平坦部に石積が残り、丘陵斜面と平坦部の境目で途切れた状態であるが、ソー13南側丘陵斜面の下部で検出された幅約80cm～1 m、深さ約15cmの6号溝状遺構の中から約30～50cm大の石灰岩礫が本石積の延長線上の位置で検出された。その前後では礫は検出されていないことから、堰き止めたものと判断される。溝は石積より約20cm高い位置にある。

南側丘陵斜面下で検出された岩盤は脆く、石積築造時の供給源となり得る状態のものと考えられる。

溝状遺構

遺跡から検出された溝状遺構は、6本である。古墓調査時に検出された2本と同じ

ものと、今回の調査で第Ⅲ層cで検出された3本である。以下、理解のため溝と記す。

これらの溝は、南側丘陵斜面と谷間の段差部分に沿っているもの、北側丘陵斜面に沿って流れるもの、北側丘陵斜面よりの谷間にあるものである。

南側丘陵斜面沿いの溝は、第Ⅱ層上面で検出された旧表土時の溝で、ソー16グリットにある滝壺状の落ち込み部から南側丘陵斜面下を地形に沿うものと、この溝と墓庭の間で検出されたもので、前者からは墓の蓋石に使用されたと考えられる石灰岩礫が出土した。

北側丘陵斜面に沿う1号溝は第Ⅱ層が堆積しており、上流側やセー14では、地山を抉り、セー13グリットでは第Ⅲ層の上位にある。前述したようにこの溝を中心に、谷間に第Ⅱ層が堆積していたことが判断できる。

第Ⅲ層cから3本の溝が検出され、南側丘陵下で1本、北側丘陵よりの谷間で2本検出された。

セー16で検出された2号溝は、石積2で堰止められた状態で、セー15で検出された3号溝は石積4に堰止められた状態である。ソー13グリットの南側丘陵斜面下で検出された6号溝は、石積6の延長線上で石灰岩礫が入った状態で検出された。

第Ⅲ層cの溝は、いずれも石積と交わる状態である。石積3の残存部の断面には浅く窪む状態が検出され、石積4の自然の段差部の地山面には、侵蝕によると考えられる窪みが見られ、石積5の下流側は、谷間の中央部が深く第Ⅲ層dは中央部にのみ検出されたことから、蛇行して下る状況が推察される。

1号溝（第10・14・15図、図版3（中）（上）・図版7（三段左）・巻首図版（下））

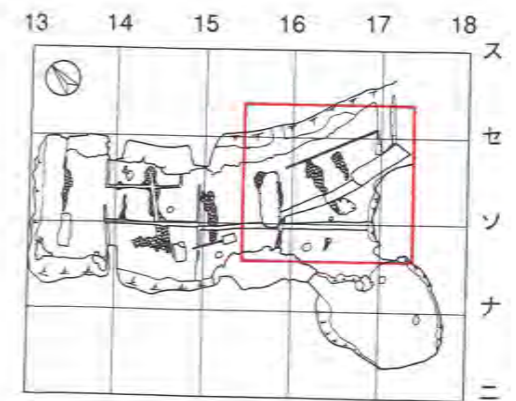
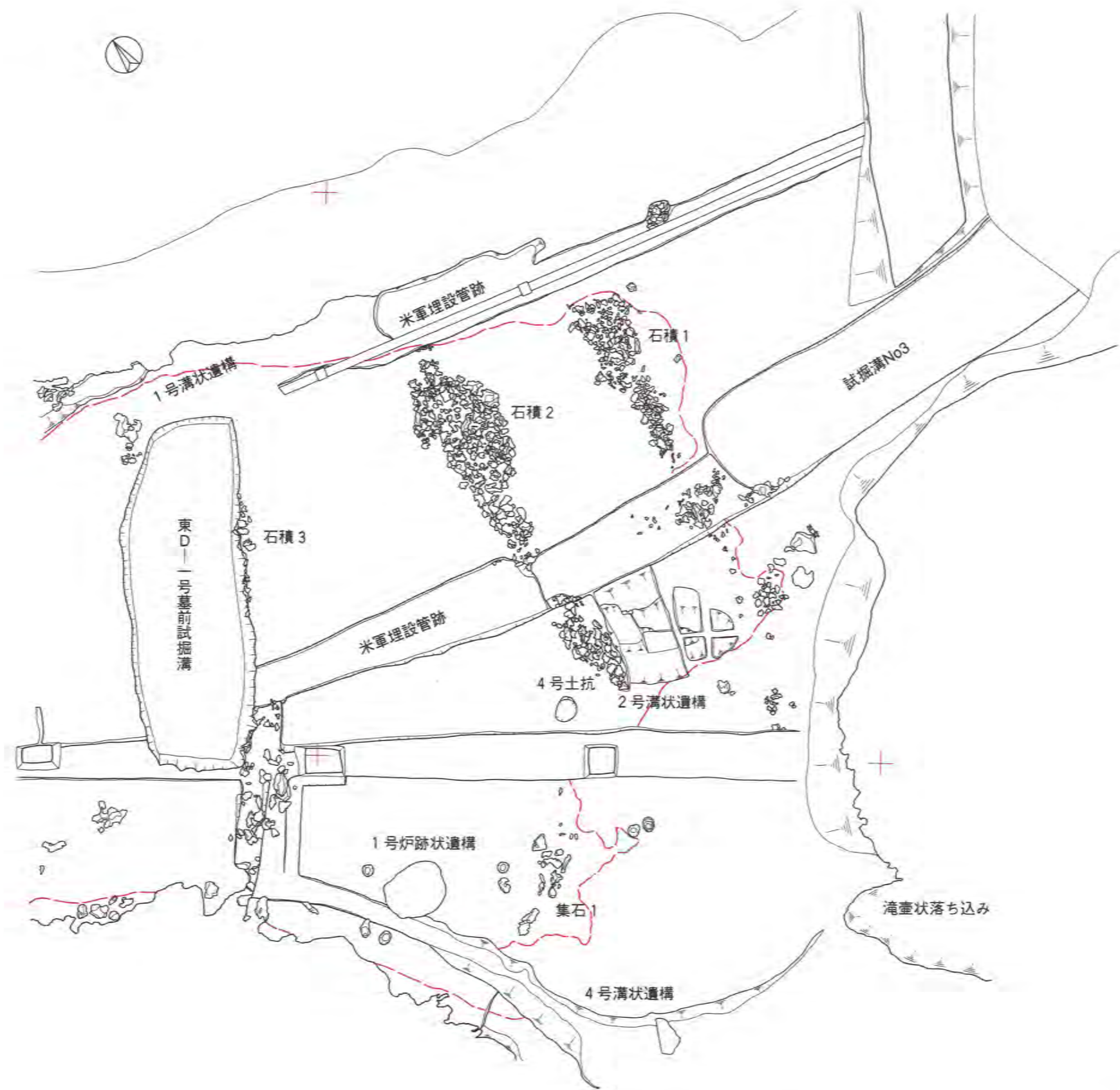
北側の丘陵斜面下で地山を抉っている溝は、幅約90cm、深さ約30～40cmで露頭する石灰岩岩盤に沿って下流に伸びている。15ラインでは谷間側に迫り出す岩盤部分で激しく攪拌した状態の堆積があり、セー13東壁では第Ⅲ層の上位にある。

2号溝（第15・17図、図版4（一段右）・図版9（一段右））

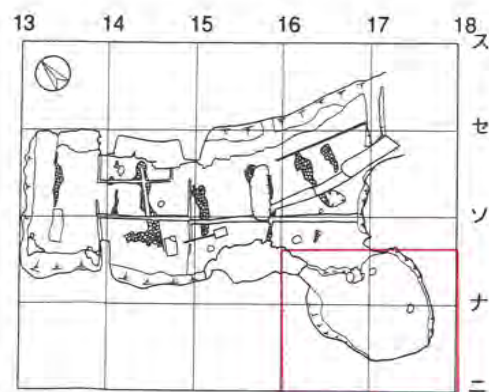
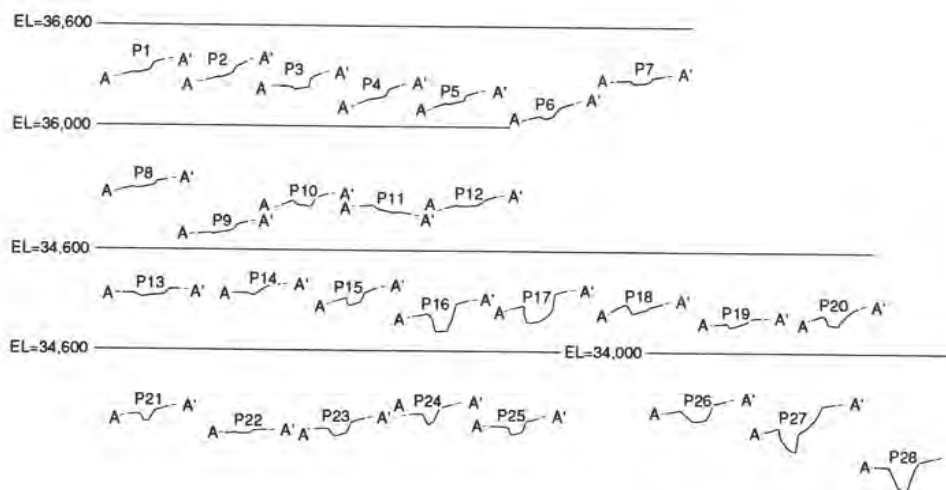
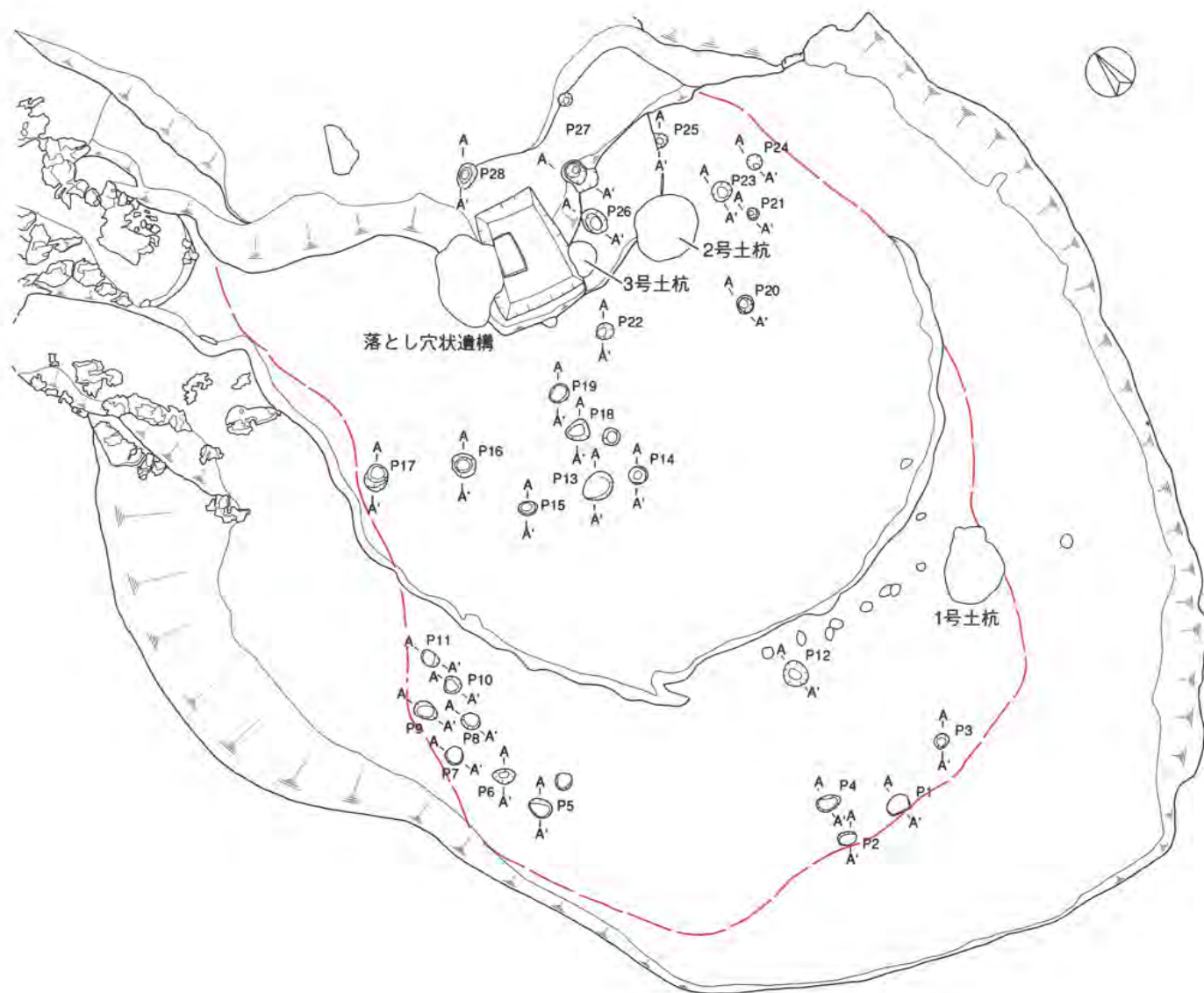
セー16で第Ⅲ層cから検出された。幅約2m10cm深さ約45cmの溝は、石列2に堰止められており深さ約40cm、残存部の最大幅は約2mで、南側で最も深く溝内北側の段差部分には溝と平行して並ぶ石列が検出された。この溝はセー15の3号溝方向に曲がっており、連続することが考えられる。溝起点部分の遺構内には、焼土が集中して検出された。この溝は、米軍埋設管溝によって寸断された状態で、断面南壁に見られる堆積には黄色土粒がほぼ同レベルで下流側へ伸びる状況が検出された（図版4（三段））。



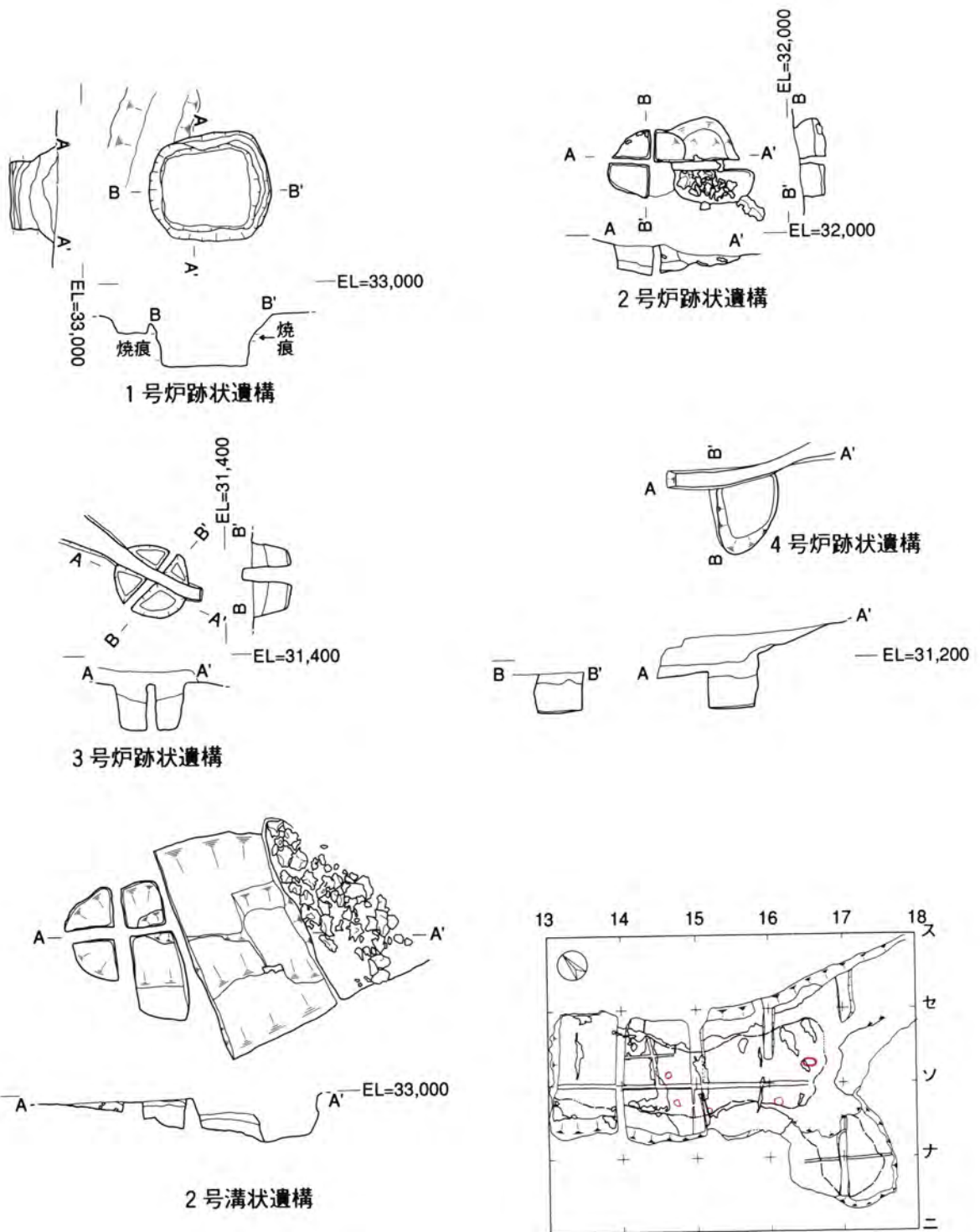
第14図 遺構平面図 (セ・ソ-13・14・15)



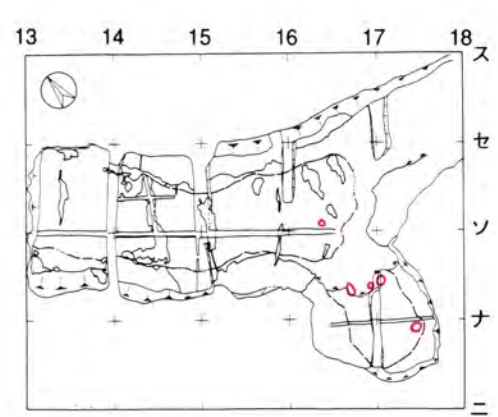
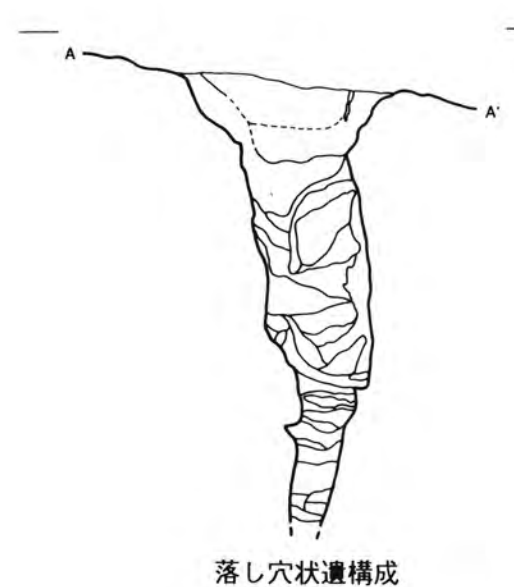
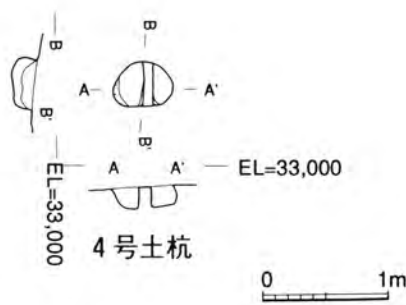
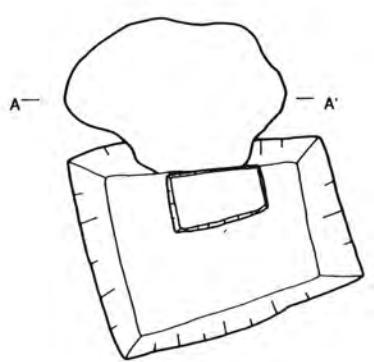
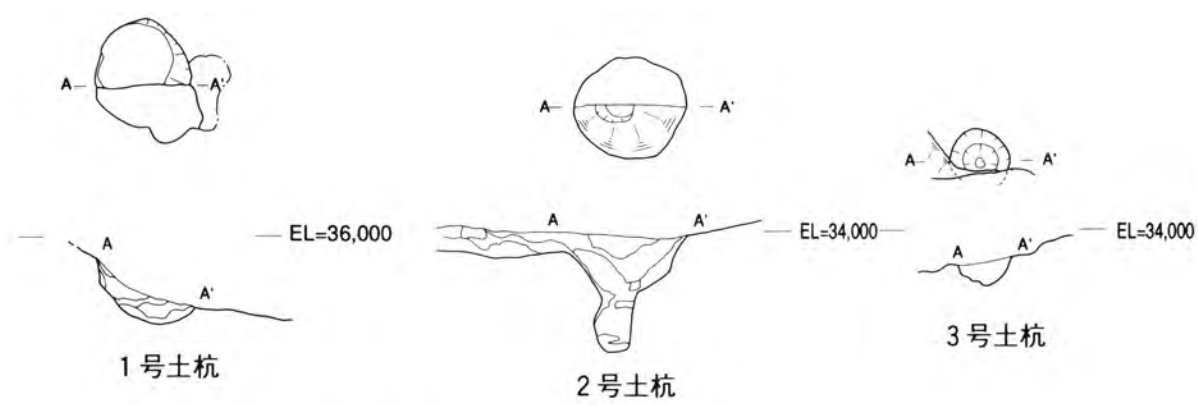
第15図 遺構平面図 (セ・ソ-15・16)



第16図 遺構平面図 (ソ・ナ-16・17)



第17図 炉跡状遺構、2号溝状遺構平面図・断面図



第18図 土杭・落とし穴平面図・断面図

3号溝（第14図、図版9（二段右）（三段左））

セー15で第Ⅲ層cから検出された。幅約95cm～1m20cm、長さ約2m40cmの溝は、やや北側丘陵よりにあり石積4で堰止められた状態である。この溝の伸びる方向で石積4の下位の地山面で窪みが検出された。

4号溝（第10・14図、図版7（三段右）・（四段右））

ソー15で検出された。この溝は、前年度の古墓群調査の際に検出された畑の水害避けの溝と考えられるもので、上場幅約60cm～1m、下場約25～50cmで2号炉跡状遺構近くから丘陵に沿って蛇行しているが、炉との切合いは見られない。ソー13・14西壁でも検出された。

5号溝（第14図、図版7（三段右））

ソー15で前述の4号溝と墓の間にあり、並んで検出された。2号墓墓庭の前面から始まるこの溝は上場幅約40cm、下場幅約30cmで墓庭前から南側丘陵斜面に沿って下流に下る。

6号溝（第14図、図版8（下））

ソー13の南側丘陵斜面下部で第Ⅲ層cから検出された。溝内からは石灰岩の自然礫が検出された。幅約85cm～1mである。この溝はソー14で、4号炉跡状遺構が検出された試掘溝No.5の壁面で落ち込みが検出されていることから、南側丘陵斜面に沿って岩盤の上位で続いていたと判断される。

炉跡状遺構

炉跡状遺構は第Ⅲ層cで4基検出された。これらのうち、3号以外は南側丘陵斜面よりで検出された。いずれも縁辺部と壁が赤く焼けているが、床面には見られない。ソー16の南側丘陵斜面下部で検出された落とし穴状遺構の上部で、炉跡状の焼痕が確認された。これについてはその項目で記述する。

1号炉跡状遺構（第15・17図、図版13（一段左・右））

ソー16で検出された。平面形が隅丸長方形を呈するもので、断面形は平坦な床面から、ほぼ垂直に立ちあがり床面から約25cmの高さから逆ハの字状を呈する。縁辺部の最大径は長径約1m16cm、短径約1m12cmで、壁面がほぼ垂直になる部分は、長径約86cm、短径約60cmである。深さは約50cmである。

壁の焼痕は北壁と西壁面を中心に南壁の中央部付近まで壁全体が濃赤橙色の焼痕が残る。東側は直立した壁の上端部に約6cmの幅で僅かに見られる。床面は焼けていない。

壁は強い火力によって焼けたと考えられ、底には炭と土が互層を成しており、最下部は厚さ約4cmの炭が堆積し、その上位に厚さ約2～6cmの土が堆積する。2枚目の炭もほぼ同じ厚さで中央部の堆積が薄い。

遺構内からは約15cm大の石灰岩礫が南側で出土したが焼けた痕跡は見られない。炉の周囲には3本のピットが検出され、南西側で2本、東南側に1本あり直径約20cm、深さ約23cmのピットが検出された。検出状況から本遺構に伴うものと考えられる。

2号炉跡状遺構（第14・17図、図版13（三段左）・図版10（二段右））

ソ-15グリットで石積4と南側丘陵の接点部で検出された。平面形は楕円形を呈し、残存部の縦の最大径約78cm、横約64cm僅かに中央部が窪む深さ約27cmの円柱状に掘られている。底面には厚さ約8cmの炭が堆積し、南西側の縁が赤く焼けている。

本遺構の西側端は楕円状の浅い窪みとの切合い関係があり、その中から石灰岩礫が出土した。この窪みは炉跡状遺構内の埋土を抉っており、第Ⅲ層bが堆積している。

本遺構の上位（Ⅲ層b）で青磁皿が出土した（図版14（三段右））。

3号炉跡状遺構（第14・17図、図版13（二段左）・（右））

セ-14で石積4・5間の中間部付近で検出された。直径約70cm円柱状を呈し、床面には約4cmの厚さで炭が堆積する。壁の上端が約10cmの幅で赤く焼けており東側が顕著である。西側の壁は全体的に焼けるが部分的に赤味が強い。遺構内の堆積土は、縁辺部から約10～20cm以下に黄色土粒と炭混じりである。

周辺で石灰岩礫の集中が検出されたが、焼けた痕跡は見られない。崩壊した石積のものと考えられる。

4号炉跡状遺構（第14・17図、図版13（三段右）・（四段左））

ソ-14グリットの南側丘陵斜面下のNo.5の試掘ピットの北東隅で検出された。残存部で見ると縦約46cm、横約46cmで、僅かに残る底の形態などから隅丸形状を呈していたと考えられる。他の炉跡状遺構と同様に底には、厚さ約2cmの炭が堆積しており、床面は焼けていない。第Ⅲ層cで検出された。

落とし穴状遺構（第11・16・18図、図版11・図版6（一段左））

前年度の試掘溝No.6の西壁で検出された土坑で、ソー16グリッドの南側斜面の端にある。遺構上部の深さ約30cmまでは、試掘溝の掘削により西側部分を半裁した状態で検出した。本調査では、さらに西側部分を半裁し、掘り下げを行ったが深さのあることが判明し遺構切り取り保存時に、バックホーで掘り下げ断面の観察を行った。

残存する平面形は半円を呈していることから円形を呈するものと考えられる。

断面形はラッパ状を呈しており縁辺部の最大径は約1 m17cm、上部の深さ約40cmまでは摺鉢状を呈し、地表面から1 m60cmまでは直径約60cmの略円筒状を呈し穴底に向かってややすぼまり、再度口径を減じ、地表面から2 m60cmまで、直径約20cmの穴が山手側（南側）に向かって斜方向に続く。それ以下には、腐植土を含む粘性の強いシルト質土壌の堆積が見られ、腐植土のすじがリング状に幾重にも重なる状況が検出され、流れ込んだ水の侵蝕によるものと判断された。

摺鉢状を呈する本遺構上部の縁辺部の北側は、火を受けて赤く焼けており、上部の深さ約40cmに床面と考えられる厚さ約5 cmの炭が堆積する平坦面がある。

その下位に、ほぼ穴の3分の2の深さで、偏って南側が深くなる堆積土の上面に炭の層がある。このことから、穴が埋もれたことによって当初の機能を失い、その後、穴の上部で炉として使用した可能性が考えられる。

遺構内の堆積は、山手側（南側）はほぼ明瞭に分けられ北側は、崩落によるものと考えられる地山の黄色土の堆積がある。堆積土中からは石灰岩小礫が僅かに出土する。

この遺構は、上部が炉として再利用されたことも考えられるが落とし穴として機能している状態の頃と炉としての機能した時とでは、遺構の位置自体に、ずれが有って落とし穴の機能が終えた後に、ほぼ同位置に炉が作られた可能性も考えられる。

土坑（第16・18・31図、図版12（一段左）・（二段左））

4基が検出された。ナー17で1基、ソー17で1基、ソー15で1基、セー16で1基である。また、ピットNo.29と2号墓の間で、丘陵斜面と谷間の境目の段差部で斜面から連続する堆積が部分的に残っており、半裁した結果、シルト質の灰褐色土壌が堆積する穴が検出された。検出状況や堆積土から侵蝕によるものと判断した。

以下各土坑について述べる。

1号土坑（第16・18図、図版12（一段左））

ナ-17グリットで検出された。平面形が略円形を呈し、長径約90cm、短径約73cm、最深部の深さは約20cmで、丘陵斜面の中腹にあり、谷間へ傾斜する側で最も深くなる。第Ⅲ層bで検出された。

2号土坑（第16・18図、図版12（二段左）・（右））

ソ-17グリットで第Ⅲ層cから検出された。丘陵斜面と谷間の平坦部が接する部分で周囲にやや深さのあるピットに囲まれる状況で検出された。平面形は、円形を呈し、長径約90cm、短径約80cm、深さ約25cmで底の中央部に直径約30cmの穴が更に続き深くなるにつれて広がっており、この部分の堆積土は、シルト状の柔らかい土が堆積し、侵食された可能性が考えられる。

3号土坑（第16・18図、図版12（二段左））

ソ-15グリットで第Ⅲ層cから検出された。南側丘陵斜面の縁にあり、最大径約45cmの円形で、深さ18cmである。

4号土坑（第15・18図、図版10（三段））

セ-16グリットで第Ⅲ層cから検出された。石積2の西側にあり平面形は楕円形を呈し長径約47cm、短径約36cm、深さ約17cmである。

ピット群（第16・31図、図版12（一段右）・（二段左））

36本のピットが検出され、そのほとんどが丘陵斜面にあり、谷間では1号炉跡状遺構周辺で検出された。ピットNo.5～11は第Ⅲ層bで検出され、ピットNo.1～4・12～28は第Ⅲ層cで検出された。（第14図）

丘陵斜面の上部や中央部付近のピットは10cm以下と浅く、丘陵斜面下部の土坑の周囲に深さのあるものが位置しており、2号土坑東側のピットNo.21・22・24～26は10cm以上20cm未満、落とし穴状遺構の西側のピットNo.17・18は20～30cm未満、東側のピットNo.28・29は、深さ約30cm以上40cm未満と深い。斜面から検出されたこれらのピット群の性格は判然としないが、深さのあるものは、土坑又は、落とし穴状遺構に関連する可能性が考えられる。

第V章 遺 物

出土遺物はグスク時代から、近世・近代のものである。表採資料で外国産陶磁器などが得られていることから、他の表採資料も含めて扱った。

人工遺物では土器・外国産陶磁器（青磁・白磁・染付・褐釉陶器）・本土産磁器・陶質土器・沖縄産陶器・円盤状製品・石器・鉄製品・銅製品が出土した。自然遺物の貝殻や獣魚骨は出土していない。出土状況を第1表に示した。

上層の近世・近代の層からは、沖縄産陶器・本土産磁器・鉄製平鑿、墓庭部分から銅製煙管が出土している。器形の伺えない資料は、集計表で扱った。

第1表 遺物総合出土一覧

種 類 層 序	土 器	外国産陶磁器				本土産磁器	沖縄産陶器			円盤状製品	石 器	銅 製 品	鉄 製 品	合 計
		青 磁	白 磁	染 付	褐 釉 陶 器		陶質土器	無釉陶器	施釉陶器					
畦		1		1										2
表 採		2		2		11	12	10	37	2				76
I 層				2	1	1							1	5
II 層									2	1				3
II 層 a														
II 層 b		2		1	1				2					6
II 層 c		1												1
III 層	3													3
III 層 a		2	1									1		4
III 層 b	52	3												55
III 層 c	51										1			52
III 層 d														8
III 層 e		8												
IV 層														
V 層														
東D1号墓右袖											1			1
不 明	38						6		18					62
合 計	144	19	1	6	2	12	18	10	59	3	2	1	1	278

土 器 (第19図、図版16)

総数144点の土器が出土した。口縁部5点、底部2点、胴部片137点で、そのほとんどが小破片である。個々の観察は第6表に、出土状況を第2・4表に示した。

口縁部と底部の資料より鍋と甕の2種に分けることができた。口縁部は鍋3点、甕1点、不明1点である。底部は鍋・甕ともに1点得られた。

鍋の口縁部は、器形と胎土に違いが見られた。分類は以下の通りである。

I 類：鍋

A：口縁部が内彎し口縁直下に横位の把手が付くものである。器壁は7～8mmで、口唇部は平坦に成形され、器面はナデによる調整が施される。胎土は、砂質で粘性が弱く、ややザラザラとしており石英の細粒を含む。器色は茶褐色を呈する部分もあるが、大半が明茶色である（第19図1、図版16の1）。

B：口縁部が内彎し口縁に瘤状突起が付くものである。器壁は3～4mmと薄い。口唇部は平坦に成形され、器面はナデによる調整がおこなわれる。胎土は泥質で粘性が強くツルツルとしておりアバタ状を呈する。器色は淡茶色を呈する（第19図3・4、図版16の3・4）。

II 類：甕

胴部が張り、頸部にかけてやや絞り、口縁部が直立するもので、器壁は3mmと薄い。口唇部は平坦に成形され、部分的に口縁部外面が丸味を帯びる。器面はアバタ状を呈しており、指圧後にナデによる調整が行われており、外器面の頸部から胴部にかけては横方向である。胎土は、泥質でツルツルとしている。器色は淡茶色を呈する（第19図5、図版16の5）。

III 類：不明

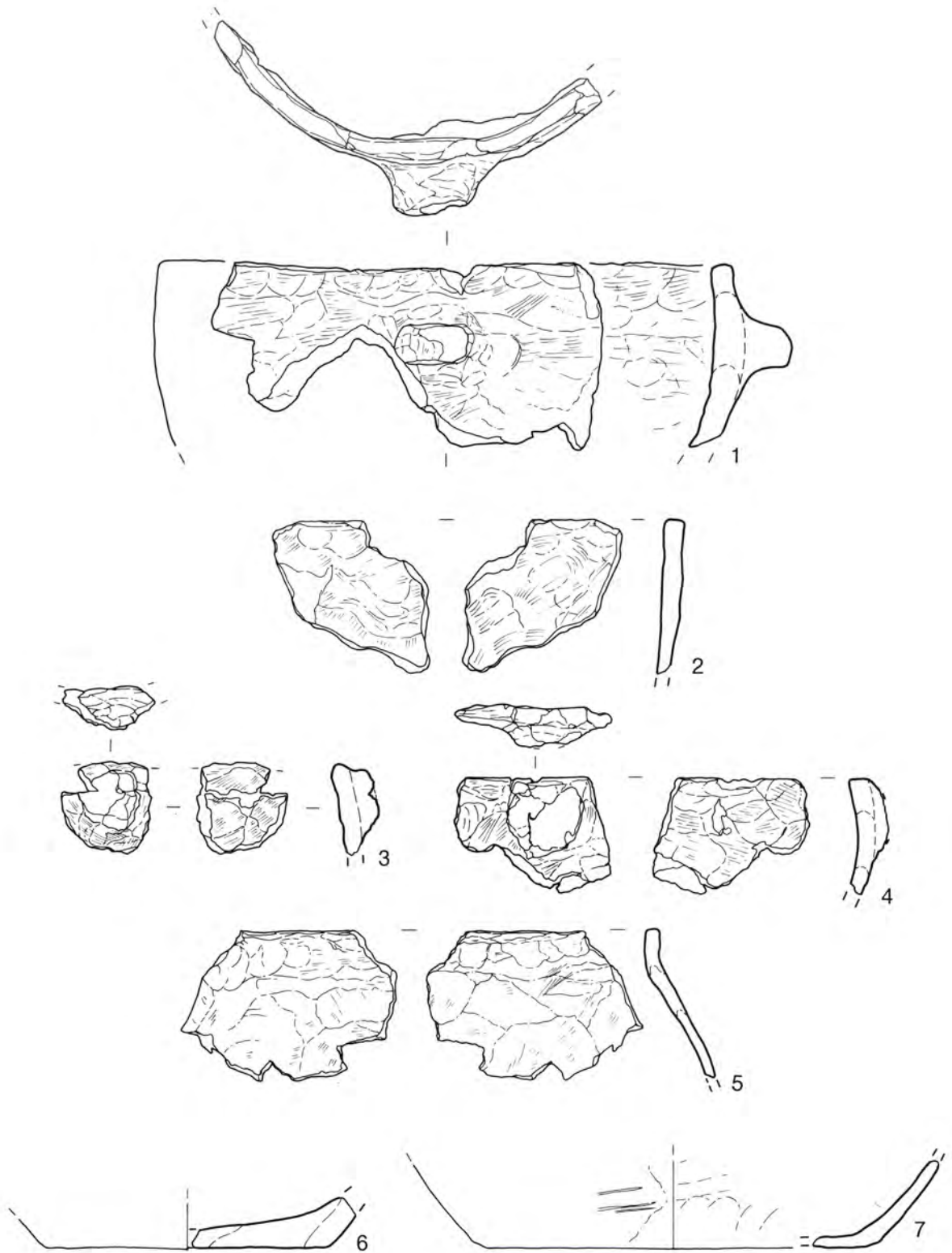
口縁部は平坦に成形され、器壁は4～6mmである。胎土は砂質で、石英粒を含むが他の資料と比較すると粒が粗くザラザラしている。器面はナデによる調整が行われ茶褐色を呈する（第19図2、図版16の2）。

底 部

底部資料は、2点の出土で、鍋と甕の2種である。口縁部資料と同様に泥質と砂質である。

鍋は、平底で緩やかに膨らみながら立ち上がる。器壁は底が5mm、立ち上がりは1cmである。胎土は粘性が弱く砂質でザラザラとしており、石英を含みわずかに炭化物が見られる。器面はナデによる調整が行われ、器色は淡褐色を呈している（第19図6、図版16の6）。

甕は、平底で緩やかに広がりながら立ち上がる。器壁は底が約3mm、胴部は4～5mmと薄い。胎土は泥質で粘性が強くアバタ状を呈しツルツルとしており、僅かに石英細粒と赤色粒を含む。器形と胎土から口縁部の項で述べた甕の同一個体と思われるものである（第19図7、図版16の7）。



第19図 土器

胴 部

胎土は砂質と泥質に分けられ、混入物から前者は3種類、後者は2種類に細分される。砂質のものには手触りに違いがあるが資料が小破片で器表面の残りが悪いことから混入物で1つにまとめた。分類集計を第5表に示した。

砂質 a : 砂質で石英細粒を含むもの。

b : 石英細粒とガラス質鉱物と赤色粒を含むもの。

c : 滑石と石英を含むもの。

泥質 a : 泥質で石英細粒と赤色粒を含むもの。

b : 泥質で粗い貝殻や貝殻片、石灰質微砂粒を含むもの。

これらの出土状況は第4表に示したように砂質cと泥質aがほぼ同数の出土である。

砂質 a・bともに、器壁は5～7mmで、茶褐色を呈している。砂質cの器壁は約4～6mmで、滑石を多く含むものと少ないものがあり、前者には、内外器面で明瞭なものと外器面だけに明瞭なものがある。器色は茶褐色を呈するものや淡茶色を呈するものがある。

泥質aの器壁は3～4mmで口縁部資料の甕と同一個体と思われる。泥質bの器壁は約5mmで、器面調整は雑で外器面に指圧痕が残り内面は刷毛目が残る。

第2表 土器出土一覧

出土地 層序	ス					セ					ソ					ナ					不明	合計	
	13	14	15	16	17	13	14	15	16	17	13	14	15	16	17	13	14	15	16	17			
畦																							
表 採																							
I 層																							
II 層 a																							
II 層 b																							
II 層 c																							
III 層														2	1							3	
III 層 a																							
III 層 b						31		11						6	4							52	
III 層 c								5	16					1	21	8							51
III 層 d																							
III 層 e																							
不明						1			1					8	22	3						3	38
小 計						32		16	17					15	49	12						3	
合 計								65						76								3	144

第3表 土器分類一覧

種 部位	I類 (鍋)		II類 (甕)	III類 (不明)	合計
	a	b			
口縁部	1	2	1	1	5
底部	1		1		2
合計	2	2	2	1	7

第4表 土器出土一覽

出土地点	層序	部位	分類	個数					備考
				0.5cm未満	0.5cm~1cm	1~2cm	2~1cm	3cm以上	
セ-13	Ⅲb	胴部	砂a	17	11	3			
セ-13	不明	底部	砂a					1	鍋
セ-15	Ⅲb	胴部	砂a	4	2	2			
セ-15	Ⅲb	胴部	砂c				1		
セ-15	Ⅲb	胴部	泥a		2				
セ-15	Ⅲc	胴部	泥a			2		2	石積下
セ-15	Ⅲc	口縁部	砂a					1	セ-15石積下+セ-15石積前横耳口縁部・鍋
セ-16	Ⅲc	胴部	砂a	6	3	3			
セ-16	Ⅲc 10/20	胴部	砂a					1	
セ-16	Ⅲc	胴部	砂c			1		1	
セ-16	Ⅲc	胴部	砂a					1	
セ-16	不明	口縁部	砂a					1	鍋
ソ-15	Ⅲb	胴部	砂a	2	3	1			壁面清掃褐色土中・壁面清掃22ライン壁側
ソ-15	Ⅲc	胴部	砂a			1			
ソ-15	不明	胴部	砂a		1				
ソ-15	不明	胴部	砂b				1		
ソ-15	不明	胴部	泥a	2					不明(Ⅲ)
ソ-15	不明(Ⅲ)	胴部	泥a	1	1				
ソ-15	不明(Ⅲ)	胴部	砂c			1		1	
ソ-16	Ⅲ	胴部	砂c			1		1	
ソ-16	Ⅲb	胴部	泥a	1	1		1		Ⅲc上
ソ-16	Ⅲc	口縁部	泥a					1	甕
ソ-16	Ⅲc	胴部	砂a	1	4	4	2		
ソ-16	Ⅲc	胴部	砂c				1	3	
ソ-16 土坑№2	Ⅲc	胴部	砂c			2			
ソ-16 土坑№2	Ⅲc	胴部	砂c	2	1	1			
ソ-16	不明	胴部	砂a	3	1	2		1	
ソ-16	不明	胴部						1	試掘土中
ソ-16	不明	口縁部	泥a					2	瘤状突起口縁部・鍋
ソ-16	不明(Ⅲ)	胴部	砂c				2		
ソ-16	不明(Ⅲc)	胴部	泥a	5	1	3	1		
ソ-17	Ⅲ層下(Ⅲ)	胴部	砂c				1		
ソ-17	Ⅲc	胴部	泥a				1		
ソ-17 土坑	Ⅲc	胴部	砂a	2	2	3			
ソ-17	不明	胴部	砂a			1			
ソ-17	不明(Ⅲ)	胴部	泥a					1	
ソ-17	不明(Ⅲ)	胴部	砂c					1	
不明	不明	胴部	砂c					1	
不明	不明	胴部	泥b					1	
不明	不明	胴部	泥a					1	
合計				46	33	31	11	23	144

第5表 胴部破片分類集計

種類 大きさ	砂 質			泥 質		合 計
	a	b	c	a	b	
0.5cm未満	35		2	9		46
0.5～1cm未満	27		1	5		33
1～2cm未満	22		6	3		31
2～3cm未満	2	1	5	3		11
3cm以上	4		9	2	1	16
合 計	90	1	23	22	1	137

第6表 土器観察一覧

挿図番号 図版番号	分 類	口 径 底 器 高 (cm)	素 地	色 調	手触り	器形・文様・その他の特徴	出土地点
第19図1 図版16の1	鍋 I類A	19.0 — —	砂粒混入 泥 質	橙 褐 色		口縁部の破片。口唇部は平坦。 横位の把手を持つ。 外面に横位の擦痕が明瞭に残る。	セー15 Ⅲ層c
々 2 々 2	Ⅲ類	— — —	砂粒混入 砂 質	外：橙褐色 内：暗褐色	ガラガラ	口縁部の破片。口唇部は平坦。 焼成は悪く、脆い。 ナデ消しを施すが表面に指頭が残る。	セー16
々 3 々 3	鍋 I類B	— — —	砂粒混入 泥 質	橙 褐 色		口唇は平坦に仕上げ、口縁部下に 瘤状の突起を持つ。	
々 4 々 4	鍋 I類B	— — —	砂粒、 石英混入 泥 質	橙 褐 色	滑らか	口縁部の破片。口唇部は平坦。 瘤状の突起を持つ。 ナデ消しを施すが表面に指頭が残る。	ソー16
々 5 々 5	甕 Ⅱ類	— — —	赤色粒、 石英混入 泥 質	外：橙褐色 内：茶褐色	ツルツル	口縁部の破片。口唇部は平坦。 器面の調整はナデと指圧による。	ソー17
々 6 々 6	鍋	9.4 — —	砂粒、 黒色鉱物 石英混入 泥 質	外：黄褐色 内：淡褐色	ガラガラ	底部の資料。平底である。 ナデ消しを施すが、内底面に縦位と斜 位、外底面には縦位の擦痕が残る。	セー13 Ⅲ層b
々 7 々 7	甕	12.6 — —	赤色粒混入 泥 質	橙 褐 色	ツルツル	底部資料。平底である。 器壁は4mmと薄い。 ナデ消しを施すが、指頭が残る。	ソー17

外国産陶磁器

外国産陶磁器は、中国産磁器、褐釉陶器で総数29点の出土である。器形の窮えるものや特徴的なものは表採資料も含めて第20・21図に示し、2 cm以下の無文の細片は集計表のみであつかった。出土状況は第7表に示した。

第7表 外国産陶磁器出土一覧

種類 グリット	青磁									白磁		染付							褐釉		合計
	セ 14	セ 15	セ 13	ソ 14	ソ 16	ソ 17	ナ 17	不 明	小 計	ソ 16	小 計	ス 17	セ 14	セ 15	セ 16	セ 17	不 明	小 計	ス 16	セ 14	
畦						1			1			1		1				2	1		4
表採					1			1	2							1	1	2			4
I層													2					2			2
II層 a																					0
II層 b		2							2						1			1			3
II層 c							1		1												1
III層 a					1		1		2	1	1	1									3
III層 b	1		1	1					3											1	4
III層 c																					0
III層 d																					0
III層 e		2		1	2		2	1	8												8
合計	1	4	1	2	4	1	4	2	19	1	1	2	2	1	1	1	1	7	1	1	29

青磁 (第20図、図版17)

第7表に示したとおり総数19点の出土である。器種は、碗・皿が出土した。第III層から出土した資料は12世紀後半から16世紀中にかけての資料である(第20図、図版17)。

櫛描文皿は石積5の崩壊部分に堆積する第III層bからの出土である。以下、個々の観察は第10表に、分類を第8表に示した。

白磁 (第21図1、図版18の1)

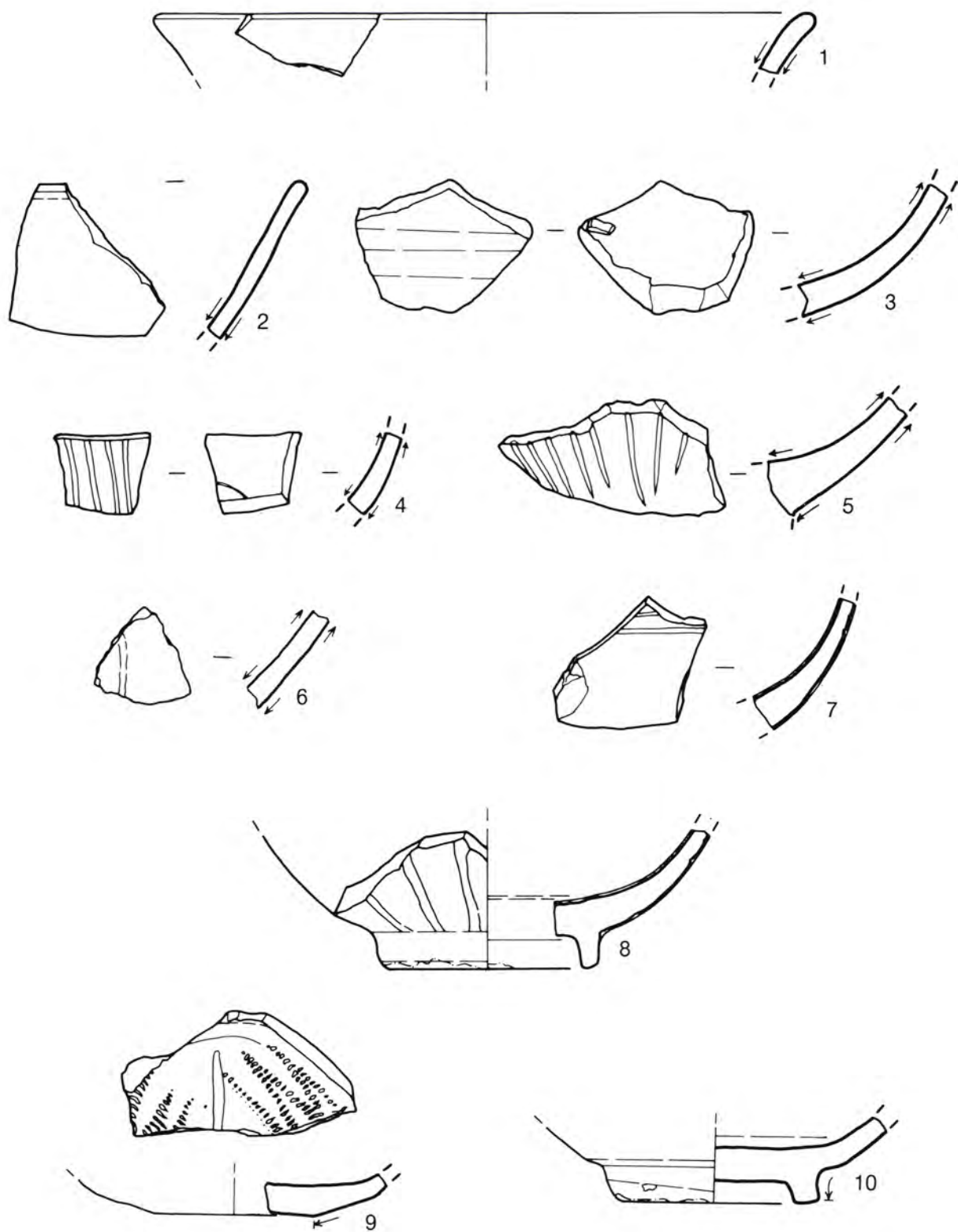
1点の出土で、16世紀中から後半の皿で第III層aの出土である。観察は第10表に示した。

染付 (第21図2~7、図版18の2~7)

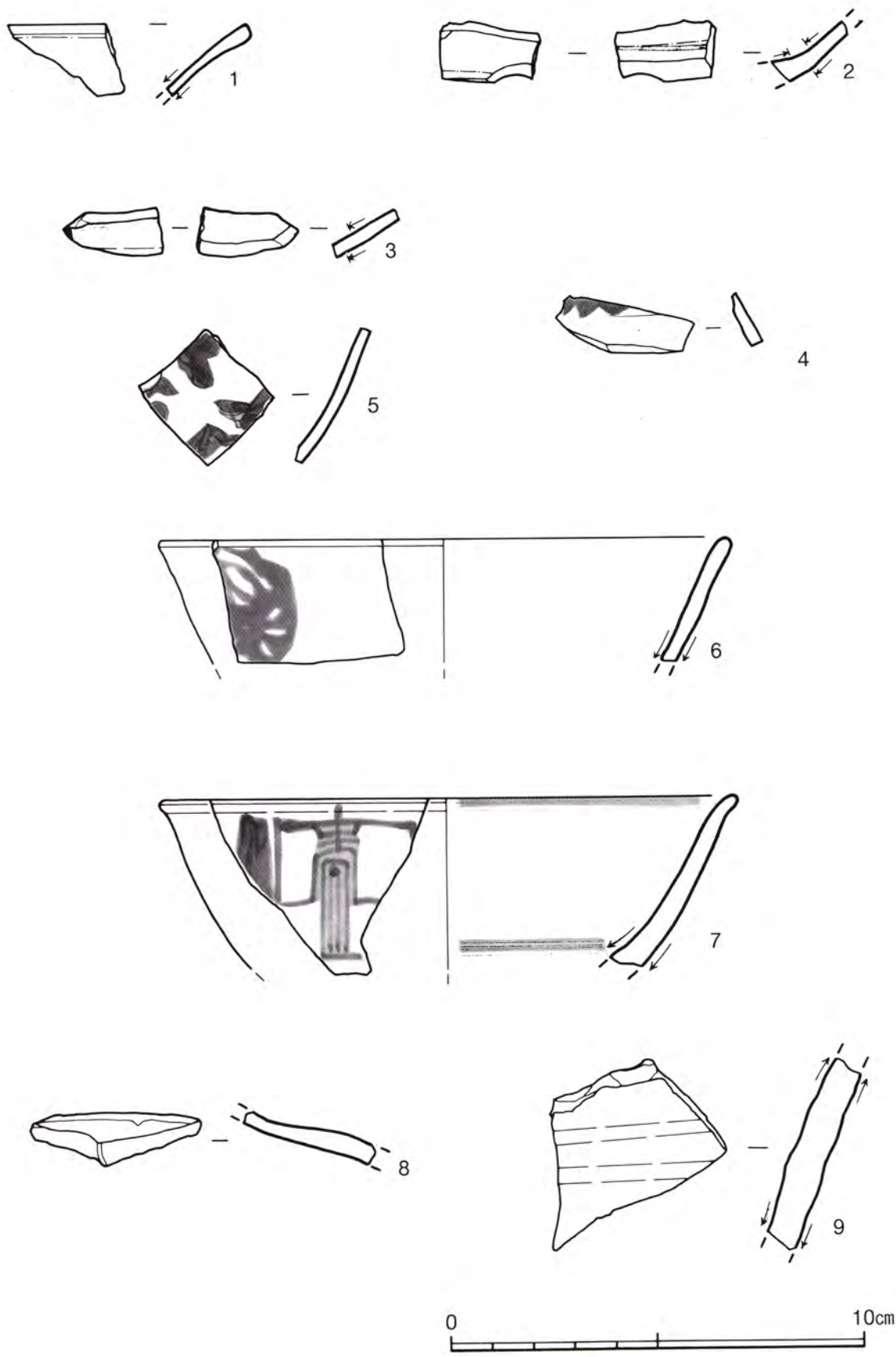
7点の出土で、ほとんどが表採品であるが、第21図1の染付は第III層aから出土しており、16世紀中から後半のものである。以下、個々の観察は第10表に示した。

褐釉陶器 (第21図8・9、図版18の8・9)

2点の出土である。いずれも15世紀代の資料である。第21図9のみ第III層bから出土した。以下は、個々の観察は第10表に示した。



第20图 青磁



第21図 白磁・染付・褐釉陶器

第8表 青磁分類一覽

種類 層序	青磁碗												青磁皿						合計
	線刻細蓮弁文			無縞蓮弁文			文様不明			無文			櫛描文			無文			
	口 縁部	胴 部	底 部	口 縁部	胴 部	底 部	口 縁部	胴 部	底 部	口 縁部	胴 部	底 部	口 縁部	胴 部	底 部	口 縁部	胴 部	底 部	
表採		1										1							2
第I層																			
第II層		1																	1
第II層	a																		
	b																		
	c									1									1
	d																		
	e																		
第III層	a		1							1	2								4
	b		1					1						1				1	4
	c																		
	d																		
	e																		
第IV層	a																		
	b																		
第V層																			
攪乱										1									1
不明						1													1
小計		4				1		1		2	4				1				1
合計		4				1		1		6				1				1	
總合計											12							2	14

第9表 白磁・染付・褐釉陶器分類一覽

種類 層序	白磁			染付碗			染付瓶			褐釉陶器			合計
	口 縁部	胴 部	底 部	口 縁部	胴 部	底 部	口 縁部	胴 部	底 部	口 縁部	胴 部	底 部	
表採				1				1					2
第I層											1		1
第II層	a												
	b					1							1
第III層	a	1				2							3
	b									1			1
	c												
	d												
	e												
第IV層	a												
	b												
第V層													
攪乱						1							1
不明						1							1
小計	1			2	4			1			2		
合計		1				7					2		10

第10表 外国産陶磁器観察一覧

挿図番号 図版番号	分類	口径 底器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様・その他の特徴	産	年代	出土地点
第20図 1 図版17の1	青磁 (碗)	16 — —	灰白色 細粒子	淡灰緑色	有	口縁部の小破片。やや外反する。 内外面に透明釉を施す。 無文。	中国	14c後 ~15c 中	ナ-17
〃 2 〃 2	青磁 (碗)	— — —	淡灰緑色 微粒子	淡灰青色	有	口縁部破片。僅かに肥厚し直口。 透明釉を内外に薄く施す。 無文。	〃	15c前 半~中	表採
〃 3 〃 3	青磁 (碗)	— — —	茶褐色 粗粒子	灰黄色	無	胴部の破片。 内外面に透明釉を薄く施す。 焼成不良。無文。	〃	15c	ソナ17ライン畔 Ⅱ層c
〃 4 〃 4	青磁 (碗)	— — —	灰白色 細粒子	淡灰緑色	有	胴部の小破片。 内外面に透明釉を施す。 外面に細刻蓮弁文、内面に一条の沈 線がある。	〃	15c後 ~16c 中	ナ-17 Ⅲ層(0~10cm)
〃 5 〃 5	青磁 (碗)	— — —	灰白色 粗粒子	淡灰緑色	有	胴部(腰部)破片。 内外面にやや厚い透明釉を施す。 外面に細刻蓮弁文。	〃	15c後 ~16c 中	ソ-14 Ⅲ層b 0/10cm、 20/30cm
〃 6 〃 6	青磁 (碗)	— — —	淡灰白色 細粒子	淡灰緑色	無	胴部の小破片。 内外に失透釉を施す。 蓮弁文?	〃	15c	東D-1号墓 左右積下
〃 7 〃 7	青磁 (碗)	— — —	灰白色 粗粒子	淡灰緑色	有	胴部(腰部)の破片。 厚い透明釉を内外面に施す。 外面に雷文の一部が見られる。	〃	15c	セ-15 セ-14 Ⅲ層b(0~10cm)
〃 8 〃 8	青磁 (碗)	— 4.8 —	灰白色 微粒子	灰緑色	無	底部の破片。 内外面にやや厚い透明釉を施す。 外面には篋描きの無縞蓮弁文、内底 に1本の圈線。	〃	15c前 半~中	不明
〃 9 〃 9	青磁 (皿)	— 3.9 —	灰白色 微粒子	淡灰青色	無	底部資料。 薄い透明釉を底部際から内底まで施 す。 外底は露胎。内底には櫛描文を配す る。	同中 安 国	12c後 半~ 13c前 半	セ-15 Ⅲ層b
〃 10 〃 10	青磁 (皿)	— 4.8 —	灰白色 細粒子	淡灰緑色	有	底部資料。腰部に稜を持つ。 薄い失透釉を内外面に施す。 高台内は露胎でヘラ削りの痕。 内底に1本の圈線がある。	中 国	14c末 ~15c 中	ソ-14
第21図 1 図版18の1	白磁	— — —	白色 微粒子	白色	無	口縁部の小破片。口唇部は平坦。 内外面に透明釉を施す。 無文。	〃	16c中 ~後半	ソ-16 Ⅲ層a
〃 2 〃 3	染付 (皿)	— — —	白色 微粒子	淡青色	有	胴部の破片。 資料上半部まで内外面に薄い透明釉 を施す。 内底に1本の圈線を巡らせる。	〃	17c前 半	ス-17 畦付近表採
〃 3 〃 2	染付 (碗)	— — —	灰白色 微粒子	淡青白色	無	胴部の小破片。 内外面に釉を施すが、下部で拭き取 られている。 外面左側に呉須による文様がある。	〃	17c代	セ-14 攪乱
〃 4 〃 4	染付 (瓶)	— — —	白色 微粒子	淡青白色	無	胴部小破片。 外面は施釉するが、内面は露胎。 外面に呉須で葉文を描く。	〃	16c前 半~中	表採
〃 5 〃 5	染付 (碗)	— — —	白色 微粒子	淡青白色	無	胴部の小破片。 外面に濃青色の呉須で文様施す。	景中 徳 国	16c中 ~16c 後半	セ-14 Ⅲ層a
〃 6 〃 6	染付 (碗)	— 13.8 —	黄白色 細粒子	乳白色	有	口縁部破片。口唇部は平坦に造り、 直口する。 内外面に失透釉を施す。発色不良。 外面には呉須で花文と見られる文様。	中 国	17c後 ~18c 中	セ-15

挿図番号 図版番号	分類	口径 底器高 (cm)	素地	釉色	貫入	器形・文様・その他の特徴	産	年代	出土地点
第21図 7 図版18の7	染付 (碗)	14.0 — —	灰白 微粒子	淡青白色	無	口縁部から腰部までの資料。外反。 内外面にやや厚い釉を施す。 外面に呉須で寿字文を、内面には口 縁部に1本、内底付近に2本の圈線。	建中 ・広 東系 福	18c- 19c前 半	セ-17 表採
◇ 8 ◇ 8	褐釉陶 (壺)	— — —	茶褐 粗粒子	外:暗褐色 内:黒色	無	肩部の小破片。肩は張出す器形にな ると考えられる。 頸部に至る部分はやや帯状に肥厚。 砂粒や白色鉱物を混入。一部断面に 一本の白い筋が見られる。	中 国	15c代	ス-16 I層
◇ 9 ◇ 9	褐釉陶 (壺)	— — —	灰 細粒子	外:暗褐色 内:茶褐色	有	胴部の破片。 内外面に褐釉を施す。 黒色粒や雲母を混入する。	々	15c代	セ-14 Ⅲ層 b10/20cm

本土産磁器 (第22図、図版19)

表採品と第I層から12点の出土である。

砥部焼の皿や伊万里系の盃などが出土している。以下、個々の観察は第11表に、出土状況は第12表に示した。

沖縄産陶器 (第23～26図1・2、図版20～24)

ほとんどが表採や第I層、第II層で陶質土器・無釉陶器・施釉陶器が出土した。

器種は碗・小碗・鉢・瓶・花瓶・酒注・火炉・壺などである。

以下、個々の観察は第15表、出土状況は第14表に示した。

円盤状製品 (第26図3～5、図版25の1～3)

沖縄産陶器と近代磁器を2次加工した遊具で3点の出土である。前者が1点、後者が2点である。沖縄産陶器は底部を使用しており、本土産磁器は胴部を使用している。

以下、個々の観察は第16表に示す。

石器

石器は、2点の出土である。磨石と敲打器である。前者はセ-16第Ⅲ層cの出土で、後者は、東D-1号墓右側袖垣内からの出土である。

磨石の破片で、厚さ4.2cmで表面に磨面が残り、裏面と下部側面に弱い敲打痕がある。輝緑岩(第27図1、図版26の1)。

敲打器は、平面形が長方形状で、断面形が楔状を呈する。下端部に剥離痕があり、右側側面の中央部から先端部にかけて磨痕がある。同側面中央部と上端のほぼ中央に抉りがあり、摩滅痕がみられる。砂岩(第27図2、図版26の2)。

第11表 本土産磁器観察一覧

挿図番号 図版番号	分類	口径 底器高 (cm)	素地	釉薬	貫入	器形・文様・その他の特徴	産	出土地点
第22図 1 図版19の1	皿	8.0	乳白色 微粒子	灰青色	無	底部の破片。 高台内は段を有し、釉剥ぎする。 内面に1本の圈線と図柄不明の文様、 高台脇に2本の圈線（型紙刷り）。	砥部	ソ-14 丘陵斜面 流れ込み
ク 2 ク 2	皿	—	灰白色 微粒子	灰青白色	無	底部の破片。 内面に細い圈線が見られた外面に竹の 文様あり（型紙刷り）。	ク	表採
ク 3 ク 3	小碗	7.8	白色 微粒子	透明釉	無	口縁部の小破片。直行する。 外面に焼成温度の低い釉種による松葉 文様の痕がある。		セ-17 表採
ク 4 ク 4	小碗	7.6	白色 微粒子	淡緑色の釉	無	口縁部の小破片。直口する。 文様の痕と考えられる淡青色の釉が一 部観察できる。	美瀬 濃系 戸	セ-17 流れ込み
ク 5 ク 5	小碗	7.8	白色 微粒子	透明釉	無	口縁部の破片。直口する。 外面に呉須による文様を施す。		表採
ク 6 ク 6	小碗	7.6	白色 微粒子	白釉	無	口縁部の破片。直口する。 外面に緑色の釉で竹葉文を描く（スタ ンプ文）。		セ-17 表採
ク 7 ク 7	小碗	8.0	白色 微粒子	透明釉	無	口縁部の小破片。直口する。 外面に呉須で文様を施す。 呉須の発色は不良である。		ソ-16 表採
ク 8 ク 8	小碗	8.4	白色 微粒子	クロム	無	口縁部の小破片。直口する。 外面に呉須による文様を施す（スタ ンプ文）。		表採
ク 9 ク 9	小碗	8.0	白色 微粒子	透明釉	無	口縁部の破片。直口。口唇部は平坦。 外面に呉須と桃色や黒の釉種による文 様が施される。	美瀬 濃系 戸	表採
ク 10 ク 10	小碗	9.2	白色 微粒子	クロム	無	クロム青磁の口縁部小破片。 外面に縦位の沈線文を施す。		ソ-16 攪乱
ク 11 ク 11	小碗	8.6	白色 微粒子	外：淡緑色 の釉 内：白釉	無	口縁部の小破片。直口する。 外面に褐色の釉で文様を施している。		表採
ク 12 ク 12	碗	4.0	白色 微粒子	濃緑色の釉	無	底部資料。 高台脇から緩やかに胴部へ開く。 畳付け以外はすべて施釉。		ソ-12 表採
ク 13 ク 13	碗	—	乳白色 微粒子	透明釉	無	口縁部の小破片。やや外反する。 内外面とも口縁部直下に青色の圈線が 1条廻る。		
ク 14 ク 14	盃	6.4	白色 微粒子	透明釉	無	口縁部の小破片。やや外反する。 内面に焼成温度の低い青い釉による文 様の痕がある。	有田	表採
ク 15 ク 15	盃	9.6	白色 微粒子	透明釉	無	口縁部の小破片。 口縁部は外反する。 無文。		表採

第12表 本土産磁器出土一覽

層序	出土地	ソ				不明	合計
	セ	12	14	16			
畦							
表採	2	1	1	2	5	11	
I	1					1	
II a							
II b							
II c							
III a							
III b							
III c							
III d							
III e							
III f							
合計	3			4	5	12	

第13表 本土産磁器分類一覽

層序	種類部位	碗			小碗			盃			皿			不明			合計
		口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	
畦																	
表採				1	7			2				2			1		13
不明		1	1														2
II															1		1
III																	
IV																	
V																	
攪乱		2															2
総計		3	1	1	7			2				2			2		18

第14表 沖縄産陶器出土一覽

層序	種類	陶質土器				無釉陶器			施釉陶器										合計		
		セ 17	ソ 16	不 明	小 計	サ 14	不 明	小 計	ス 14	セ 13	セ 15	セ 16	セ 17	ソ 14	ソ 15	ソ 16	ソ 17	ナ 14		不 明	小 計
不明				6	6			0	1	1	1	1	2	4	1		1	1	5	18	24
表採		7	1	4	12	1	9	10	1				1	3	1				31	37	59
I層					0			0													0
II層					0			0							1	1					2
	a				0			0													0
	b				0			0		1	1										2
III層	c				0			0													0
	a				0			0													0
	b				0			0													0
	c				0			0													0
IV層	d				0			0													0
	e				0			0													0
攪乱				0			0														0
合計		7	1	10	18	1	9	10	2	1	2	2	3	7	3	1	1	1	36	59	87

第15表 沖縄産陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	分類	口径 底器高 (cm)	素地	施釉・釉種	施釉範囲	貫入	器形・文様・その他の特徴	産	出土地点
第23図 1 図版20の1	陶質土器 不明	— — —	橙褐色	無釉		—	胴部の破片。 「く」の字状に折れ曲がる。 雲母と黒色鉱物、赤色粒を混入。		表採
〃 2 〃 2	陶質土器 不明	— 11.8 —	淡褐色	無釉		—	底部の破片。 内面に轆轤痕が、底部に意図切り 痕跡が僅かに残る。 雲母と黒色鉱物、赤色粒を混入。		表採
〃 3 〃 3	陶質土器 火炉?	— 14.8 —	橙褐色 細粒子	無釉		—	底部の破片。 素地に赤色粒が混入。		表採
〃 4 〃 4	無釉陶器 鉢	— 23.6 —	赤褐色 細粒子	無釉		—	口縁部の破片。 外に折れ曲がり鑄をつくる。		表採
〃 5 〃 5	無釉陶器 壺	— 9.0 —	茶褐色 微粒子	無釉		—	底部の破片。 底部の仕上げは雑である。 内底面は轆轤痕が明瞭に残る。		表採
〃 6 〃 6	無釉陶器 壺	— 18.0 —	茶褐色 細粒子	無釉		—	口縁部の破片。 口縁部は玉状に肥厚する。 黒色鉱物を混入する。		表採
第24図 1 図版21の2	施釉陶器 碗	— 10.4 —	灰色 微粒子	灰釉		有	口縁部の小破片。 口縁部は直口。 内外面に轆轤痕が見られる。	沖縄 (湧田?)	ソー15 右側袖垣
〃 2 〃 2	施釉陶器 碗	— 13.0 —	灰白色 細粒子	淡灰色 釉		有	口縁部破片。 口縁部は僅かに外反する。 内外面ともに発色は良くない。	沖縄 (湧田?)	表採
〃 3 〃 3	施釉陶器 碗	— 11.6 —	淡黄白色 微粒子	暗灰色 釉		有	口縁部の破片。 口縁部は僅かに外反する。	沖縄 (湧田?)	表採
〃 4 〃 4	施釉陶器 碗	— — —	灰白色 細粒子	淡灰色 釉	腰部まで 施釉	有	底部の破片。 内外面ともつけ掛け(フィガキイー) の痕。	沖縄 (湧田?)	表採
〃 5 〃 5	施釉陶器 碗	— 4.6 —	乳白色 微粒子	—	全て露胎	無	底部の破片。 灰釉碗の底部と思われる。	沖縄 (湧田?)	セー13東壁 14ライン
〃 6 〃 6	施釉陶器 碗	— 6.4 —	灰色 微粒子	暗灰色 釉	内面は見込み 部と外面 は高台脇ま で施釉	有	高台脇から斜めに直線的に立ち上がる。 内外面ともつけ掛け(フィガキイー) の痕。 見込みに目砂が残る。	沖縄 (湧田?)	表採
〃 7 〃 7	施釉陶器 碗	— — —	灰褐色 細粒子	白化粧 +透明釉		有	口縁部の小破片。 口縁部は直口。	沖縄 (壺屋)	表採
〃 8 〃 8	施釉陶器 碗	— — —	橙白色 微粒子	白化粧 +透明釉		有	口縁部の小破片。 口縁部は僅かに外反する。	沖縄 (壺屋)	表採
〃 9 〃 9	施釉陶器 碗	— — —	灰色 微粒子	白化粧 +透明釉		有	口縁部の小破片。 口縁部やや外反。 口縁部直下に石灰分が付着。	沖縄 (壺屋)	表採
〃 10 〃 10	施釉陶器 碗	— — —	乳白色 細粒子	白化粧 +透明釉		有	口縁部の小破片。 口縁部はやや外反。	沖縄 (壺屋)	表採
〃 11 〃 11	施釉陶器 碗	— — —	淡灰色 細粒子	白化粧 +透明釉		有	口縁部の小破片。 口縁直下に石灰分付着。 内面の焼成が不完全で無発色。 外面にピンホールが目立つ。	沖縄 (壺屋)	表採
〃 12 〃 12	施釉陶器 碗	— 13.0 —	淡黄白色 微粒子	白化粧 +透明釉		有	口縁部の破片。 口唇の断面はやや厚みのある舌状 で、僅かに外反する。	沖縄 (壺屋)	セー17 表採

挿図番号 図版番号	分類	口径 底器高 (cm)	素地	施釉・釉種	施釉範囲	貫入	器形・文様・その他の特徴	産	出土地点
第24図 13 図版21の13	施釉陶器 碗	13.6 — —	淡灰色 微粒子	白化粧 +透明釉		有	口縁部の小破片。 口縁部直下に稜を持つ。	沖縄 (壺屋)	不明
〃 14 〃 14	施釉陶器 碗	13.6 — —	淡黄白色 粗粒子	白化粧 +透明釉		有	口縁部の破片。 口縁部はやや外反。	沖縄 (壺屋)	ソ-15 表採
〃 15 〃 15	施釉陶器 碗	14.0 — —	淡灰色 細粒子	白化粧 +透明釉		有	口縁部の破片。 口縁部は直口。	沖縄 (湧田?)	表採
〃 16 〃 16	施釉陶器 碗	— 5.8 —	灰色 粗粒子	白化粧 +透明釉		有	底部の破片。 見込み部に蛇の目剥ぎが施される。 高台脇に呉須がわずかに認められる。	沖縄 (壺屋)	セ-17 流れ込み
〃 17 〃 17	施釉陶器 碗	— 6.6 —	淡橙色 粗粒子	白化粧 +透明釉		有	底部の破片。 蛇の目釉剥ぎが施され、白土が付着。	沖縄 (壺屋)	ソ-14丘 陵斜面(流 れ込み)
〃 18 〃 18	施釉陶器 碗	— 6.8 —	橙色 粗粒子	白化粧 +透明釉		有	底部の破片。 内面は焼成不良。 蛇の目釉剥ぎが施され、白土が付着。	沖縄 (壺屋)	ソ-14丘 陵斜面(流 れ込み)
第25図 1 図版22の1	施釉陶器 碗	— — —	淡灰色 粗粒子	白化粧 +透明釉		有	口縁部の小破片。 口縁部はやや外反。 呉須による文様がわずかに残る。	沖縄 (壺屋)	表採
〃 2 〃 2	施釉陶器 碗 (アラマカイ)	— — —	灰色 微粒子	白化粧 +透明釉		有	口縁部の小破片。 口縁部はやや外反。 呉須と鉛釉による文様がわずかに残る。	沖縄 (壺屋)	ス-14 表採
〃 3 〃 3	施釉陶器 碗 (アラマカイ)	12.2 — —	淡黄白色 細粒子	白化粧 +透明釉		有	口縁部の小破片。 口縁部はやや外反。 内外面とも発色が悪い。 外面胴部に呉須と鉛釉で絵付け。	沖縄 (壺屋)	表採
〃 4 〃 4	施釉陶器 碗 (アラマカイ)	— 5.4 —	淡灰色 細粒子	白化粧 +透明釉		有	底部の破片。 外面に呉須と鉛釉で文様を描く。 蛇の目釉剥ぎは施され、白土が付着。	沖縄 (壺屋)	セ-17 流れ込み
〃 5 〃 5	施釉陶器 碗 (アラマカイ)	13.4 5.6 6.4	淡灰色 細粒子	白化粧 +透明釉		有	外面に呉須と鉛釉で文様を描く。 内外面とも発色が悪い。 蛇の目釉剥ぎが施され、白土が付着。	沖縄 (壺屋)	セ-15畦 攪乱
〃 6 〃 6	施釉陶器 小碗	— 3.4 —	灰色 細粒子	白化粧 +透明釉		無	底部の破片。 蛇の目釉剥ぎが施され、白土が付着。	沖縄 (壺屋)	セ-16畦 II層b
〃 7 〃 7	施釉陶器 小碗	— 3.8 —	黄白色 細粒子	外:鉄釉 内:白化粧 +透明釉	高台内ま で鉄釉を 施釉。	無	底部の破片。 見込み部に蛇の目釉剥ぎ。	沖縄 (壺屋)	表採
〃 8 〃 8	施釉陶器 碗	— — —	淡灰色 細粒子	鉄釉		有	胴部の破片。 内外面ともつけ掛け(フィガキイ-) の痕。	沖縄 (壺屋)	セ-15 III層c
〃 9 〃 9	施釉陶器 鉢 (ワンブ-)	— — —	黄白色 細粒子	外:鉄釉 内:白化粧 +透明釉		有	口縁部の小破片。 口縁部は外反。	沖縄 (壺屋)	不明
〃 10 〃 10	盃	3.2 1.6 2.0	灰白色 微粒子	透明釉		有	口縁部は外反する。 高台脇以下は露胎。	沖縄 (壺屋)	東D-2号 幕庭
〃 11 〃 11	盃	3.4 1.7 1.9	灰白色 微粒子	透明釉		有	直口する小盃で、置付に釉葉の付 着が見られる。 高台脇以下は露胎。	沖縄 (壺屋)	ソ-15 II層
第25図 12 図版23の1	施釉陶器 瓶	2.5 — —	茶褐色 細粒子	鉄釉	内面は口 縁部のみ 施釉。	有	頭部の破片。 ユシビンと呼ばれる瓶子の頭部と 思われる。	沖縄 (壺屋)	表採

挿図番号 図版番号	分類	口径 底器高 (cm)	素地	施釉・釉種	施釉範囲	貫入	器形・文様・その他の特徴	産	出土地点
第25図 13 図版23の3	施釉陶器 花瓶	— — —	灰白 細粒 色子	白化粧 +青緑色 の釉	内面は無 釉。	有	頸部の破片。 頸部内面は明瞭に轆轤痕を残す。	沖繩 (壺屋)	表採
◇ 14 ◇ 5	施釉陶器 花瓶	— 7.4 —	灰白 細粒 色子	白化粧 +青緑色 の釉	高台内透 明釉が施 釉。内面 は無釉。	有	底部の破片。 高台は袴状の付け高台である。 轆轤痕が明瞭に残る。	沖繩 (壺屋)	表採
◇ 15 ◇ 2	施釉陶器 酒注 (カラカラ)	4.6 — —	黄白 粗粒 色子	白化粧 +透明釉	内面は頸 部の3分 の2まで 施釉	有	口縁部(注入口)の資料。 口縁部が大きく外反し、受け口状 になっている。	沖繩 (壺屋)	表採
◇ 16 ◇ 4	施釉陶器 酒 (カラカラ)	— 7.2 —	橙白 粗粒 色子	外:鉄釉 内:白化粧 +透明釉	畳付け以 外は全施 釉。	有	底部から胴部への資料。 胴部中央が「く」の字状に折れ曲 がる。胴部の上半部には、線彫り の上に具須や飴釉を施す文様があ る。	沖繩 (壺屋)	ナー21
◇ 17 ◇ 6	施釉陶器 酒 (カラカラ)	— 7.4 —	橙白 粗粒 色子	白化粧 +透明釉	外面は底 部以外施 釉。内面 は無釉	有	底部から肩部にかけての資料。 胴部が「く」の字状に折れ曲がる。 胴部に線彫りの文様が描かれ、具 須と飴釉で色付けされる。	沖繩 (壺屋)	ソー14
第26図 1 ◇ 7	施釉陶器 蓋	— — —	淡黄 細粒 色子	鉄 釉	内面は露 胎	有	高台状のつまみを持つ。 蓋甲面に蛇の目状の釉剥ぎがあり、 付着物を削り取った痕が見られる。 耳壺の蓋である。	沖繩 (壺屋)	ソー14 斜面の流れ 込み
◇ 2 ◇ 8	火入	— 12.4 —	黄白 粗粒 色子	黒 釉	外:腰部ま で施釉。 内:露胎	有	底部資料。 外面は胴部に幅のある沈線を巡ら す。 内面は黒く焼けた痕を残す。	沖繩 (壺屋)	表採

第16表 円盤状製品観察一覧

*単位はcm、g

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	完/破	最大径	最小径	厚さ	重さ	備考	出土地
第26図 3 図版25の1	壺屋焼	小碗	底部	完	4.4	4.1	1.5	1.6	白化粧後に透明釉。 見込みに蛇の目釉剥ぎ。 高台内も施釉	セー16 攪乱
◇ 4 ◇ 2	本土産磁器	碗?	胴部	完	3.9	3.3	0.6	0.6	外面は具須で葉文を施 す。	表採
◇ 5 ◇ 3	本土産磁器	皿?	胴部	完	3.8	3.5	0.6	0.6	具須で外面に1条の圈 線、内面に細縦線文様。	ソー16 Ⅱ層

第17表 陶質土器分類一覧

部位 器形	口 縁 部	胴 部	底 部	合 計
火 炉	0	0	1	1
不 明	2	14	1	17
合 計	2	14	2	18

第18表 無釉陶器分類一覧

部位 器形	口 縁 部	胴 部	底 部	合 計
鉢	1			1
壺	1		1	2
不 明		7		7
合 計	2	7	1	10

第19表 沖縄産施釉陶器分類一覧

部位 器形	口 縁 部	胴 部	底 部	合 計
碗	16	1	8	25
小 碗			1	1
鉢	1			1
壺				0
瓶	1	1		2
花 瓶		1	1	2
火入れ			1	1
酒 注	2	3	1	6
盃	2			2
蓋	1	1		2
不 明		17		17
合 計	23	24	12	59

鉄 製 品

鉄製石鑿（第26図6、図版25の4）

第26図は、方言で、石イヤと称されるもので、長さ7.3cm、太さ3.6cm、重さ826gである。刃部は胴部より細身で、断面は略二等辺三角形を呈し、表裏面を幅広くした4つに面取りされた平刃である。先端部は幅1.9cm、厚さ5mmの横断面形が長方形を呈し、平坦面となり、潰れは見られない。胴部は円柱状を呈し、頭部は使用によって椎茸の傘状に潰れ、周辺部は縦方向に切れ目が生じている。3号墓前面の第I層からの出土である。

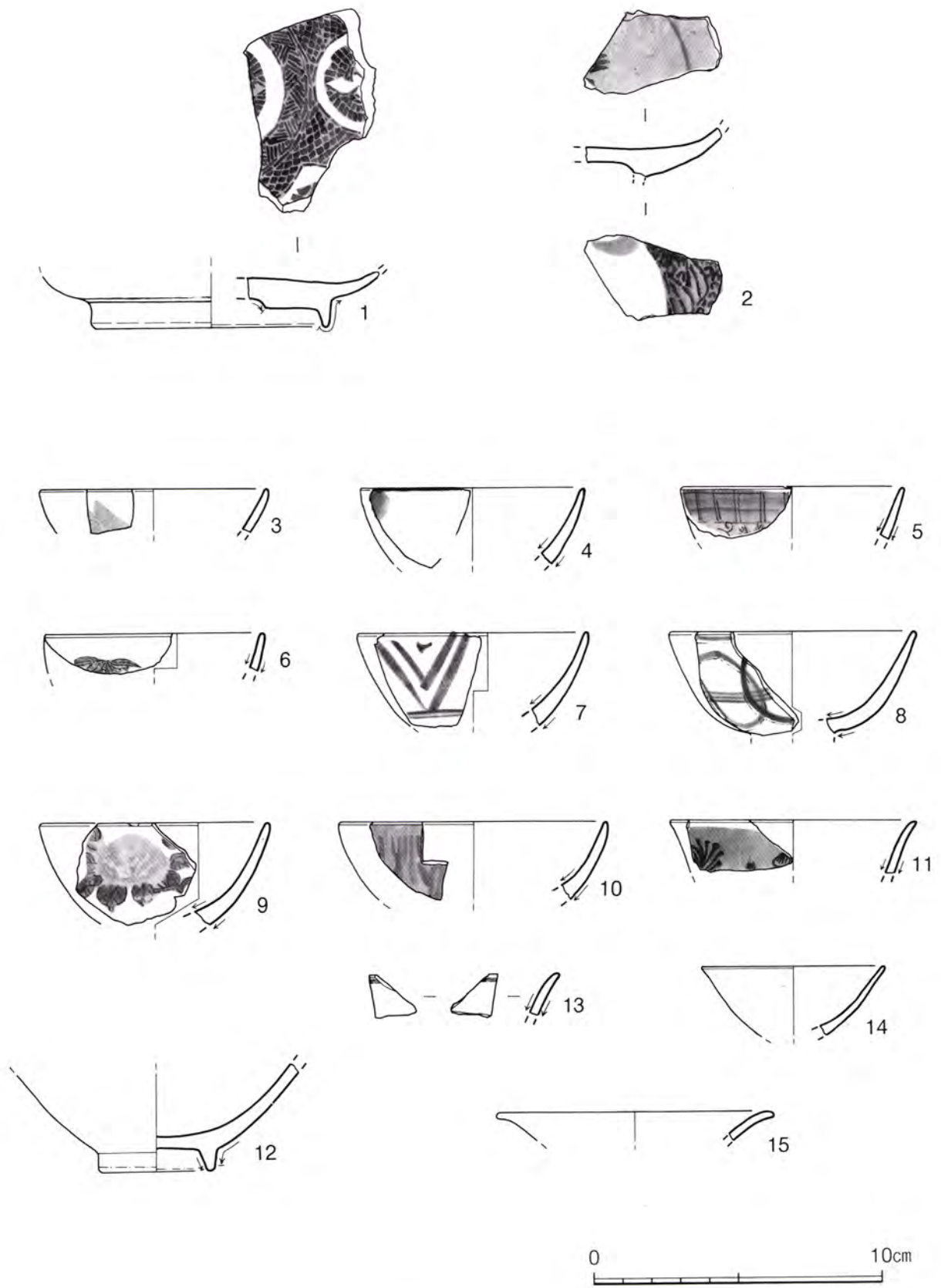
金 属 製 品

煙 管（第26図7、図版25の5）

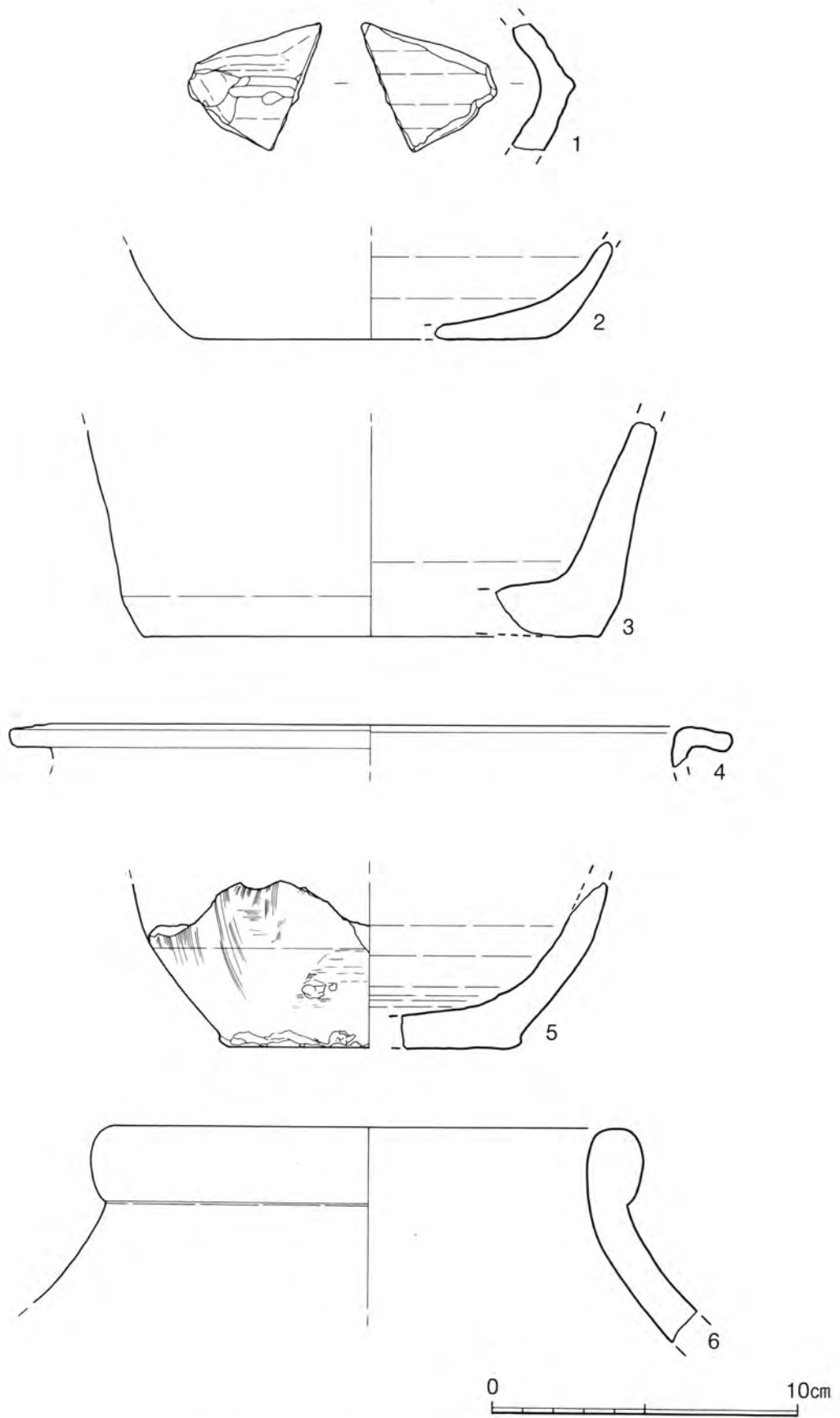
吸口で、長さ7.1cm煙管との接続部は六角形状を呈し、口径は6～7mmで次第に径を4.5mmと細くなり端部を窄ませ口径2.5mmである。約0.5mmの金属の板を筒状に丸めたもので接続部には、竹製の煙管が残っており長さ2.4mmで、直径5.5mmで中央部に口径約2mmの穴がある。東D-2号墓墓庭で検出され第II層の出土である。

植 物 遺 体

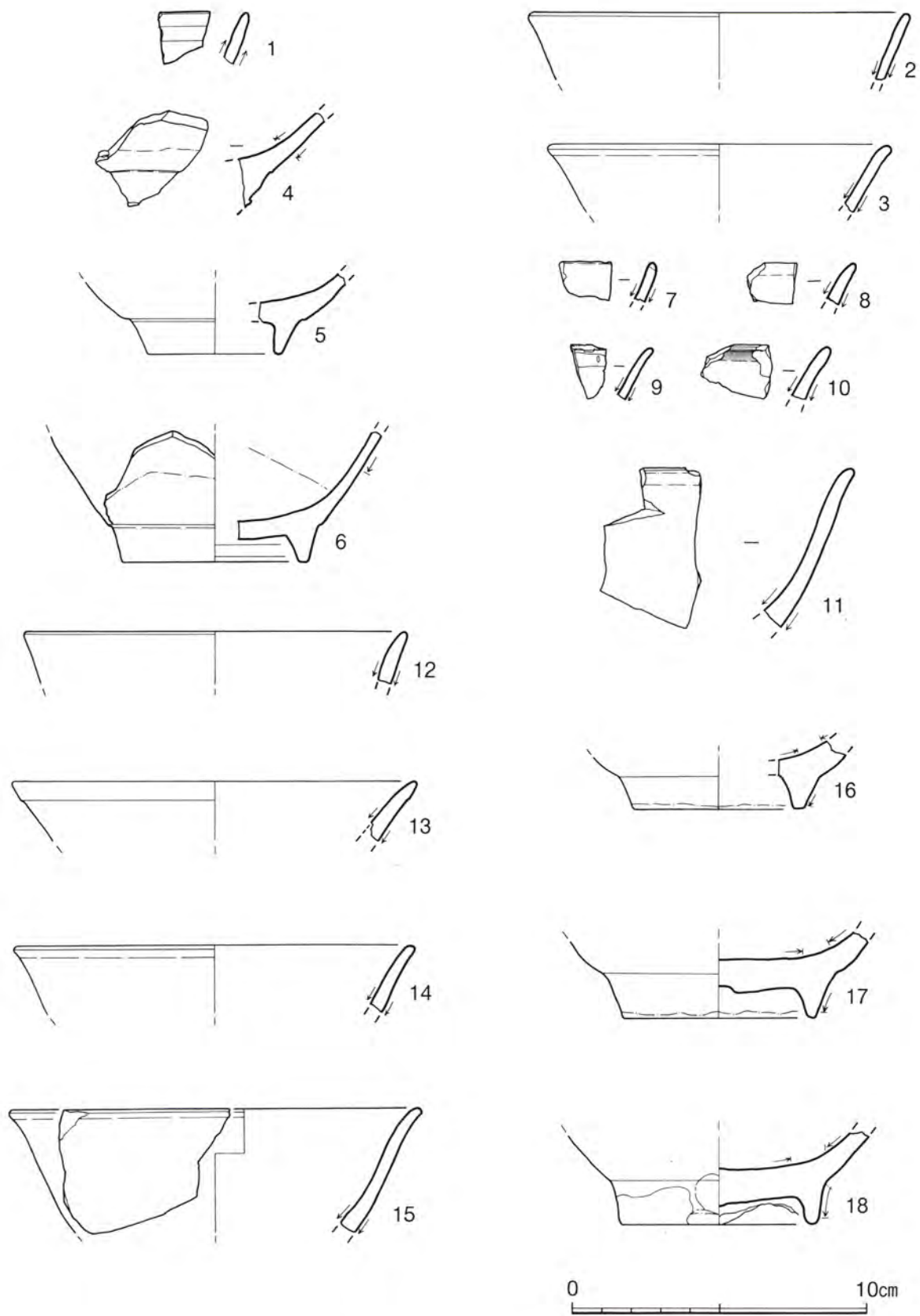
本調査では、プラント・オパール分析のためサンプルの採集を行った。分析の結果、第III層からイネは検出されなかった。詳細は藤原宏志氏の付記に譲る。



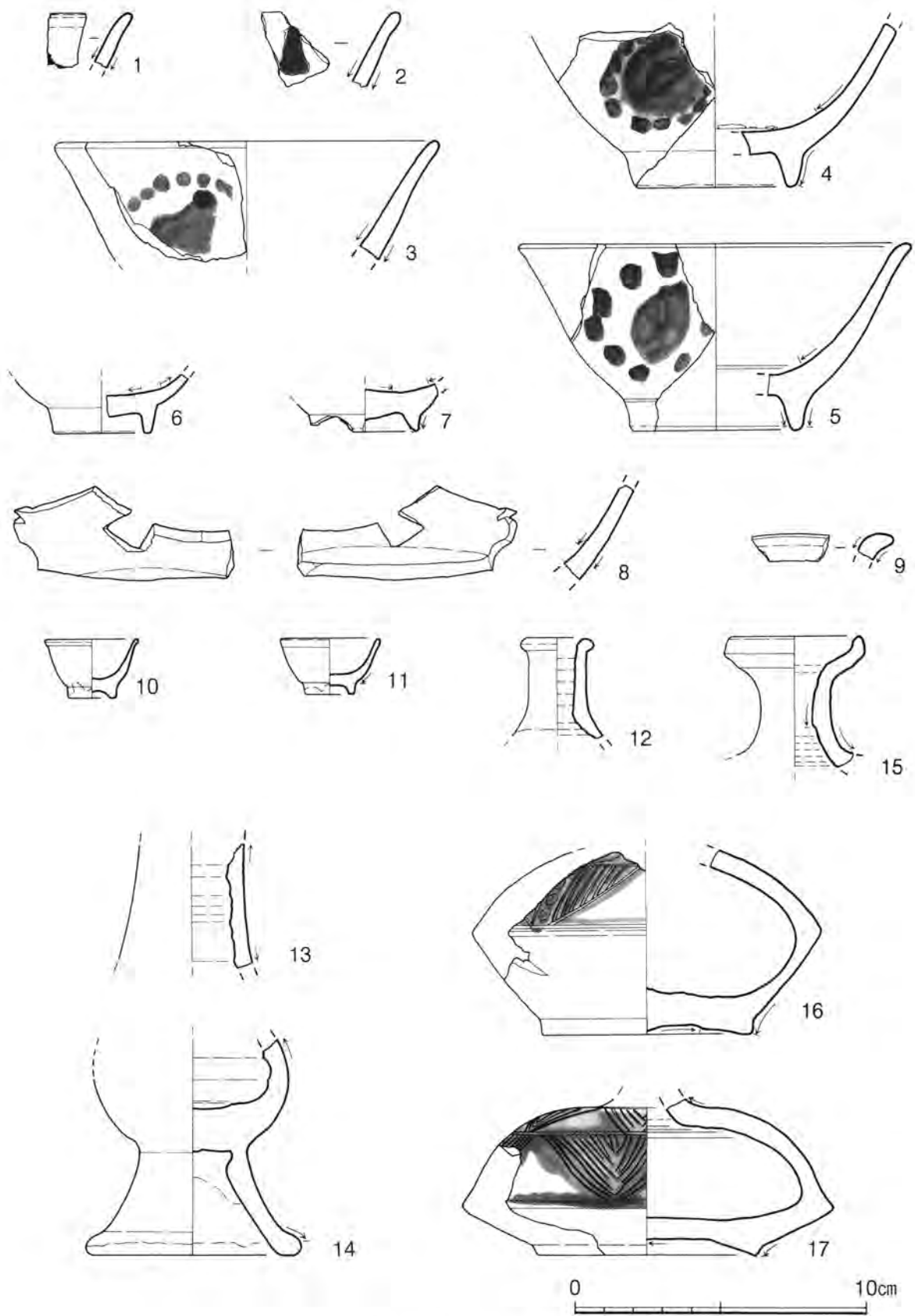
第22図 本土産磁器



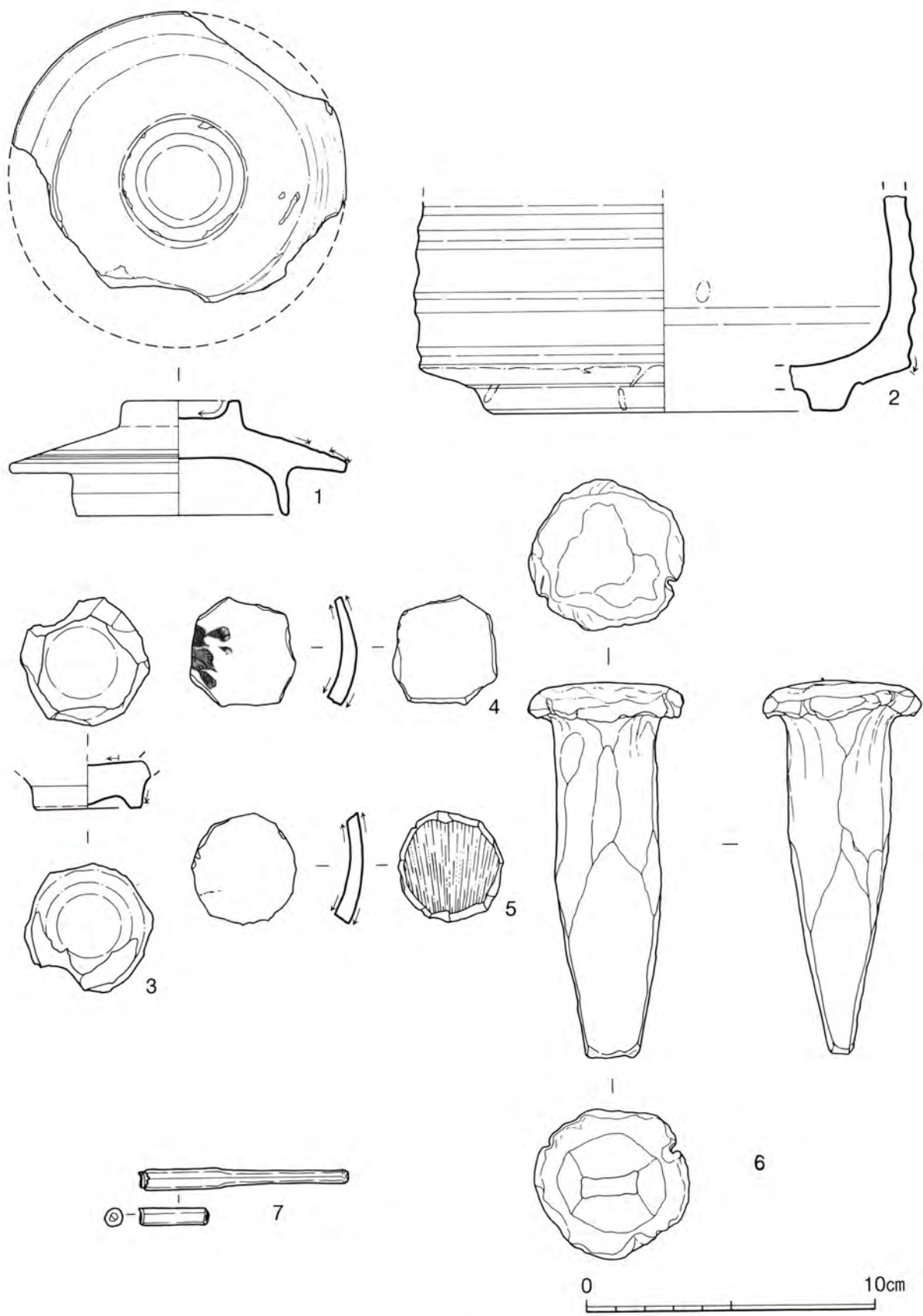
第23図 陶質土器・無釉陶器



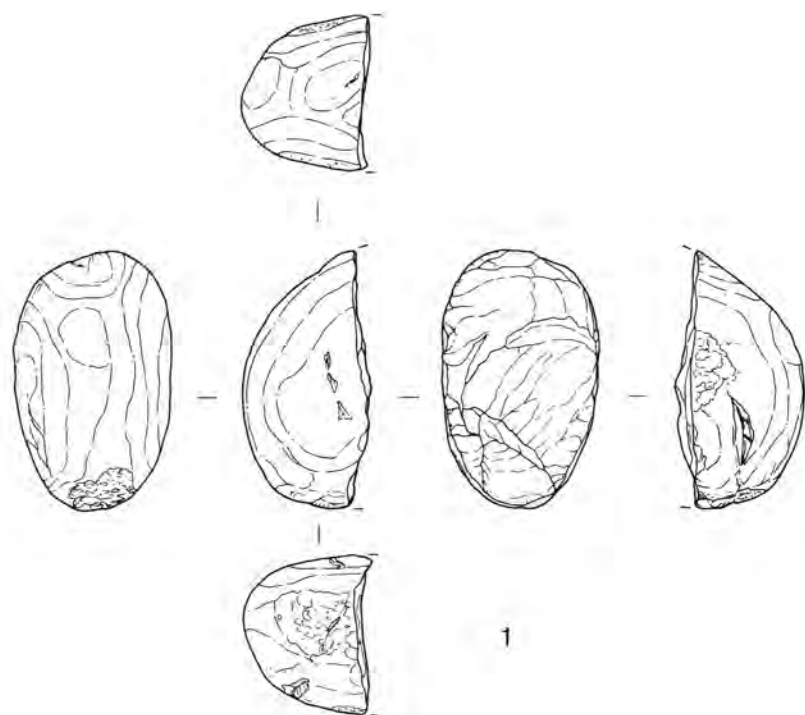
第24图 施釉陶器



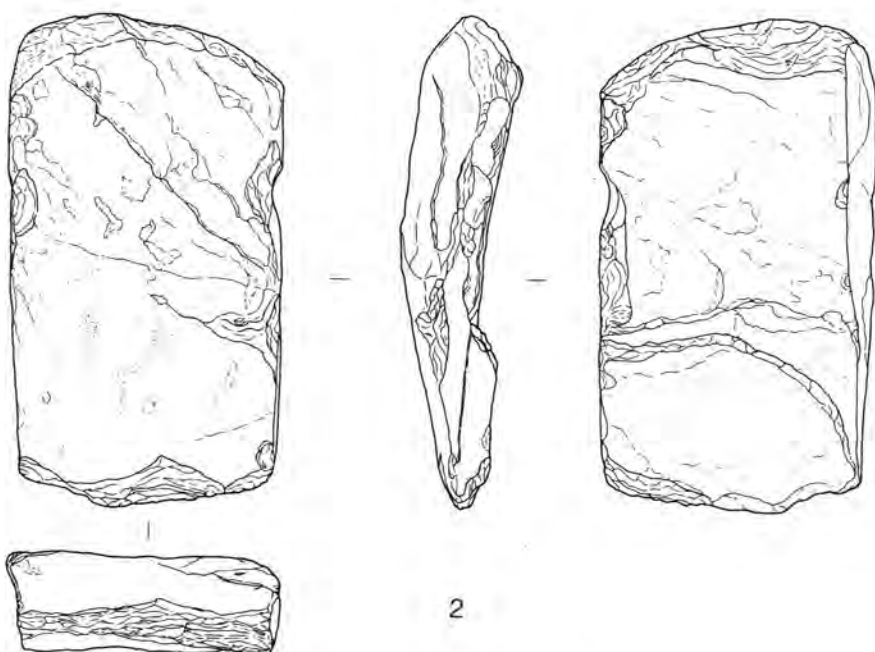
第25图 施釉陶器



第26図 施釉陶器・遊具・鉄製品・銅製品



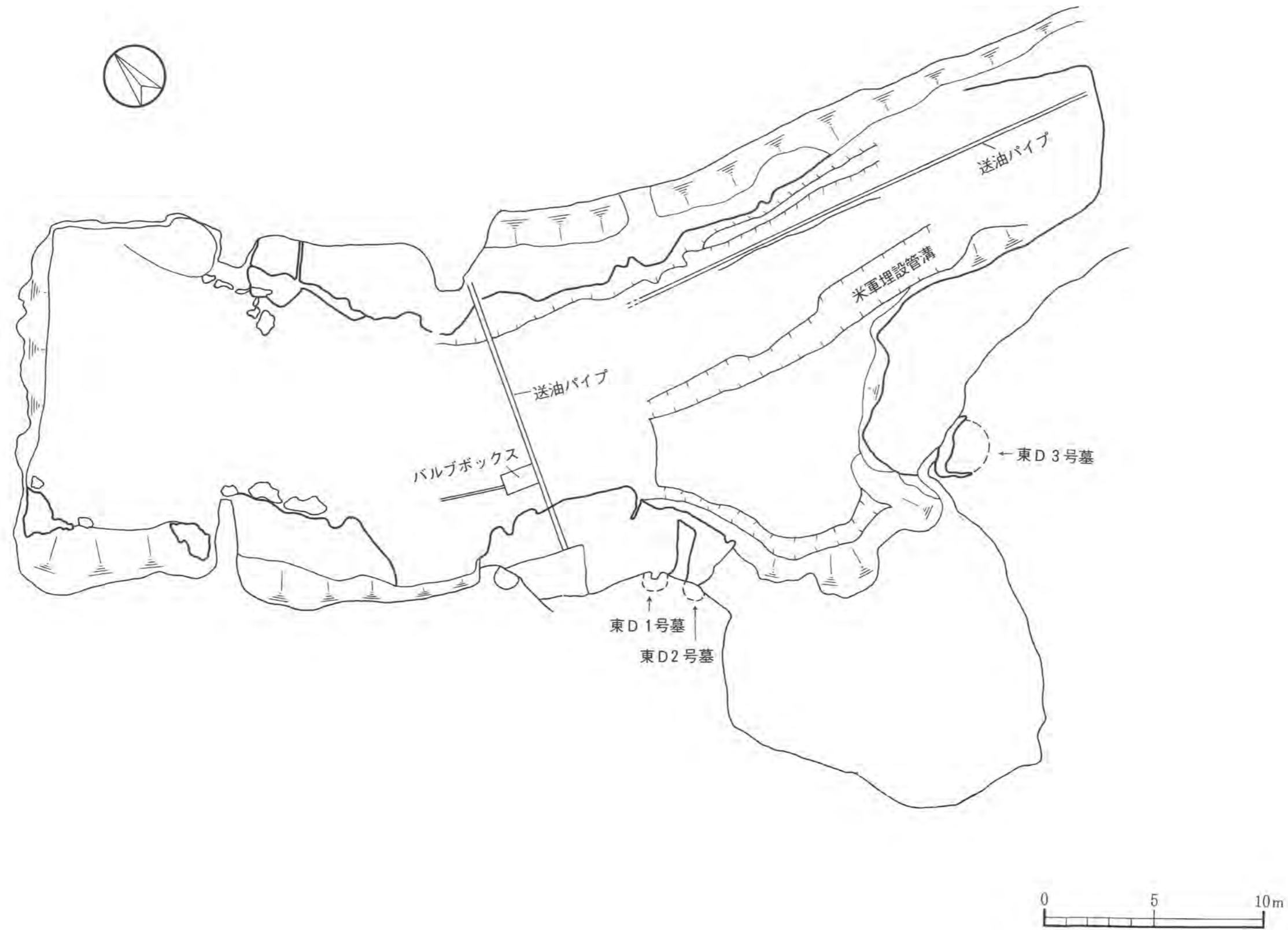
1



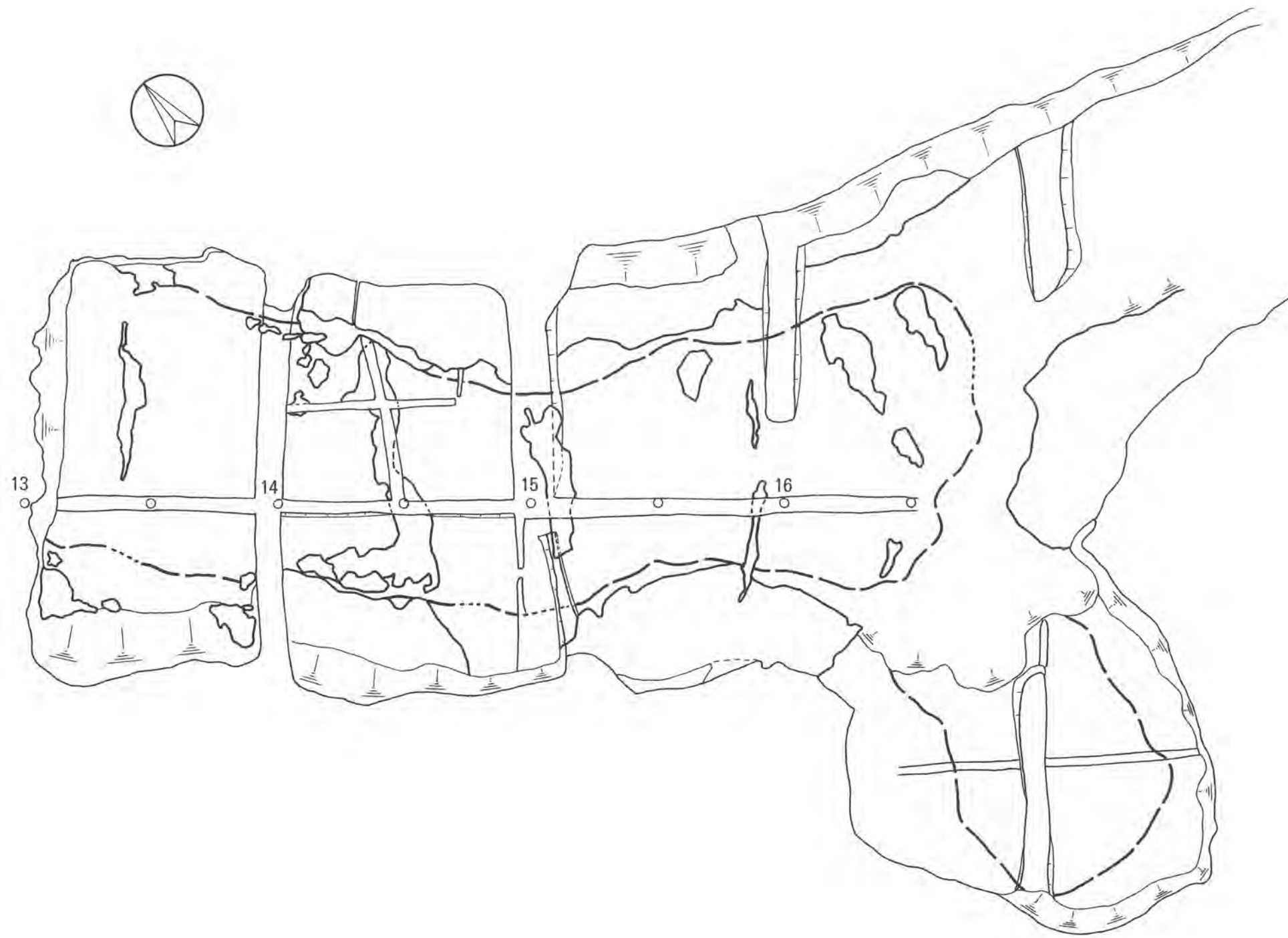
2



第27图 石器

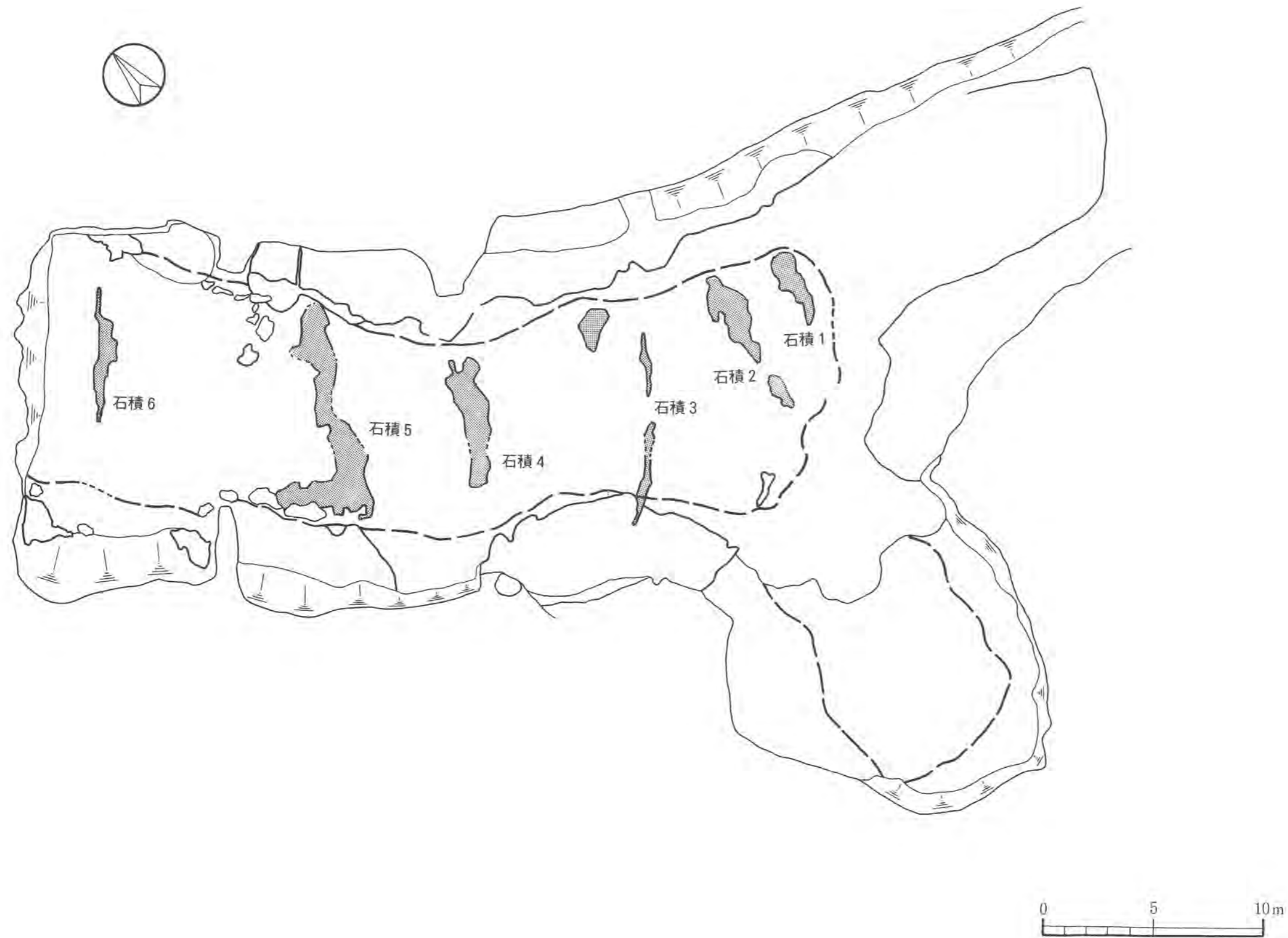


第28図 近代・墓・溝

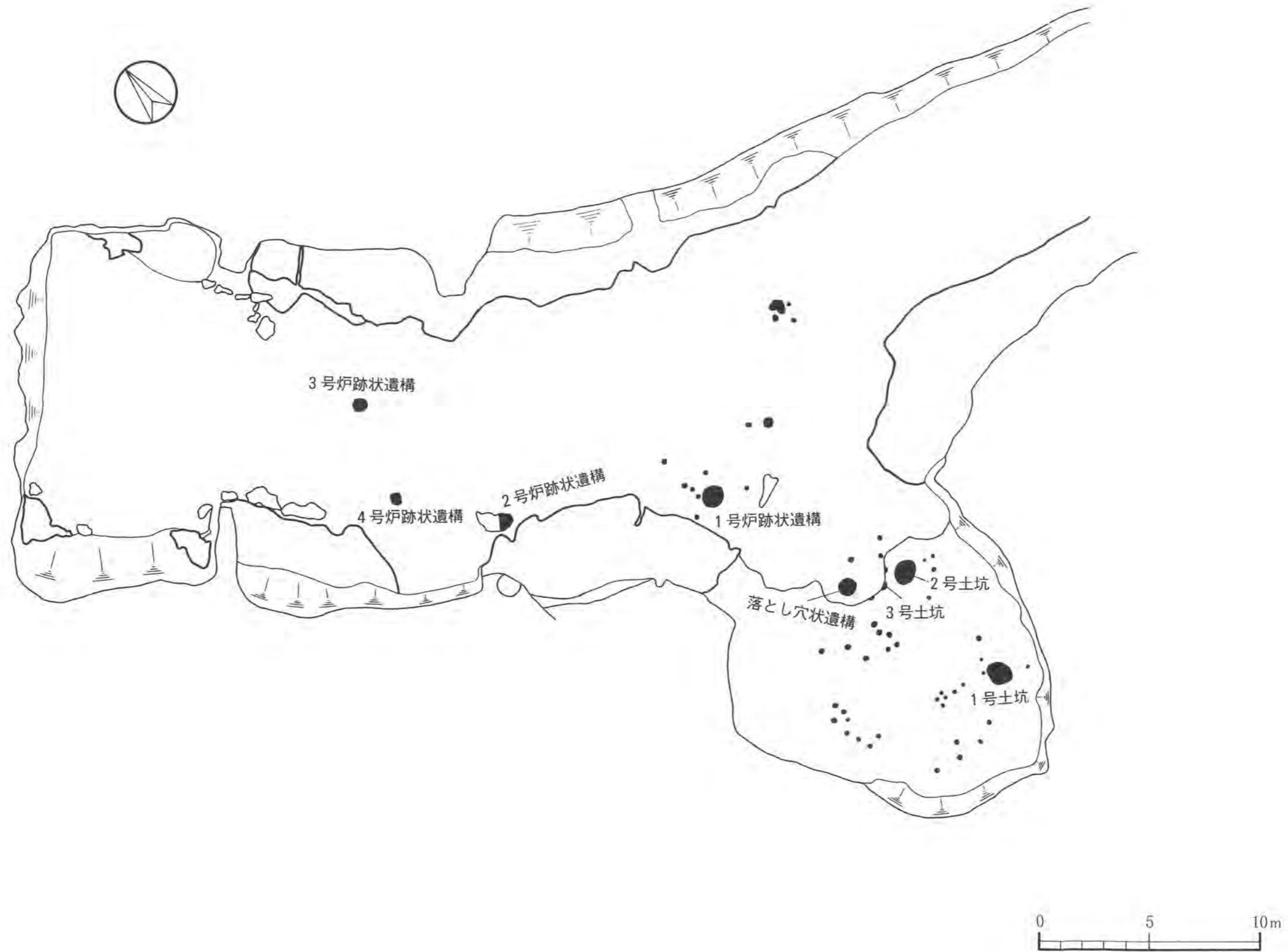


第29図 石積・包含層・畦

0 5 10m



第30図 石積・包含層



第31図 炉跡状遺構・土坑・ピット

第Ⅵ章 ま と め

以上、発掘調査の成果について述べてきた。最後に若干のまとめをしたい。

伊礼伊森原遺跡は、起伏の激しい丘陵地帯を東西に蛇行する谷間に形成された遺跡である。遺構は谷間と丘陵斜面に検出され、下流側に広がりを持つことが判明した。

これまで、遺跡のある北谷町北側の丘陵地帯には、18世紀頃から形成された屋取集落とその東側の谷間に近世から近代の古墓群が確認されているのみであった。

本遺跡の発見によりグスク時代における山間部の土地利用の状況を窺い知ることができた。

層序は大まかにみると、地山を含めて5枚からなる。第Ⅰ層が戦後の造成土や攪乱層で、南側丘陵斜面に沿って下方へ続く古墓に伴う溝と、戦後一時期行われた畑の脇に造られたものと思われる溝状遺構が検出された。本土産磁器・沖縄産陶器・鉄製平鑿などが出土し、青磁や染付が東D-3号の北側丘陵斜面下部で表採された。

第Ⅱ層は近世～近代で、北側の丘陵斜面に沿う1号溝状遺構部分で厚く堆積し、南側丘陵側は侵蝕によって削られたと判断された。本層からは、青磁と沖縄産陶器（壺屋焼）が出土した。

第Ⅲ層が文化層で、a・b・c、d、eの5枚にわけられる。

第Ⅲ層aでは15世紀の青磁や16世紀中から後半の白磁・染付が出土している。

第Ⅲ層bでは谷間を横切る状態の6列の石積が検出された。本層からはグスク土器、12世紀後半～13世紀前半・14世紀末～15世紀中・15世紀代・15世紀前半～16世紀中の青磁・褐釉陶器が出土している。

第Ⅲ層cでは3本の溝状遺構・4基の炉跡状遺構・土坑・落とし穴状遺構・ピットが検出された。1号炉跡状遺構の周辺や石積2・3・4の下位や周辺からグスク土器が出土した。

谷間を階段状に区画する6列の石積は、本遺跡を特徴づけるものであった。そこには農耕を窺わせる次のような状況が見られた。

石積は谷間を区画するように設けられており、谷間の中央部付近や南側斜面下部の第Ⅲ層cで検出された3本の溝状遺構と交わって検出された。溝内の段差部に石列を伴っている2号溝状遺構は石積に堰止められた状態で、6号溝は遺構内で石灰岩礫が石積6の延長線上の位置で流れを遮るように検出された。3号溝は石積4にほぼ直行し、石積4の下位で検出された浅い窪みとつながるものと考えられ、石積以前の水の流れを予測させるものであった。谷間を区画した石積は、その流れを利用した可能性

がある。

石積間に堆積する第Ⅲ層bは、ほぼ水平に堆積する傾向がある。土中で酸化した根の痕跡が検出されたこと、石積4と5の前面以外ではほとんど自然礫が出土せず、また、遺物の出土は石積周辺や下位、1号炉跡状遺構周辺という状況があり、石積間には、意図的に排除されたことが考えられ、谷間を区画した水田または畑の可能性を持つ農耕地の存在を窺わせるものであった。しかし、プラント・オパール分析を行ったが、イネは第Ⅰ層で僅かに検出されたのみで、第Ⅲ層からは、キビ族・ススキが検出されている。

石積4の南側の第Ⅲ層cで検出された2号炉跡状遺構の断面で堆積土が第Ⅲ層bに挟まっていること、石積4・5の前面に第Ⅲ層bで細分された細かい砂利の堆積が南側から北側に堆積し、さらに、石積5の北側部分で大小さまざまな石灰岩礫が下流側に散在していた。このことから主に南側丘陵斜面に沿って流れ込む鉄砲水などによって石積が崩壊した様子が見て取れた。

石積3の下位の第Ⅲ層cからは、横耳（把手）付土器の胴部片と滑石混入土器片が共伴し、第Ⅲ層bからはグスク土器と12世紀後半～13世紀前半の櫛描文皿、15世紀代～16世紀中までの青磁・褐釉陶器が出土したことから、石積の時期はこの頃でよいと思われる。

石積崩壊後、第Ⅱ層期に石積5の南側部分については、露頭する石積にさらに石を積んだ状況が見られ、崩壊後もこの谷間に人が入っていたことが窺われる。

南側丘陵斜面下部（ソ-16）で検出された落とし穴状遺構は、穴の上部に焼痕と炭が堆積し、炉と落とし穴の2つの性格を持つと考えられた。本遺構を考える上で、現存する民俗例として、大宜味村で確認されている猪の落とし穴の規模に類似性がある。

本遺構周辺の斜面中腹と下部（第Ⅲ層c）の深さのあるピット群は、柵などの可能性も考えられるが判然としない。また、上部（第Ⅲ層b）の深さ10cm以下の浅いものは性格を異にするものと思われる。

4基の炉跡状遺構は、縁辺部に焼痕が残り、主に西側壁面が非常に強く焼けているが、床面には見られず底に炭が堆積している。2号を除いては、40～50cmの深さがあり1号炉と3号炉は壁面・縁辺ともに強く焼けていることから、長期間の使用が考えられる。

このような深さを持つ炉跡状遺構の形態は、本土の炭焼窯に類似性が求められるが判然とせず、今後の類例を待ちたい。1号炉跡状遺構の周辺からはの甕形土器の口縁部（Ⅱ類b）や滑石混入土器が出土した。2号炉跡状遺構については他と比較して浅いことから、性格を異にすることが考えられる。

近年、グスク時代の畑の検出例や集落周辺での状況が確認され始めている。本遺跡の性格や山間部での利用状況についても、今後の更なる検討・分析を行い、類例遺跡の発見に俟ちたい。

参考文献

- 『大宜味村の猪垣—猪垣調査報告書—』 大宜味村教育委員会 1994年
 『上原濡原遺跡発掘調査記録』 宜野湾市教育委員会 1995年
 『漢那福地川水田遺跡』 宜野座村教育委員会 1993年
 『高嶺古島遺跡』 豊見城村教育委員会 1990年

伊礼伊森原遺跡の2件炭素年代測定の結果、下記のように示された。出土遺物から見る遺跡の年代と差があることから、再分析・再検討が必要と思われる。

TPの番号は、変更があり第1図の番号に変更した。下記のとおりである。

提出時	変更後	
TP No. 1	TP No. 9	
TP No. 4	TP No. 8	
TP No. 6	TP No. 5	
TP No. 10	TP No. 12	(TPは平成6年度の試掘溝)

Ⅲ層 f → 第Ⅲ層 e

伊礼伊森原遺跡14C年代測定結果報告

パリノサーベイ株式会社

試料名	試料の質	年代	Code No.
TP No. 1, 4, 6 第Ⅱ層	炭化材	1600±90 A.D. 350	Gak-18655
TP No. 10 第Ⅱ層	炭化材	2130±100 B.C. 180	Gak-18656

14C年代測定結果

遺跡名	試料名	試料の質	CoDo No.	年代 (1950年よりの年数)
伊礼伊森原	ソ-16 炉跡No. 1	木炭	Gak-19304	1690±180 A.D. 260
	ソ-16 炉跡No. 2	木炭	Gak-19305	1790±150 A.D. 160
	ソ-16 Ⅲ層 b	木炭	Gak-19306	1230±120 A.D. 720
	セ-14 Ⅲ層 f (最下部)	木炭	Gak-19307	2260±170 310 B.C.

圖 版



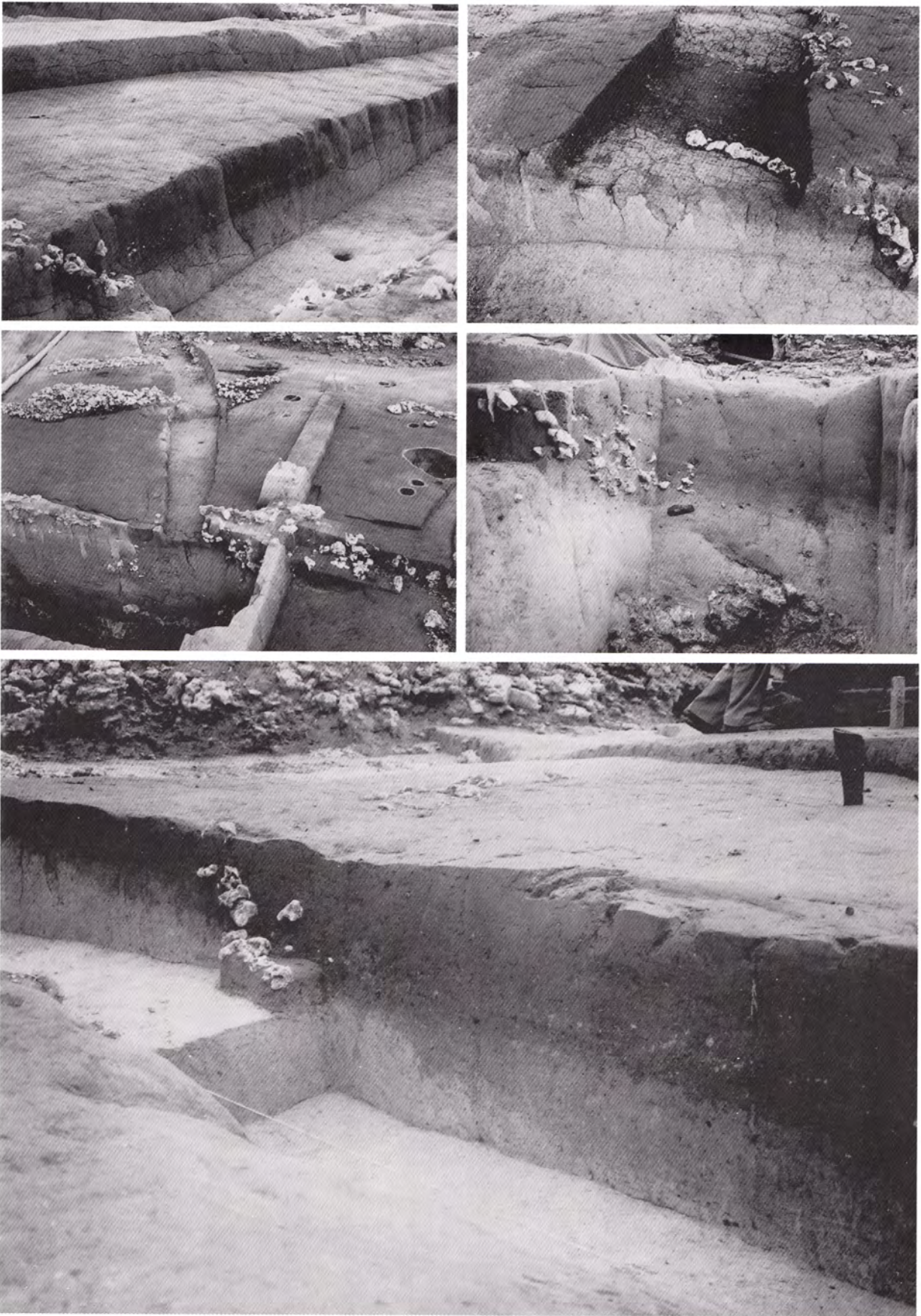
図版 1 (上) 遺跡遠景 (北側より)
(下) 遺跡遠景 (東側より)



図版2 (上) 遺跡近景 (1994年度)
(下) 発掘作業風景 (1995年度)



図版3 (上) セ・ソー14東壁
(中) セ・ソー15西壁
(下) セー13東壁



図版4 (一段左) セー16米軍埋設管溝南壁
 (二段左) 石積1～3検出状況
 (三 段) 石積2の断面

(一段右) 2号溝検出状況
 (二段右) 東D-1号墓前試掘溝(石積3)



図版5 (一段左) 石積4の断面
 (二段左) 石積4 (ソー14北壁)
 (三段) セー14南壁層序

(一段右) 石積5の断面
 (二段右) 石積5崩壊部断面



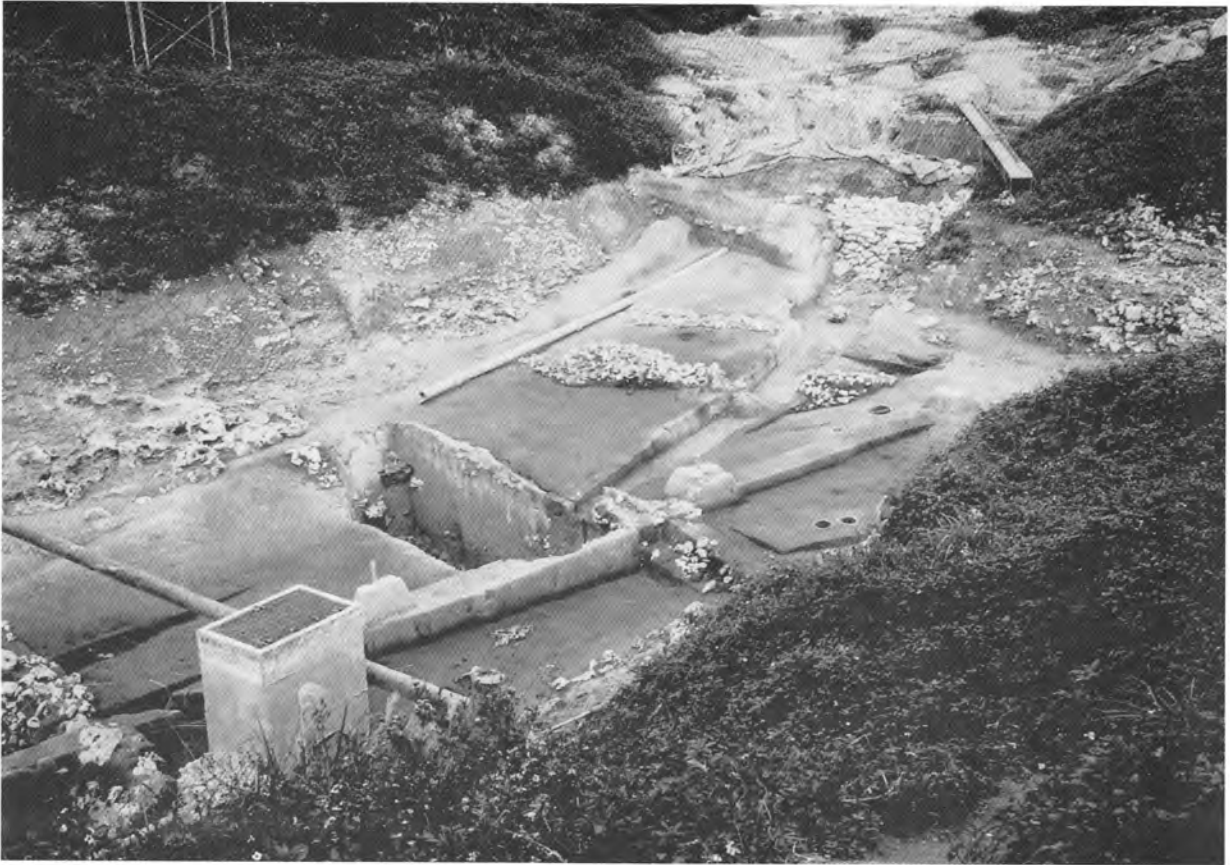
図版6 (一段左) 試掘溝No.6 検出状況
 (二段左) 南側丘陵斜面包含層検出状況
 (三 段) 包含層の範囲

(一段右) 南側斜面部からの第I層
 (二段右) 南側丘陵斜面掘り下げ



図版7 (一段左) スー16東壁
 (二段左) スー16西壁
 (三段左) セー14東壁
 (四段左) セー13東壁

(一段右) 墓前面の層位
 (二段右) ソー14東壁
 (三段右) 4・5号溝状遺構
 (四段右) ソー13東壁・4号溝部分断面



図版 8 (上) 石積 1・2・3 の検出状況
(下) 石積 4・5・6 の検出状況



図版9 (一段左) 2号溝状遺構検出状況
 (二段左) 石積1~3と2号溝状遺構
 (三段左) 3号溝状遺構
 (四段左) II層上面の谷間の検出

(一段右) 2号溝状遺構検出
 (二段右) 3号溝状遺構半裁状況
 (三段右) 雨天時の谷間(1994年)
 (四段右) 4号溝状遺構(1994年)



図版10 (一段左) 石積3～5 (南側より) (一段右) 石積1・2 (東南側より)
 (二段左) 集石2と3号炉跡状遺構 (二段右) 石積4と2号炉跡状遺構
 (三 段) 南側丘陵斜面検出状況、4号土坑 (下位の中央)

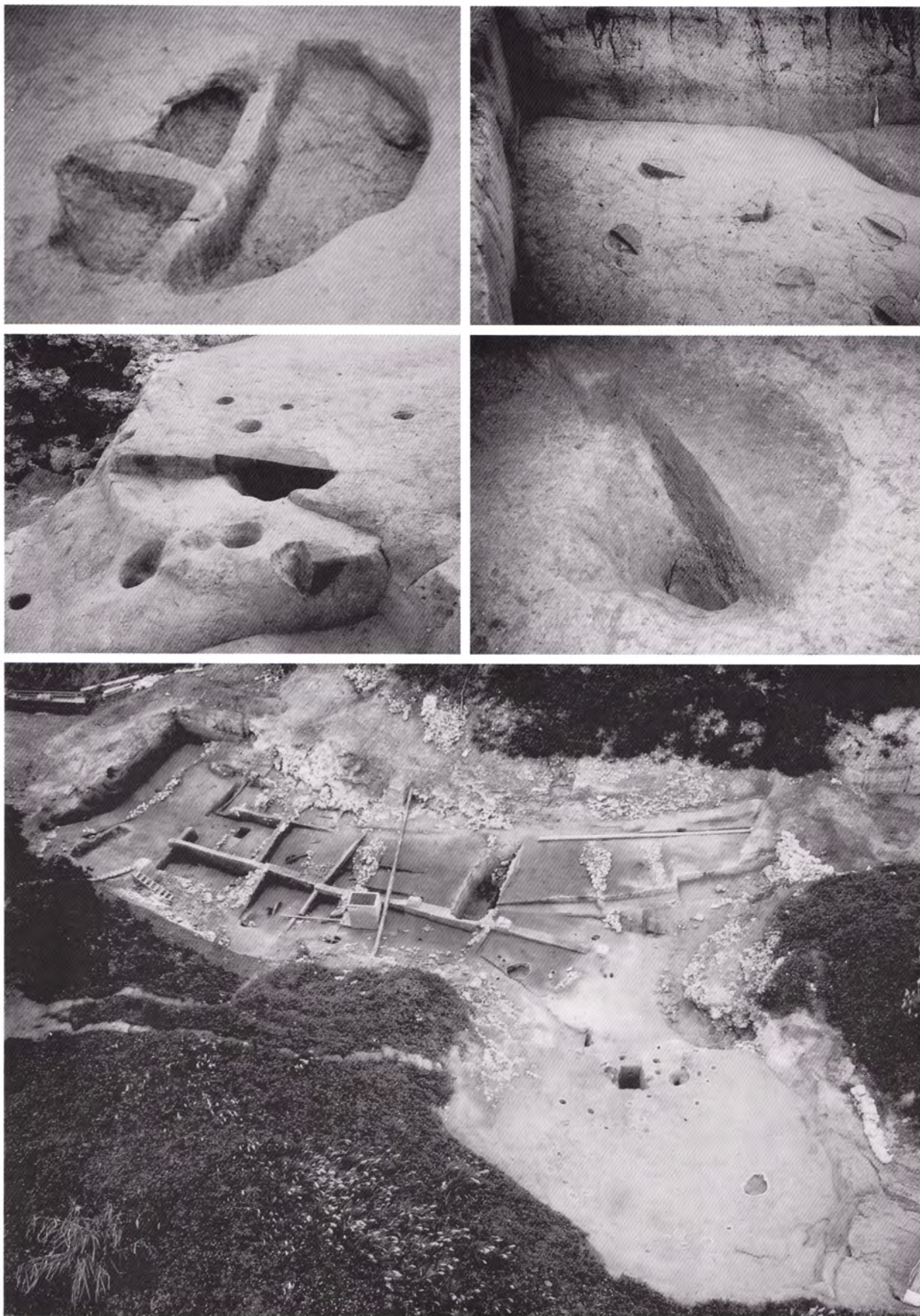


図版11 (一段左) 落とし穴状遺構上部断面

(一段右) 落とし穴状遺構断面

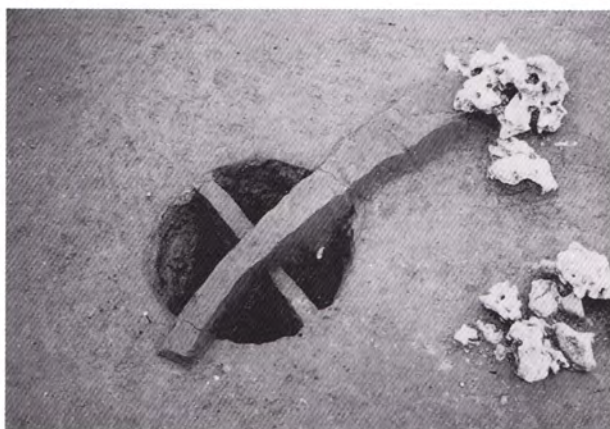
(二段左) 遺構内炭の堆積状況

(三段) 落とし穴状遺構半裁検出状況



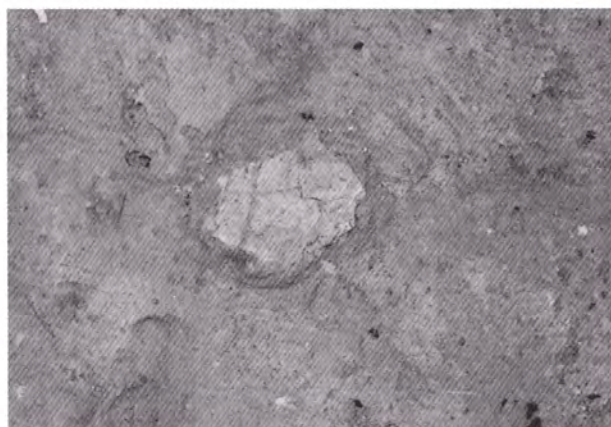
図版12 (一段左) 1号土坑の検出状況
 (二段左) 2・3号土坑周辺検出状況
 (三 段) 遺跡近景(南側より)

(一段右) ナー16丘陵上部検出ピット
 (二段右) 2号土坑の検出状況



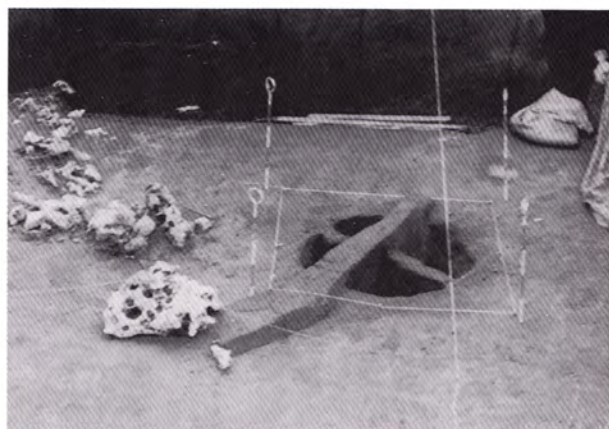
图版13 (一段左) 1号炉跡状遺構
 (二段左) 3号炉跡状遺構
 (三段左) 2号炉跡状遺構
 (四段左) 4号炉跡状遺構

(一段右) 1号炉跡状遺構断面
 (二段右) 3号炉跡状遺構断面
 (三段右) 4号炉跡状遺構



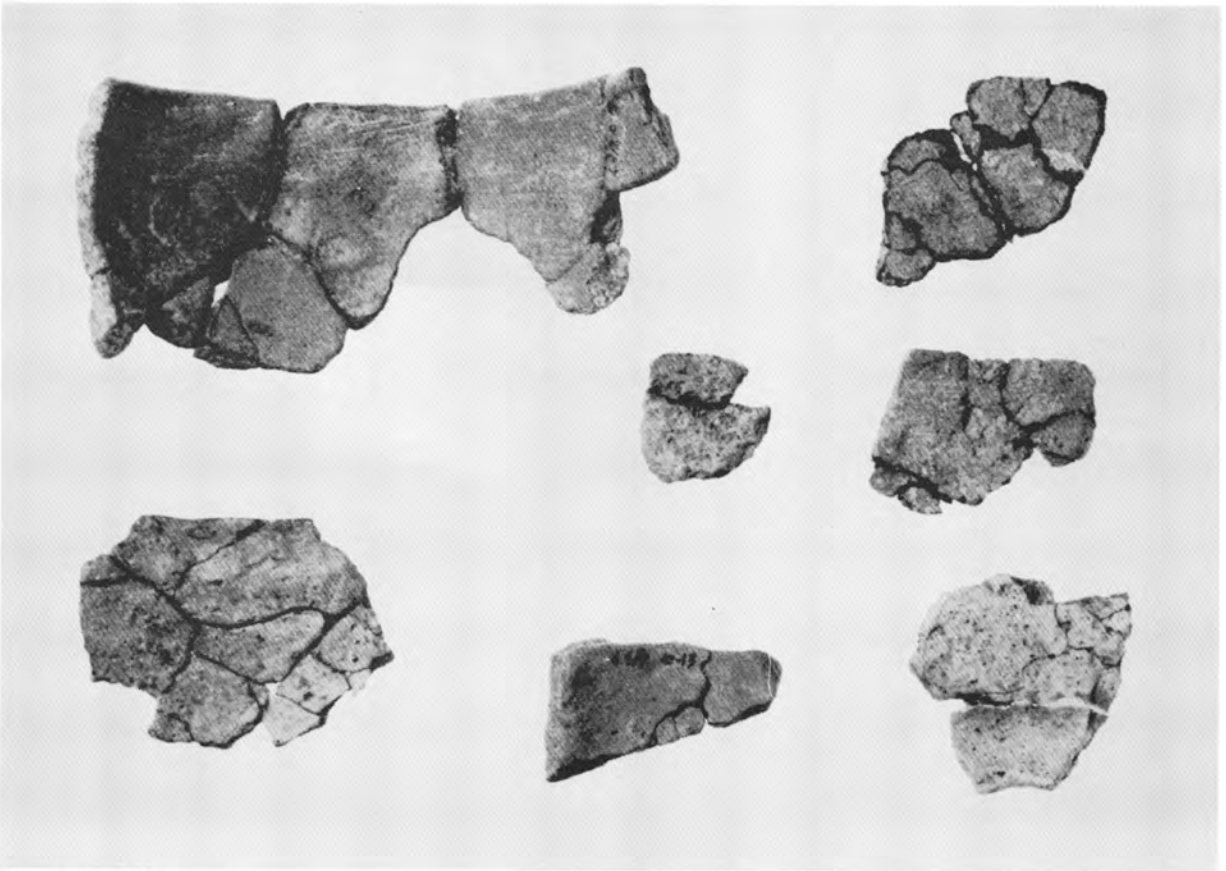
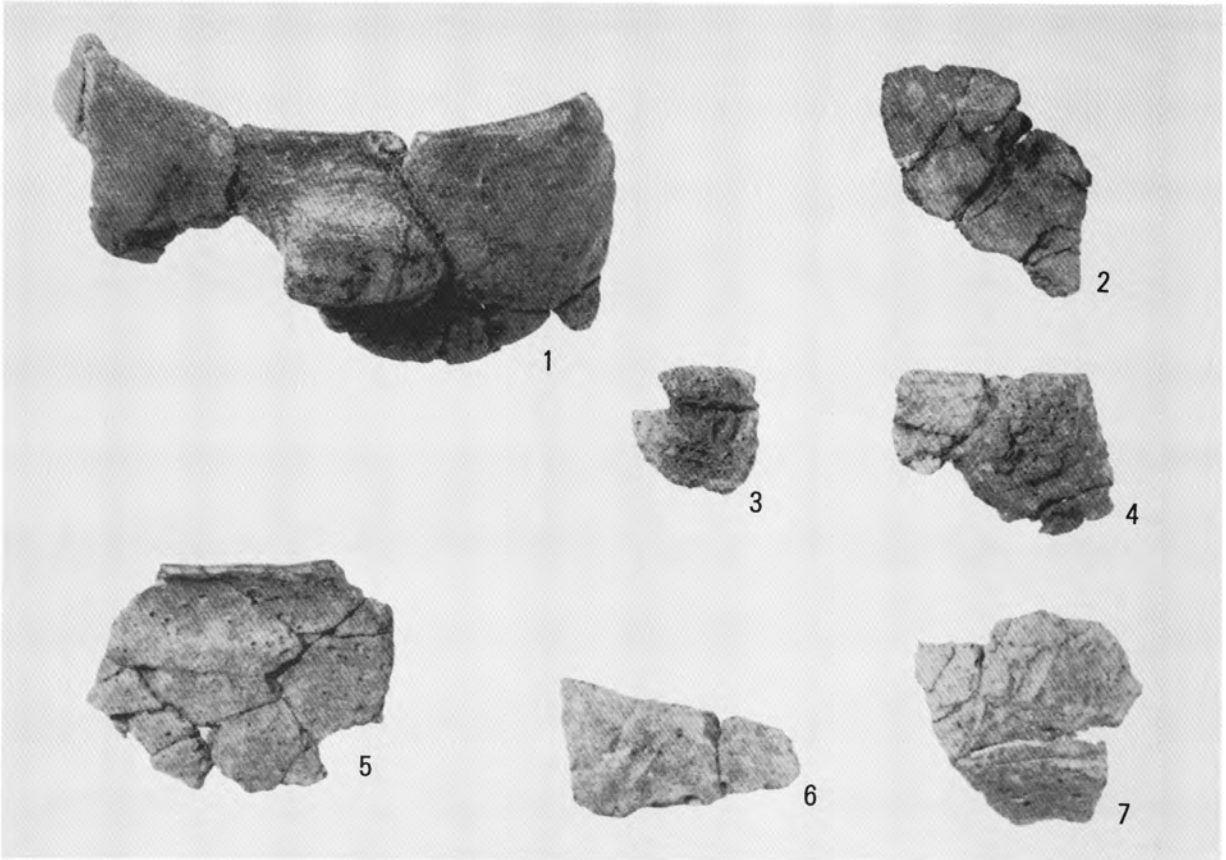
図版14 (一段左) 横位把手付土器の出土状況
 (二段左) 土器出土状況
 (三段左) 土器出土状況
 (四段左) 櫛描文青磁皿出土状況

(一段右) 石積4西側出土状況
 (二段右) 石積3下位の土器出土状況
 (三段右) 青磁皿出土状況
 (四段右) 褐釉陶器出土状況

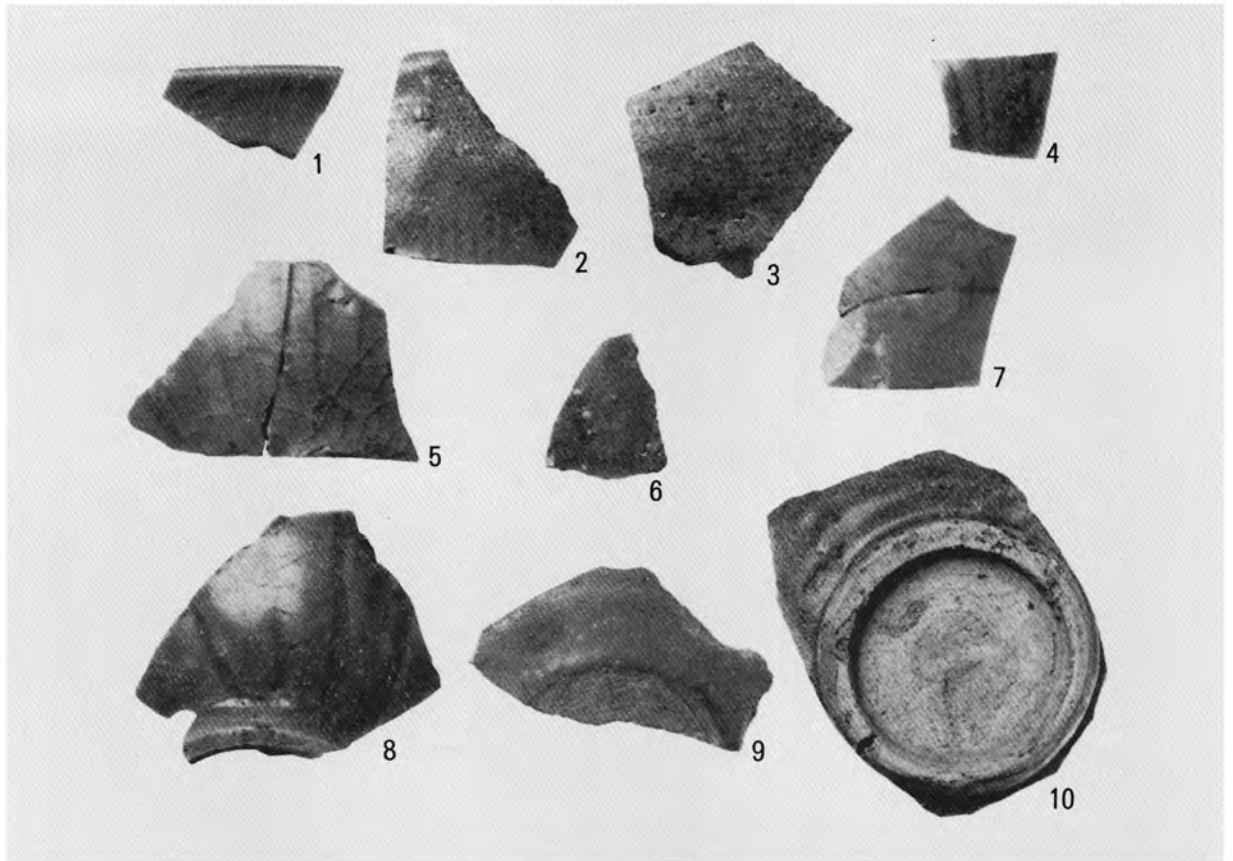


図版15 炉跡状遺構 (一段左) 2号切り取り範囲
 (二段左) 2号切り取り作業風景
 落とし穴状遺構 (三段左) 落とし穴状遺構上部の切り取り
 (四段左) 落とし穴状遺構の切り取り

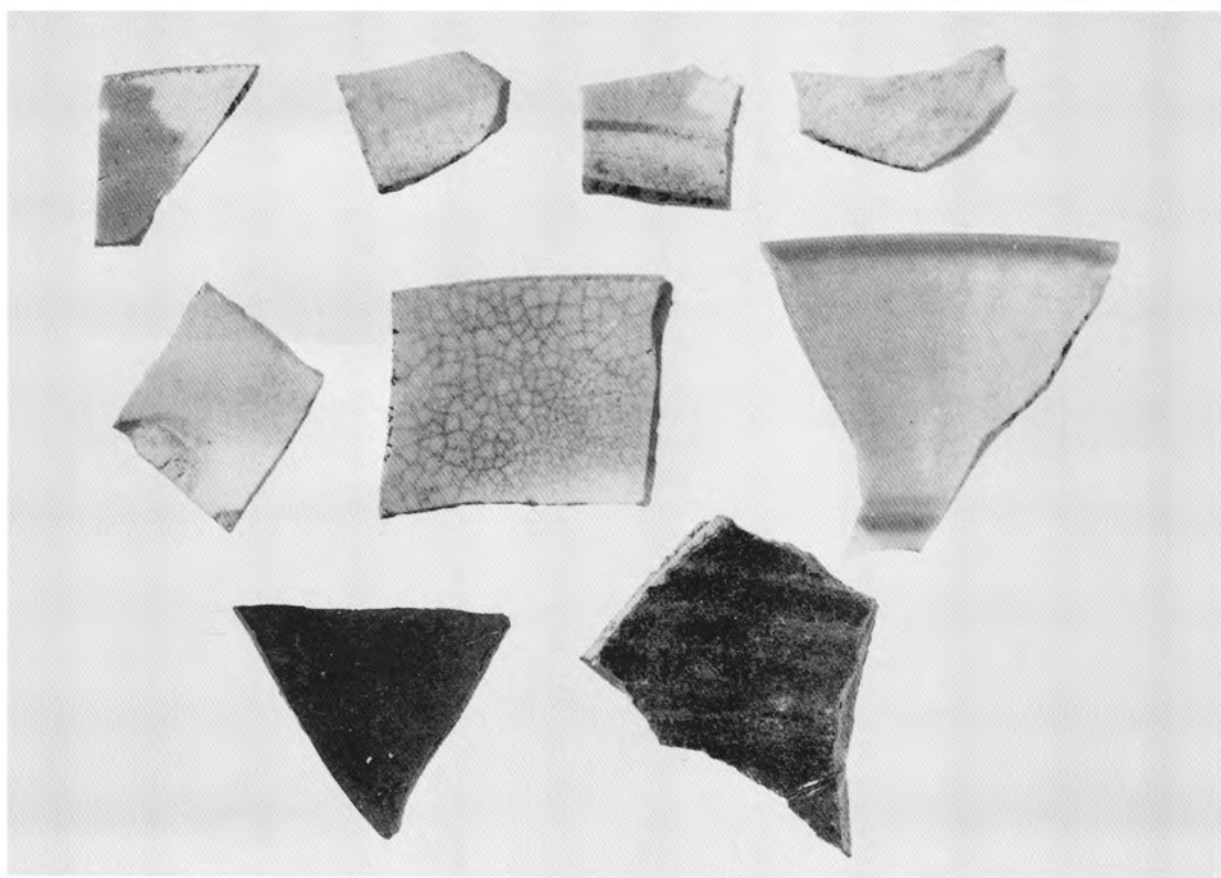
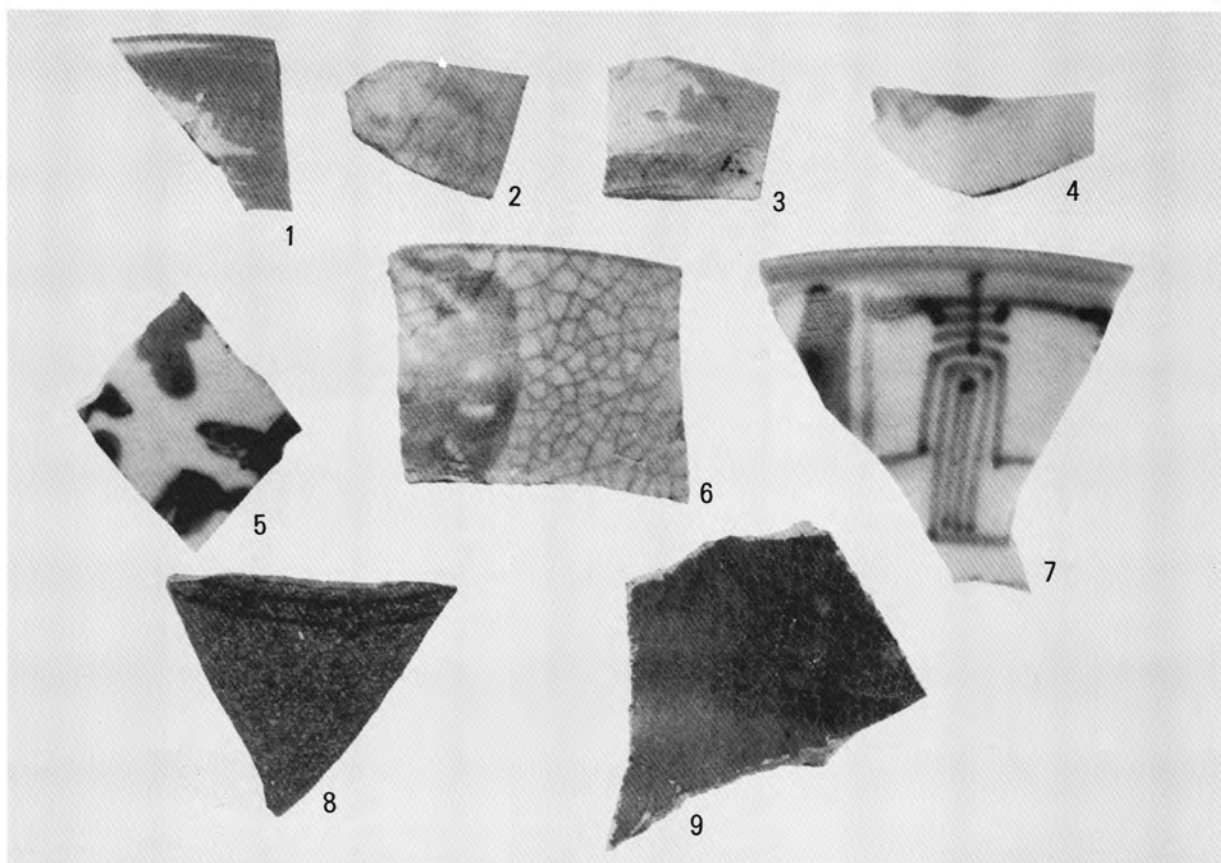
(一段右) 1号切り取り範囲
 (二段右) 1号切り取り作業風景
 (三段右) 切り取り作業風景



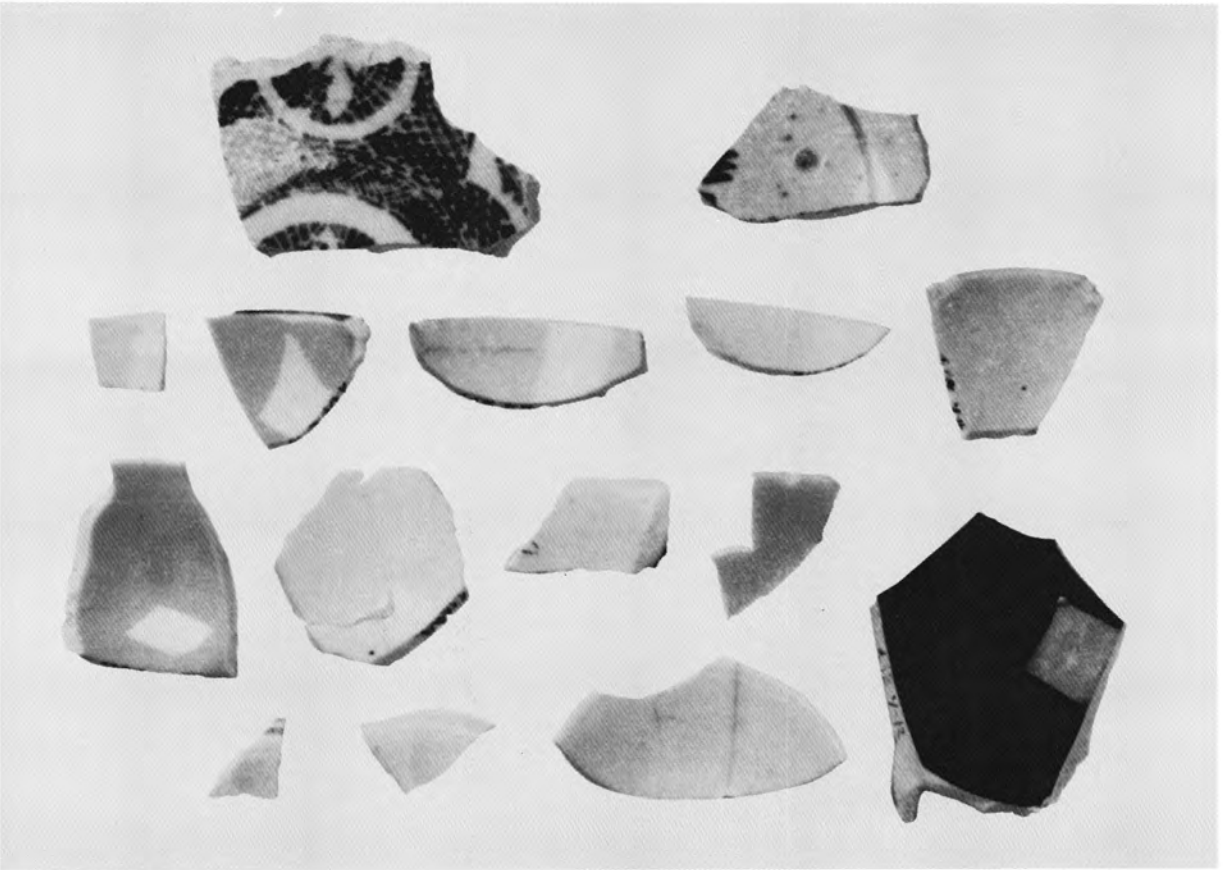
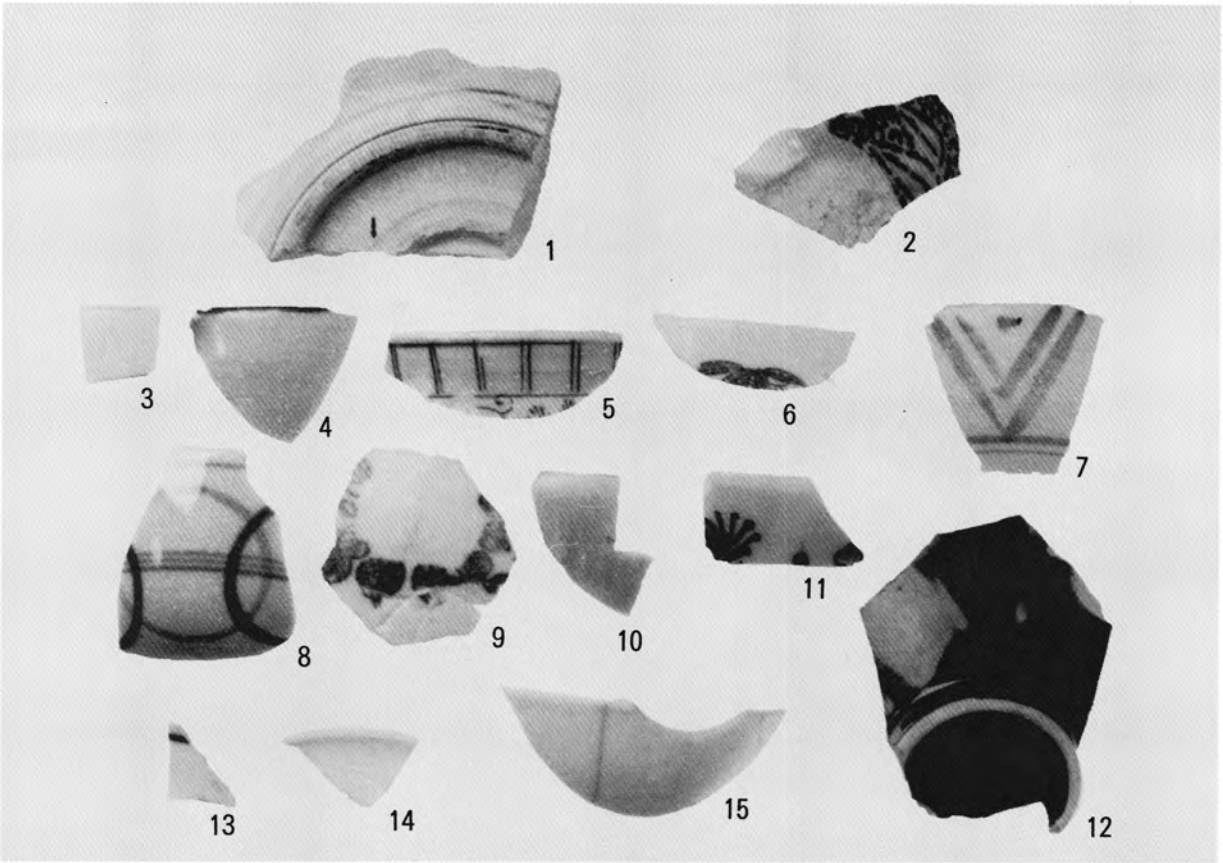
图版16 土器



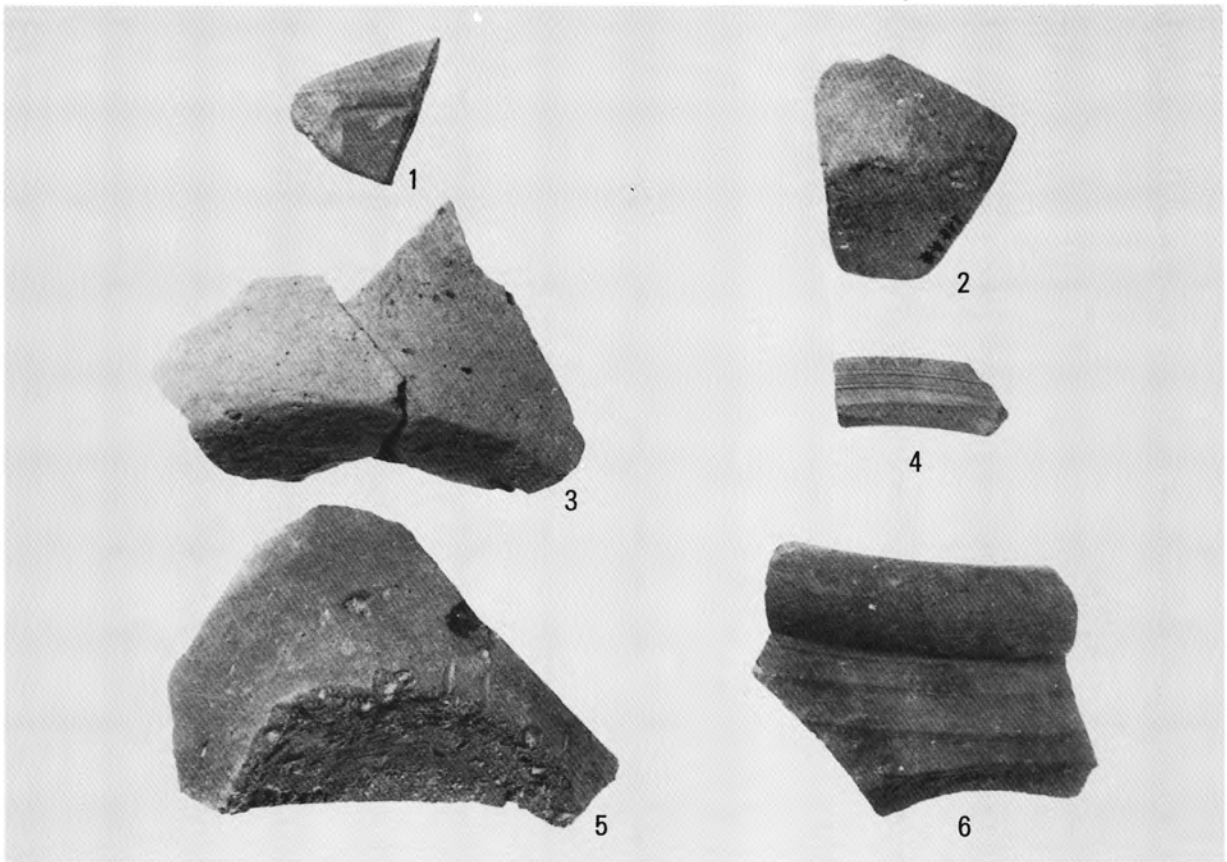
图版17 青磁



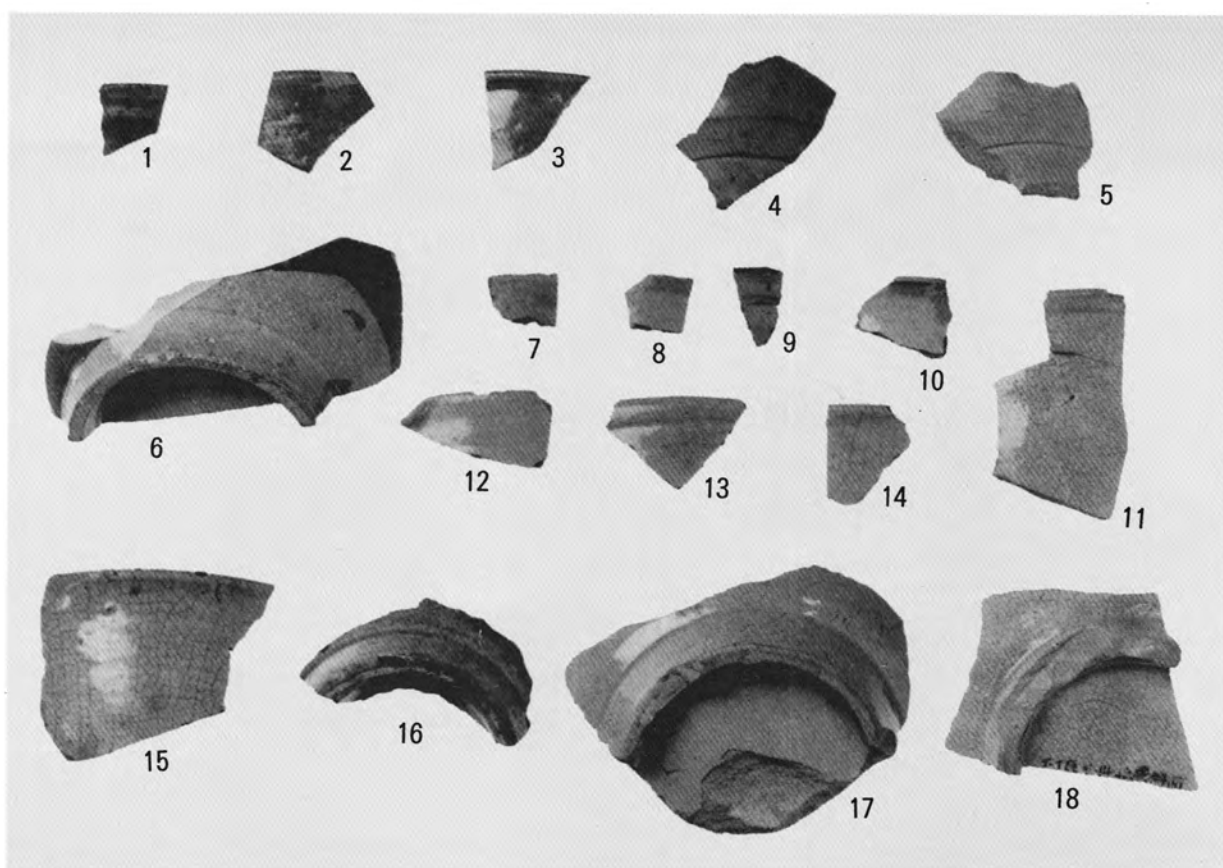
图版18 白磁・染付・褐釉陶器



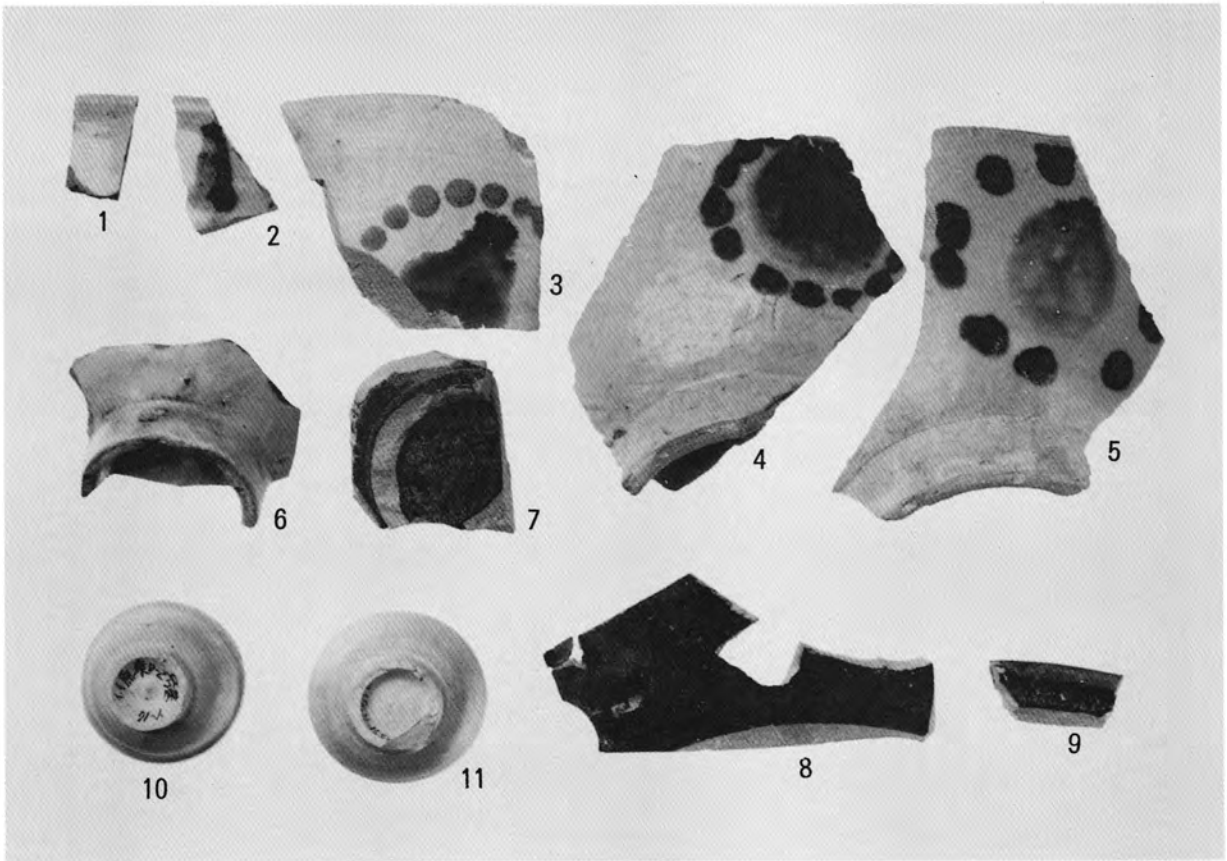
図版19 本土産磁器



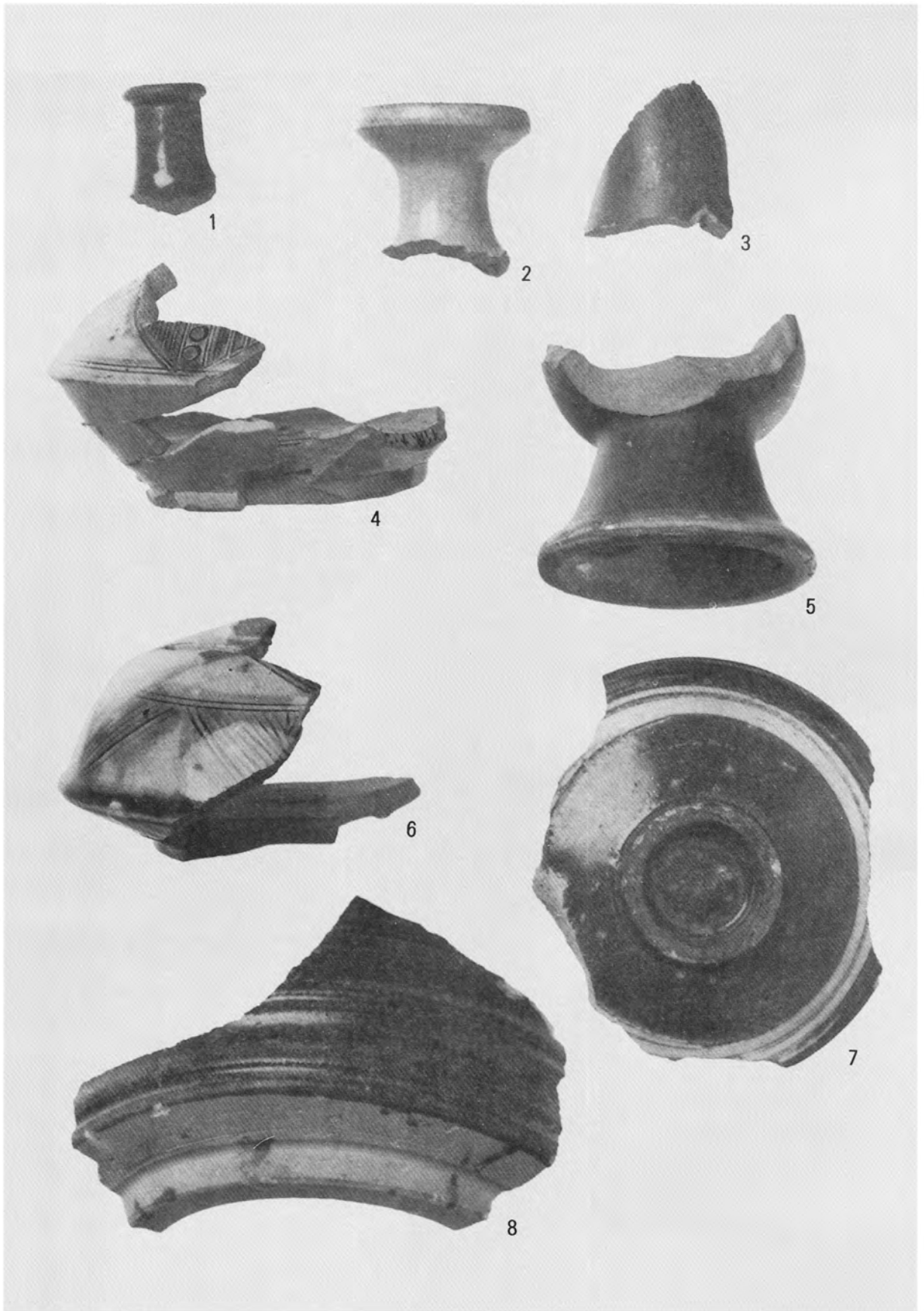
図版20 陶質土器・無釉陶器



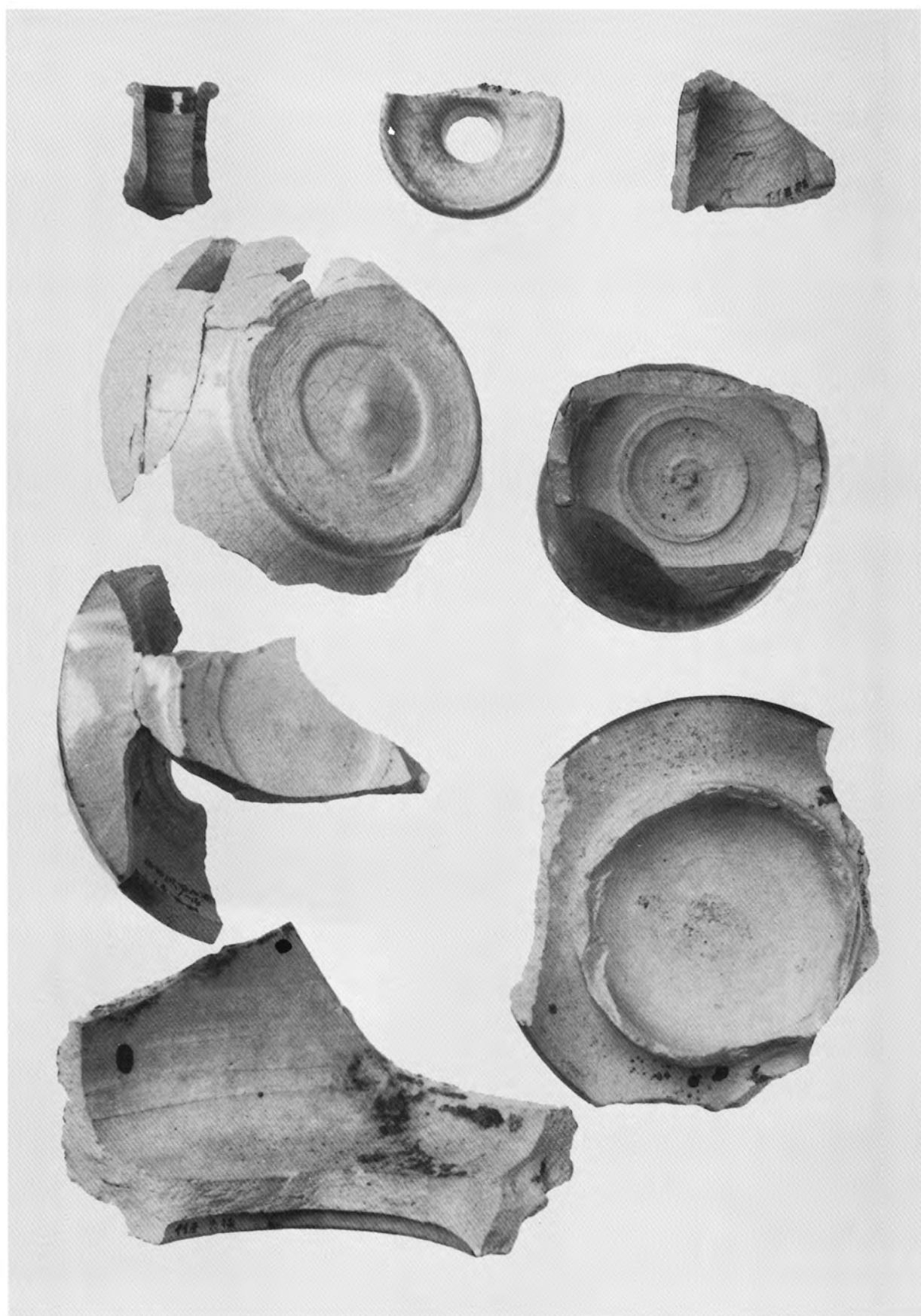
图版21 施釉陶器



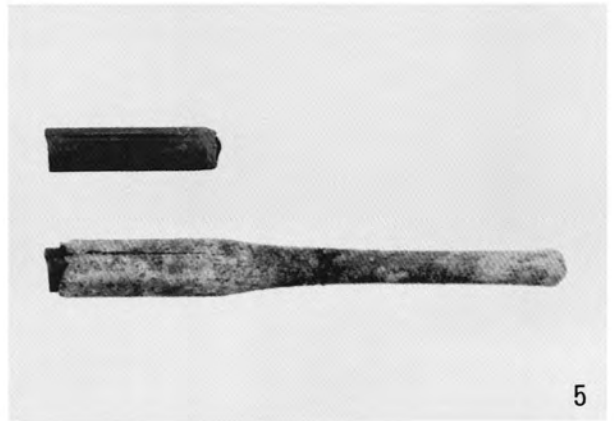
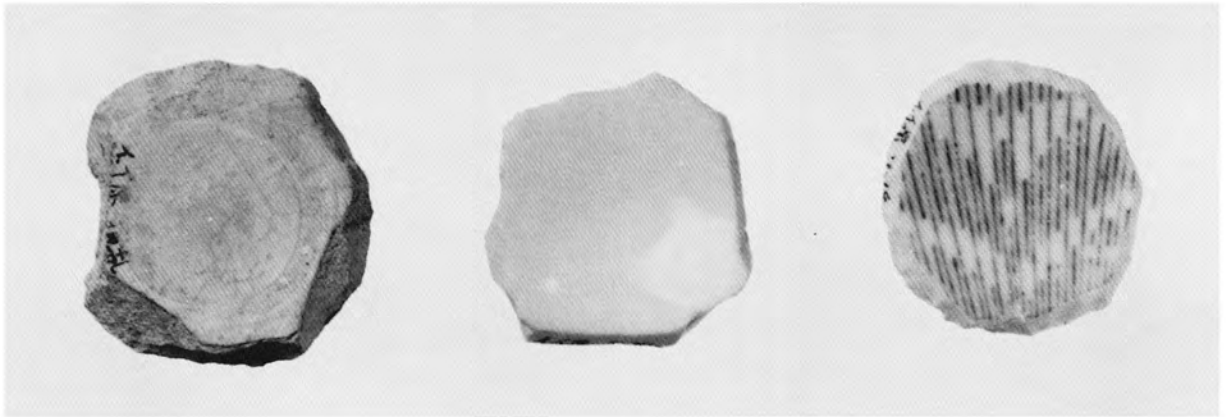
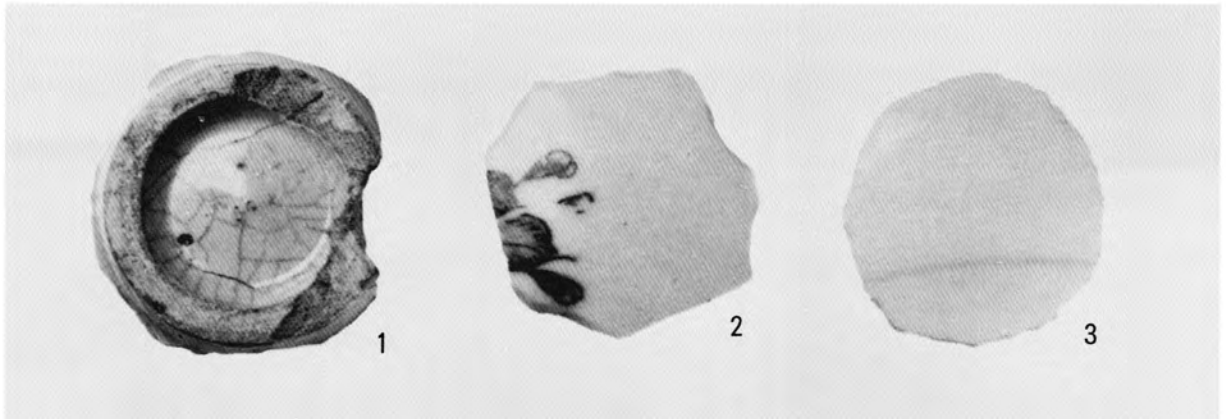
図版22 施釉陶器



图版23 施釉陶器



图版24 施釉陶器



図版25 円盤状製品・鉄鑿・吸口



图版26 石器

付 記

伊礼伊森原遺跡におけるプラント・オパール分析

宮崎大学 藤原宏志

琉球列島における稲作史については、まだ不詳の部分が多い。水田稲作についても、先史時代まで遡ることを実証するデータはまだ見あたらない。水田稲作については、水田址を発掘することができれば、その時点で実証されることになり、その存在を確認する作業の進展が待たれる。

当該遺跡では比較的新しい時代であるが、水田状遺構が検出されたことにより実証的データの蓄積に資するところが大きいと思われ、プラント・オパール分析により確認することにした。

1. 分析法および試料

{分析法}

プラント・オパール分析はガラス・ビーズ定量分析法の定法にしたがい、宮崎大学農学部で実施した。

{試料}

分析試料は1995年10月、水田状遺構にともなう土壌を試料採取用円筒により、3地点(セー13、セー15およびソ、ナー16、17)で各層ごとに採取した。

2. 分析結果

試料採取3地点の分析結果は、それぞれ図と表に示したとおりである。

3. 考察および結論

(1) イネについて

イネが検出されたのは、セー13地点の1層のみであり量的にも少なく、周辺からの流入の可能性も考えられる。他の各地点、各層いづれからもイネは検出されなかった。他のプラント・オパールの残りがよいことをみるとイネが土中で風化・消滅したとは考えられない(これまで各地でイネのプラント・オパールを観察してきたが、完全に風化・消滅したと思われる事例はない)。このことから近年を除き、ここでイネが栽培されたとは考えがたい。

(2) キビ族 (*Panicaceae*) について

キビ族プラント・オパールが検出されたが、これはサトウキビではない。キビ族植物にはヒエ、アワ、キビなどの栽培植物も含まれるが、プラント・オパールの形状から、そのいずれであるかを判別するにはいたらなかった。ヒエあるいはアワの可能性もあるが、これらの栽培種の野生型であるイヌビエ、エノコログサの可能性も否定できない。

(3) その他のイネ科植物について

その他のイネ科植物で確認されたのはススキである。ススキはオープン・ランド（樹木で覆われていない地面）に生育する植物であり、これが検出されたことを見ると、調査域は樹木の少ない状態で堆積が進んだものと判断される。

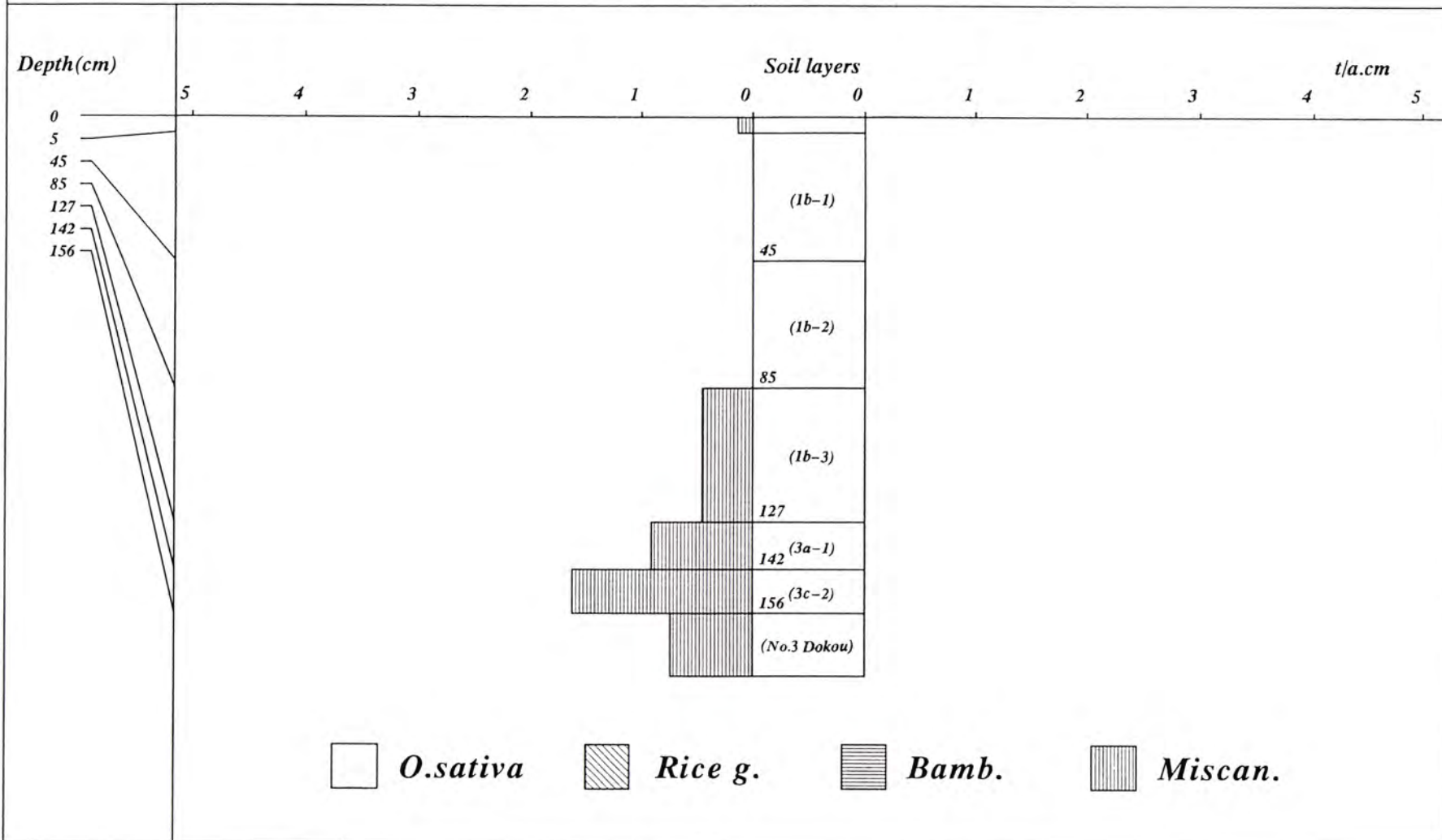
(4) 「水田状」遺構について

最初に遺構を見たとき、その状況から水田の可能性が極めて高いという印象をもったのは事実である。実際、パキスタンでは石列で造られた畦畔をともなう水田がいまも利用されている。また、日本でも石を畦畔の芯にして土を被せる事例があり、石列と畦畔の関係はそれ自体不自然ではない。しかし、プラント・オパール分析結果は予期に反し、この遺構が水田である可能性を否定するものであった。それでは、この遺構はどのような性格のものなのだろうか。もっとも可能性が高いのは、土砂の流出を防ぐ一種の砂防堤ではないだろうか。現場は小さな谷であるが、台風などで集中豪雨に見舞われれば土石流を発生する地形である。谷を横断する形で石を配置すれば水の流速を抑える効果が期待でき、ひいては土石流の発生を抑制することに繋がるものと思われる。

(5) 今後の課題

当該遺跡で水田の確認を行うことはできなかったが、琉球列島の稲作史に関する関心は高まっており、近い将来、その実態も明らかにされるであろう。ひきつづき、水田史の解明に努められることを期待する。

- Estimation of plant products with plant opal analysis -



O.sativa
 Rice g.
 Bamb.
 Miscan.

Site

Ireimoribaru (Okinawa Pref.)

Sampling block

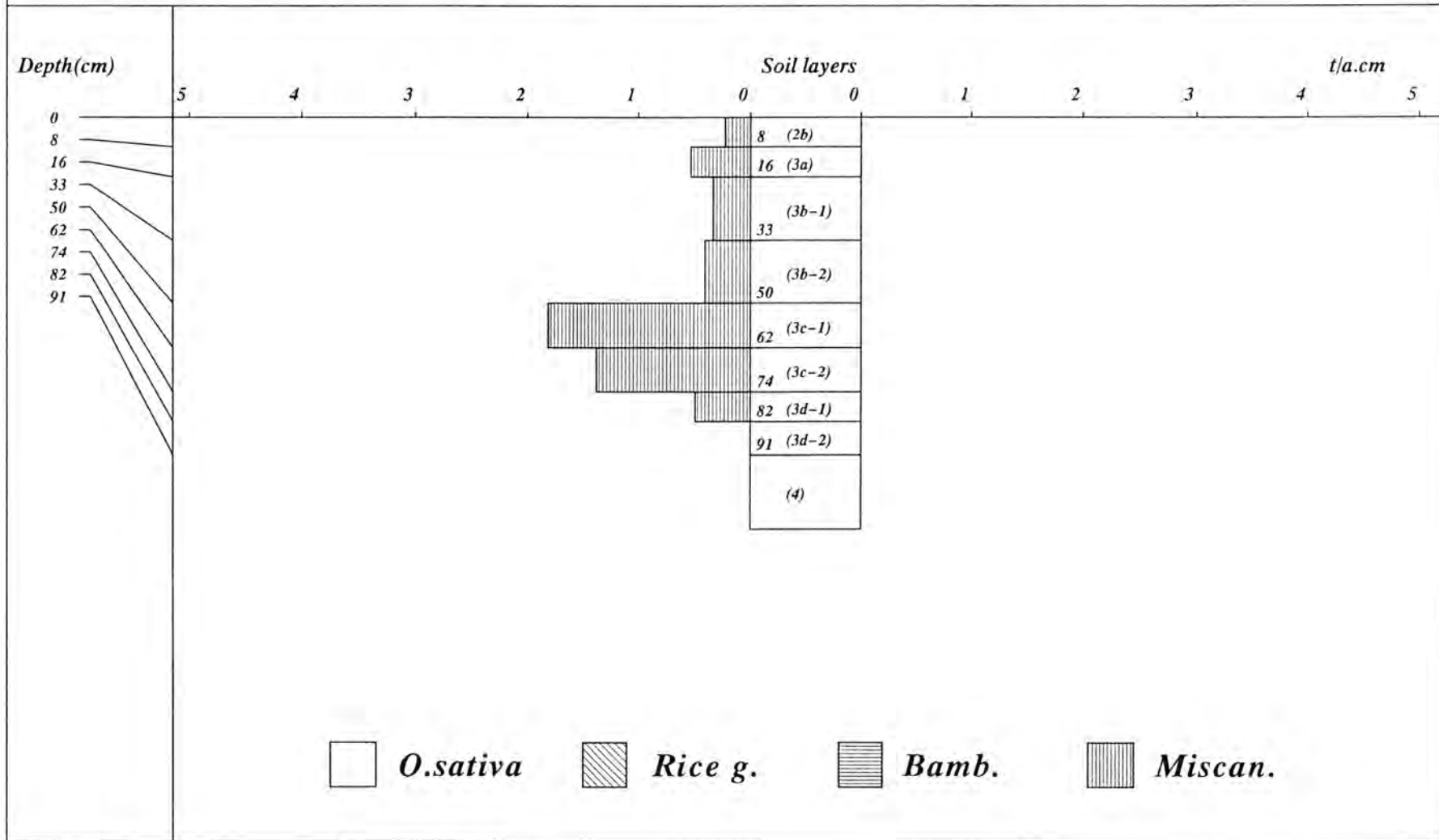
ソ、ナ-16.17

Sampling date

10/28'95

Analyzed at MIYAZAKI Univ.

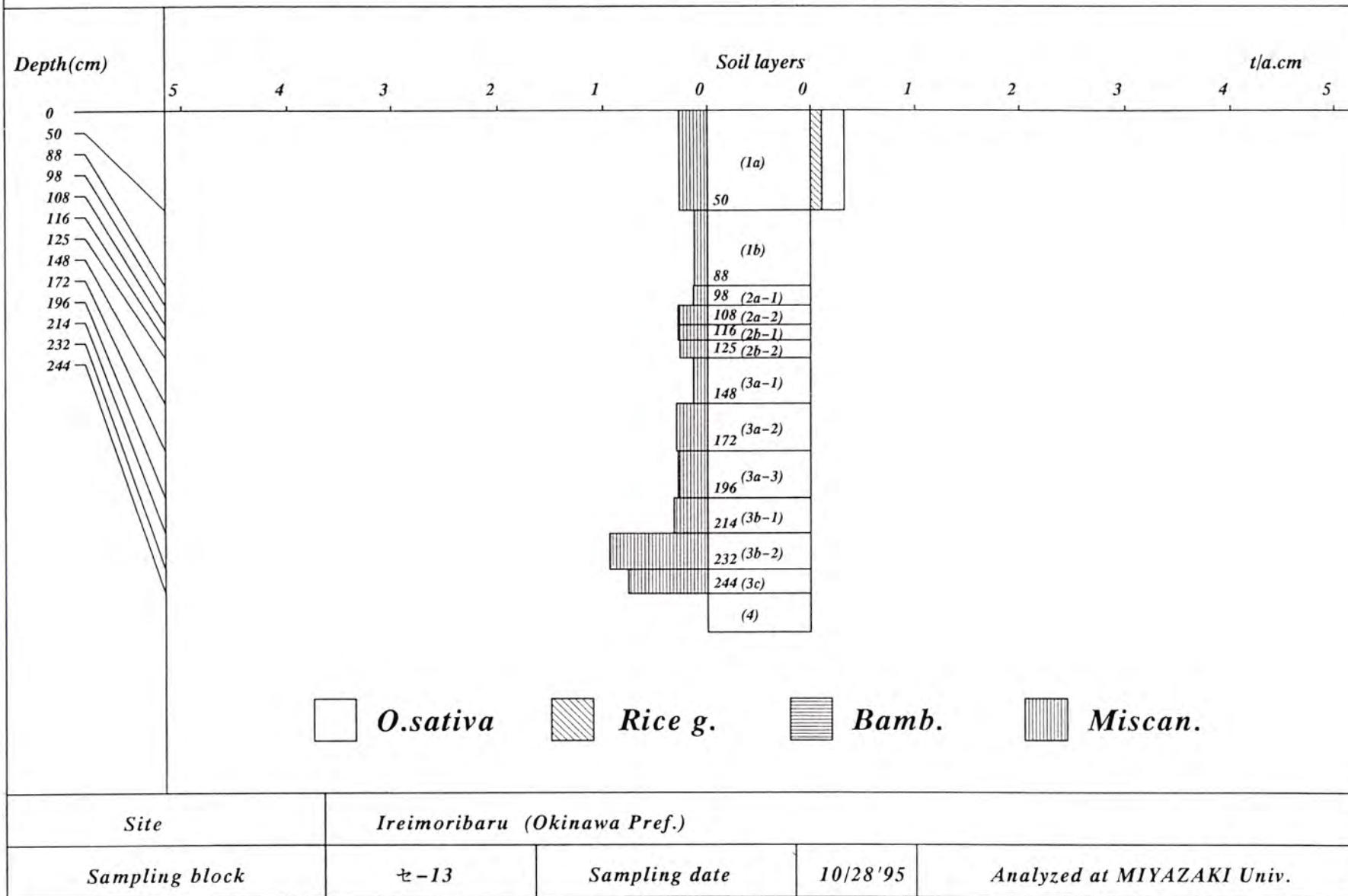
- Estimation of plant products with plant opal analysis -



O.sativa
 Rice g.
 Bamb.
 Miscan.

Site	Ireimoribaru (Okinawa Pref.)			
Sampling block	セ-15	Sampling date	10/28'95	Analyzed at MIYAZAKI Univ.

- Estimation of plant products with plant opal analysis -



伊礼伊森原遺跡におけるプラント・オパール定量分析結果

宮崎大学農学部 地域学講座

Sampling block〔ソ, ナ-16, 17〕

Sampling date〔10/28'95〕

層名	植物体乾重 (t/a, cm)						
	イネ (O. sati.)	イネ粉 (Rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani, seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ススキ (Andoro.)
1	0.000	0.000	2.571	1.168	0.000	0.000	0.131
1 b-1	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
1 b-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
1 b-3	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.455
3 a-1	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.910
3 c-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	1.625
No3 Dokou	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.738

宮崎大学農学部 地域農学講座

Sampling block〔セ-15〕 Sampling date〔10/28'95〕

層名	植物体乾重 (t/a, cm)						
	イネ (O. sati.)	イネ粉 (Rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani, seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ススキ (Andoro.)
2 b	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.228
3 a	0.000	0.000	1.748	0.794	0.000	0.000	0.533
3 b-1	0.000	0.000	3.287	1.493	0.000	0.000	0.334
3 b-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.403
3 c-1	0.000	0.000	2.233	1.014	0.000	0.000	1.816
3 c-2	0.000	0.000	10.837	4.921	0.000	0.000	1.377
3 d-1	0.000	0.000	2.428	0.000	0.000	0.000	0.493
3 d-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
4	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

宮崎大学農学部 地域農学講座

Sampling block [セ-13] Sampling date [10/28 '95]

層名	植 物 体 乾 重 (t/a, cm)						
	イネ (O. sati.)	イネ粉 (Rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani, seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ススキ (Andoro.)
1 a	0.323	0.113	0.000	0.000	0.000	0.000	0.272
1 b	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.127
2 a-1	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.139
2 a-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.287
2 b-1	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.286
2 b-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.266
3 a-1	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.139
3 a-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.305
3 a-3	0.000	0.000	1.422	0.646	0.000	0.000	0.289
3 b-1	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.327
3 b-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.941
3 c	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.761
4	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

琉球列島水田立地論 一序説として一

中 鉢 良 護

<はじめに>

1. 琉球列島における水田立地の概観

- a. 与那国島
- b. 西表島
- c. 波照間島
- d. 石垣島
- e. 久米島
- f. 徳之島
- g. 奄美大島

2. 水田立地の歴史的展開についての若干の仮説

<はじめに>

本報告の北谷町伊礼伊森原遺跡をはじめ、今後、県下各地で水田遺構と思われる遺跡がみつかる可能性は高いと予想される。その際、類似の事例をどのように評価する (evaluate) か、何を指標にして水田遺構と立証するのかという点が大きな問題となるだろうが、琉球列島各地に現在残る水田立地の実相を具体的に観察することはこうした水田遺構評価の基礎的な資料となり、有益な手掛かりを提供すると信じる。これまで地理学の立場から、水田分布図の作成はおこなわれてきたが、個々の水田の環境と立地について、現場を踏査してその特徴を観察し整理した成果は意外に少ない。琉球列島各地の多くの水田を実際にみて歩くと、一定の共通した様相と地域・島ごとの自然条件の違いによる相違の両方に気づく。より多くの変化に富む現実の水田立地例をもとに、現在はまだ数少ない考古学上の水田遺構が評価されれば、推論以上の確からしさが生れるかもしれない。これは、いうならば帰納的にみる態度である。

方法としては、まず国土地理院の二万五千分の一の地図によって作成当時の水田の位置を確認し、それを現場で探すことから始まる。現況 (1996~1998年) では、これらの水田は近年の「基盤整備」によって畑地化するか、水田の形状を変えるか、または使用されずに荒蕪地となっている場合が多い。とくに「基盤整備」以前の現に耕作される水田または放棄田を確認することが重要である。それによって、畦の形状もかつてと変わらずにあり、水利・立地も大きく変化をうけていない前代の水田の姿に接することができる。加えて、それら水田の耕作者や地元の人からの聞き取りは、貴重な知識を得るまたとない機会になる。さらに歴史的な時間差を考慮するうえで、稲作関係古文書を探索する必要もある。

今回は、琉球列島の水田をかけめぐり、また、その立地の時間的な推移にも思いを馳せる最初の報告である。

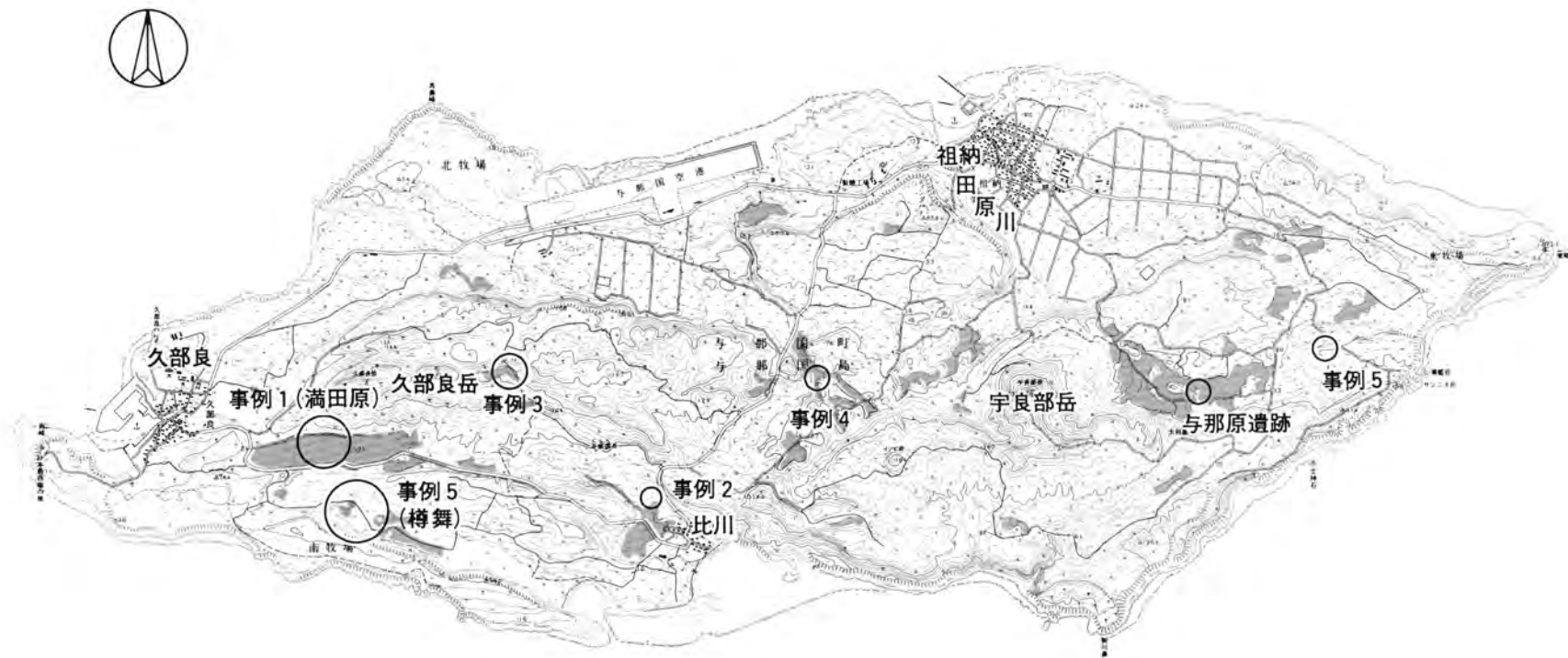


図1 与那国島の水田分布（1987年）

1. 琉球列島における水田立地の概観

a. 与那国島

与那国島の水田はここ最近になって一時期の面積より拡大している（放棄田が再利用されたため）こと、「基盤整備」がまだ一部の地域でおこなわれるだけで、水田の形状があまり変わっていないことなど、他の島々に比べて特に観察するうえでの価値がある。

今回、短い日程で島全体の水田と水田跡を駆け巡ったが、現在は図1に示す1987年の水田分布と異なり、新たに開かれた水田と、逆に放棄された水田も多くみられる。この変化は水田立地を考えるうえで重要な意味をもっている。近年の開田と放棄田の分布には、現在の規模と効率の経済合理性を追及すると、どのような地形が水田開発されやすく、どのような立地の水田が放棄されるのかが示されているからである。このことは、水田立地の歴史的な展開順序が現在の経済合理性に「翻訳」され、今もくりかえし適用されているとみることにもできる。このことはのちに触れる。

<事例1 広い谷あい水田群>（満田原）

概して与那国の水田をみてまず驚くのは一筆面積が大きいこと（四～五反以上）だが、これは最近あらわれたことで、「基盤整備」がおこなわれない代わりに、昔の畦を壊して一筆面積を拡大したのだという。島の西部、久部良岳の南に広がる満田原（マンタバル）でも同様で、今は大きな水田ばかりである。



図版1 マンタバルの水田

この広い水田域には何本かの用水系がある。用水の入り込み場所は必ず最も高い位置にある水田の近くにあるので、それに注意してみると、周囲の山際からの流水の溝が何本かあった。さらに水田域の中央にむけて別の水路が長く伸びている（図版2）。これは周囲の水系だけでは不足する量をこの溝の用水が供給していることを示す（余分な水の排水路としても使われる）。また中央部の水田は一様に低いわけではなく、田によって凸凹の高低差がみられる。これは、おそらく山際の水系に依存するそれぞれの水田群ができたあと、これらの水田群が中央部で徐々につながったため、この広大な谷あいの一帯が一挙に水田開発されたわけではない事実を示すと思われる。水田域の中央に長く伸びる水路は、マンタバル水田域全体の連結が完成したとき、必要とされたものだろう。



図版2 マンタバルの溝と水路

a : 山際の高い田に通じる流水溝 b : 水田域中央に伸びる水路

すなわち、初期に流水を利用する山際の水田群がいくつか生まれ、のちに中央の湿地だった部分が水田化された、という広域水田の開発の時間差を想定することができる。

<事例2 集落近くの山腹斜面の水田> (比川)



図版3 比川の階段状水田跡

この上に「シッキヌカン」の湧き水がある

現在、比川における水田は集落南面の平坦部にあるが、近年「基盤整備」され、ここで

も昔より一筆面積が大きくなっている。

かつて、集落の西側には、背後の山の中腹からの湧水を利用した山際斜面の棚田が集落のそばまで連なっていた（図版3）。その湧水の場所まで行って見たが、今でもかなり水量がある。以前は飲料水にもつかわれた。現在は島の中央部の地下水を汲みあげる上水道が普及し、また棚田が放棄されたため、下の平坦部の水田への用水としてパイプで導水されるだけである。湧水がある場所を「シッキヌカン」という。田中耕司（註1）によれば、水田群の最も奥の水田を「カンヌタ」または「ミヌカン」といったというから、「上（カミ>カン）」の意だろうが、「シッキ」の意は不明である。

ところで、比川のかつての苗代田はこの水源近くではなく、集落近くの平坦部の何か所かにわかれていた。苗をとる利便からという。

平坦部の田の一部は砂まじりの土壌で、上からの水が流れ込むアシやヨシが生える小さな湿原（放棄田）に接している。「改良」した平坦田は周囲の小丘陵から流れ込んだ土壌で、もともとよい条件だった。こうした田だけが残ったというわけである。与那国島の水田は現在そのほとんどを近隣する地域が経営せず、字祖納の機械化した大規模経営農家に委ねられているが、比川の水田も同様で、地元の手から離れている。

＜事例3 山中の水田＞

与那国島を一見して、その西部では四つの丘陵・山並みがあり、水田は基本的にそのあいの三つの地帯につくられる。すなわち、久部良山系の北裾（桃原・立田神）と南側（満田原）の二か所と、その南の丘陵と絶壁のあいの細長い「地溝」のような平坦湿地帯（樽舞^{たるまい}）である。

与那国の山は深く広い。この印象は久米島でも同様だが、久米島では山系が北寄り中央に位置し、そこから緩斜面が海までつづくのに対して、与那国では東西に長く何本かの山系と丘陵が走っているため、全体としての山の量感は大きい。そうした与那国西部の久部良岳と与那国岳のあいの山道を登って標高百m前後のところにも水田がある（図版4）。



図版4 久部良山系のなかの水田

除草剤をかけた跡のある右の山裾に水路が巡る

ここは山道の途中から入って三方を山に囲まれている。一筆面積がかなり大きいので、

小規模水田を大きくまとめた「改良」がおこなわれたとみえる。田ごとの段差はほとんどなく、平坦に近いが、山裾を水路がめぐり、これから下半分の水田に水が流され、利用される。水路の一部には山際側に土止めの石積みがなされている。。

山中の他の田ではこうした平坦なつくりは少なく、山際の田から下の田まで高低差があるのが普通である。例を挙げる余裕がないが、この事例のように周囲を山に囲まれる田と、奥の田だけが山裾に接し、残りの田は斜面に沿って下に展開される場合の大きく二つのタイプがみられる。山が深いだけに、いずれのタイプも水量は十分あるようにみえる。後者では、最奥部に谷川をせき止めて溜め池をつくるものもあった。

<事例4 谷川を利用した細い谷筋の水田>

島の中央部を比川から祖納ちかくの製糖工場に抜ける道の途中、細長い谷筋にこの水田がある。最も奥にある田の両側には二本の谷川が流れている。これを用水として、水路を掘り、緩やかな若干の高低差を下の田まで流れていく。



図版5 谷川を利用した水田

正面の山裾をめぐる谷川と右の谷川のふたつを水路（溝）に使う

このように、ふたつの谷川を利用し、緩傾斜に沿う細長い水田群なので、下の田まで水が行き届き、水量は十分確保されているようにみえる。また奥の田では畔は広く、しっかり水を溜めるようにつくられ、下の田では畔が細い。水路を隔てて隣り合った田にパイプを通して、水路を利用せずに直接田から田へ用水を通す新方式の田越し灌漑も上の田にみられた。この例や畔の広さをみて、なんらかの「改良」がなされたものと思われる。

この事例のように、比川の裏の山系から下った谷あいには、こうした谷川利用の水田が多くある（または、あった）。現に使われる田、放棄された田といろいろだが、これは経済的な理由による（牧場の放牧、牧草地または稲作）のであって、谷筋の水量は今もそれほど変わらないようにみえる。そこで、次にこうした点、放棄された田と新たに開発された田の立地条件をみてみよう。

<事例5 放棄田と開発田>

島をめぐるまず気づくのは、放棄田と新たに開発・造成された水田の立地である。大づかみにいえば、現在牧場につかわれる用水に乏しい台地で放棄された田の跡と、湿地だっ

た場所での新たな水田という明確なコントラストがある。前者の典型は島の東部、祖納から東の牧場地帯であり、後者は祖納の後背地の田原川流域と南の樽舞の一带である。



図版6 牧場内の放棄田

図版6は放棄されて久しい田と思われるが、畔の輪郭ははっきり残っている。この一帯の台地上には、近年まで耕作されていて、ごく最近放棄された田もみられた。これらの近くに山や丘陵がありはするが、離れているか、または丘陵からの水が至って少ないため、これら放棄田は、与那国では「天水田」とみなされたようである。

前掲の田中論文では、与那国の天水田（ティンチダ）は「完全に降雨のみに依存するティンチダと、降雨に加えて山腹からの表面流去水も流れこむハタギダに分けられ」「ティンチダやハタギダがもっとも新しく開かれた水田であるということは、古老達の一致した見解であった。」と述べ、二種の水田をひとまとめに「天水田」とする地元の認識を紹介している。すなわち、与那国での（流水が僅かなため降雨以外に用水が期待できないという）水利条件の制約をもつ天水田の認識は、用水量が確保しやすい場所から水田が展開して、それが一種の「飽和」状態に達したのち、やがて限界地（条件の悪い土地）につくられるようになった水田というものである。

歴史的にみて初期（十五世紀）の与那国の稲作では、十二月になるまでに、ウシによる田踏み（踏耕）をおこない、苗代田をつくり、種子を播き、本田に田植えをしたと明記される（『李朝実録』）。実はこの記述は簡潔すぎて、いろいろと想像が入る余地があるのだが、まずウシによる踏耕には、前年の荒れた田の草の踏みこみ、堅くなった土の軟化、そしてなによりも田に水を溜めること、のおおまかに三つの役割があるだろう。しかも、これらの作業は降雨またはなんらかの水を入れた状態でなければ、おこなえない（おこなっても意味がない）。ウシの踏耕にはまず田に水がなければならぬというのが大事なポイントである。田の水が降雨のみであれば、天水田だったことになり、山裾からの流水が田に導かれたとすれば、水の豊富な立地だったことになるが、一般的に言って、降雨に依存するだけでは年により踏耕が遅れ、適季に種子播きが間に合わない場合も出てくるので、不安定さはまぬがれない。その意味で初期の水田がいわゆる天水田であった可能性は少ないといえる。この与那国の初期の水田立地の問題はのちに改めてとりあげる。

ただ、踏耕を前提にすれば天水田でも稲はつくれるという事実は指摘しておかなければならない。のちにみるように、降雨だけに依存する波照間島の初期の水田（かつ後代の水田まで）はウシの踏耕による天水田だった。

もうひとつ注意したいのは、図版6にみられる牧場と水田の関係である。

のちにみる石垣島と同じく、かつては踏耕の季節になると牧場のウシを田に引いてきて使った事実がある。ウシは古くから舎飼いではなく「牧」で放し飼いしていたので、与那国でもそうした習慣はあった（註2）。こうした田も用水に恵まれたわけではなく、天水田またはそれに準じる田である。図版6は牧場（ウシ）と天水田との密接な関係を示している。



図版7 樽舞の水田

左に従来からの田、右には新たに造成された田が広がる

図版7の樽舞や祖納背後の田原のように、標高が極めて低く、明らかに湿地だった一部に、近年、水田が新たに開かれたのは現代的な土木技術のおかげだが、こうした湿地につくられる深田には独特な性格があった。

前掲田中論文によると、与那国の深田は①「常時湛水」で、これによって②「まったく除草しないことも多かったという」。このため③「深田では泥が深かったので、大苗でなければ植えられなかったという」ことである。

さらに松山利夫（註3）によれば、戦前昭和期の台中65号など改良種の導入の後も、深田では④「しばらくは在来種が主に栽培されたという」が、これは在来稲作が大苗で植える（在来種は作期も長く、草丈も高いため）習慣であることと③の深田の特徴が合致していたからである。深田を使い続けようとする限り、大苗の在来種を使うほかに、改良種（作期が短い早生種で、大苗を植えると不時出穂する）は水のかげひきができる浅い水の田でしか普及できなかった。こうして深田は、天水田とともに一旦放棄されていった。

時代は変わり、現在の与那国でみる放棄田と開発田は、かつてともに放棄の対象だった「天水田と深田」の正反対に異なる性格が、皮肉にも明暗を分けた結果を表わしている。丘陵部の天水田は確実に放棄されたのに対し、深田は客土や排水路によって新たに水の掛け引きができる田に変貌して、その面積を増大させている。これにはその立地も関係して

いる。前者は水の乏しい台地上か、山間の谷あいに限られるが、後者はおおむね満潮時には海水も流れ込む海岸低地の川の流域や、山と山のあいだの地溝のような広く平坦な一帯に分布するため、土木技術が使いやすいからである。

b. 西表島

西表島の西部から東部まで海岸道路をめぐる、今も耕作される海岸低地の水田がとくに目につく。琉球政府時代の『西表島農業調査報告書』（1960）には、当時の水田が「山の側腹」「海岸の入江」「河川の流域」「丘陵間の凹地」「山間台地」などの各地形に分布することが示されているが、これらのうち、現在、河川の流域、丘陵間の凹地、山間台地の水田は放棄され、激減した。

残る海岸低地の水田でも、その用水系を見ると、山腹また小さな谷川からの水を集水して海岸低地のやや広い面積を水田化しており、実態は、＜短い谷筋+海岸低地＞の「複合的立地」（同書）が大部分である。このほかに、東部では、山間に入った凹地に水田が耕作される例もあるが、ともかく現在では圧倒的に海岸沿いに集中して残っている。

<事例1 海岸低地の水田>

現在、西表島の水田で「基盤整備」された水田は、西部白浜～祖納のあいだの「美田良（ミダラ）」(a)地区だけである。ここは図2に示すように、いくつかの谷筋からの水が海岸低地に流れ込んで、形成された典型的な立地であり、星立～浦内川のあいだの水田（ミ

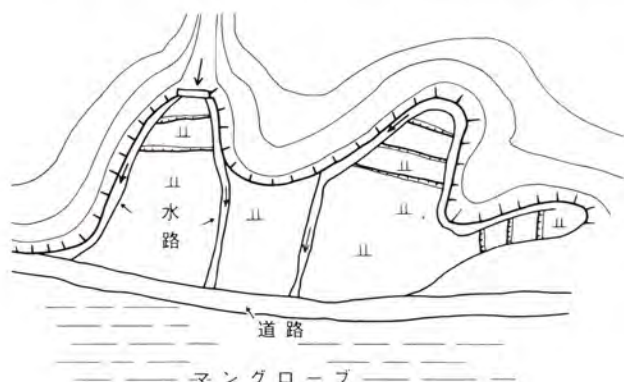


図2 海岸低地の水田(a) 模式図

ナピシ・クモッタ)(b)や浦内川～浦内のあいだの水田(カトラ)(c)、さらに高那の手前から東海岸までの道沿いの水田(ユシキダ川、ホーラ川、フナラ川の海岸低地)または水田跡は、いずれもこのタイプである。西表島の現在残る水田立地の代表的事例とってよいだろう。

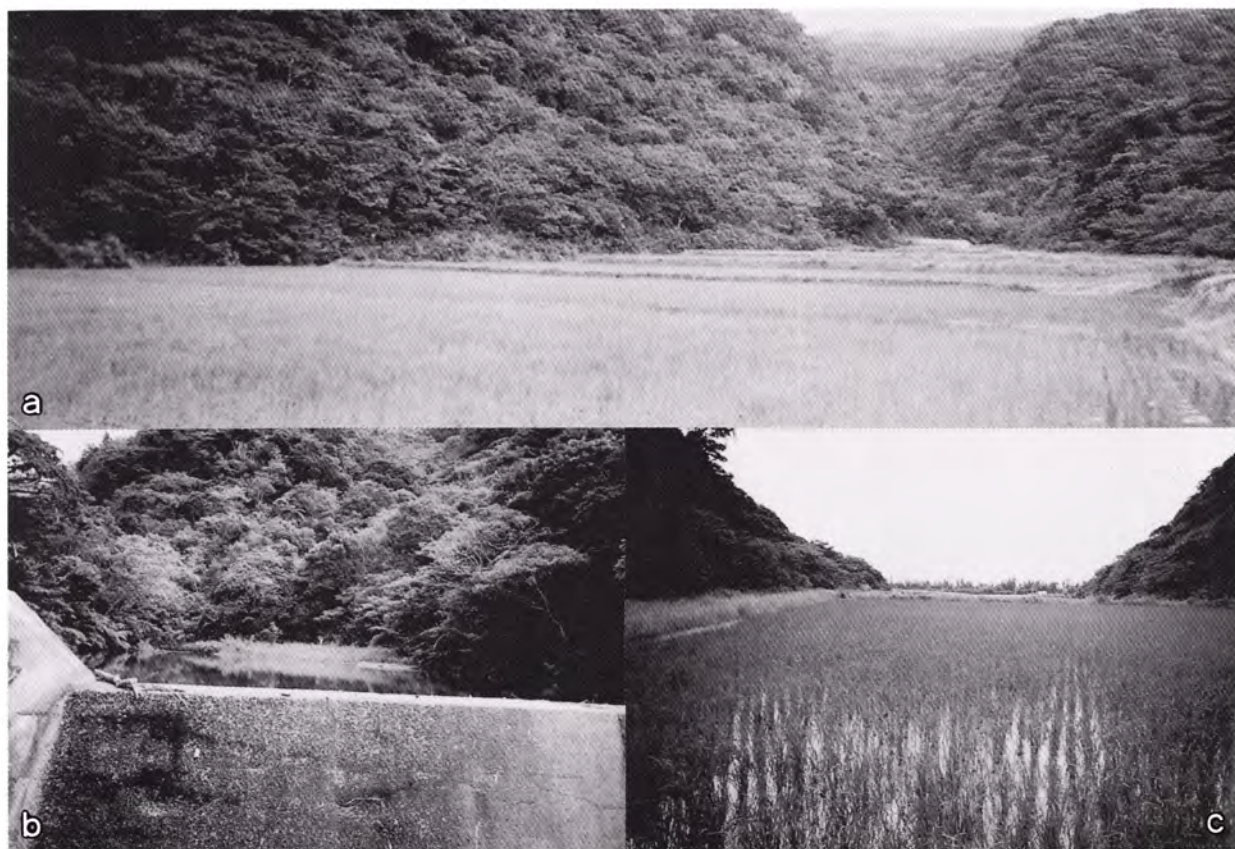
これらはいずれも、いくつかの短い谷筋の緩斜面から谷川が海岸の平坦な湿地に流れこみ、さらに山裾からも小さな表流水が

ある。「改良」された(a)は、図版8にあるように、山からの谷川をせき止めて小ダムをつくり、その用水を山裾沿いの水路から、下の広範囲の水田に供給している。下の広い水田は道路をへだててマングローブ林に接するので、道路が海水をせきとめる機能を果たしているが、下の水田はもとマングローブ林地帯であったと考えられる。

このように、事例1は、谷筋-谷川-山裾と、湿地-マングローブ林(-海)によって構成された水田という特徴をもつ。「改良」されていない(b)の水田も、(a)と同様の＜谷筋+湿地＞複合型だが、とくに山裾の流水を直接利用する様子をはっきり観察できた(図版9)。



図3 西表島の水田分布図 (1997年)



図版8 美田良の「改良」された水田

a : 谷筋の緩傾斜の田 b : 谷筋奥の小ダム c : 奥からみた谷筋

時期（九月）としては(a)がそうであったように二期作の時期だが、ここ(b)では二期作をおこなっていない。山裾の少し高くなった帯状の場所に小規模水田があり、その一部に田芋を植え、一部は水のたまった状態で水牛による耕起をはじめた段階（来期の一期作のため）だった。

この場所の用水は山からの小さな谷川からくる。谷川というよりも、表流水というべきだろう（図版9(c)）。ここでは、雨が多い時季または年には、多くの水が山腹をえぐるように流れるが、雨の少ない時季や年には枯れることもあるという。九月のこのときは、ごく僅かの水がかすかにしみ出るだけで、田芋の小さな田を満たす程度だった。そばの田の水は、最近の降雨がたまったものである（図版9(b)）。このような表流水だけでは到底、前面にひろがる水田全体を潤すことはできず、他のいくつかの谷筋のこれら表流水を集水して平坦な海岸低地の田の用水をまかなうことができる。

ところで、安溪遊地（註4）はこの水田地帯の平坦部の土壌採取をおこなっている。それをみると、おおむね基層は砂土で、一部で砂土のなかにマングローブの残滓がある。また、(c)カトラの水田の断面でも、基層にマングローブが腐食せずに残り、そのうえにシルト層がのっている。

こうした海岸低地の水田の土層がさらにわかる場所が、東部の大原集落のうしろ、大保良（オウボラ）の広大な水田にある。ここも海岸にきわめて近く、奥の谷筋から谷川が流



図版9 ミナピシ（星立～浦内川）の水田

a : 右の山裾に小規模田 b : 上の田から下の田をみる c : 山裾の流水口

れこむ広い平坦地だが、かつては湿地だった。その一部に、ウンボで排水路を掘ったあとの断面がみえる。そこでも、マングローブの幹が最下層に残り、そのうえに多くが淡水棲の小さな巻貝（カワニナ）を含んだ幅広い砂の層があり、上層には黒い腐食土がのっている。地元の人によると、深田の水に浮遊する土の層は、排水して地下水位を下げると、圧縮して腐食土になるという。

このことから、大原の大保良田は、淡水・海水が入り交じるマングローブ林が、のちに谷筋からの土砂の堆積による砂地となり、次にそれが湿地化したところで開発の手が入った水田であると想像される。西表島の海岸低地の水田化は、大なり小なりこうした展開をたどったものだろう。このとき、山ぎわの短い谷間がまず水田化され、次にその前面の湿地が深田として利用されたのではないかと推測する。

<事例2 集落近辺の水田>

西部の星立の集落は砂地に立地し、浜をすぐ前にして、後ろには御嶽をふくむ山が迫っている。集落と山のあいだに、図版10にみる細長い水田群がある。

地元の人に聞くと、図版10の右側の山が切れた奥の小谷川と、芭蕉が生える少し高い場所の山腹からの表流水の二つの水源がある。これらは雨の少ない年に枯れることがあるが、もうひとつ、御嶽の向こう側、国道に近い方の山腹の岩の割れ目からの水は枯れないので、その場所は「神田だった筈」ということだった。それぞれの水源ちかくの田は、一段高く

なった小規模水田で、苗代田として使われた。この一帯の水田は基盤が砂地であるためか、砂っぽく、水もちが悪そうで、杭を打って土止めをしている箇所もある。

二期作をしている田も一部にあったが、一期作で膝くらいで高刈りした株からのマタバエを収穫し、脱穀しているKさんがいたので、話を聞くと、彼女所有の水田は、ここの他にクリ舟で浦内川をさかのぼっていく（稲葉の奥の）「山の田」や、ウナリ崎の住吉の丘陵間の凹地の田などがあるという。前者の田の用水は川からの水ではなく、山ぎわの小谷川の水である。これら「山の田」は今回確認する余裕がなかった。



図版10 星立集落背後の水田

右端の奥と右の山の切れ目の谷間から水が流れてくる（左は集落）

隣りムラの祖納上村の背後に、道路に面して祖納の水田がある。

笹森儀助は『南島探験』（明治二十六年七月）のなかで、祖納の水田について「村ノ東ニ近接シテ沼田泥沢等」があり、「村ノ南方祖納湾ノ沿岸ニ溪水及沼田等ヲミル」と書いている。ここでいう「沼田」は平坦な湿地を水田化した部分、「泥沢」はマングローブが生える湿地そのものを指し、図版11の一带の様子を表現したものであろう。「村ノ南方、祖納湾ノ沿岸」の「沼田」とは祖納から白浜にかけてのミダラを含む海岸低地の水田を、「溪水」はアラバラ川やミダラ川を指すと思われる。

図版11の用水は、手前の水田が山に接する部分からかなりの水量が流れている。この祖納集落近辺の水田は、山の周囲に沿って展開し、海浜につづく。山腹からの小谷川と表流水を集めて、緩傾斜面の水田と海岸低地の水田が連続して組み合わされている点では事例1と同じだが、台地状の上村の集落と山のあいだの低湿地の水田としての利用という点では星立集落背後の水田立地と同じである。

<事例3 東部の水田>

西表島の東海岸沿いに出ると、西部の<短い谷筋+海岸低地>ではほぼ共通した立地と、いささか異なることに気づく。

ひとつは、海岸からひろがる幅広い丘陵地帯である。東海岸に出てすぐに野原の牧場が山側に見える（図版12）が、前面から左奥にかけての小さな谷間には天水田があったと思われる。こうした様子は、既に見た与那国島東部台地と同じである。



図版11 祖納集落周辺の水田

さらに、道を南下すると、由布島を前にして、与那良川が流れ、丘陵がなだらかに海に続く広大な平坦水田地帯がある。これだけの面積の水田は川の水または丘陵からの湧水だけではまかなえないだろう。かつては下の方には深田があったという。

古見にちかづく、アイラ川が流れるあたりの道の両側に水田がある。山側の田は二期作がおこなれていたが、マングローブ林側の平坦な田では二期作はおこなわれていない。この対照は、もっぱら二期作の水利用の可否にかかっているようだ。山側の田は短い谷筋があるが、川の水が主な用水となっていて、ここには、古見の北の苗代田（ユナダナース）が、芭蕉が生える、山ぎわの少し高くなった場所にある。



図版12 牧場内の天水田跡

ここから南下し、山側に道を少し入って、マングローブ国際研究センターの後ろ、カリマタという小地名に図版13の田がある。

ここはその脇を小川が流れていて、かつてはそれをせき止めて、用水を確保していたが、今は、川からポンプアップして田に流している。このため、二期作をおこなえるだけの用水がある。ただ、まわりは木々に囲まれているので、風通しは悪そうで、イモチ病などの発生が懸念される。ここでもかつては多くの小面積の田であったが、今は畔をこわし、一筆面積を広げている。

この田は、実はシイラ川に近く、標高はあまり高くない。これに隣接し、シイラ川のマ

ングローブ林の湿地のうしろにもうひとつの田がある。ここでは、さきの田と反対に小川から離れ、その水を利用する事が出来ない。その意味で、天水田に近い。これら二つの田はかつて、シイラ川をさかのぼって利用された、いわゆる「川沿いの田」に分類できるだろう。



図版13 古見・カリマタの山田

左奥から小さな谷川が流れている

古見の村内は、北のシイラ川と南のマイラ川のマングローブ林の湿地に囲まれた形になっている。村内にもかつては水田があったといい、とくに浜の御嶽そばに今も湧水が流れているが、そこに極く小さな、水溜まりのような水田があった。祭祀田だったのではないかと思う。また、マイラ川の河口の御嶽のうしろには、古見の南の苗代田（フクダナス）があった。

古見から大富にむかう途中にも、極く小さな谷筋から海岸低地に接続する水田跡が残るが、これら小規模水田は放棄されている。この谷筋には表流水だけしか流れこまなかった。

これらに加えて、大富の後ろの丘陵から山にむかって入ったところにも山田があるが、ここは山からの小谷川の水を利用して、二期作もつくっていた。

このように西表島東部の地形は、海岸から山までのあいだに丘陵がつづくことが西部と異なる点であり、この間に山田、天水田や深田などがかつては分布していた。現在までに天水田や深田は放棄されたが、道が便利になったので、丘陵の奥の山田は一筆をひろげて再利用されている。

c. 波照間島

波照間島は山や流水のない島である。海からは緩やかに傾斜した低い島に見えるが、三段に隆起したサンゴ石灰岩の傾斜は内陸ではなかなかのものを感じる。島で最も高い中央部に集落が集まり、ここは周辺に比べて土層がやや厚い。はじめ、人は海岸沿いの砂地・石灰岩台地に住んだ。のちに島の中央部に進出したが、それも、土層のより厚い、有利な農耕地を求めたことに理由があるのだろう。

当初、粟・麦・黍などの畑作物だけだったが、西表島との交易で米の美味を知り、この

稲作限界地にも米をつくろうとする意欲がわいてきたためか、十七世紀初頭には、島中央部に水田があったことがわかっている（註5）。

稲作の最盛期である1950年代の水田は、図4のように島の中央部と周辺部に想像をこえて分布していた。

<事例1 島中央部のカネーズ>



図4 波照間島の水田分布（戦後）

中央部の水田群はカネーズと呼ばれ、人頭税時代の上納田だった。人頭税廃止後、島民の頭割りで分配された。多くが小規模水田で、苗代田だったという。完全に降雨に依存した天水田であるため、入念にウシによる踏耕をおこない、基盤がツルツルになるまで踏み固めた。また通常の田よりも畔を広くかつ高くして、水を溜める工夫をした。

この一帯をまわると、今も水田跡が確認できる。とくにビラツィの坂から西のフカ村に向かう道の両側に一段低くなった水田跡がある。これらは、六、七畝ほどで（一反あるのは大きい方）、畔（アブス）は芯にサンゴ石を積み、そのまわりに土を塗って高くした。図版14は、その石積みの跡である。



図版14 畔の石積み跡

<事例2 島周辺部の水田跡>

島を形成する三段に隆起したサンゴ石灰岩台地の段差をピシェ（坂）という。島の中央部から周辺部にむかって降りていくが、このピシェから下の田は、一般に中央部の田よりも一筆が大きかった。ところが、石灰岩が露頭し、土層がうすいので、降雨がなかなか溜らず、三年に一度の収穫しかないということもたびたびあった。

こうした周辺部の条件のより悪い天水田は「トー」の地形を選んでつくられた。図版15は、島の南西海岸への「ナナバリヌウダツ」道（ウダツとは海に出る道）沿いに「基盤整備」をまぬがれて残る「トー」の地形である。

ここは現在、畑（ピテ）としてつかっているが、水田もまたこうした地形につくられた。



図版15 島周辺部のトーの地形

「トー」とは低くなった場所をいう（沖縄島では「トー」はやや高い場所で平坦な地形をいうが、八重山ではほぼ共通して、低く窪んだところを指す）。これは石灰岩地帯の陥没地（一種のドリネ）とみてよい。だいたいその真ん中に穴があいていて、これを「アーブ（アブ）」という。「トー」の地形は周囲の石灰岩の露頭した高所よりの土を集めてやや土層が厚くなっている。これを畑としてつかう際には、周囲の斜面にソテツなどを植えて、土止めにする。ついでにいえば、これまで島の不毛地帯だったピシエから下の地域で現在進行中の「基盤整備」は露頭した石灰岩の岩盤を掘り削り、「トー」の地形を均してしまうので、その結果、アーブも埋めてしまう。それで、大雨が降っても地中に吸収できず、土が海まで流れ出てしまうという弊害がおこっている。

かつて「トー」の地形の水田では、そのアーブの周囲にもまるく畔をつくり、水が逃げないようにした。水を溜めるために畔を厚くしてつくったのは、現在、雑草にすっかり覆われた畔跡を足で確認してわかる。

波照間島の水田は全く用水系をもたないという点では特異な水田である。だからこそ、雨の降り方と、地形のわずかな窪み、傾斜へのセンシティブな感覚がこの島に生まれたのである。今もおこなわれる旧暦五月ごろのプーリン（収穫後の祭り）とその後のアミジワー（雨乞いの祭り）で、各集落周辺の水田名と窪み、溝の名をあげ、神々に雨を「お与え下さい」と呼びかけ歌いながら、ゆっくり東から西へ巡行する神女の儀礼が、実際にやや高い東から低い西への雨水の流れを象徴すると指摘したのはアウエハントである（註6）。水と低い場所を結びつける感性はサンゴ石灰岩の島の水田には必須であった。

d. 石垣島

八重山のなかでも、石垣島の水田立地が最もヴァリエティに富んでいる。ここでは、島全体に及んだ水田・水田跡の調査対象のうち、五つの事例、「石灰岩台地の水田」「山麓谷筋の水田」「丘陵谷筋の水田」「内陸部の水田」「谷筋低地の水田」をとりあげる。

<事例1 石灰岩台地の水田>

石垣島の宮良台地はおおよそ二段に隆起したサンゴ石灰岩である。この台地上にかつて

は多くの小規模水田群があった。図5は1956年当時の分布である（R.フォスバーグ、石垣島植生図、1956年調査、1959年作製）。

「基盤整備」以前、上の段の台地では、石灰岩が露頭して耕作に適さない場所でウシを繋牧したり、岩と岩のわずかな合間で芋や黍をつくる昔ながらの風景がみられた。また、台地中央の陥没地や周縁部の傾斜に小規模水田とくに苗代田が点々とあった。現在は、台地東側の白保ムラの小規模水田と、宮良ムラではその水田跡がみられるだけである。



図5 宮良台地の水田分布（1956年）

図版16aは台地東側の白保ムラの小規模水田である。「ヨナムリ」という小さな丘の東と南の台地傾斜面につくられ、主に苗代用につかわれたが、苗をとったあとに本田として田植えもする。筆者はかつて1983年に、この一帯でタントウイ（種子おろし）をしたことがある。

ヨナムリの斜面の途中から流れ出てくる水を上の田に溜め、畔の一部を切って順次下の田まで水を流すという伝統的な「田越し灌漑」である。ここは耕土が浅く、扱いやすいが、ハゲ山状態

のヨナムリからの水だけでは充分ではないので、雨水を溜める必要から畔は高い。この意味で、冬場の雨を溜めなければならない「天水田」に準ずる田である。現在でもウシにひかせる代掻き具の「イシピキ」（石灰岩の石五、六個を横木に結んだもの）を使用する人もいる。

図版16bは、台地西側に残る宮良ムラの苗代田（「タナー」）跡である。この一帯ではとくに台地傾斜部の陥没地に、「ウラーシィ」「シイバル」「ナデー」「タフナー」などの名称の苗代田があった。ここでも筆者は、1978年に苗取り仕事をしたことがあるが、ところにより、こうした湿地にはヒルが棲息し、その洗礼を初めて受けたことを思い出す。

このドリーネ状の窪地では、石灰岩の奥から湧く水が順次小さな苗代田を満たしてつかわれたあと、窪地下部のガマに流れ込み、台地の下まで伏流水となる。石灰岩台地がまさに水タンクとなり、そのドリーネが水田に使われる貴重な実例である。耕土は浅く扱いやすいが、底に石がある。

宮良ムラの本田は、台地の北側下の広い後背地にあり、そこは、小河川と湧き水を利用した谷底低地、小丘、石灰岩段丘が入り組んで、平坦な湿地あり、丘のあいだの小さな窪地あり、川筋と台地に挟まれた狭い場所ありの起伏に富む地形で、それらを利用して、深田、谷田など、一筆が二、三反、ときには五反以上もの大きな水田が広範囲に展開していた。面積と立地をみるかぎり、石灰岩台地上の50～100坪単位の小規模水田（苗代田）が



図版16-a 白保ムラの苗代田



図版16-b 宮良ムラの苗代田跡

先行して使用された、つまりこの一帯での最初の水田であり、後背地の起伏に富む地形の水田はのちに大面積の水田確保の必要から開発されたものではないかとみている（後述）。

＜事例2 山麓谷筋の水田＞

ここは、名蔵海岸に面したシーラ原の海岸低地（水田）にせまる山並みの傾斜面につくられた水田である。その意味では既に見た西表島西部に一般的なく短い谷筋＋海岸低地＞型の水田のタイプに似るが、山と海との距離が短く、山の傾斜がやや急である点が少し異なっている。戦後1956年の米軍航空写真（註7）をみると、名蔵から崎枝まで、山麓から

すぐ海にいたる狭い地帯にこうした水田のセットが多くあったことがわかる。

図版17の水田をよく観察すると、いくつかの興味深い点がある。

まず用水系だが、ここでは図版の左奥の二か所で上の田に流れこむ表流水二筋のほか、右奥から流れる小谷川が別にある。前者はもっぱらこの山麓の水田につかわれるが、後者の谷川の流は右の山際にそって山麓の水田に入ることなく（上の田のレベルが高く、谷川の水位が低いため、上の田の用水として使えない）、下の海岸低地の水田群に直接流れこんでいる。つまり、山麓の水田と海岸低地の水田は上から連続して展開してはいるが、用水は別々になっているという事実である。

このことから、上の山麓の田と下の海岸低地の田とは形成された時期を異にすると考えられる。まず山から二筋の表流水を利用して上の山麓傾斜面の田がつくられ、次に海岸低地に水田を開発する段になり、上の田からくる田越しの水だけでは用水に不足するために、もうひとつの谷川の水を導く「溝」を山際に新たにつくったと思われる。いいかえれば、一連の水田群のようにみえても、立地によって、その用水利用の仕方の違い（表流水→溝）があり、このことから、それぞれの立地の水田の開発時期が異なることがある程度想定できるのではないか。



図版17 名蔵シーラ原の山麓の水田

また、この山麓谷筋の水田の最も上の田は表流水の一つを利用した苗代田だが、浅い砂地の田で、これは山の川砂に由来するようだ。谷筋の傾斜がややきついところでは、とくに高い畔がしっかりつくられているが、別段、山石で補強された跡はみあたらなかった。耕作者の話によると、谷幅に細長くつくられた田の特定箇所が深くなっていて、その深みのラインが上から下に続いているとのことである。これはこの谷筋の田の開発以前のかつての表流水のあとと思われる。とすれば、この山麓谷筋の田は、斜面を削って段差をつくとともに均平にして、そのさいに出た土を、自然の表流水の上に客土したものと想像される。

厳密に言えば、海岸低地の水田群のうちでも、少し高くなった山際の田は面積が小さく、砂っぽい。湿地だったと思われる低地の水田では深くなり、面積も大きい。この点は西表島の海岸低地の田の事例と同様である。

<事例3 丘陵谷筋の水田>

崎枝半島の南の海岸低地にむかって、丘陵から細長い谷筋が伸びている。事例2の山麓谷筋+海岸低地の地形に似るが、丘陵の谷筋なので、幅が狭く長いのが特徴である。現在、こうした谷筋は周囲から樹木や雑草が侵入して生い茂り、僅かに田芋の残存がみられるだけで、昔の面影はないが、図版18（米軍航空写真）は、かつてのこうした地形に多くの小規模水田がつくられていたことを鮮明にとらえている。

現場で、この谷筋の奥からたしかに湧水が流れていたと聞いた。この流れが順次下の田を潤していくので、当然ながら、田越し灌漑である。図版からは、こうした谷筋の水が何本か集まって、下の海岸低地のより大きな田に利用された様子もみてとれる。



図版18 崎枝の丘陵谷筋の水田（1956. 6 撮影）

こうした丘陵の谷筋の水田は、かつては富崎半島でも、崎枝半島より数多くみられた。ただ、富崎半島では全体が起伏に富む丘陵をなして、海岸低地があまりないこと、丘陵内部のいくつかの谷川沿いに小さな谷筋がつくられることが崎枝と違う点である。こうした丘陵地帯の谷筋の田は全体として水不足になりがちで、ところによって天水田とかわらないほどの田もある。このためであろう、これら丘陵谷筋の田は現在ほとんどが放棄されている。

<事例4 内陸部の水田>

眼を内陸部に転じると、水田はさらに特徴ある姿をみせている。

a. 図6は石垣市街地背後の標高200m前後の前勢岳・バンナ岳山麓から段丘がなだらかにのびる一帯に分布した水田跡である。山腹の急斜面から山麓・段丘へと幾筋かの水の流れがあり、これを用水とした水田がかなりあったことがわかるが、これらは現在、すべてが放棄された。この水の流れはあるときは地上に現われ、場所によっては地下の伏流水となって段丘をくだっている。石灰岩台地につくられた水田という意味で<事例1>と同様の性格をもつが、背後に山があり、それを水源とする点が異なっている。



図6 前勢岳・バンナ岳山麓・段丘の水田分布（1956年）

b. 石垣島東の内陸部、とくにカラ岳周辺の起伏に富む丘陵の低地に現在も耕作される水田が広く分布している。図版19はそうした水田のふたつのタイプである。

図版19aは、丘陵または小山の周囲からしみ出る湧き水を集めて、狭い窪地に水田が連続する小規模なまとまりの水田群である。これは窪地単位に完結し、孤立して分布する。

もうひとつのタイプは丘陵のいくつかの窪地がより広い低地でつながっている地形の水田である。ここではおおむね、田越しと溝（水路）による灌漑が組み合わされて現われる。一例として、一定のまとまりをもつ上の水田群と下の水田群にわかれる場合、水田の横腹の「溝」によって上から下に流す用水系と、溝から横の水田に水を一旦とり入れ、さらに田越しに下の水田に流す用水系とが併用される。こうして、いくつかの窪地の水が合流する低地には大きな面積の水田群が形成される。図版19bの水田群はそうした典型である。石垣島のある程度大きなまとまりをもつ水田群はこのbのタイプのものが多く、既に触れた宮良台地北側の水田もこれに属する。

また、このタイプの水田群であれば、溝で連結する用水系の特徴から、上の田が放棄されても下の田は耕作しうる分節的な構造になっている。

孤立した窪地のみのaの水田と、窪地—低地が連結されたbの水田とはおそらく歴史的な段階を異にすると思われる。bのように比較的広い範囲の水田開発が可能となるのは、

そうした社会的必要の発生（例えば上納田の拡大の要請）と、まとまりある集団労働が調達できる段階（例えば人口の増加と新村建設）をまたなければならぬだろう。



図版19 カラ岳周辺の水田

a : カラ岳南西、リースン道路際の水田 b : カラ岳北西の水田

c. カラ岳周辺からの水は西に流れて、オモト連山の麓の谷底低地をとおり、宮良川の源流となる。こうした小河川のひとつが流れる（おそらく湿地だったと思われる）流域に大浜ムラ「底原」の水田群（現在の底原ダムの前方）がある。筆者はここで1984～1986年の三年間、稲作をしたことがある。

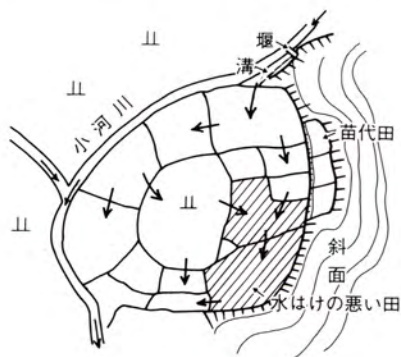


図7 小河川沿いの水田群

この水田群（二町歩ほど）の一面は、蛇行する小河川と丘陵に囲まれている。主たる用水の取り入れ口は水田群から小河川を少しさかのぼったところにつくった堰で、そこから丘陵の裾に溝を掘って、水田群の奥の田まで水を引いてくる。そこから水田群の水田一枚ごとに落差をつけて水田群全体に水をいきわたらせるようになっていて、基本的に田越し灌漑である。

もうひとつの用水は、水田群を囲む丘陵斜面からの表流水または湧き水である。丘陵側の一段高くなったところに、これら表流水を集めて細長い小区画の苗代田があった（当時は放棄されていた）。



図8 石垣島の事例でとりあげた地域

この水田群を耕作して、当時最も困ったのは、風雨が強く雨量が多い時に河川の増水で、堰が決壊したり、溝が埋まったため、そのたびに補修しなければならなかったことである。一度は（毎年ということではなかったが）河川の氾濫で、田植え直後の水田群すべてがとうとうと流れる水の下になって跡形もないこともあった。

また、丘陵側の低い田では一般に収穫時期の水はけが極めて悪く、このため高刈りして、刈った稲を刈り株の上に置くという伝統的な収穫法をとったこともあった（水はけの悪い田では、田の内側に溝を鍬で掘って、排水させるということもおこなった）。

こうした内陸部の大きな面積を占める平坦な谷底低地の田は高低差をつけてつくられているが、低い田ではおおむね水はけの悪くなる傾向がある。

<事例5 谷底低地の田>

地形的に「谷底低地 (valley bottom lowland)」と分類される場所の水田でも、前項の内陸部の田と、海岸に近い場所の田では違いがみられる。とくに後者は、白水地区の名蔵川流域の平坦低地につくられる水田群や、前勢岳・バンナ岳前面の台地と市街地の台地に挟まれた平田原の水田群のようにまとまった大面積の水田地帯をなしているため、谷底低地の水田という印象はあまりうけない。

川平では、ウイヌムラの底地ビーチへの道沿い、山川オン横から浜に直接くだる斜面に展開した水田跡も地形的には「谷底低地」に分類される。山川オンの後ろの山からの幾筋かの表流水の流れを利用し、ゆるやかな斜面全体に水田をつくっていた。

図版20の水田は川平への入り口部分にあり、山から直接海浜につづく広い谷筋の斜面にそっている。山からの表流水の流れを、上の田の脇からひきこみ、田越しに流すとともに、横の溝からも水を取り入れるようにしている。特徴的なことに、この水田は砂土で、畔が崩れやすいため、木杭を畔に打ち、土のうを積んで補強している。古い昔は海浜だったのではないか。こうしたところは石垣島ではあまりみない。

海岸低地をもたず、山が海に直接せまっている場所での緩斜面につくられる水田は、のちの奄美大島でも類似した姿を示す。



図版20 川平入り口の谷筋斜面の田
全体に砂っぽい。左の丘陵裾に溝がある

e. 久米島

久米島の水田はかつて多くの地域に分布していたが、現在は極めて僅かな面積が残るだけである。現存する水田とかつての水田跡をみてまわると、久米島独特の立地と水利条件がうかがい知れる。その代表的な水田立地の事例をとりあげて報告する。

<事例1 段丘最上部の水田跡>

具志川村西銘集落に入る道のそばに一段低くなった窪地の一画がある。ウチガースクという。現在、ほとんど耕作放棄しているが、一部に田芋田が残る。二～三畝ほどの小区画で、かつては窪地すべてが苗代田であった。



図版21 西銘の苗代田跡

a : 上からみた苗代跡 b : 湧き水が出る箇所

かつて、この苗代田には牛馬の糞、またソテツの葉をいれて肥やしにした。一旦、とりあげた苗は本田だけでなく、この苗代にも植えた。現在集落に入る道路で下の斜面と区切られているが、かつては道はなく、橋がかけられていて、斜面の下まで水が流れ（下にも苗代田があった）、多くの水田が広く展開していた。この水田群の水がかりは、窪地奥のクバの樹の下からの湧き水と、山から延々と引いてきた水路（溝）の用水系のふたつである。おそらく古くから窪地の湧き水を頼って切り開かれた小水田が、さらに下の斜面に面積を拡大して展開しようとして用水不足になったために、或る歴史的段階で、久米島独特の溜め池とそこからひく長大な水路建設がおこなわれたと思われる（後述）。

<事例2 段丘急斜面の棚田>

段丘につくられた水田は、急斜面であれば見事な棚田になる。具志川村仲地集落はずれには、段丘が緩斜面から急斜面におちこむ部分に水田が今も残り、耕作されている。急斜面の棚田は琉球列島でもここだけに現存するものであり貴重な文化財である。かつては下の段丘緩斜面まで水田が連続して展開していた。

棚田は、図版22に見えるより実際にはもっと急斜面で、10～20坪内外の極めて小規模区画である。畔は細く、とりわけ石を積んで補強した様子はないが、畔の基部に部分的に石を置いたところもある。田越し灌漑で、畔の水口には平たい石を置き、そのレベルで田の水位を調節する。



図版22 仲地の棚田

a : 棚田 b : 棚田のうえの田 (畔が細い)

久米島でも、平地の田の耕起は牛を何頭か集めておこなう「踏耕」が一般的だった（のちに馬で鋤起し、マーガで代掻きするようになる）が、この棚田では単位面積が小さいため、田鋤を用いて耕作した。ここでの昔の田植えは彼岸の頃、収穫は新七月末頃までで、二期作の田植えは八月だったという。

この一帯の水田は段丘上の水路の用水に依存しているが、この水路の用水は図9の水系によって供給されている。仲地集落の東の仲地橋の下に取水口があり、橋から上流の川（ウッカー）の名称が橋を境にその下流でシンガーラと変わる。このウッカーはもともと自然の川である。ウッカーの水は堰止められて取入口から水路に流れ込む。この水が仲地の水田全体に行き渡るようになっている。

この水系が独特なのは、ウッカーからさらに上流部に大きな溜め池をつくり、その水を自然流水のウッカーに流している点である。溜め池によって自然の川の水量を安定させ、それによって自然川から取る水田用水も安定的に確保しようとしたのである。水田面積の拡大に対応する用水量の拡大はこうした手段で解決された。

古いヤンガーチ（ヤンガ池）は1739年につくられた。叔仲姓家譜に「山加き原川御分二堤井築立、水貯置候」とあり、これは「仲地、山里、具志川、仲村渠四ヶ村苗代仲地原」の水を確保するためだったという。古いヤンガーチは山にむかって少し行ったところ、狭い部分を幅10m、長さ15mほどの土堤（表面を山石で覆い、土止めした跡がみえる）で小川を堰止め、その脇の手掘りの細い溝から水を取り入れるようになっている。

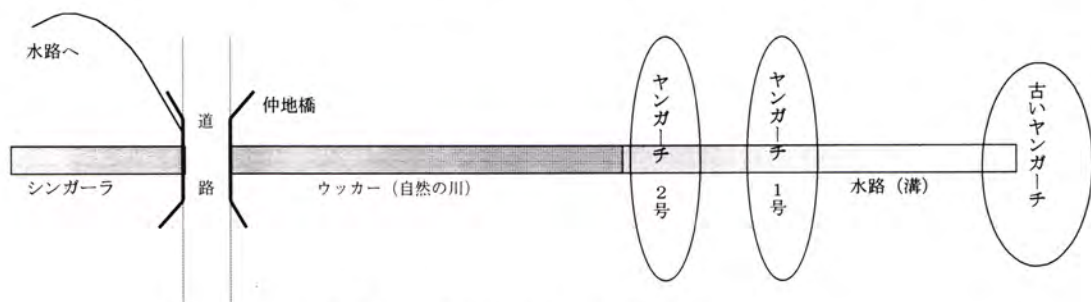


図9 ヤンガーチ水系の模式図



図10 久米島の水田分布 (1983年)

古いヤンガーチが決壊したあと、それを補修せずに、すぐ下流にヤンガーチ1号、2号と新たな溜め池をつくった。

<事例3 山腹谷筋の棚田>

仲里村のなかでも儀間は大きい集落である。儀間の水田は集落から後ろの段丘の間の平坦部とともに、儀間川の右岸から東の丘陵やアーラ岳にかけた山腹に階段状の棚田があった。前者の水田は儀間集落西部の人が、後者の山の棚田は集落東部の人が所有し耕作したと聞く。

久米島南部の儀間～島尻にかけての山系にはかつて多く水田が分布していた。近年の畑地化と耕作放棄によって、現在この一帯に水田は皆無となったが、その立地跡は見る事ができる。

a) 儀間の東、山城集落の前のウニシ岳の山腹に興味深い石積み遺構がある。ここは谷川もなく谷筋の凹地でもない、ありふれた山の中腹の雑木が生える急斜面であるが、その一部に段差をつけた石積みが残っている。石積みの間の区画は平坦になっていて、極めて小面積(10坪内外)であり、石積みの長さは10メートルほど、それが山腹に3～4段ほど残る。谷川はないものの、急斜面には表流水の流れの跡があり、その部分に石積みが見られた。

結局、山腹斜面のごく一部、しかも規模も極めて小さい石積みの跡は住居跡とは思われず、また段畑にしては上から表流水の流れの線上にあることから、これも否定されると思われる。のちにみるように石積みを基部にして土をかぶせた畔跡(のちに土が表流水で洗い流された)とみるしかないが、長い間耕作した恒久的な水田の形跡はみえない。条件の悪い場所につくられて、早々と放棄されたのではないかと思う。

b) 儀間から島尻にかけた山系には窪地となった大きな谷筋(マタ)や山腹を流れる谷川で削られた狭い谷筋が数多くみられ、それらはかつて、おおむね水田だった。

とくに後者、山腹の急斜面を谷川が流れている狭く細長く浜まで続く谷筋には必ずとってよいほど、階段状の水田がつくられた。畔は、この一帯の山石を一尺ほど基部に積み、その上は土をかぶせた。当然ながら斜面なので段差をつけている。

そうした典型的な谷筋の水田跡が図版23である。ここはアーラ浜の周囲の山の斜面を谷川が流れ落ちているその谷筋にある。アーラ浜側から山をみると、そうした谷筋は雑木があっても、まわりに比べて低く、上の山腹から下の浜ちかくまで続いているので、一目みてもそれと見当がつく。かつては浜や海からみると小さい見事な棚田が細長い谷筋沿いに並んで見えたという。

その現場に足を踏み入れながら、同行してくれたかつての耕作者に尋ねると、以下、次のような水田の様子である。

谷川は山の上から地肌を削り、大岩をむき出しにして蛇行して流れるが、その脇に階段状に水田群があった。段差ある畔は石や岩を基部に置き、その上に土をのせている。おおむね横幅10メートルくらいの畔で、一区画は5・6坪から10坪以内の小さな田だが、山



図版23 アーラ浜に落ち込む急斜面の谷筋の水田跡

a : 道から谷筋をみる (木の陰に谷川) b : 谷川沿いの段差ある田芋田

の上の方には 100坪ほどの田もあったという。用水は山の斜面を縦につながる水田群の上の方で取水するが、石積みの堰から溝を掘って導水した。そのさい二か所の取水口をもうけたのは、縦に細長い水田群である理由からだという。当然、上から一枚ごとに田越しの水利用である。

谷川の水は豊富だった。今も水音をたてながら流れているほどである。谷川は一年のあいだに時として氾濫することがある。小さな水田の崩壊を防ぐために川岸の上部、水田に接する部分に石積みをしている。

だが、年によって早魃があり、このときは谷川の水が涸れ、取水することができなかった。こうした場合には馬を田に入れて踏ませて田拵えをしたが、通常は小さな水田なので、田起しも均平作業も鋤でおこなった。

用水が豊富で狭い谷筋の棚田のこの事例で極めて興味深いのは、「収穫の時も、その後も田に水を溜めたままにした」事実である。これらの田では一旦水を落してしまうと、土質の関係で田も畔もひび割れしてしまい、次の年の耕作に不都合なためだという。堪水状態で夏季を迎えるので、当然二期作ができる（戦前から近年までは台中65号）。次章で触れるが、こうした条件下ではヒコバエも大いに生育した筈である。山の土質は赤土である。宇江城の山系南斜面では典型的な国頭マーチであり、アーラ岳周辺でも同様である。

耕作者によれば、これら山腹の小水田の耕土は浅かったが、儀間背後の平坦地の水田の稲よりも稲粒の重さは重かったという。ただ、狭い谷間なので、ところによって日当たりが悪い田もあったが、そのためにまわりの山林の木を伐採した。

c) もうひとつ、儀間から島尻に越える山道の途中、道わきの下に小さな谷筋があり、わずかな谷川の流れのそばに緩やかな段差をつけて石積みで囲った小さな区画（10坪以下）がいくつかみられる。石積みの内側に土を盛りあげた低い畔の跡があり、石積みの畔には平石を置いた水の流れ口があるので、田越しの水がかりである。

耕土は浅く、使いやすそうな田だが、現在は雑木が生えて、昼なお暗く、じめじめしている。おそらくかつては切り開かれた明るい風景だっただろう。

f. 徳之島

徳之島はかつて奄美諸島のなかでも稲作が大きな比重を占めた島である。笹森儀助による明治二十六年当時の資料（『南嶋探験』）では人口3万5千人、水田面積1,490町歩を数え、これは沖永良部島や与論島にくらべ人口比にして水田面積がそれぞれの1.3倍、0.8倍となる。但し、これは後述するように明治に入って砂糖貢納制が解除されてから以降の結果である。

今回、二十年ぶりに訪れたが、水田は二十年ほど前からサトウキビ畑に大転換して、稲作は壊滅といってよい状態であった。天城町から伊仙町にかけて極めて起伏に富む入り組んだ地形のうち、大小の窪地はほとんどすべて水田跡だったとみられる風景は残っているが、明確な水田跡（昔の畔跡）はなかなかみつからなかった。

天城町でみつけた明瞭な水田跡は図版24の例のみである。ここは道路で寸断されて一部が残るが、細長い窪地に沿って上の田から下の田へ緩やかな段差があり、片方に僅かに水が流れる溝がある。今は畑地化しているので、溝は排水用に使われるのだろうが、畔跡と溝ははっきり区別されるので、かつては水田用の水路だったのはまちがいないだろう。ここでは、おそらく上の田から水を導き入れ、田越して流しながら、脇の溝の用水も併用する方式をとっていたものと思われる。



図版24 徳之島天城町の水田跡

<事例1 伊仙町の水田跡>

南部の伊仙町は石灰岩台地が幾重にも隆起した一帯で、古い上段の台地から浸食谷底（カルストドライヴァレー）と丘陵が交互に細長く下に走っている（一周道路から下の一帯は新しい石灰岩台地なので峡谷状の窪地はなく、斜面だけの畑地のみである）。そうした窪地はおおむね水田跡、丘陵は畑だったが、西の犬田布あたりでは流水不足のため「天水田」が多く、湧き水は伊仙や面縄の方面に多かったという。

しかし、湧き水の箇所と水量には限りがあり、水田の面積拡大期には山の方から導水するしかなかった。図版25にみるように犬田布の水田も石灰岩台地の細長い窪地につくられたが、丘陵からの表流水を集めても用水は不足気味なので準天水田とならざるをえなかったのである。

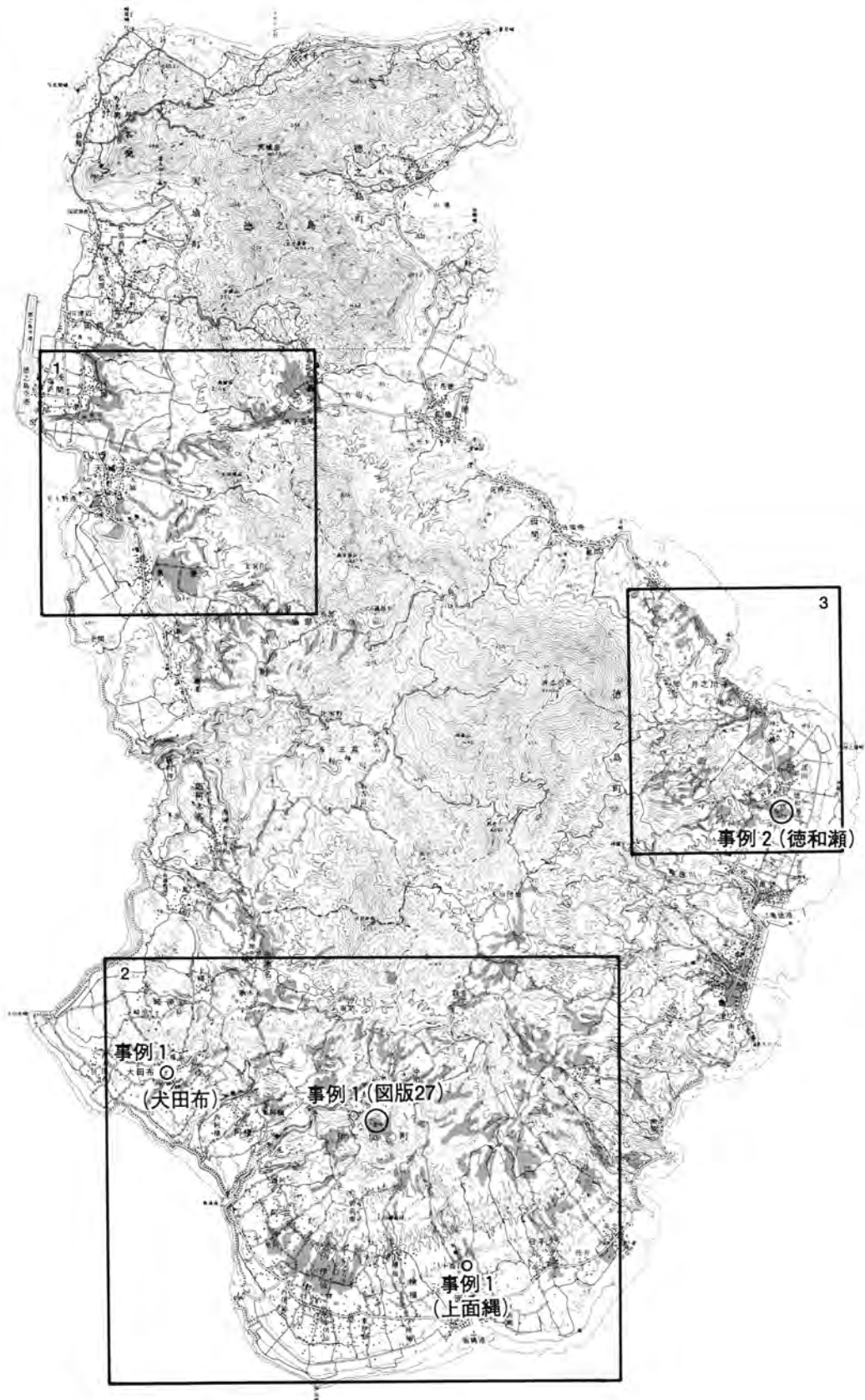
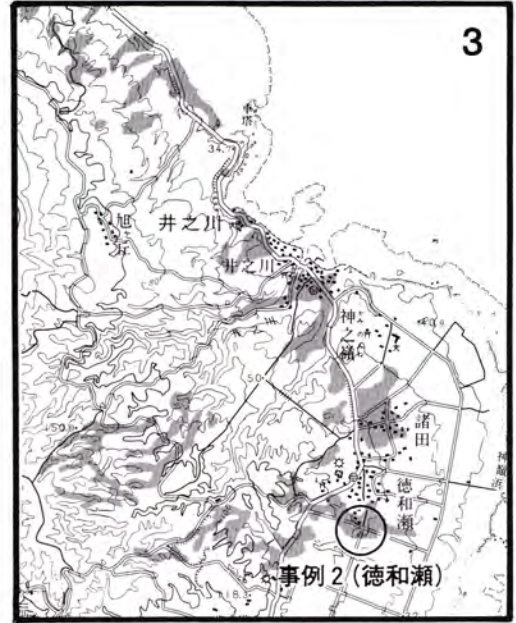


図11 徳之島全図



1. 天城町平土野周辺 2. 伊仙町 3. 徳之島町井之川・徳和瀬

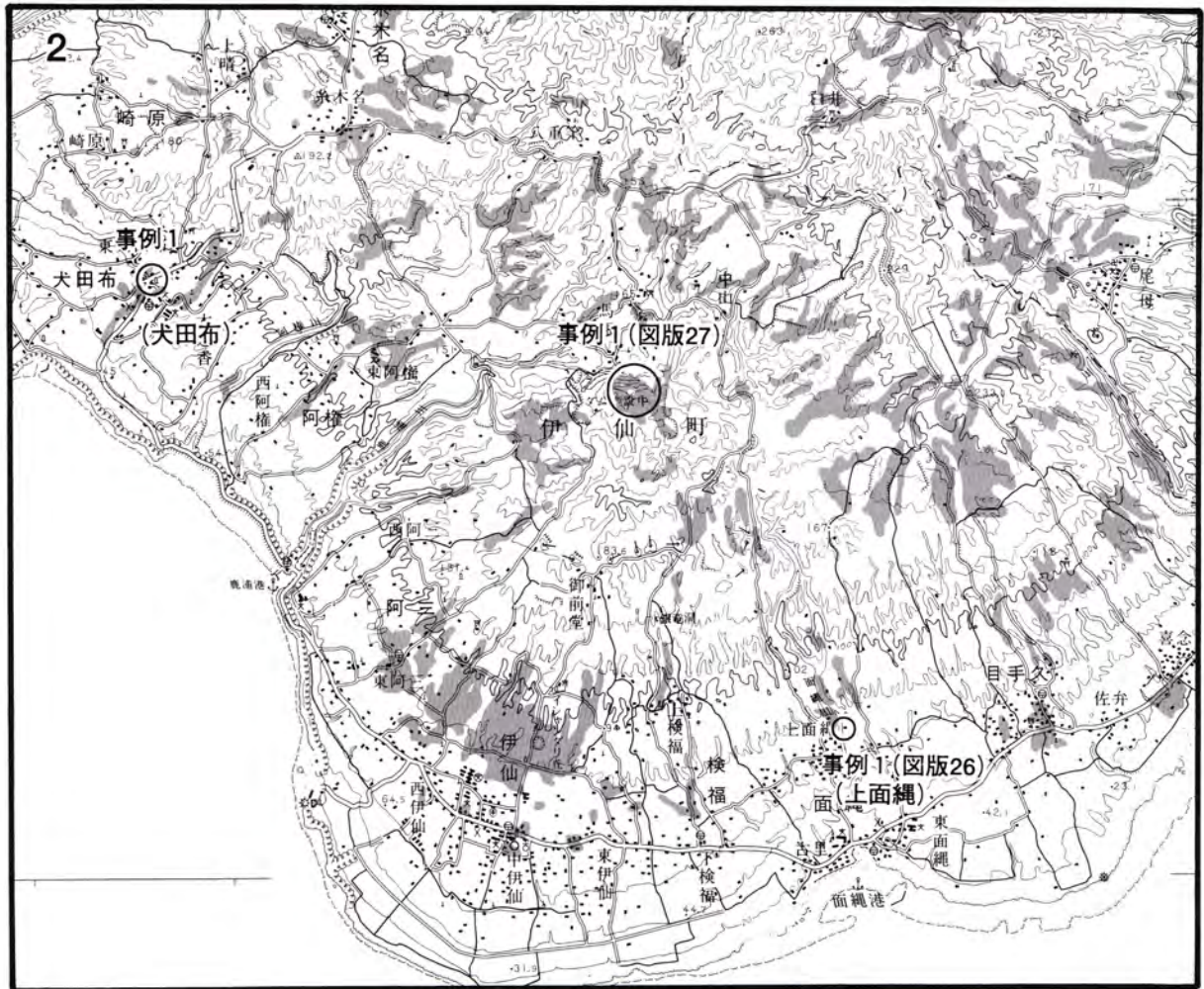


図12 徳之島の水田分布図 (1968年)



図版25 伊仙町犬田布の水田跡

伊仙町歴史民俗資料館長の義憲和氏から次のような話を聞いた。

水田のなかでも、最も深い田をイグという（強いて命名すれば「池田」か）。これは石灰岩台地のさらに上の山のなか（ウイバル）にあり、低く狭い谷筋に水と「アラ」が流れこんで池のような状態になっている。こうした場所は、現在、図版27のようなダムに変貌している。次に深い田がユビダで、ここは牛を使うことができず、人力のみで耕作される。そこに川の流水が流れ込んでいけば、それはミッタ（湿田）として区別される。ミッタは谷筋（マタ）の田である。

シルムチ（汁もち）と総称される田は山や森のなかで川の水が入らない田のことで、周囲からの「汁」を溜めるしかない。「汁」とは表流水のことだろう。

石灰岩台地の窪地の田でも土層の浅い田をアギダという。ここは流水が入り込まない場所である。これに対して同じ田でも流水が入るところには苗代（ノーシュ）がつくられる。苗代に対する本田はファーダーという。また、石灰岩地帯の田にあるドリーネ状の窪地で、水が流れ込む場所をフッキという。

集落周辺の田に導水する必要があるときは、谷川に石積みして堰をつくり、その脇から溝を掘って導水してくる。ときには徳之島独特のキンチクという竹をつないで導水管にす



図版26 伊仙町上面縄集落内の水田跡

a : 集落内の田への導水溝跡 b : 屋敷脇の水田跡。苗代にも使う

ることもある。いくつかの集落にそれを分けるときはムンデーという箇所です分水する。かつては水争いもあったという。さらに田植え始めの儀礼につかうマツインダー（祀り田）はマタの水田群の上部にあり、常にマタの先端の形にあわせた三角田であった。必ず泉（イジュン）の水をひいた。

上面縄の集落内の水田には上の湧き水から導水する溝が掘られている（図版26 a）。集落内は斜面に沿いながら起伏があるが、高くなった屋敷地脇の低地の水田には「屋敷の汁」も流れこんで用水にした。

なお、伊仙町には喜念ブク、目手久のフーグブク、面縄のグランブク、検福のクタブク、伊仙のミンツキブク、犬田布のアジノーシュがあったというが、今回は未確認である。



図版27 伊仙町の中部ダム

こうした山中の谷筋の窪地に深田があった。五年ほど前につくられ水量三十万トン

<事例2 徳之島町徳和瀬の水田跡>

東海岸の徳之島町は伊仙町に比べ小河川が多くあり、山からの小河川沿いとそれがつくる平坦部に水田がつくられた点が島南部の伊仙町と異なる。徳和瀬はもとは和瀬村といい、南の亀徳と境を接している。地元の民俗研究者の松山光秀氏に案内され「シマのコスモロジー」（註8）を説明されながら見てまわったが、古い水田は、集落西のアーケントーという山に発し、ティラ山、チンシ山の脇から小川がくだる集落下の低地にあった。五百メートルほどの小川の上流はカマミゴ（神浴み川）と呼ばれ、以下、イシキャッキヤ（見事な清水。産水に使った）、チブマヌコーとその名を変え、かつては澄んだ川だった。やがて、この川は水田群のなかのファーサブという大きなドリーネに流れ込んでいた（図16参照、58頁）。集落に最も近いチンシ（積み石）山の南側にはイビガナシがあり、その下の田は三角の「神付き田」であった。神道はこのイビガナシと集落最南の根屋（ネーマ家）そばのトネという祭祀場（トネの東隣りにノロを出すアガレ家があった）を結んで、水田と集落のあいだを通っていた。

この古い水田に対し、近世中期、山の方に溜め池とそれからの水路がつくられる。これによって、集落から離れた一帯の多くの斜面が新たに水田化されたようである。こうした水田開発の時間差がはっきりとみてとれる村落の貴重な例である（後述）。

8. 奄美大島

ここでも二十年ぶりの変貌に驚くことが多い。名瀬の市街地が周辺集落をのみこんで拡大し、それに伴いかつての近郊の水田地帯は新興住宅地になり（龍郷・笠利へ向かう途中、有屋川・浦上川流域）、峠をこえた龍郷がわの大勝・戸口の集落周辺（中勝川・大美川）の水田も荒れ地となって捨てられ、跡形もない。

現にある水田または水田跡をさがして、龍郷町と笠利町、それに大和村をめぐるみたが、そのうちの幾つかの例を報告する。

<事例1 浜に接する水田>（笠利湾沿岸）

奄美大島の北端、笠利町や龍郷町にかけていくつかの小さな岬がある（図版28）。山が岬の背骨となり、その裾部のところどころに浜ができていて、そうした場所はおおむね集落である。そして、集落ちかく、または集落と集落のあいだに水田（跡）がみられることがある。



図版28 鯨浜のある岬（笠利町）

同じ笠利湾の対岸の龍郷町にも鯨浜の地名がある

笠利町鯨浜もそうした岬のごくありふれた集落のひとつだが、山ぎわに並ぶいくつかの家々のわきに水田跡（今はキビ畑）があり、石積みされた畔がみられた（図版29）。

この辺りのムラで屋敷囲いといえは海のサンゴ石と相場が決まっているが、この畔の石は海石と山石を混ぜてつかっている。山から小さな谷川が流れ出るややなだらかな部分の水田化し、畔の段差を外側に石積みして補強したものだだろう。かつての水利は、さらに上の小さな流れから溝で導水したという。海に流れるこの小谷川も現在は幅広く、深いコンクリート製の水路にしてしまったため、水が畑に利用できなくなったという嘆きを聞いた。



図版29 鯨浜の石積み水田跡

同じ岬を鯨浜から南下したところには、図版30 aにみる山の「割れ目」(谷川が流れる)の傾斜から海岸砂丘上まで展開した水田が今も使われている。



図版30 傾斜田と砂丘の田

a : 道路の上と下に水田がひろがる b : 道路下の浜の田

bの水田の一部、段差がある区画の隅に石積みが見られたが、これは砂地のためである。畔に杭をうち、土止めしているのも同じ理由であろう。

このような浜端の砂地の田は近辺の岬でもみられた。笠利湾に面する龍郷町の岬の付け根にある水田では、砂地のために畔がすでに崩壊しかけ、土止めのための杭打ちがおこなわれていた。また、おなじ浜端の水田でも笠利町一屯^{いっとん}にある水田は、新たな道路建設で削られたと思われるものの、昔ながらの区画の跡をよく残している。図版では実際よりも大きくみえるが、百坪内外の小さな水田の不定形が印象的である。



図版31 一屯の不定形の水田

笠利町とその周辺の水田が以上あげた「浜に接する田」だけではもちろんない。笠利町立歴史民俗資料館で教示されたとおり、東海岸にはほとんど水田跡がみられず、西海岸の笠利湾の岬に今も実際に水田が残っているというにすぎない。西から笠利の東海岸に出る途中の谷筋の傾斜地にもかつての水田と思われる地形があった。また、東のアヤマル崎から北上し、半島の突端、佐仁、楠野、屋仁の集落近辺では、次にあげる事例のような、川沿いに発達したかつての水田の面影がみてとれた。



大和村



笠利町

龍郷町・名瀬市

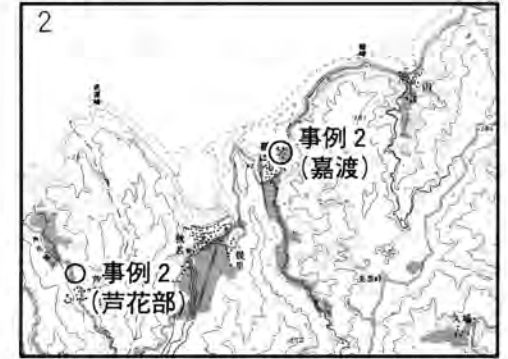


図13 奄美大島の水田分布図 (1969年)

<事例2 川沿いの水田>

川が流れ、沖積平坦部ができるころはかつて水田が必ずできている。龍郷町や名瀬市の各集落は、そうした川がつくる平坦部をとりかこむ山ぎわか、または河口の砂丘上に形成されているが、その川筋が比較的長いか、短いかの相違によってアクセントがつく。

長い川筋の代表例、龍郷町の秋名川流域には、現在、ふたつの集落（秋名と幾里^{いくざと}）が砂丘と山際の両方に別れて分布する。これに対し、短い川筋と狭い幅の流域をもつ龍郷町^{えん}門では、東の山際から砂丘にかけて集落がのびている。この集落の立地の相違に対応して、川の流域の水田立地にも、中央平坦部の広い水田地帯と、山ぎわのマタに切れ込んで袋状につくられた水田群の二種類がみられる。

とくに後者の水田は全般的に小区画で、山ぎわからのやや傾斜した袋状の土地に立地する。図版32はそうした典型で、aは険しい海岸の道から降りて集落に入る坂の途中に、山ぎわの傾斜地につくられた嘉渡の水田跡であるが、小区画の畔跡が残っていた。bは芦花部川の途中の袋状の水田跡（一部は今も使われる）である。



図版32 川の流域の山際の水田跡

a：龍郷町嘉渡の水田跡 b：名瀬市芦花部の水田跡

いずれの例も、背後の山からの流水が水源である。bは現在も奥の山ぎわからの表流水に石を無造作に重ねただけの堰ともいえないものをつくり、そこから細いパイプで水を集めている。流量は決して少なくはない。

集落がもともと北風を防ぐ山ぎわからはじまったと思われること、それにみあって水田も山ぎわの表流水を利用した傾斜地の小規模水田からはじまったと考えられる。流域中央の平坦部はかつて湿地同然だったのが、のちに水田開発されたのであろう。集落立地の移動と変遷は水田立地の展開とも対応するといつてよい。

<事例3 大和村の水田>

名瀬市域から西にのびる大和村の各集落は、海岸線に山からの谷川が流れくだる部分があれば、必ずそこに点々と形成されている。しかも、山は深く、谷筋に覆いかぶさるようになっている。道は集落を結んで海岸線に沿って曲がりくねり、時に集落から山中に入ることもある。水田はかつて村の中心、思勝湾周辺に最も多く集中していた。ここは流域の

長い大和川が流れ、国直、湯湾釜、津名久、思勝、大和浜の集落が集まっている。それに次ぐ水田は西の大棚周辺にあり、それより西の名音^{な おん}、志戸勘、今里には少なかった。今はほぼ全滅状態にちかく、水田跡がうかがえるのみである。

そうしたなかに、集落背後の斜面に図版33のような小規模な棚田の跡がある。ここは主たる小さな流れを利用した小規模水田の側面に、別の棚田の小さな谷筋が落ち込んでいるかたちになっている。一筆が50～60坪の階段状の区画である。



図版33 集落背後の小さな棚田

名音の集落の背後、険しい山中の谷川（名音川）が小河川となって流れ込む一帯の狭い河川敷にかつての水田区画が明瞭に残っている。現在は畑地化しているが、風よけのトタン囲いが一筆の小ささを表わしているのがわかる。谷川に沿って急な山中をさかのぼっていくと、深い山のなかでところどころで小さな滝をつくるほどの豊かな水量がある。

このように、大和村、ひいては奄美大島の水田は深い山にみあう谷川の水の豊かさに負うところが大きい。

この他に、かつて海岸の浜に水田がいくつかみられた。そのひとつ、戸円と名音のあいだのヒエン浜の細長い水田はかつて今里と戸円の人達が耕していたと聞く。ここは縄文相当期の遺跡でもあり、おそらくアダン林を伐開して水田化したものだろう。浜の背後に山の岩肌がすぐ迫るところだが、岩の表面にわずかな流水がある。これが貴重な用水である。



図版34 名音の河川敷の水田跡

2. 水田立地の歴史的展開についての若干の仮説

以上のように、沖縄島を除く琉球列島の現在残る水田または水田跡を実際にみてきたが、いうまでもなくこれらの事例はかつての水田立地のごく一部である。多くの水田が畑地化し、昔の地形や水系が跡形なく消え失せてしまった現状での報告にすぎない。そうしたなか、昔の水田立地の面影が残る事例を通して、再度、島ごとの整理をおこないながら、先学の研究をふまえて、水田の古い立地、のちの展開の軌跡を想像してみたい。

*

与那国島には、希有なことだが、既に触れた十五世紀後半の水田関係史料が残っている。この史料は漂流済州島人が当時の集落を順にまわされて生活したという事情から、特定の集落周辺の水田または稲作を表現したものではなく、従って各事例にあげた与那国島の水田立地と対応しない。ただ、その史料記述から最大公約数的な当時の与那国の水田立地を推測することはできるかもしれない。

それによれば、当時、①田起しを牛による踏みこみ（踏耕）でおこなっていること、これは深田では不可能である。

次に、②田植えのあと「草をとらない」こと、これだけを見ると、常時堪水条件下で、雑草が生えにくい深田の特徴のようだが、①の記述と矛盾するので、別の考え方をしなければならぬ。私はこれを「田を深水にして雑草の発生を抑制しているため」とみている。八重山とくに石垣島では、かつて早目に田起しをおこない、そこに水を溜め、深水にして、田植え前の雑草の発生を抑制することがよくみられた（最近の基盤整備された水田では浅水の状態で田植えをするので、除草剤が不可欠となる）。深水の田に植えるので、稲苗は当然のように大苗である（ここでも最近の水田では浅水の田に播種後2週間ほどの若苗を機械植えするのと対照的である）。このような条件は降雨を溜める天水田にもみられるが、降雨の不安定さがまぬがれないことは既に述べた。この条件を恒常的に確保できる水田は、既にみた事例から推測すれば、やはり山際に位置し、山からの表流水や小さな谷川の水が恒常的に流れ込む水田でなければならぬだろう。

この点は次の、③五月ごろに刈り終えたあとのヒコバエの生育は初めに勝るほどで、七～八月ごろに再度収穫されること、をみるとさらにはっきりする。この③の記述は沖縄島名護市での筆者自身の八重山・沖縄在来稲栽培実験の結果（註9）と次のように対応する。

栽培実験では、冬期から月ごとに連続して播種し田植えした在来稲を新六月後半から順次収穫していったところ、月ごとの連続作付、連続収穫という条件のために、期せずして常時堪水状態で収穫することになった。そうしてみると、この時期、六月後半から八月盛夏の高温、しかも常時堪水というのふたつの条件下で、穂刈り（穂首下10センチほど）、根刈りを問わず、必ず根ぎわから新たなシュートが生れて、穂長、桿長とも一期作に勝るとも劣らない生育を示した。正直、予想外の結果に驚いたが、与那国島の稲作史料が表現しているのは、このことだと思い知った。つまり、高温・堪水条件さえ揃えば、十五世紀の与那国の稲作の様子は再現できるということである。

筆者が栽培実験に使用した水田は県農試名護支場の水田のなかでも水の落ちやすい（砂っぽく耕土が浅い）あまり条件のよくない田だが、用水はいつも補充できた。いいかえれば、与那国島の十五世紀において、高温下でも常時堪水できる水田でなければ③のようなヒコバエ栽培は不可能だろうと推測がつく。盛夏の時期に常時用水が補給できる田とは、山が深く、その水を直接利用しうる山際の水田ということである。

与那国にはこの史料と同時期に成立していたとおもわれる与那原遺跡がある（註10）。遺跡のある南帆安^{ほあん}一帯はかつて台地のあいだの谷底低地を利用した水田がひろがっていたが、復帰前後の一時期、畑地または荒蕪地と化し、現在は一面の水田地帯に復活している。遺跡はその道ぎわに小高い小丘として残っている。このドナンバラ^{ドナンバラ}の地に十五世紀の漂流者が一時的に生活していたとみて誤りないだろうが、田中耕司は前掲論文で「与那国の水田のうち、最も水条件に恵まれた水田は（中略）満田原や浦田、南帆安などの丘陵・台地間谷底水田のうち、山脚からの湧水を直接利用できる水田である。」と述べている。漂流者が見た水田風景は、おそらくそうした水田だっただろう。

与那国島の初期の水田立地は、初期の集落の立地とおそらく密接な関係がある。現在の集落の位置は初期の集落からの移動の結果であるので、初期の集落の場所を推定することが同時期の水田立地を特定する手掛かりとなり、またそれによって集落移動にともなう水田立地の展開を推定することが可能となるだろう、という見通しが得られる。

今後の宿題とするが、伝承では、これまでの発掘事例のトゥグル浜、ドナンバラ、久部良慶田崎はすべて初期の村跡であり、とくに現在の比川集落は久部良トウバルから何か所かを経て移動したという伝承によると、初期の村はすべて島の北半分に集中していたことになる。1500年八重山戦争で石垣島制圧の余勢をかって与那国に侵攻しようとした王府軍が比川の津口からの進入に失敗した時、集落のない南から北の村々の背後をつく作戦だったと思われる。こうした点から、初期の水田立地を考えるうえで、北の初期集落周辺の適当な地形・立地に絞り込むことができるだろう。残る問題は「天水田」や「深田」の発生時期だが、これについては後に触れる。

西表島、とくに西部の祖納周辺もまた十五世紀の同じ史料に登場するが、水田立地を推し測る記述はない。ただ、当時の水田立地が、与那国島と同時期、海に突き出た台地上の祖納上村の背後の一带を中心とする狭い範囲に限定されたと仮定できれば、現在の水田（跡）立地は当時の立地にいくつかの新たに開発された立地をプラスして展開した姿とみなせるだろう。

当時から現在まで基本的な西表島の島民の生活圏は、海岸・河川を交通の基点にして内陸へ10キロ内外入った範囲にほぼ収まるとみてよいと思う。このことは、明治二十六年、笹森儀助による西表島東部の視察に次のように現われている（『南島探験』現代語訳）。「この島の人間は親兄弟が互いに往来するにも（海岸沿いの）本道を通り、数日かかる旅ですむ。一人もこの山脈を横断する者はない。猟師が狩猟に出る場合も、山奥に二里以上入らずとも猟が出来る。そのため、東部と西部の山境を越えようとする者はない。」（A）

「仲間川を舟で迂回しながら行くことおよそ二里で、或る山の下浅瀬に出る。ここで舟を捨て森に入る。ここを『ミヤケ』泊という。仲間村からは一里半にすぎないといわれる。『ゴザ』岳の頂上まで一里半の地点、川水は赤く濁り、飲めない。（この辺りの）沿岸には数十の廃屋を見る。これは家材伐採のための仮小屋である。…（ここから）小木を両手で払いながら数十間行くと、三十町四方ほどの草の野原に出る。連日の雨降りのため泥水が膝頭まであり、所々に畔跡がある。おそらくかつての水田であろう。」（B）

Aは地元で聞いた話、Bは西表島横断を目指す笹森たち一行が仲間川をさかのぼり、御座岳を登るため麓で舟をおりて実際に見た風景である。Bの視察によってAの話がほぼ裏づけられるだろう。

祖納村周辺でも、十八世紀前半の伝承を示す『八重山諸記帳』の一項「島中奇妙」には、干立村から浦内川をさかのぼった地点の「稲葉」の地名があらわれていて、当時、村から直線距離で約5キロの地点まで人の往来があったことがわかる。この付近には成立年代は不明だが、最近まで水田群があった。「川沿いの田」は干立村や古見村での聞き取りによれば、川の水を利用したのではなく、近くを流れる小谷川を利用する例が多かった。

これに対し、村近辺にあった田、例えば祖納村のすぐ東の「沼田・泥沢」や村内の「水田」のように、笹森儀助の観察で「沼田」「水田」と書き分けられているのは理由があった。「沼田」とは「海面とほぼ同じなので、汚水滞留し、樹木繁茂して腐敗したガスを発生する」（『南島探験』）湿地を水田化したものであり、「水田」とは山の麓の傾斜地にあり、山から水の流れが入りこむ田である。この「水田」と「沼田」が西表島の海岸線において連続して展開すること、しかも「水田」→「沼田」という開発の順序であったと想定できることは既に述べておいた。かくて、西表島の水田を大別すれば、「水田」「沼田」と、河川をさかのぼる遠距離の「川沿いの田」の三つの類型にわけることができ、これらが海岸線の集落から10キロ以内に分布しているわけである。

こうした水田立地は東部の南風見村でもいえることである。

かつての南風見村は現在の豊原集落の下辺りにあり、波照間島からの人寄せで十八世紀前半に創設された。当時数百人規模の集落だったが、笹森儀助がここを訪れた時には九戸、二十九人とさびれていた。彼によれば「海岸まで二町、東は広い原野・水田・泥沢・河川を経て仲間村に至る。東の海浜には新城島・黒島人民の耕作小屋が七、八軒ある。（背後は）二、三町の原野・沼田・泥沢を経て山に接する。西は村のそばに水田や古村跡があり、森林が繁り、じめじめしている。」という様子で、仲間川の西岸すべてが南風見村の範囲であるが、同時に例えば、村から東へむかって「原野をすぎて水田があり、やがて河口のマングローブ林、仲間川に至る」という順序を彼は正確に記述したものとみえる。

当時の村には1)東の「水田」、2)西の「水田」、3)背後の「沼田」があったことがわかるが、1)は現在大原集落背後の「大保良田」、2)は「南風見田」をさす。『南島探験』に引用する「定納田地配分帳」にある「大浦田原」は1)の水田とみて誤りないだろうが、ここには二町歩弱・十筆の村役人職田（をゑか田）と六百六十坪ほどずつ六筆の上

納田があり、ほかに十町歩ほどの放棄田があったようである。この「上納田」水田群では一筆平均が二反歩（六百坪）前後の田であった。これに対し「自分田地帳」には、南風見田が一筆平均二反歩内外のほか、「ふかん田原」（一筆平均九十坪内外）「つめみ原」（百六十坪強）「ひさ原」（五十五坪）「嵩の前」（百六十坪強）と一筆が小さい田がおそらく3)の村背後の「沼田」であったと思われるのは、「ふかん田（深田）」や「嵩の前」という名称から推測される。

このほかにも南風見村の範囲内に「佐久田」という二里余りの「舟路差越作得仕候」田があった（那覇市史『琉球資料（上）』五八四頁）。これは新城村の上納田であり、仲間川をさかのぼったところの田ではなかったかと思われる。

このように南風見村にも海岸沿いの田、背後の「沼田」、川沿いの田という三つの類型がみられるだけでなく、上納田の一筆が自分田の一筆より明らかに大きかったこと、また、大きなまとまりをみせる1)や2)の水田地帯に一筆の大きな田が分布していたのである。

南風見村の、とくに「大保良田（大浦田原）」は放棄田も含めると大きな面積を有していた。既にみたように、ここは豊富な水が流れる谷川沿い（傾斜地）と広大な湿地とが組み合わされた場所につくられた水田地帯（28町歩ほど）である。これらの水田が離島の新城村（上地・下地）や地元南風見村の上納田として開発されたこと、さらにいえば（人口増加にみあう）上納田の拡大要請にあわせて近世期に開発されたとみてよいだろう。村から離れた「川沿いの田」もまた同様の事情で開発された上納田であったことは先述のとおりである。

ところで、十八世紀半ばごろの『諸村農業之次第』（注11）では、慶田城村（祖納）と南風見村の水田耕作の様子を次のように記している。

<慶田城村>

<南風見村>

苗代田 六月土用～十月まで「五度打」
 十月蒔入前に「一度打」「土拵」
 *「よと水用候苗代田」「山漏入候苗代田」は七月「草拂置」八九月に「□打」「牛踏」「草取除」、蒔入前に「一度打」「土拵」
 *「上田」「下田」の区別あり（上苗田は坪当り播種量が多い）

水田 六月土用～十月「五度打」
 十一月「土引直し」「手もみで田植時分かいし拵」
 十二月～一月「田植」
 *「上田」「下田」の区別あり（上田で植付間隔大きい）

□月～八月まで「四度打」
 九月「てかず拵」
 十月十日ころに蒔入
 *南風見田は「跡田」で種子取より十三日目後に蒔入する。

六月、八月、十月に「三度打拵」
 十一月「てかず拵」
 正月中「田植」
 *「上田」「下田」の区別あり（同左）

*とくに「稲萌茂候田」は六月中に草
取、八月～十月「二度打」
十一月～十二月「土引直し」「植時
分打拵」「手もみ」で「田植」

天水田 八～九月「鋤打」、「雨ふり次第、 九月「一度打」「牛踏二度」
一、二度牛踏」「土引直し」 二月中「田植」
十二月～二月「田植」

これらを比較して、次の点に注意する必要がある。

1) 「牛踏」は天水田に共通するが、慶田城村の「よと水用候苗代田」「山漏入候苗代田」でもおこなわれる。前者は水溜まりのような「澱む水」の小さな田、後者は山からの水がわずかに流れこむ田の意か。いずれも水がなくなる心配があるか、草が生い茂りやすい田なので「牛踏」を必要としたのではないかと思う。また天水田では雨を待って「牛踏」させるので全般に田植が遅くなる傾向にある。

2) 「打拵」とは木鋤キーバイによる耕起であり、慶田城村の天水田での最初の「鋤打」は鉄の刃のついた鋤ではないかと思われる。何故かといえば、木鋤では乾燥した田は耕しにくく、「田に水が充分あるばあいに、木鋤で耕していく」（註4）からである。この点を逆にみれば、「牛踏」を要しない苗代田・水田がすべて木鋤による耕起からはじまるのは、前作を収穫したあとも田に水が残った状態で「打拵」をおこなったとみることができる。のちに、アローナ（新打）という（木鋤耕起の）名称で、実際には「牛踏」をおこなうようになったのは、木鋤の作業に比べて牛の踏耕の方がずっと楽だったためである。

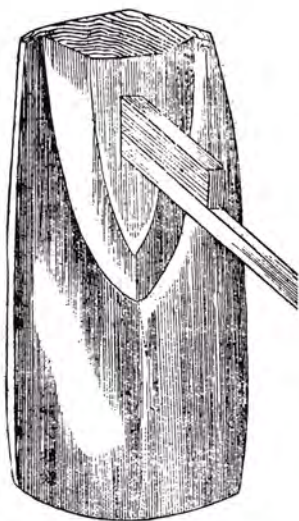


図14 木鋤（『南島探験』）

作では必ずしも必要としなかった。むしろ、水を落すことは後作を配慮すれば有害であったと思われる。木鋤による耕起、牛による踏耕いずれにおいても田に水が必要であっただけではない。一旦、乾いた田、割れ目が入った田は旱魃にあった田に等しく、再び水保ちを回復するために大変な努力が必要となるからである。しかも堪水条件であれば、現在も干立村で実際に見たように、ヒコバエ二期作が充分可能である（近世期、公的には否定された）。

おそらく前代に一般的だった牛による踏耕は、近世期の十八世紀段階では原則として木鋤による耕起に変えられた。だが、収穫前後から堪水のままという伝統的方法是前代と変わらなかった。この延長で「近代」に入り踏耕が本格的に復活したものと思われる。水田から深田（沼田）や天水田への展開は王府支配の社会システムに起因するが、天水田には

近世期でも踏耕が必須であった。但し、一筆面積が小さければ小さいほど、踏耕よりも木鋤の方が便利であるという面がある。そうした条件も近世期に現われたのだろう。

3) 『諸村農業之次第』記述中の「てかず拵」「手もみ」「土引直し」などの作業については未だよくわからない部分もあるので、改めて別の機会に論じるつもりである。

既に述べたように、**波照間島**では薩摩による慶長検地以前、少なくとも十七世紀初頭には天水田が存在したことが明らかになっている。水の便が極めて不利な立地（稲作限界地）にまで水田が形成されたこと、また天水田の成立が時代的にどこまで溯り得るかという点で、この事実は貴重である。

波照間島の最初の集落遺跡（石積み区画をもつ）はすべて海岸線の砂丘または断崖の上にあった（西からミシク、下田原、タカフクの各遺跡）。伝承によれば、西のミシク、下田原は徐々に島の中央の高台へ移動したが、東のタカフクの一部は海岸ちかくにとどまったようである。中央部に移動したふたつの集団は目の前に見える西表島東部との関係（移住伝承など）をもっていた。このことを仮に歴史的事実として肯定するならば、西表島東部を脱出する理由（例えば疫病やマラリアによる壊滅の危機）があつて、水条件の悪い石灰岩の島にあえて移住し、第二の住みかとする道を選び、そして適宜、木材や猪などのタンパク源の確保のため西表島とのあいだを往来するようになったとみることができる。このとき、第一の故郷の西表島で稲作の経験があつたかについては確たることがいえない。十五世紀後半のさきの濟州島民漂流記では、波照間島に米が流入していたことが確認されるが、それが祖納など西表島西部からか、東部からかは不明のままである。後者が証明されれば、波照間からの出作り、または一部集団の西表島東部への稲作を伴う村の再建を想像できるが、そのためには新たな考古学的知見を待つしかない。

いずれにせよ、十五世紀後半段階、波照間島で稲作がおこなわれた証拠はないが、それから百年余りのあいだに、島の中央部に天水田が点々とつくられた。慶長検地で捕捉された村々の名、山田、タハル、アカタ、平田にそのことが現われている。これらの村は現在のごとき集村形態ではなく、天水田に近接して点々と散在していたと考えられる。

のちの近世期人口の頂点（波照間島人口 2,069人）の1753年の史料に、当時、西の平田村、東の波照間村という行政単位の「其外、田畠^{たより}二便、小村数相構」（『参遣状』）とあり、これは、人口増加期において田や畑の近辺に点在する小村が多くあつたということである。実はこのとき、行政組織としての平田、波照間両村自体もまた小村の集合体であつたことが古村の聞き取りでわかっている。

十七世紀の村々もまた「田畠に頼る小村」の形態だったとみられるのは、人口規模がまだ低い段階ではますます一種の「開拓村」のごとき小村形態をとるのが自然であろうという推測からである。『宮古八重山両嶋絵図帳』での十七世紀前半の波照間島12カ村はそうした点在する小村形態だったとみる。ここでも水田（または畑）立地と古集落立地とが密接な関係にあることを再認識できるだろう。

ところで、戦後まで波照間の天水田は牛による踏耕が一般的だった。十八世紀、『諸村

農業之次第』で「田はすべて天水田」とある波照間では、九月ごろから「鋤踏」という作業を何度か繰り返し、十二月から一月にかけて田植をしている。西表島各村の当時の天水田がおおむね「鋤」による荒起し、雨降りあとの「牛踏」という順序（崎山村のみ荒起し作業が記載されず、また高那村では「鋤」による荒起しという相違がある）でほぼ共通しているのに対し、波照間島の「鋤踏」は、のちにみるように石垣島の天水田で共通する「鋤拵」のあとの「牛踏」の作業を意味すると思われる。

「鋤」「鋤」という用具の差はあるが、天水田でまず、前作で堅くなった地面を除草も兼ねて荒く起すのは、のちに来るであろう雨降りの水が地中に浸透し、土を柔らかくするため、それをまっけて牛による踏耕がはじまる。常時堪水が不可能な天水田の場合、夏場で堅くなった地面に雨が降っても表面だけの湿り気しかない。そこに牛を入れ、踏ましても土が柔らかくなることはない。荒起しの作業が雨降り前に必須である理由がそこにあった（但し、海岸の砂混じりの天水田では（石垣島崎枝村の天水田の例）「砂土交之田ハ水請次第、不鋤、直ク牛ニ而三度踏セ植付申候」とある）。

十七世紀、島中央部に小村形態で点在する集落と集落のあいだにある土地は、十八世紀前半のおよそ四倍増の人口爆発によって、広範囲な上納（天水）田に仕立てられ、変貌する。おそらく窪地という窪地（ト）からはじめて、やや高いところまでも水田化され、集落と集落のあいだと周囲、とくに現在のフカ村周辺と中の村とのあいだ、東の村周辺は^{ナーヌ} 一角が天水田となり、ちょうど多くの小村が水田で連結されたような風景を呈したことだろう。図版14の水田畔の石積みはそのときの名残りである。それでも不足する上納田は島のピシェの下方、石灰岩が露頭する畑地のわずかなトの地形にまでつくられるようになったと思われる。

石垣島では、宮良台地の小規模水田（苗代田）とその背後の本田との関係にまず注目してみよう。

宮良村は、十八世紀初頭の伝承（『八重山島由来記』）では、その昔、台地のうしろ、オモト連山手前の水岳という後背地の山から、のちの白保村集団とともに（おそらくまず台地上に）移動してきたという。近世初期には行政単位としては「宮良村」の名だけで、白保村の名はない。台地の縁辺にいくつかの小集団が散在して住んでいたと思われる。

1651年には、宮良・白保をあわせ、248人の人口を数えた。1家5人として五十軒ほどの家数であった。十七世紀後半から次第に八重山全体は人口増加の時期をむかえるが、1713年には、波照間島の過剰人口を白保にむかえ、白保村が宮良村から行政的に分離し、担当役人がつくことになった。以後、白保村と歩調をそろえて、宮良村の人口もさらに増加していく。1737年に760人、1753年に1016人、1760年に1189人、そして大津波直前の1771年には1221人となるが、大津波のために溺死者1050人を数え、生き残り171人に小浜島からの320人を加えて再出発した。

もうひとつの伝承（同上）によると、「昔、インナーラ（西かはら）とアンナーラ（東かはら）という兄弟があり、インナーラは宮良に、アンナーラは白保に住んでいた。当時、

人々は別々にわかれて住み、争っていたが、やがて二人の徳にひかれて集まった。そこで、山猪や牛馬が畑を荒らすことが多かったので、協力して、東の轟川河口から宮良の西、高山まで二里の距離に高さ二尺の石垣を積むことになった。」とあるが、この猪垣建設が極めて具体的に語られること、近年までその石積み跡が残っていたことをふまえると、少なくとも十七世紀にはこの宮良台地を横切る石積みによって、その外側に牛馬の放牧、内側には田畑という土地利用区分がつけられていたことになる。そして、前章で紹介した古くからの宮良・白保両村の苗代用小規模水田はその内側に分布する。宮良台地縁辺の小規模水田の古さを想定したのは、このことによる。

ついでにいえば、宮良村の人口増加は台地縁辺部での用水不足をもたらしたため、信仰の中心のナカダキオン（上のオン）を残し（おそらく一部の人もここに残り）、大半は現集落の下、天然井戸「アダドナー」があるフカントという場所に移動した。1747年「宮良村下知方之次第」（『参遣状』）という文書に「この村は年とともに人口が増え、千人余りとなり、家が不足し、そのうえ用水が不自由なので、村の西、三百尋余りのところの浜川という場所が用水の便もよく、村をつくるのによいので、1743年、嘆願の者たちに家をつくらせ、その数、十八戸になっている。」とある「村」はこのフカントであり、「村の西」の分村「ハマガー」は宮良河口の台地下の一带（ハマサキオンがある辺り）である。つまり、十八世紀の人口増加によって、本格的に宮良台地をおり、新たに村立てをし直す必要にせまられたのである。白保村もまた同様の過程をたどったとみてよい。

『諸村農業之次第』ではこの時期の水田を次のように触れている。

<宮良村>

苗代田 七・八月に二～三度「鋤仕」
 九・十月に三～四度「牛踏」
 「てかす仕」「畔前ぬり仕」
 土質によりヨナ・カフリ・オカ
 ハ木の葉「踏入」、五・六日後
 に「するない拵」で蒔入
 *「当村苗代田ハ惣様天水田」な
 ので「雨続候年」は「木鋤」で
 水田同様に耕す。

水田 六月土用～七・八月「四度打拵」
 十一月「てかず仕」「しるない
 拵とて鋤打候而、つきいた二而
 土直し」「畔前ぬり」
 十二月～一月「苗植付」

天水田 十一・十二月に二～三度「鋤せ」
 「雨降り次第二□式度踏せ」「畔

<白保村>

六月～八月に三度「打拵」、
 □月に「牛踏」
 十月に「てかず、しるない」で蒔入

七月に「新打取懸」
 八～十月に「三度拵」
 十一月「てかず仕」
 十二月「白苗拵」
 ～一月□頃まで「植仕廻」

十月始比に二度「鋤仕」
 「雨降次第牛ニ踏せ、水請置、

前ぬり」

～「正月始比迄（以下不明）」

畔前ぬり」

十一月「牛又踏」「てかず仕」

十二～一月始比迄「植仕舞」

ここでまず宮良村の苗代田がすべて天水田という記述が注目される。「天水田」の概念について再度考え直す事柄を含んでいるからである。

近年まで宮良村の苗代田はすべて図5の台地上と縁辺にあり、本田はその背後の北の低地にあったことは既に述べた。白保村の苗代田もほぼ同様である。その苗代田がすべて「天水田」という認識を『諸村農業之次第』が示しているとき、これは何を意味するのか。

かつて二十年ほど前に筆者が台地上の宮良の苗代田（タナー）でおこなった冬場の蒔き入れ（当時は品種も変わり、十一月十五日前後だった）と苗取り（二月中）のさい、水は豊かだったと記憶している。苗代田なので浅水ですみ、そのため畔は細く、低い。石垣島、少なくとも宮良・白保では「ナー」は水または水が湧く場所を指す（湧き水＝バギナー）。明らかにこの苗代田には流水があったのである。十五年前ごろの冬、白保村のヨナムリの下の苗代田での蒔き入れと苗取りのさいにも、水は田越しに充分流れていたのをおぼえている。ここでは畔は高く仕立てられ、一目みて水を溜める機能をもたせてあった（苗代につかうときには浅水になるよう平石で調節する）。

今回の調査で訪れた1996年5月と1997年9月には、タナーは荒れ果て、ヨナムリ下の田だけがかるうじて今も使われていた（現在は機械植えのため箱苗をつくるので苗代田はいらなくなった）。そのとき後者のヨナムリの丘の中腹からしみ出る程度の水が認められたが、田の用水としては全く物足りないと思うほどである。だが、波照間島のような純粋な天水田ではないのも明らかである。

すなわち、『諸村農業之次第』がいう「天水田」には、純粋な天水田と、台地からしみ出る水はあるが用水不足におちいる可能性が高い（降雨を溜めることも必要となる）「天水田」とが含まれるということである。このことは与那国島での田中耕司による二種の天水田の聞き取り内容と全く合致する。ただ、与那国島と石垣島宮良・白保との重大な相違は、前者が山が深く、湧き水などに恵まれただけ天水田が新しく開かれた田という認識がある（おそらく事実である）のに対し、後者では石灰岩台地の上の「天水田」から最初に始まらなければならなかったという点である。つまり天水田というだけで一律にその成立の新旧をみてはならず、古集落が立地する地域を厳密に考察する必要にせまられる。形式論理の限界を示すよい例である。

こうした眼で『諸村農業之次第』をみると、通常の苗代田とは別に「天水苗代田」は当時、新川村・石垣村・大川村・登野城村・平得村・宮良村・白保村といった石垣島南部の村々のすべて（唯一記載がないのが大浜村である）に存在し、桃里村から以北の村々にはその記載がないという事実につきあたる。

これらの村のかつての苗代田分布を精査する必要があるが、宮良・白保と同様な条件、

すなわち石灰岩の台地・段丘の上につくられた小規模水田（苗代田）が必ずみられる筈である。図6にみられる前勢岳・バナナ岳の山麓から段丘にかけたバリ（細長い谷間）の水田に、水の出具合いとその古さにおいて基本的に宮良台地の天水苗代田と同じものがあるだろう。共通するのは石灰岩地帯であること、集落が山手から移動してきた伝承をもつことだが、バナナ岳・前勢岳などの山をすぐ背後にもつ点が宮良・白保と異なっている。

宮良村の本田地帯は「仲田原」「底田原」などの名称をもち、台地の北側、水岳を含む小丘のつらなりと台地とのあいだにひろがっていた。ここは轟川の上流域にあたり、白保村の本田も入り組み、起伏した土地の高いところは畑に、起伏のあいだの低いところは水田になっていた。筆者は1983年に初めての稲作をここで経験したが、今から思えば、さまざまな水田があったことに気がつく。起伏のなかの小さな緩傾斜の窪地には田越し灌漑の天水田があり、だが同じ起伏のあいだにも小丘側の湧き水からの流れを溝で通して利用する水田があったり、またその流れのさきには湿地のような田（深田）もあるといった様子だった。ここが『諸村農業之次第』にみる宮良・白保村の「水田」「天水田」地帯である。

水田のさまざまなタイプはこの起伏ある地形に規定されているが、これらまとまりある水田地帯が形成されるためには相当の労力を必要としたと想像される。もうひとつ、これらの水田の所有者の多くが近年まで石垣四箇の人間（四箇以外の村の者は今もく石垣と自分達を区別する）だったという事実もつけ加えておく。このことは、これら水田が近世期「おゑか田」の系譜をひくか、明治の土地整理のさいに多くの水田が四箇の者達によって登記の対象とされたためとみる。つまり、この地帯の水田群が基本的におゑか田も含めた上納田だったと考えられるのである。十八世紀に入ると『参遣状』には「諸士并百姓仕明田」の記事が多くなる。沖縄島と異なり、八重山では仕明地の竿入（測量）をおこない「仕明請地帳」を発給することはなかったようである。このため、役人層の恣意に任せられた公算が大きい。「百姓仕明田」についても全体として（当時の宮良・白保の百姓よりも）四箇の百姓によるものがずっと多かったとみているが、確たる証拠はない。八重山においてこの分野の研究が更に深まることを期待している。

いずれにしろ、村々の人口増加は上納田の増加と自分たちの食糧増産の必要を生み、その結果、田および畑の「大開墾時代」を迎えたと考える。こうした過程でこれら水田群も開発されたものとみてよいだろう。

次に白保村から北上し、カラ岳の北・西に展開する水田群をとりあげる。ここは十八世紀前半、新たに村立てされた桃里村とうざとの周辺（註12）にあり、宮良・白保の本田地帯と似た起伏ある地形である。十八世紀に本格化する人口増加により、新村建設の以前から、石垣・登野城・平得・宮良・白保の各村がこの地を食糧増産のため畑の出作りに利用していた。だが、カラ岳周辺の窪地や湿地の水田化は本格的におこなわれた気配はない。桃里村の新設によって新住人を動員した組織的な水田開発が可能になったのであろう。

明治二十六年八月、笹森儀助はここを訪れ、次のように記している。「（桃里村の）西

は一里余りでオモト岳の山脈に至る。そのあいだには丘陵と沼田が多い。真南は村に接して水田が多い。…村の周囲には水田と丘がめぐっている。…繫牛馬七頭、牧詰牛馬四百十二頭…これは皆、四ヶ村土族吏員が放牧した数だという。」

図15で名前を記した水田は1990年当時の聞き取りで復元したものである。カラ岳と桃里村とのあいだは特に起伏に富み、小さな谷筋が多くあり、その底には低地があって、それぞれが水田化されていた。水はカラ岳から谷筋の先にしみ出していたようである。

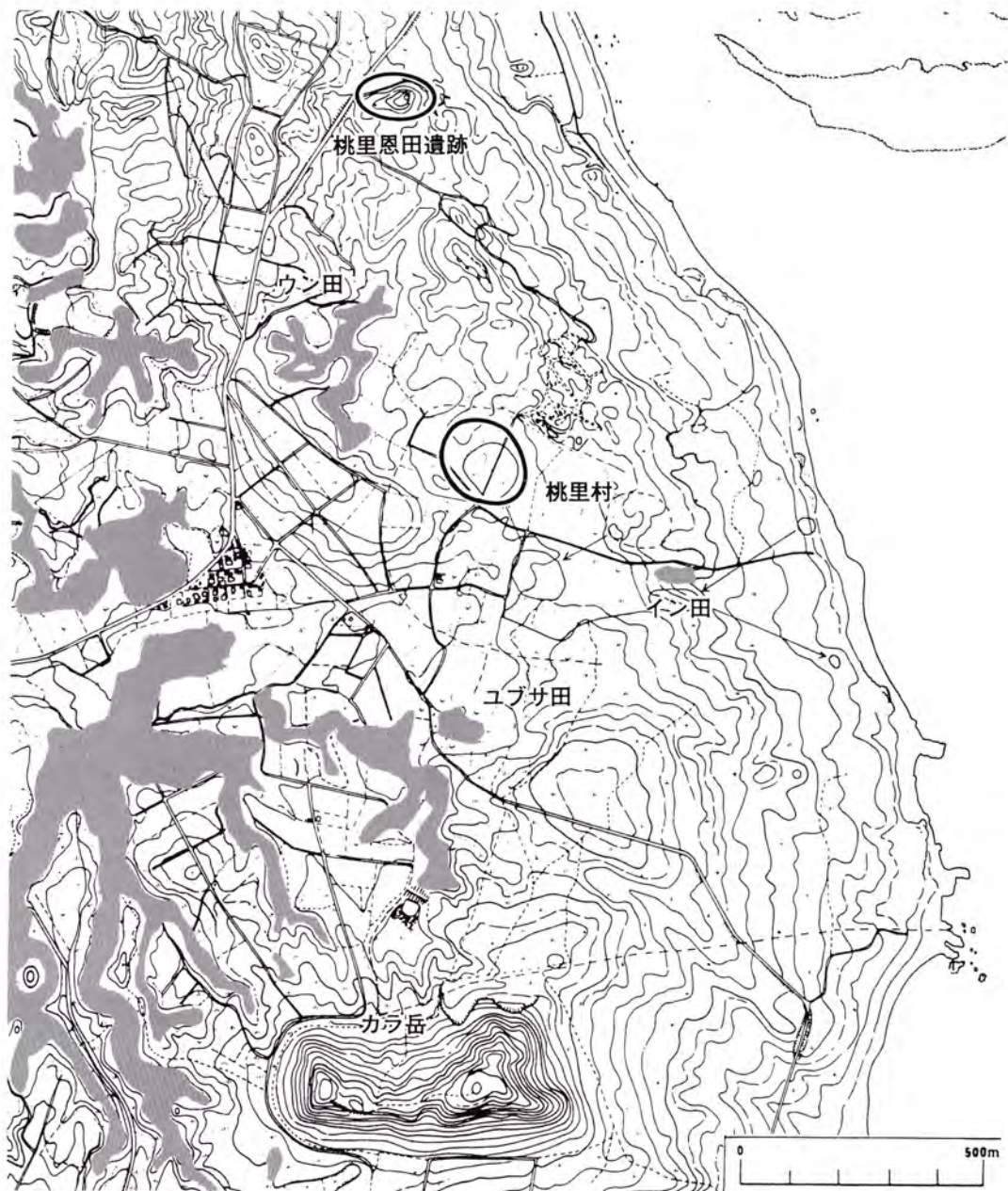


図15 旧桃里村周辺の水田分布（戦前期）

桃里村の東のイン田は、緩い傾斜に深く落ち込んだ、窪地というよりドリーネ状の凹地につくられた小規模水田であったといい、村のすぐ西のウン田は傾斜ある谷筋がいくつか集まり、その傾斜に沿って図版18（21頁）と同様の小規模水田群が縦に並び、その最下部

は沼のようなやや広い深田になっていた。そして、用水を最終的に吸い込むガマがあったという。ちなみにウン田の水田群のすぐ北には、炭化米を出土した「桃里恩田遺跡」の小丘がある。石垣島東部のこの遺跡が「生きていた」当時、もし稲作がおこなわれていたとすれば、この起伏ある石灰岩土壌の湧き水（というより漏水水といった方が適当である）を利用したドリーネ状の窪地や谷筋がその舞台だったと想像することができる。これらは石垣島事例4 (b)で示唆した二つのタイプ、すなわち、孤立した窪地・谷筋単位で完結した小規模水田群（田越し灌漑のみ）と、谷筋窪地+低地（の水田は笹森のいう「沼田」）の水路灌漑による分節化した水田群のうち、前者の例である。

後者は図15でおもにカーラ岳（「カーラ」は流水を意味する。カーラ岳の周辺、とくに北と西の多くの谷筋に漏水水を供給し、宮良川の源流のひとつになっている。）の西に展開している。図版35に水田脇の溝の例を示したが、このような簡単な溝がなぜ必要となるかは、谷筋周囲から流れる漏水水を集めて低地の田に流すという用水路の側面と、その反対に梅雨時の田にたまる過剰な水を吐き出す排水路の側面があると思う。この溝によってやや広い谷筋+低地の広い範囲の水田化が容易になった。こうした立地の水田化はいずれにしる個人では出来ない。まとまりある上納田を開発する手法であろう。石垣島事例2シーラ原の山麓+海岸低地の水田もこのタイプに属する。

第三のタイプは、これら周囲の小さな谷筋から水が集まり、いくつかの川筋となってオモト連山下を流れる宮良川上流の、山と丘に囲まれた低地につくられた石垣島事例4 (c)の水田（大浜村底原）である。小川を簡単な堰でせきとめ、溝で導水して低地のある程度の面積を水田化したもので、ここでは堰+溝の形式が登場する。事例4 (c)での筆者の経験では、堰といっても大きい石を積み、隙間に小石を詰めれば出来上がる程度のもので、水田が川沿いのため溝も長いものではなく、集団的な労力をそれほど必要としない自分田の開発に適したタイプのように思われた。轟川に沿い、堰（コンクリート）から直接導水する田（白保村）でも、限られた面積（2反ほど）の細長い田だった（なお、石垣島全域の水田分布と固有名称は『石垣市史・民俗（上）』1994に収録されている）。

石垣島には大小・長短の川の水系が多くある。その流れを利用した水田または水田跡、



図版35 カーラ岳周辺水田の溝（水路）

土地改良済みの田などのいくつかをまわった限りではあるが、川が山から出たところである程度広い平地がひろがっている場合には、上流に堰を設け、そこから溝で上の田に導水する、堰+溝方式のタイプで共通するように思われる。川の両側が狭く、川に沿う細長く水田があるところでは、川をせきとめた場所から直接、田に導水したものが多い印象がある。とくに大きな水田平坦部をもつ名蔵の白水川流域や石垣四箇市街地の北の平田原のかつての灌漑水系については今後の調査課題として残る。

久米島の水田立地については、小川徹氏が「久米島民俗社会の基盤」（註13）という重要かつ長大な論文を発表しているのので、それを紹介しながら検討を加えることにしたい。

小川氏は主に1962年撮影の航空写真を使い、久米島の水田を、A谷頭型、B谷底型、C谷壁型、D山脚型、E段丘型、F兼久型の六類型に分類している。おおづかみにいえば、E段丘型は具志川村の水田のほぼすべてにあてはまり、その一部については筆者が既に久米島事例1・2で紹介した。F兼久型は近年まで仲里村の海岸低地に広範囲な展開をみせていたが、今は畑地に転換され、跡形もない。残るA・B・C・Dの類型は、彼の説明によると、次のような像が浮かびあがる。

A谷頭型水田とは山地の谷筋が始まる部分にあり、「久米島の場合、谷頭部にも谷底に土壤堆積があり、水があれば水田農耕も可能であった」ので、小面積かつ不定形の田が開発された。載せられた航空写真だけでは分りにくいが、要するに山地のなかの谷筋の始まり部分に孤立して点在する水田群とみてよいのではないか。もし、孤立せずに、谷筋の上から下まで展開していれば、次のB谷底型に分類されるだろう。

B谷底型は「山の中腹以下」の谷底につくられた水田である。「狭いが平らな谷底が形成され…このような特質を備えた谷が幾本となく並行して山腹や旧段丘の内部につくられ、樹枝状に延びている」。少し分りにくいが、「樹枝状に延びている」というのは、谷川が流れる谷筋につくられたことを意味するだろう。それであれば、前章で扱ったアーラ岳近辺から浜に落ちる谷筋の小規模水田の事例3もこれに含まれることになるか。

C谷壁型は「谷壁の傾斜は緩いとはいえ二〇度以上に達するから、階段になったテラス式の水田、本土でいう棚田や千枚田の形態をとる」という説明から、要するに山腹の傾斜に沿ってつくられた水田ということであろう。

D山脚型は「山脚または山麓線に沿うて造営された水田の形態である。山脚、山麓と呼んでいるのは山あるいは急傾斜地が平坦な地形に移る、あるいはあい接する時の漸移地形を指すことにする。山脚にしばしば湧泉が見られるが、それを頭として下流に谷が出来ている場合には…Bの谷底型に分類される」。実態を見た者でも言葉にして見ない者に伝えるのが難しいのは筆者も経験することだが、この記述もわかりにくい（航空写真も載せられていない）。「山麓に沿うて形成されるもの」「山麓線にみられるもの」といいつつ、「比屋定のシンバルでも海蝕崖から隆起珊瑚礁原に移る部分」もそれに含めているので、よけい混乱する。シンバルは比屋定バンタ断崖下の平坦部であって、これを山麓というわけにはいくまい。

以上の類型のすべては現場を確認して記述したものではないような気がする。もっぱら航空写真を判読してなされた分類ではないか。この点を差し引いてみれば、A・B・C・Dの類型は山の内部に孤立した水田群、谷筋に沿ってつくられた水田群、山腹の水田、山麓というよりそこからの緩傾斜またはやや平坦部にある水田、と表現しなおすことができ、要するに山系の内部からその裾にかけて展開する水田のタイプを表わそうとしたものである。

次に彼はこれら類型の地域ごとの分布と時代的順序を問題にする。

航空写真にみる水田類型の村ごとの分布表によって、村の地域にどの類型が卓越し、その他にどのような類型がみられるかを示しているが、これは村それぞれの水田の歴史的展開と変遷を含んだうえでの、航空写真作成時の1962年の分布にすぎないので、そこでの村落タイプは結局その地理的条件をなぞること以上を出ない。

これに対し、水田類型の「発生上の前後関係」を問題にする彼の議論には評価できる観点多く、「ありうべき」可能性を考えるうえで先駆的かつ基本的な論点を提示している。

1) 「この点は史料に依拠せねば断定がむづかしい問題であるが、このような史料を期待しえない以上、他の観点、たとえば後に扱う村落移動の事実と対比してみるとというような方面から窺ってみる他ない」として、古村とその移動に関係づける必要に言及している。

2) F兼久型の大多数は新しいとする。これはよい。ただ、具志川グシク下のマエガニク・グシガニク両村と筆者も確認した水田跡を具志川グシクとの関係で、彼が十五世紀成立の「兼久型としてはきわめて古い事例」とする点は留保したいところだ。確かに後背の台地からの水の便は今もあり、海岸に極めて近い不利をおぎなうだけの条件があるが、その古さについて筆者はにわかに信じがたい。

3) 「水理に恵まれた土地であるほど水田化は容易であったことは確かであり、…この観点からすれば、降水の他に頼ることのない水理条件、すなわち天水田」の成立は遅いとするのも肯定できる。山に恵まれた久米島では、与那国島と同じく天水田の成立は新しいとみてよいだろう。ただ、このことを一般化してならないのは既に石垣島の事例で触れた。久米島の史料中の「天水田」が「降水の他に頼ることのない」純天水田ではなかった可能性を久米島でも考慮すべきである。

4) E段丘型が「土地は豊富であっても水理にはもっとも不利な場合が多かったと考えられる。したがってその開拓は他の型よりも遅れた可能性が高かったのではないか」と彼がみるのは、のちに触れる溜め池一水路による久米島の灌漑方式の成立が十七世紀にはじまる点を踏まえてのことである。たしかに段丘型水田の拡大は灌漑方式の成立によるとみてよいが、初期の段丘型水田の成立は別問題である。久米島事例1の初期の段丘最上部の田は灌漑方式成立以前からの古いものと思われるので、その成立と拡大は混同されてはならない。

5) 「久米島人のいう“山の汁”とは山からしみ出てくる僅かな水の恵みを指している。その意味では、A谷頭型、B谷底型がもっとも可能性を有し、C谷壁型、D山脚型も“山

の汁”が与えられるなら早くから造出された可能性がある」とする点は一般的に語られ過ぎていて、谷筋の田（A・B型）は谷川が利用出来るが、山腹や山麓（C・D型）では条件づきで早い可能性があるというのは語らないに等しく、まさにその“山の汁”の実態に水田類型成立の早晩を求めなければならなかった筈である。類型論の限界とまではいわないが、水田の実態は、航空写真の上からの視線による地形・形状以上に、現場で水田または水田跡を見たらまず最初に発する質問「水はどこから来るか」から始まるのである。

率直に言えば、ここまでの小川氏の論点は机上の議論にちかく、彼自身そのことを承知しているが、その記述を読む者が以上の感想を明らかにしておくのも礼儀のうちと思う。

彼の長大な論文の白眉は「三、池と溝の歴史」である。「堤井」「水道」「詰溝」など久米島独特の灌漑水利様式をとりあげ、「しかし、状況は今日一変した。不用となった溜池や水路は放棄され急速に湮滅しようとしている。現時点でこれを検討しておくことは史実保全のためにも必要ではないか」という切迫した動機を語り、「意外なことに僅々三百余年の間に池溝の名称が変わり、家譜上の名称との同定も現在まだ充分とはいえない」という困難のなか、現場におもむき、家譜の記述をつきあわせ、多くの「池溝」の歴史的同定をおこない、それらの成果の一部を地図に記した。

筆者が久米島に行った1996、1998年にはいうまでもなく具志川村仲地の水田が残るのみで、かつての水田は壊滅していた。私たちが灌漑水利の実態に触れるためには小川氏のこの研究によるしかない現実がある。

それによれば、十八世紀仲里間切では、多くの用水整備事業の発端として「芋田苗代」が早魃の年には水を汲み入れなければならない状態であることを家譜はあげている。同時に「芋田苗代」がおおむね「天水田」だったとも記す。史料中の「天水田」が純天水田ではないことは繰り返さない。久米島では近年まで苗代田と田芋が共存している事情をかつては「芋田苗代」と称している。

具志川間切では十七世紀前半には長い水路建設がはじまる。

「西銘大溝」は白瀬川中流から取水し、延々たる溝を導水し、久米島事例1の西銘村ウチガースクまでひくが、水田用水だけでなく飲料水に使ったことがわかる。

「富祖古溝」は現在の上江洲ダム上流の川をせき止めたニブチ池（堤井）からダルマ山（フソコ山）の中腹をまわる溝によって、現在大岳小学校校庭から上江洲村へと導水した。図版34はダルマ山中腹を巡ってつくられた富祖古溝の跡である。上江洲ダムにむかう現在の舗装した山道のすぐ下を、山腹を掘り下げ、土堤をつくって通した溝だが、人が悠々と通れるほどに意外と幅広いのに驚く。

このほか仲地村へは、久米島事例2で紹介したヤンガーチ（山垣池）の水系によった。ここでも堤一溝による貯水・導水施設である。現在、仲地の集落内にも小さな水田（「芋田苗代」）が残っていて、水は近くのナカチガーからひいている。この水もヤンガーチ水系とともに、段丘上の水田群に集められる。

このように、久米島の水田を考えるうえで「池と溝の歴史」を抜きにできないことを強



図版36 フスクンズ（富祖古溝）跡と仲地の小水田

調しながら小川氏は「今後の課題はこの灌漑水利体系の完成をみるまでの道程を可能な限り遡及し復元することではしかない。これまで述べてきたことはその第一歩にすぎないが、現時点での調査と史料上の推理を通じて、まず近世の状況を知り、さらに近世以前の状況にまで溯ぼってゆくことが今後の課題として残されている」と述べる。

ところで、私たちは水田類型の歴史的な展開だけでは満足しない。農法や農耕経験のもつ意味も含めて水田立地を考えたいと思っている。その点で、事例3の儀間村のアーラ岳周辺の谷筋の田の興味ふかい特徴を再びとりあげて要約しておく。

1) この水田の用水は谷と谷川の上の方で取水していた。河川でも小谷川でも往々にして田の面は川の水面より高いのが普通である。川は底をえぐって流れるからだが、そのため、川の上流で取水することになる。湧き水または川を直接、田に導水すれば一次用水、取水した水を溝で通し、遠距離の田に導くのは二次用水、という分け方をすれば、この水田は一次用水を田越しに流して使っていた。このさい、谷川は二次用水の溝と同じ役割をしている。下の田でも谷川から取水でき、またそうしたからである。実は、溝はこの自然谷川の人工版だったということである。ちなみに石垣島の宮良の本田の一部では溝からの用水を田越しで使い、同時に溝の用水は下の田でも活用されるから、用水系としては久米島のこの谷筋の田と同じことである。池・溝で灌漑した久米島の水田群もおそらく同様であろう。とすれば、谷川利用と<池・溝>灌漑とは規模と利用範囲の違いを除けば用水系の原理としては同じである。水田の増加にみあう用水の増加を図るため、流水からの堰止めまたは溜め池（これも原理的には谷筋の田の用水系と同じ）が大規模におこなわれる必要があったのであり、山深い久米島だからこそそれが可能だった。残る問題、与那国島、西表島、石垣島でなぜ、それがなかったのかについては稿をあらためて考えてみたい。

2) 谷川利用のこうした田でも旱魃の年には谷川が涸れたという。しかし天水田でないのはいまでもない。最も注意すべきなのは、おおむね用水が涸れることがないこのような小規模水田で、収穫後も田の面を乾かすことを嫌った事実である。次年の耕作を考えれば、この方がある意味で合理的だ。もともと与那国でも西表島でも同様な農法だったことは既に示唆した。古琉球稲作を考えるうえで、この事実は重要だと思う。これまで議論に

なってきたヒコバエ作や二期作（註14）は、共通の土台、つまり一期作収穫時とその後も湛水したままであった水田をもっていたのであり、それをもとに選択のふたつの道があったのである。これを全く異なるものと考え、前者が遅れ、後者が進んだ農法だとする偏見は成り立たないだろうことがわかる。

徳之島・奄美大島については多くを語るができない。これら島々を視野の外においてきたことがとくに沖縄島にとって歴史的かつ道義的にみて如何ほど大きなマイナスであるか、思い知る機会を与えられたと思っている。ここでは今後の見通しを得るため、地元先学の調査研究を紹介しながら水田立地のみならず稲作全般について触れておきたい。

徳之島の近世段階の人口推移は次のとおりである（註15）。

下表のうち、十八世紀後半の人口減少は砂糖貢納制（換糖上納）の導入、飢饉、千数百人規模の奄美大島への「逃散」によるものであり（註16）、この時期は徳之島における過酷な社会変動期だった。

1659年	17,423人
1753年	22,392人
1761年	19,645人
1772年	19,217人
1785年	12,734人
1824年	18,155人
1830年	18,963人
1838年	19,664人
1845年	20,910人
1852年	23,447人

『徳之島前録帳』によれば、1690年の条に「（徳之島）三間切で新田仕明が多くおこなわれた。徳之島と沖永良部島とが行政的に分離された」とあり、1736年には「西目間切の真瀬那川を玉城の腰横に堀を切り、西に水を通して、川筋を田地にする手配をした」とある。十七世紀後半から十八世紀前半にかけて、人口増加に対応する新田開発が本格的になり、それに伴う水利の改良もはじまっている。

溜池の最も早い例は1670年の諸田村の溜池（現在製糖工場の用水池になっている）で、遅れて1781年には和瀬村の溜池、検福・糸木名両村の溜池がつくられる。和瀬村の溜池は「御田地用水ならびに村中用」とあるように、水田用水と飲料水の供給源であったが、その後「樋」が壊れたため、1819年に夫数1540人で修理した。1850年の記事には、和瀬村の溜池の上にさらに新たな溜池をつくり、隣りの諸田村の溜池が土砂の流入で浅くなったため浚渫したり、このほかにも全島において既存の溜池に加えて新たな溜池を建設している。

和瀬村では、次頁のかつての水田分布図にみる山がわの「マンナ池」「ウン池」がそれと思われ、これらが十八世紀後半から十九世紀前半にかけて建設されたことがわかる。その結果、そこからの用水路が集落南側まで伸びて、アーク、タシキ山の北、コント、マイヤマまでの地域の水田用水を供給するようになった。また、新たな水田群にみあって、タシキ山そばに新たな第二の神田（これも近くの水田群の最も上に位置する三角形の田であった）＝「マツイ田」が設けられる。これに明治から戦後にかけて開発された新田も含め、分布図に示されている。

ところで、松山氏によれば、「泉田（湧き水からの水をひく田）をもっていれば、稲をとりそこなうことはないといって、人々は泉田をほしがるものであった。それに比べるとニズ（水路）から水を引くのは、人々が水を取りあひすることになるので、ミジハラシヤツ

ケ（水ひきけんか）があとをたたなかつた」（註17）という。これは、シマダイ（鋤）とマンガ（馬鋤）を牛に引かせてする田の耕起（ターワク）を何度もおこない（そのため牛も労働過重になるほどだった）、田の土をこなしておくことが大きな関心事であり、田の水が涸れることが最大の心配だったからである。和瀬村では最初の耕起を「アラワク」、二度目を「テングナ」といい、七回以上やる人もいた。

徳之島町の他の村々では鋤で田を掘り起していくくアラウチと、まず牛を田に入れて土を柔らかくするくタークナシの方法がとられたが、アラウチをする「田には年中、水が溜まっていた」（註18）という。こうしたことは既にみたように琉球列島共通の耕起法である。

また、伊仙町でも伊仙ミンツキの水田は「天水田で、降雨をまった田越えかんがいをしてきた。降雨が少ない時は田植えができなかつた」といい、そのため「天水田等は年中落水せず」（註19）というのは、「天水田」（準天水田）に限らず「水を溜めたまま」にするのが普通のやり方だったことを示唆している。



図16 徳之島和瀬ムラ水田分布図（原図松山光秀）

さらに松山氏は和瀬村のかつての水稲品種を詳しく説明している。

最も重要かつ古いと思われるのは「フンナイ」（この名称は「本ナリ＝元来の種」とみたい）別名「ウヤダネ」というモチ種である。これは他の品種と異なり、旧十月節に浸種、播種して越冬させた翌年二～三月に田植え、六～七月に収穫する晩生種である。草丈四尺位、長い毛がついた粳、「穂のたれ具合は豊作のように見えるものであったが、収穫してみると量は少なく、上田で一畝から二斗ぐらいしかとれなかった」（これは長穂であるが、分けつが少ないことを意味する）「藁だけは大事にとって保存」（つまり、長く丈夫な稈）という特徴は筆者が栽培した八重山・沖縄島在来稲と明らかに同じであり、その古さがわかる。「ジコオ」という品種も、粳の先の長い毛、分けつが少ない、痩せ地にも生育し、難脱粒性という特徴は八重山・沖縄島の在来稲と共通する。

これに対して「チジュミ」別名ボージという品種は二月播種、三～四月に田植え、七月に収穫する作期がより短いもので、粳に毛がなく、小粒で少しモチ味があり、粒数も多くつくが、極めて脱粒性が強い点が特徴である。一部の特徴は波照間島にあった外来種「ボーザマイ」種に似るが、それより作期が長いのが異なる。「トーブシ」という唯一の赤米は、長円形の粒で、全くモチ味がなく、冷えてしまうとまずい、生長はおう盛だが軟弱な藁、葉・稈も赤褐色、容易な脱粒性なので、稲束をたたきつけて脱穀する。東南アジアによくみられるタイプのようだ。

このように簡単にみても、徳之島の水稲品種を含めた稲作の基盤はかつての琉球列島各地と共通していたことをうかがうことができる。

奄美大島については水田跡をみてまわっただけで、ほとんど聞き取りをおこなっていない。そのため、次のふたつの研究にもっぱら依拠して概括する。

ひとつは『改訂名瀬市誌1巻歴史編』の桐野利彦「耕地開発と農作物の変化」（第一章第五節）で、名瀬市域に限定されるが、これはもう堂々たる奄美の農業史といえる力作である。

近世以前（中世）の水田ができる立地について、名瀬市域では（事例2で筆者がとりあげた）「各河川にそなた平野」を問題にして、そのなかでも「最下流の砂丘裏」は「当時まだ相当な湿地で、かえって水田としてまずかったかも知れない」とし、また川の上流部の扇状地は「水がない」ので「水田になりにくい」ものの「扇状地末端からは水が湧くので、そこから下流域までは、ちょっと手を加えれば水田ができる」として、河川の上流扇状地のうち湧水が出る地点から中流、下流域までの地域に絞られる可能性を述べ、筆者がふれた芦花部については「芦花部川の場合、芦花部部落より下流は水田適地が多く」、「部落から上流は扇状地で、水田とはなり得ない。芦花部部落は水田と畑地域との境にできた部落である」と述べている。桐野氏は主流たる細長い川（数キロにわたる）の流域を問題にしているが、筆者は下流またはすこしさかのぼった部分の、山裾のちいさな袋地（マタ）や緩い傾斜地（そこには山からの表流水や小さな谷川がながれる）あたりに最初の水田があったのではないかと狙いを定めている。それは、奄美大島の河川の流域では当

初からの集落立地が下流部の山裾に多く、それに近い小規模な水田適地はそうした部分だからである。主流の川の流域はのちに水田開発の対象となったとみている。

だが、なんといってもこの論文の圧巻は「耕地においても、農作物においても、中世人が想像もしないような大変動が起こった」近世期の詳述である。第一に十八世紀前半の間切役人田畑佐文仁による大島各村にわたる広範囲な水田開発が注目される。これは主に海岸低地の水田化だったようで、それ以前まで海岸線は現在よりも内陸に入り込んでいたが、その部分の干拓である。彼が手掛けた村々のうち、笠利の手花部、喜瀬、芦徳や龍郷の浦や屋入はある程度広い海岸平坦部をもつ一帯である。これにより田畑約五百町歩を開発した。第二に、それと前後する十七世紀末から十八世紀初頭にかけて、薩摩は砂糖生産の本格的移植と収奪体制を開始する。当初、砂糖の一定量（三五〇万斤）を強制作付・強制買入れで男子十五歳～六十歳に割当てたものであり、公的にはまだ貢租化していなかったが、1745年には貢米を砂糖量に換算し、すべて砂糖で上納させる「換糖上納」がはじまる。桐野氏によれば「大島本島三五〇万斤の定式糖を生産するには、約九〇〇町歩の土地を必要とする。…水田中心で畑の少ない時代であるから、急にそういう莫大な甘蔗栽培ができる筈がない。いや応なしに甘蔗を栽培しようとすれば、自然に既成の耕地、すなわち水田に進出せざるを得ないであろう」ということになり、砂丘裏などの湿田を除き、扇状地から平坦部水田までがすべて（甘蔗）畑地に変貌する。その結果、「平地は甘蔗畑でうまるので食糧畑は山地斜面にならざるを得ない」くなり、食糧たるイモ作は平地から山地の段々畑へと追われていく（「甘藷は平地に全くなし、凡て片下りのところなり」奄美大島誌料1805年）。こうした状態を氏は「いま大島各地に驚くほどの高さまで見られる山地斜面の耕地は、当時の島民の命の綱で、この山地斜面の耕地には、大島の悲惨な歴史が秘められている」と評している。また水田の甘蔗畑化については明治七年の『南島誌』の分析から「注意に値するのは、稲作は水田の三五パーセント弱に過ぎず、水田が水田として機能をしていなかったことである」とし、「そのため延享以来（註一換糖上納制導入以降）、大正中ごろまで、約一七〇年間、大島では大部分の水田が…もっぱら甘蔗畑となった。それが大正中ごろになって、これら甘蔗作付の水田が、ふたたび延享の昔にかえって、本来の水田にかえることになったのである。思えば、奄美大島の水田は、まことに数奇な運命をたどったのであって、感無量なものがある」と指摘している。

こうした農業史的概括をふまえて、もうひとつの和田正洲「奄美諸島の農耕技術伝承」（註20）をみななければならない。ここでは主に、牛による「踏耕」とマタバエ収穫のふたつの事実がどの程度（時間を）さかのぼって聞き取りできたかに注意してみよう。

これをみるかぎり、「踏耕」は奄美大島以外の戦前期まで明瞭な痕跡を残しているが、奄美大島ではどうもそうではないようだ。笠利町節田では大正後半期に犁や馬鋤が導入される以前、天水田での牛（一頭）と人による田踏みがおこなれたが、宇検村の湯湾・久志のふたつのムラでは犁導入の以前には、トーチムンという在来鋤での耕起しか聞けなかった。住用村石原では、犁が導入されたあとも、犁がないか利用できない人は「牛踏」をす

る場合もあったようだ。つまり、大正年間での犁導入以前にはトーチムン（在来鋤）によるか、細々とした牛一頭だけの「田踏」のいずれかが所によっておこなわれたということである。大正年間に大島では水田と稲作の復活がはじまる。これと、鹿児島からの犁導入はほぼ同時期らしい。その以前の在来鋤あるいは牛一頭の田踏みというのは、稲作と水田が甘蔗栽培によって痛めつけられた歴史の残像とみてよいだろう。

ただ、奄美大島以外での「踏耕」も微妙にその役割を変化させている。徳之島の事例は2～3頭の牛で田を踏ます「タークナシ」のあとに鋤または在来犁・馬鋤で再び耕す方式が定着していることを示す。ここでの「踏耕」は犁耕の前段階作業という性格に変化している。このとき、田は少量の水（または降雨）がある状態だったと想像する。既に触れたように田に充分水を張ることができれば鋤によるアラウチが可能だが、そこまでいかない状態の田で「踏耕」がおこなわれたと思われる。さらに興味あるのは、犁を使いきれない若者が「スキで耕起する代わりに、牛2、3頭横に並べて田を踏ませたと親から聞いた」という上面縄の事例で、ここでは「踏耕」が犁と馬鋤（鋤耕ではない）による耕作に代替されていく歴史的变化がうかがわれる。つまり、鋤耕と「踏耕」は田の状態（立地・水利）によって使い分けられてきたが、犁と馬鋤は「踏耕」の代替技術として登場したということである。徳之島の事例はそれらが併用されながら、しかも犁耕+馬鋤を中心とした耕作方式へ移行しようとする一種の過渡期を表している（水田の条件によって犁耕+馬鋤が不可能な場合もあっただろう）。

「踏耕」がながく存続したのは沖永良部島や与論島のような典型的なサンゴ石灰岩の島だった。同様の条件下の波照間島の近世において「鋤耕」は徳之島の例とは逆に「踏耕」の前段階作業であったことを想起されたい。サンゴ石灰岩の島での「踏耕」の優位は変わらなかったのである。これが田の条件（立地・水利）と関係するのはいうまでもない。

マタバエ収穫については、その収量は前作の1/3または肥料を入れて半分というのが一般的な聞き取りである。だが、そのときの条件を厳密にみる必要がある。その場合、水が田にある状態で収穫し、そのあとも同じ状態だったのか、聞き取りはこの点を明確にしていない。ただ徳之島天城町の例でマタバエ収穫が「可能な田はミッタ（湿田）であり、乾田はできない」、与論では「天水田でもあり、田の水が少ないためか、マタベは聞かれなかった」という例をみるかぎり、マタバエ収穫には田の水がなければならなかったことが想像できる。和田氏の「今回の資料だけであえて判断すると、マタベは自然に放置しておいただけでは、牛馬の飼料にしかならず、たとえ収量が少なくとも、食糧として一期作の程度の収量を期待するには、それに相当する技術を加えねばならなかった」という総括は、的はずれであると思う。彼の視点は、現在の、水を落として収穫した田で発生するマタバエの姿を想定している（以前の筆者もそうだった）か、マタバエを実際にみていないために、思わぬ過ちを犯したのである。おそらく、この聞き取りの時代には、全般的な水不足、または水を落として収穫する利便性への傾斜がはじまっていたと思われる。『南島雑話』の「すべて（一期作は）六、七月に熟す。気候が暖かいので収穫したあと、芽が出てもう

一度熟す。これをマタワヘという。これは初めのものよりも実入りがよく、味もよいという」「三番穂は刈りあとに生えると、八、九月に熟す」という記述を信じてよい。但し、田に湛水した状態という限定がつくのは先述した筆者の栽培実験で明らかにした点である。

*

以上、水田の歴史的状況をめぐって〈観察〉〈議論〉にわけ、島ごとの資料に即して、いくつかの指摘をおこなったつもりだが、これで「序説」としての役割は充分だろう。念のためにいえば、読者が〈観察〉を読み飛ばし、〈議論〉だけを読むことがないように願っている。机上の議論や先入見を避けるために〈観察〉にたちかえっていただきたいというのは、筆者の自戒でもある。最後に、少なくとも筆者にとってより鮮明になった諸点を要約しておきたい。

A. それが稲作をとまなうものであれば、初期の集落立地のちかくに水田立地を想定してよいと思われる。そのさい、その地形（石灰岩台地・山麓傾斜地など）の湧水にも程度があるので、あまり一般的に水田の立地を想定するのは危険である。条件が理想的でなくても、ともかく当時の集落が水田として利用し得る場所があったという点が大事である。準天水田でも初期の水田になりえたことを考慮する必要がある。

B. 文献でみるかぎり、与那国島のみならず奄美諸島、さらに沖縄島でも初期の水田では、牛による踏耕とヒコバエ収穫がセットになっていたと思われる。この特徴から当時の水田の次のような条件を推定することができる。

- a) 前作収穫のあとのヒコバエを収穫できる水田は夏季でも水が溜められる（水の切れない）水田に限定される。それは深田や天水田ではない。小さな谷川または山からの表流水がたとえ少量でも常時流れこむ田であった可能性が考えられる。
- b) 踏耕は鋤や鋤がない段階での普遍的な耕起法である。冬場の雨を前提にすれば、a)の水田はいうまでもなく（純・準ともに）天水田でも有用な方法であり、永くおこなわれうる汎用性があった。
- c) 古琉球期の沖縄島の一部でおこなわれた二期作法も、a) b)とともに、またはその延長上に成立したのと考えてよい。実は、あと作の耕起を考えて、田からあえて水を落さなかった（田に水を溜め続ける）という伝統的態度が古くからあり、ヒコバエ収穫も、二期作もその上に成立している。

C. 近世になり、まとまった地域の水田化が要請されたとき、水田のさまざまなタイプが現れる。西表島の谷川・表流水の谷間から低地（沼田・深田）への水田化、石垣島の起伏ある地形での堰・溝による灌漑、天水田、深田の多様化、久米島の溜め池＋溝の方式による水田の拡大などである。波照間島では先駆的な純天水田が大規模に登場する。徳之島では溜め池（堰）＋溝方式で、奄美大島では川沿い・海沿い平坦部で水田が拡大するが、途中から徳之島では甘蔗畑地の大規模な開発、奄美大島では水田の甘蔗畑への強制的な転換がおこなわれる。

こうした歴史をさらに具体的かつ詳細に現場で跡づけることが今後の課題となる。

- [註] 1 田中耕司「与那国島の水田立地と稲作技術 —蓬萊米導入以前の伝統的稲作の体系を中心に」(渡部・生田編『南島の稲作文化—与那国島を中心に—』1984、法政大学出版局)
- 2 安溪遊地「与那国農民の生活—西表島との対比から」(同上)
- 3 松山利夫「与那国島における水田の分類と在来の稲作農具」(同上)
- 4 安溪遊地「西表島の稲作：自然・ヒト・イネ—伝統的生業とその変容をめぐって—」(『季刊人類学』9-3、1978、京大人類学研究会)
- 5 中鉢良護「<波照間の稲作>覚え書」(『波照間文化』3号、1994、波照間文化協会)
- 6 C. Ouweland, *Hateruma* (1985, E. J. Brill)
- 7 石垣島白保の山里節子氏所蔵を利用させていただいた。
- 8 松山光秀「シマのコスモロジー —奄美徳之島徳和瀬集落の事例—」(第748回日本民俗学会談話会講演文、1995)
- 9 中鉢良護「八重山・沖縄在来稲と古琉球稲作 —統・琉球の農業史の再構成のために—」(未発表)
- 10 与那国町文化財調査報告書第2集『与那原遺跡—個人農家の畑地改良等に伴う緊急発掘調査報告—』1988
- 11 『諸村農業之次第』(石垣市・喜舎場永珣収集文書、写真製本版)
- 12 中鉢良護「クバ御嶽の歴史・民俗学的位置づけ」(沖縄県文化財調査報告書第106集『新空港・空港拡張建設計画予定地内の遺跡』1992)
- 13 小川 徹「久米島民俗社会の基盤—水田造営形態と集落移動の関係について—」(『沖縄久米島』1982、弘文堂)
- 14 安里 進「古琉球における農耕技術の地域色と系譜」1991(『第三屆中琉歴史関係国際学術会議論文集』)
- 中鉢良護「琉球の農業史の再構成のために —安里進の仮説の批判的検討—」(『地域と文化』74号、1992、ひるぎ社)
- 安里 進「古琉球の水稲品種 —中鉢良護氏の批判について—」(『地域と文化』77・78合併号、1993)
- 15 『徳之島前録帳』(徳之島面縄院家所蔵、福岡大学研究所資料叢書1『道之島代官記集成』1969所収)、川野誠治「徳之島面縄院家蔵前録帳」注解(三)(『徳之島郷土研究会報6号)、同上「注解(四)」(同7号)
- 16 仲地哲夫「宝暦期の徳之島における逃散関係史料—窪田家文書の紹介を中心に」(『徳之島調査報告書(1)』1984、沖縄国際大学南島文化研究所)
- 17 松山光秀「明治中期頃に栽培されていた水稲」(南日本文化研究所叢書21『徳之島採集手帖』復刻版1996、鹿児島短期大学付属南日本文化研究所)
- 18 『徳之島町誌』(1970、徳之島町誌編纂委員会編、徳之島町役場)
- 19 『伊仙町誌』(1978、伊仙町誌編纂委員会編、伊仙町役場)
- 20 和田正洲「奄美諸島の農耕技術伝承」(九学会連合『奄美—自然・文化・社会—』1983、弘文堂)

[謝 辞]

西表島古見の松本貢氏、波照間島前部落の南風見正夫氏、石垣島石垣の干川明氏、白保の山里節子氏、長浜正雄氏、久米島儀間の宮城幸吉氏、川端信一氏、具志川の久手堅稔氏、徳之島伊仙の義憲和氏、徳和瀬の松山光秀氏、奄美大島龍郷町の中山清美氏、の各氏に調査にさいして御援助いただいた。また、沖縄島北谷町文化課の中村愿氏から丸々二年間この仕事のため側面から便宜・援助をいただいた。また、なにかとお世話になりますが、今後ともおつきあい下さい。

北谷町文化財調査報告書 第18集

伊礼伊森原遺跡

—嘉手納(7)貯油施設建設工事に伴う文化財発掘調査報告—

発行 北谷町教育委員会
1998年(平成10年)3月

北谷町字桑江 529
電話 (098) 936-3490

印刷 (株) 国際印刷
製本 那覇市宮城 1-13-9
電話 (098) 857-3385 (代)
